

ちて、此曲を君に授奉る。三曲の中に上玄石上是也。其後は、君も臣も恐させ給て、遊し弾く事もせさせ給はざりしを、仁和寺御室の御所へ参させ給たりしを、此經正最愛の童形たるに依て、下し賜られたりけるとかや。甲は紫藤の甲、夏山の嶺の緑の木間より、有明の月の出けるを、撥面に被書たりける故にこそ青山とは名附けれ。玄象にも相劣らぬ希代の名物也。

【語釋】(一)村雨とは紛はじな——村雨の降る音と紛れまい(なほ感嘆の意を表す)、即ち聲調律呂が村雨の音によくにてゐるといふ意であらう。(二)三五夜中の新月——白樂天の詩の句。(三)轉手——琵琶の頭の方にある線をまきつけるもの。(四)甲は紫藤——樂家録に「補紫藤は是下面之圓盤也今謂之甲」とある。木の名。但し盛衰記には檀案につくる。

【評】琵琶の語り物だけに斯うした挿話を載せたものか。經正に關聯して先には竹生島の事があり、今またこゝに二節にわたつて載せてあるのは注意をひく。

### 一門都落

池大納言頼盛卿も、池殿に火懸て出られたるが、鳥羽の南の門にて、忘れたる事有とて、鎧に附たる赤印、共撥り捨させ、其勢三百餘騎都へ歸り被上けり。越中次郎兵衛盛續、弓脇挟み、大臣殿の御前に馳参り、急ぎ馬より飛で下り、畏つて、あれ

【通釋】池大納言も自分の邸に火をかけて出られたが、鳥羽離宮の南門邊まで来て、「忘れた事がある」とて鎧につけた赤印などを投げ捨て、三百騎で都へ歸つて来た。越中次郎は宗盛卿の前に飛んで来て「あれ御覽なさい。池殿がお留りになつたために多くの兵が都に留ります。怪しからぬ事だと思ひます。池殿に對して迄矢を射るのは恐れ多いけれど、侍共には矢を射たいと思ひます」といふと、宗盛卿は「現在、是程の悲境を末迄見送げない様な意氣地無しはそんな事をする價値もない」と仰せられたので、止むなく射なかつた。」さ

御覽候へ、池殿御留に依て、多くの侍共留り候が、奇怪に覺候。池殿迄は其恐も候へば、侍共に矢一つ射懸候はばやと申ければ、大臣殿、今是程の有様共を見果ぬ程の不當人はさなく共有なんと宣へば、力及ばで不射けり。さて小松殿の君達は如何にと宣へば、未御一所も見えさせ給ひ不候と申す。大臣殿、都を出て今日だに不過に、早人々の心共の變行くうたてさよとぞ宣ける。新中納言知盛卿、行末とても頼もしからず唯都の内にて如何にも成せ給へと、さしも申つる物をとて、大臣殿の御方を、世にも恨めしげにぞ見給ける。抑池殿の御留を如何にと云ふに、兵衛佐頼朝、常は情をかけ奉つて、

て重盛公の公達は皆どうしてゐるのだらう」と仰しやると、「まだ御一人もお見えになりませぬ」といふ。宗盛卿は「都を出てまだ一日しか過ぎないのに、早人の心が變るのは悲しい事だ」といふ。すると知盛が「行末とて頼もしくないのでから唯都の内討死なさいとあれ程申したのに」と宗盛をば殊の外恨めしさうに見て云はれた。一體頼盛が都へ留まつたのは何故かといふと頼朝が平常から親切にして「あなたを疎には思ひませぬ。全く池の尼(頼盛の母)殿が御在世だと思つてゐます。八幡大菩薩も御照覽だから、若し私の言が偽だつたら私は罰を受けるでせう」などと度々誓状を送られたからである。そして平家追討の使が京へ上る毎に「注意して池殿の侍に向つては敵對するなよ」といつて親切にせられたので、一門の平家は運盡きて都を落ちたが、自分は頼朝に助けられるだらうといふので都に留まつたのだといふ。そして八條の女院(暎子。鳥羽院の皇女)が戦に恐れて仁和寺の常盤殿に忍んでいらした所へ頼盛は引籠つた。この頼盛は女院の乳母で宰相殿といふ女房を妻としてゐたからである。「自然何か大事があつたら頼盛をお助け下さい」と乳母が言つた所、女院は「世が世であれば頼りにもなつてあげよう。」と頼もしげもない御返事だつた。凡そ頼朝ばかりは親切にしてくれるけれど、其他の源氏等はあてにはならぬ。なまじつか一門に別れて都に止まつてゐる事



全く御方をば疎に思ひ不奉、偏に故池殿の御渡とこそ存候へ、八幡大菩薩も御照討候へなど、度々誓状を以て被申けり。平家追討の討手の使の上るごとに、相構て、池殿の侍に向て、弓引ななど、事に觸て芳心せられたりければ、一門の平家は運盡て都を落ぬ。今は兵衛佐にこそ助られんすれとて、落留られたりけるとぞ聞えし。八條女院は、都をば軍に恐させ給て、仁和寺の常盤殿に忍うで坐ける所へ参り被籠けり。此頼盛卿と申すは、女院の御乳母宰相殿と申す女房に、相具せられたりけるに依てなり。自然の事も候はば、頼盛助けさせ坐せと被申ければ、女院、今は世が世で有らばこそと、よ

が浪にも磯にも附かぬ（落ちつかぬ）心地であつた。さて話變つて、小松殿の君達兄弟六人（維盛等）は一千餘騎をつれて淀の六田河原で行幸に追附き奉つた。宗盛卿は大層嬉しうに「どうして今迄遅れたのです」といふと、維盛は幼い子供があまり慕ふのを何とかなだめさうとして存外の遅参をされました」と答へた。宗盛は「なぜ六代殿をおつれにならなかつたのだ、氣強くも留め給ふ物かな」といふと「行末とても頼もしくもないので……」と尋ね辛い程に涙をながされた。さてかうして落ちゆく平氏は誰々ぞといふに、前内大臣宗盛以下（略之）都合七千餘騎、これらはこゝ三年間に東國北國での度々の軍で討ち漏らされて残つた人々である。平大納言時忠卿は山崎關戸院で天皇の御輿をとめさせて、男山八幡の方に向ひ「願はくば主上を初め我々を今一度故郷へ歸し入れ給へ」と祈られたのも悲しい事であつた。各々後をふりかへると、都の方は烟のみが細う立ち上つてゐる。致盛卿は「主は雲井遙に距たつて煙のみが立ちのぼつてゐるのも果ない事だ」と詠じた。修理大夫は「故郷を焼野が原になつたか」とふりかへり見つゝこれから遠い所へ落ちて行くのだ」と詠じた。

誠に懐かしい故郷を一片の煙塵に隔て、萬里の旅路に赴かれた心中は誠に氣の毒である。肥後守貞能は、淀の川尻に源氏が待ち伏せてゐると聞いて、

に頼しげもなうぞ仰せける。凡は兵衛佐計こそ、芳心を存すと云へ共、自餘の源氏等は、如何有んすらん。悉に一門には引別れて落留りぬ。浪にも磯にも附ぬ心地ぞせられける。去程に、小松殿の君達兄弟六人、都合其勢一千餘騎、淀の六田河原にて行幸に追附奉らる。大臣殿不斜嬉げにて、如何にや今迄の遅参候と宣へば、三位中將、少き者共が餘に慕ひ候を、兎角こしらへ置んと仕る程に存の外の遅参と被申ければ、大臣殿、など六代殿をば召具せられ候はぬぞ、心強も留め給ふ物哉と宣へば、三位中將、行末とても頼もしうも不候とて、問ふにつらさの涙を被流けるこそ悲しけれ。落行く平家は誰々

散散らさうといふので五百餘騎で發向したが、間違つたので引返した。すると宇度野の附近で行幸に出逢つたので、急ぎ馬から下り、宗盛の前に長つて「あゝ悲しや、これは一體何處へお越しになるのですか、若し西國へお逃げなさるのならば、あれは落人だ」とて到る所で討ち漏らされて不面目な名を残す事が残念です。唯都を死守して討死されては如何です」と申した所が、宗盛卿は「貞能は未だ知らないのか、義仲は既に五萬騎で東坂本に一ぱい居るのだ。法皇も夜半に姿をお隠しになつた。皆の人は都で死なうと申し合はれたけれど、目前に女院や二位殿（時子）に憂目をお見せするのも口惜しいので、せめては行幸だけでもお願して西國へ下り、一先づ落ち着かうと思ふのだ」と仰せられると、貞能は「では私はお暇を戴いて都の中で討死ませう」とて召しつれた五百餘騎を小松殿（重盛）の君達に附屬させて、自分は手元の兵三十餘騎程で都へ取つてかへした。平家の餘黨で都に留まつてゐる卑怯者を討つ爲に貞能が歸つてくるさうだといふ噂を聞いて、頼盛は自分の身上だらうとて大いに恐れ騒がれた。けれども貞能は西八條の焼跡に大幕を張らせ、一夜宿つたけれど、歸つて来る平家の君達は一人もなかつたので、さすがに世の有様を心細く思つたのだらう、源氏の駒の蹄にかけさせたくないとして、重盛公の御墓を掘らせ、御骨に向つて泣く／＼いふには「あゝ淺まし



ぞ、前内大臣宗盛公、平大納言時忠、平中納言教盛、新中納言知盛、修理大夫經盛、右衛門督清宗、本三位中將重衡、小松三位中將維盛、同新三位中將資盛、越前三位通盛、殿上人には、内藏頭信基、讃岐中將時實、左中將清經、同少將有盛、丹後侍從忠房、皇后宮亮經正、左馬頭行盛、薩摩守忠度、武藏守知章、能登守教經、備中守師盛、尾張守清定、淡路守清房、若狹守經俊、藏人大夫業盛、經盛の乙子大夫敦盛、兵部少輔正明、僧には二位僧都專親、法勝寺執行能圓、中納言律師仲快、經誦坊阿闍梨祐圓、武士には受領檢非違使衛府諸司尉百六十人、都合其勢七千餘騎、是は此三箇年が間、東國北國度々の軍に討漏れて纒に残る

や、御一門の末路を御覽下さい。昔から、生者必滅樂盡悲來といふ事は書物に書かれては居りますが、目前にこんな悲しい目を見た事はありませぬ。(こんな悲しい事は又とありませぬ) あなたは、こんな事もあるだらうと豫め覺悟なすつて神にお祈りになり御早世なすつたのは、今更、めづらしい賢察だと存じます。私もあなたの御薨去の時にすぐ殉死して後世の御供をすべき筈でしたのに、甲斐なき命をながらへて、今はこんな憂目に逢つたのは口惜しう御座います。私も死ぬ時には一佛土(同じ御佛の淨土)へ迎へさせ給へ」とかきくとき、御骨を高野山へ持つて行かせ、附近の土を賀茂川へ流させ、一門の後を追ふのも末頼もしくないと思つたのだらう主家と後合せに東國の方へ落ちて行つた。

貞能は先年宇都宮の莊を預つて管理してゐた時、その土地の人を情深く取扱つたので、今度も宇都宮をたよつて下つた。さうした誼であらう。宇都宮の人達は貞能を大切にしたいふ。さて「平家は維盛卿以下は皆妻子をつれられたが、身分の高くない人達はお互に妻子をつれて行く程でもないので再會の期もわからぬけれど、何れも都へ打捨て、おいて落ちて行つた。一體人間は何日何時に必ず歸つて來るとその時を定めて置いて別は悲しいものである。まして今度の別は今日最後の事であるから、行くも留るも互に袖を

所也。平大納言時忠卿、山崎關月院の玉の御輿を昇居させ、男山の方伏拜み、南無歸命頂禮八幡大菩薩、願くは君を始め參らせて、我等を今一度故郷へ歸し入させ給へと、被祈けること悲しけれ。各後を顧み給へば、霞める空の心地して烟のみ心細うぞ立上る。平中納言教盛、はかなしな主は雲井に隔れば、宿は煙と立上るかな。

絞つた。相傳譜代の縁故であり長年の恩恵を受けてゐるのだから、平家の恩を忘れるわけにはゆかないので皆落人とはなつてゐる。けれどやはり都に止めておく妻子の事を思へば、後をふりかへりつゝ足も前へは進まなかつた。かくて或は水路を或は陸路を、一門は思ひ／＼に西をさして逃げて行つた。

故郷を焼野が原とかへりみて、末も煙の浪路をぞ行く。

誠に故郷をば、一片の烟塵に隔てつゝ、前途萬里の雲路に赴かれけん心の中、推量られて哀也。肥後守貞能は、川尻に源氏待と聞て、蹴散らさんとて、其勢五百餘騎で發向したりけるが、僻事なればとて取て返して上る程に、宇度野邊にて行幸に參會ひ、急ぎ馬より飛で下り、大臣殿の御前に參り、畏て、あな心憂や、こは何地へと渡せ候やらん。西國へ下せ給たらば、落人として、あそこ爰にて討漏らされて、憂名を流せ在さん事、口惜う候べし。唯都の内にて、如何にも成せ給ふべうもや候らんと申ければ、大臣殿、貞能は未知ぬか。木曾すでに北國より五萬餘騎で攻上り、比叡山東坂本に滿々たり。法皇も過し夜半に失させ給ぬ。人々は都の中にて如何にも成んと申合はれけれ共、親子女院二位殿に憂目を見せ參らせんも、我身ながら口惜ければ、せめては行幸計をも成奉り、各をも引具して西國方へ落下り、一先もと思ふぞかすと宣へば、



左候は、貞能は身の暇を賜て、都の中にて如何にも成候はんとて、召具したりける五百餘騎の勢をば小松殿の君達たちに附參せ、手勢三十騎許都へ取返す。平家の餘黨の都に残り留たるを討んとて、貞能が歸り入る由聞えしかば、池大納言は、頼盛が身の上でぞ有んずらんと、大に恐れ噪がれけり。去ども貞能は、西八條の燒跡に、大幕ひかせ一夜宿したり共、歸り入せ給ふ平家の君達一人も坐ざりければ、流石世の形勢心細くや思けん、源氏の駒の蹄に懸させしとて、小松殿の御墓掘せ、御骨に向ひ奉て泣々申けるは、あな淺まし、御一門の御果御覽候へ。生ある者は必滅す。樂み盡て悲み來るといふ事をば、昔より書置たる事にて候へ共、親りかゝる憂事不候。君はかゝるべかりける事を豫て悟せ給て、佛神三寶に御祈誓有て、御世を早うせさせ坐ける事こそ、有難う候へ。如何にもして、其時貞能も後世の御供仕るべう候し物を、甲斐なき命存へて、今日はかゝる憂目に逢候事こそ、口惜う候へ。死期の時は、必一佛士へ迎へさせ給へと、泣々遙に掻口説き、骨をば高野へ送り、傍の土をば賀茂川へ流させ、行末頼しからずや思けん主と後合に、東國の方へぞ落行ける。貞能は先年宇都宮を申預て、其時情有しかば、今度も又宇都宮を頼うで下つたりければ、其好にや芳心しけるとぞ聞えし。平家は小松三位中將維盛卿の外は、大臣殿以下妻子を具せられ共、次様の人々はさのみ引擺ふにも及ねば、後會其期を知らず、皆打捨てぞ落行ける。人は何れの日何れの時、必立還べしと其期を定置だにも、別は悲き習ぞかし。況や是は今日を最期、唯今限りの事なれば、行くも留るも互に袖をぞ絞りける。相傳譜代の好年來日來の重恩、争で可忘なれば、老たるも若きも、皆跡をのみ願て、前は進もやらざりけり。或は磯邊の波枕、八重の潮路に日を暮らし、或は遠きを分け、嶮きを凌いで、駒に鞭つ人もあり、舟に棹す者もあり、思々心々にぞ落行ける。

【評】 (一)赤印——平家の軍の目印に赤布切を置つけたのである。(二)撥る——かきなぐるの意でれちとる。(三)池殿御留りに依つて——頼盛卿が都に留まつてゐられるので。(四)池殿迄は云々——頼盛卿にまで矢を放つのは憚ればの意。(五)見はてぬ不常人——最後まで見届けない(運命を共にしない)様な道しらす者(不心得者)。(六)如何にもならせ給へ——亡びやうと、勝たうと、どの様になれ。(七)故池殿の云々——頼盛の母池の尼がおいでになつたればこそ(私が今日あるのだ)と思つてゐます。(頼朝の詞である)故にあなたを池殿の御形見だと思つてゐるの意。(八)八條の女院——暎子。鳥羽院の第三皇女。(九)被籠けり——頼盛がである。(一〇)あらばこそ——この下へ「助けもせめ、今は」と附け加へると、文意がよくわかる。(一一)兎角、しらへる——いろ／＼とだめぬ。(一二)問ふにつらき——こちらから尋ねるにも尋ねづら程。(一三)乙子——末子。(一四)關戸院——山城國乙訓郡にある。(一五)はかなしな云々——はかなしなのは感嘆の助詞。(一六)世を早うせさせ——せさせはするの敬語、世を早くなすつたといふのは早死せられたことといふ。(一七)芳心す。——親切に待遇すること。(一八)引しろふ——しろふは互になし合ふ意の助詞、こゝでは引き連れて行くことと見てよからう。(一九)相傳譜代の好——先祖以來代々仕へた縁故。

【評】 大屋壺が頼れて一門が落ちてゆく。それはたしかに悲惨な運命であるし、京の騒ぎも大した事であつたらう、何といつても多人數の落人である。落ち目になつた時の人の心は様々である。「さて小松殿の君達は如何に」と心配して見たり「早人々の心共の變りゆくうたてさ」と嘆いたり。そして維盛が漸く一行に追ひ附くと斜ならず嬉しげに「如何にや今迄運參候」と問ひかけては互に涙をそゝる有様。頼盛一人に殘ると「侍共に矢一つ射かけばや」とはやる兵士もあれば「是程迄の不常人にはそんなことをするの馬鹿らしい」と横をむく大將もあれば、今更ながら重盛が早く死にたいと願つた心持を思ひ出して泣く舊臣もある。かうした混雜した心、たゞそこを流れる一脈の共通點は、昨日にかはる一門のさびしい運命に泣く力弱い吐息である。後の貞能の故重盛に對する態度、こゝに當時の主従の心持を察し得られはしまいか。

# 福原落



平家は福原の舊里に著て、大臣殿可然侍、老少數百人召て宣けるは、積善の餘慶に盡き、積惡の餘殃身に及ぶが故に、神明にも放れ奉り、君にも捨られ參せて、帝都を出て旅泊に漂ふ上は、何の頼か可有なれ共、樹の陰に宿るも、先世の契不淺、同じ流を掬ぶも、他生の縁猶深し。況んや、汝等は一旦隨附く門客に非ず、異祖相傳の家人也。或は近親の好他に異なるも有り。或は重代芳恩是深きも有り。家門繁昌の古は、其恩波に依て、私を願き。何ぞ今其芳恩を酬はざらんや。然れば十善帝王、三種神器を帶して渡らせ給へば、如何ならん野の末山奥迄も行幸の御供申て、如何にも成んとは思は

【通釋】 平家は福原の舊都について、宗盛卿は然るべき重だつた侍數百人を呼んで仰しやるには「積善のわが平家にも餘慶が盡きてしまつた、却つて積惡の餘殃（わざはひ）が身に及んで來たのだから、神明にも見放され奉り、君（法皇）にも捨てられて、帝都を出て旅泊に漂ふ身となつた。かくては何の頼むべきものもない。しかし一樹の蔭に宿るのも先世からの約束事（前出）である。同じ流を汲んで水を飲むのも他生からの因縁が深いからだ。況んやお前達は俄に平家に随つたといふお客様ではない。先祖代々の家人なのだ。従つて近親の誼は他と異つたものがあるし、重代の芳恩は又他と異つて深いものがあるわけだ。平家繁昌の昔はその恩恵によつて自分達それ／＼の榮華を考へて來たのだから、その恩を酬いなくては居られまい。さうしてみれば、十善の帝王が三種神器を持つてこちらに御座あるのだから、愈々以て、どんな野の末、山の奥迄も行幸の御供申して一緒に死なうとは思はないか」と仰せになつた、すると老少皆涙をおさへて、「つまらない鳥獸でも恩を報ずる心はあるものです。」ましてや人間としてどうしてその道理を知らないですみませう。武士の習として二心あるを以て恥と致します。其上、この二十餘年の間は妻子を育くみ、家來達を大切にすることが出來たのも、これ皆君の御恩でないものはありませぬ。こんな譯ですから、日本は強か新羅、高麗、雲の果までも行幸の御供致して死にたいと思ひます。」と異口同音に申したので、人々は皆頼もしげに見えた。かくて平家は福原で一夜を明かした。丁度秋月は下弦である。深更夜は靜かで旅寢の床の枕も露も涙と争ふといふ有様で、唯、何もかも皆悲しい程である。もういつ歸り得るか分らないので、故清盛が造つて置いた福原の所々を見て歩くにつけても春は花見の岡御所、さては泉殿、松隱殿、里内裏など、鶯鶯の模様を表した瓦や玉の鋪道など何れも三年程の間に荒れ果て、苔が道をふさぎ、秋草が門を閉ぢる程に茂つてゐる。そして瓦に松生ひ垣に蔦茂り、建物に傾いて苔むしてゐる。たゞ月影のみが差し入るといふ有様であつた。

すやと宣へば、老少皆涙を抑て、奇の鳥獸も、恩を報じ徳を酬ふ心は候なり。況んや、人倫の身として、争か其理を存知仕らでは候べき。就中弓箭馬上に携る習、二心あるを以て恥とす。其上此二十餘年が間、妻子を育み、所従を顧み候事も併ら君の御恩ならずといふ事なし。然れば日本の外、新羅百濟高麗契丹雲の終海の終迄も、行幸の御供仕り如何にも成候はんと、異口同音に申たりければ、人々皆頼もしげにぞ見給ける。去程に平家は福原の舊里にして、一夜をぞ明されける。折節秋の月は下の弦なり。深更空夜閑にして、旅寢の床の草枕、露も涙に争ひて、唯物のみぞ悲しき。何歸るべ

靈、雲の果までも行幸の御供致して死にたいと思ひます。」と異口同音に申したので、人々は皆頼もしげに見えた。かくて平家は福原で一夜を明かした。丁度秋月は下弦である。深更夜は靜かで旅寢の床の枕も露も涙と争ふといふ有様で、唯、何もかも皆悲しい程である。もういつ歸り得るか分らないので、故清盛が造つて置いた福原の所々を見て歩くにつけても春は花見の岡御所、さては泉殿、松隱殿、里内裏など、鶯鶯の模様を表した瓦や玉の鋪道など何れも三年程の間に荒れ果て、苔が道をふさぎ、秋草が門を閉ぢる程に茂つてゐる。そして瓦に松生ひ垣に蔦茂り、建物に傾いて苔むしてゐる。たゞ月影のみが差し入るといふ有様であつた。翌日には福原の内裏へ火をかけて、主上を始め皆の人は御船に乗つた。都を出た時の悲み程ではないが、やはりそれでも名残は惜しかつた。海士のたく藻の夕煙、鹿のなく聲、波の音、袖にさし入る月影、千草に集まり鳴く蟲の音など、總て目に見、耳にふれる物は一として哀を誘はないものはない。昨日は東關の麓に鎌をならべて頼朝を討つた十餘萬騎も、今は西海の浪に出かける七千餘人に過ぎない。茫々たる海も靜かに音なく、青天もやう／＼暮れやうとする。孤島に夕靄が遮つて、月は海上に浮び出た。絶海の浪を分けて潮に引かれゆく船は波のまに／＼半空に上るが如く、かくて日數の積るにつれ



し共覺えねば、故入道相國の造置給へる福原の所々を見給ふに、春は花見の岡御所、秋は月見の濱御所、泉殿、松陰殿、馬場殿、二階棧敷、雪見御所、萱御所、人々の館ども、五

て都は次第に隔つてしまつた。随分遠く迄來たと思ふけれど、悲しみの涙だけは盡きる間とてない。波上に群れてゐる白鳥を見てはあれが在原業平が名をたづねた都鳥——都といふ名さへ自分達には親みのある言葉だ、など望郷の念にかられるのも哀であつた。かくて壽永二年七月二十五日に平家は都を落ち果てしまつたのである。

條大納言國綱卿の承て造進せられし里内裏、鶯瓦玉の登、何れも三年が程に荒はて、舊苦道を塞ぎ、秋の草門を閉づ。瓦に松生ひ垣に蔦茂れり。臺傾いて苔むせり。松風のみや通ふらん。簾絶え閨露也。月影のみぞ差入ける。明ぬれば福原の内裏に火を懸けて、主上を始參せて、人々皆御船に召す。都を出し程こそ無れ共、是も名残は惜かりけり。海士の燒藻の夕煙、尾上の鹿の曉の聲、渚々に寄する波の音、袖に宿かる月の影、千草にすたく蟋蟀のきりくす、惣て目に見耳に觸る事の、一つとして哀を催し、心を不傷といふ事なし。昨日は東關の麓に鑪を竝て十萬餘騎、今日は西海の浪の上に纜を解て七千餘人、雲海沈々として、青天既に暮なんとす。孤島に夕霧隔て、月海上に浮べり。極浦の浪を分け、鹽に被引て行く船は、半天の雲に遡る。日數経れば都に山川程を隔て、雪井の餘所にぞ成にける。遙々來ぬと思へども、唯盡ぬ者は涙なり。波の上に白き鳥の簇居るを見給ひては、彼ならん、在原のながしの隅田川にて言問けん、名も眠き都鳥かなと哀也。壽永二年七月二十五日に、平家都を落果ぬ。

〔註釋〕(一)私を顧みき——一身一家の榮華をにがつた。(二)鶯瓦——をしのりの模様ある瓦。(三)台——高い樓。(四)極浦——際涯ない

浦。(五)在原のながし——業平のこと、伊勢物語に出でゐる。(六)言問ふ——業平の歌「名にしおはよいこと問はむ都鳥、わが思ふ人はありやなしやと」によつたもの。

〔評〕私は平家物語の前篇が、こいで終りを告げてゐるのだと思ふ。

都落ち、それは平家にとつても痛ましい事實に違ひない。而もそれは人生の歩むべき、悲しくも運命づけられた行程なのだ。さう考へる時、作者の人生無常に泣く涙が、そのまゝ平家一門の上にそゞぎかけられたのである。愛別離苦の婆娑の相。それを女々しいと嘆つてはくれるな。武人もやはり人間である。まして平家の貴公子の如き都に育つた情趣の生活に慣れてゐた者にとつては無理もない。和歌文藝は迷かもしれないが、その風流を捨てられないのが都人の教養であり趣味であつたのだ。

人間の涙は悲壯に對しても流れる。濃やかな情愛に向つても催される。將又美しさにも……。

平家は落ちていつた、幾つかの哀れな話を残して、又幾つかの勇ましい話を残して、又いくつかの優なる物語を残して……。

で、本文の「去る程に平家は福原の舊里にして」以下が例の美文になつてゐる。けれど、これは大して告むべきではあるまい。維盛の都落ちあたりから哀れな挿話をいくつか聞かされて來た聽衆の心にはもう涙がやどつてゐやうといふものだ。

こゝらで、さらりと美はしく而も哀れに、筋よりも話よりも聲を中心に、急調ですゝめさへすれば、聽衆の目にたまつてゐる涙が、ほろ／＼と落ちてしまふのだ。

私は平家物語の作者が好んで用ひる美文に對して、一は作者自身の嗜好が不知不識流れ出して來る爲めと、もう一つは語り物としての心組みとに因るものと考へたい。



平家物語 卷第八

山門御幸

壽永二年七月廿四日の夜半許、法皇は按察使大納言資方卿の子息右馬頭は按察使大納言資方卿の子息右馬頭資時計を御供にて、竊に御所を出させ給て、鞍馬の奥へ御幸なる。寺僧ども、是は猶都近うて惡う候なんと申しければ、さらばとて、篠の峯藥王坂など云ふ峻き嶮難を凌せ給て、横川の解脱谷寂場坊へ入らせ坐す。大衆起て、東塔へこそ御幸は成べけれど申しければ、東塔の南谷圓融房、御所なる。かゝりしかば、衆徒も武士も、皆圓融房を守護し奉る。法皇は

山門御幸

【通釋】 壽永二年七月二十四日の夜半の頃、法皇は按察使大納言資方卿の子息右馬頭資時等を御供にして、竊に御所（法住寺殿）をお出ましになつて鞍馬の奥へ御幸なすつた。寺僧達は、「是は都に近うて惡う御座いませう」と申したので、さらばとて、篠の峯藥王坂などと云ふ峻しい難所を凌がせられて、横川の（比叡山三塔の一）解脱谷寂場坊へ入らせられた。すると、大衆が騒ぎだし「東塔の方へ御幸になる様に」と申したので、東塔の南谷圓融房を御所に成された。かくして衆徒も武士も、皆圓融房を守護し奉つた。法皇は仙洞を出て比叡山へ、主上は禁門、即ち宮中を避けて西海へ、攝政殿は芳野の奥とかへ、女院の宮々は、八幡、賀茂、嵯峨、太秦、西山、東山のかたほとりに、それ／＼逃げ隠れさせ給ふた。平家は落ちたが源氏は未だ入り替らず。既に此の京は主のない都に成つてしまつた。天地開けてより以來、斯かることが有つたとは覺えない。聖德太子の未來記には今日の事が既に載せてある。去程



仙洞を出て天台山へ、主上は鳳闕を避て西海へ、攝政殿は芳野の奥とかや。女院宮々は、八幡、賀茂、嵯峨太秦、西山、東山の片邊に附て、逃隠させ給けり。平家は落ぬれど、源氏は未入替らず。既に此京は主なき里とぞ成にける。開關より以來、かゝる事可有共不覺、聖德太子の未來記にも、今日の事こそ床しけれ。去程に法皇天台山に渡せ給ふと聞えしかば、御迎に馳參せ給ふ人々、其比の入道殿とは、前關白松殿、當殿とは近衛殿、太政大臣、左右大臣、内大臣、大納言、中納言宰相、三位四位五位の殿上人、すべて世に人と被數、官加階に望をかけ、所帶所職を帶する程の人の、一人も漏るは無り

に法皇は延曆寺へ渡らせられると聞いたので、御迎に馳せ参つた人々の中には其比の入道殿(前關白松殿基房)、現攝政(近衛殿基通)、大政大臣師長、左右の大臣(經宗と兼實)、内大臣(實定)、大納言(忠親)、中納言宰相(實宗)、三位・四位・五位の殿上人など大方の名士や、官職の昇進に望をかけ、所領官職を有する程の人は、一人も漏れなかつた。圓融房では餘り人が多く集つて、堂上堂下門外内際もなく満ちて、全く山門繁昌で、門跡の名譽と思はれた。同二十八日法皇は都へ還御遊ばした此時木曾は五萬餘騎で守護し奉つたし。近江源氏山本冠者義高は白旗を立て、先陣にお供した。此の二十四年間見なかつた白旗が今日始めて都に入るので珍らしい觀物であつた。十郎藏人行家は數千騎で宇治橋を渡つて都に入り、陸奥新判官義康の子、矢田判官代義清は、大江山を経て都に入り、又攝津の國河内の源氏等は心を合せて、同じく都に亂れ入るなど、すべて京中は源氏勢で充滿した。勘解由中納言經房卿、檢非違使別當左衛門の督實家の二人は院の殿上の間の簀子に待つて、義仲・行家を召した。木曾の其の日の裝束は、赤地の錦の直垂に、唐綾威の鎧を着て臙物作りの太刀を帶き、二十四本さした切斑の矢負ひ、滋藤の弓を脇に挟み、甲をば脱いで高紐にかけ、階下に跪いた。十郎藏人行家は紺地の錦の直垂に、黒絲威の鎧を着て黒漆の太刀を帶び、二十四本さした大中黒

けり。圓融房には、餘に人多く参りつどひて、堂上堂下門外内、隙はざまもなうぞ充滿たる。山門繁昌門跡の面目とこそ見えたりけれ。同廿八日法皇都へ還御なる。木曾五萬餘騎で守護し奉る。近江源氏山本冠者義高、白旗さいて先陣に供奉す。此二十餘年不見つる白旗の、今日始めて都へ入る、珍しかりし見物なり。十郎藏人行家、數千騎で宇治橋を渡して都へ入る。陸奥新判官義康が子、矢田判官代義清、大江山を経て上洛す。又攝津の國河内の源氏等同心して同う都へ亂入る。凡京中には源氏の勢充滿たり。勘解由小路中納言經房卿、檢非違使別當左衛門督實家兩人院の殿上の簀に候て、義仲行家を

の矢を負ひ、塗籠藤の弓を脇に挟み、之も兜を脱いで高紐にかけ、畏つた。そこで前内大臣宗盛公を始めとして、平家の一族を皆討つべき由の仰せが下つた。兩人は庭上に畏り承つて退出した。其時、自分達は宿所のない由を申し上げたので、木曾には大膳大夫成忠の宿所、六條西洞院を、十郎藏人行家には法住寺殿の南殿と云ふ賀陽の御所を賜はつた。主上は外戚である平家に囚はれさせ給うて、西海の波の上に漂はせ給ふことを法皇は大變に御歎きになつて、主上並に三種神器を無事に都に還し奉るやう西國へ仰せ下されたけれども、平家は用ひない。高倉院の皇子は、主上の外三所坐したが、中にも二の宮をば皇太子に奉戴しようとして、平家は此宮を取り奉つて西海へ落ち下つた。三・四の宮は都に在した。八月五日、法皇は此の宮達を迎へさせられて、先づ三の宮の八歳に成らせらるゝ方に、「あれは如何に」と仰せられると、三の宮は法皇を御覽になつて、大變むづかり泣かせられるので、法皇は「早くあちらへやれ」と仰せられたので出し参らした。四の宮の四歳に成らせらるゝ方に「あれは如何に」と仰せられると、聽て四の宮は法皇の御膝の上に参られて、大層懐しさうにして居られたので、法皇は御涙を流させ給うて、「何のゆかりのない者が、此の老いた法師を見て(法皇御自身の意)如何してなつかし氣に思はれるべき筈があらう。是が本當の我が孫である。故院(高倉院)



召す。木曾其日の装束は、赤地の錦の直垂に、唐綾威の鎧著て、いか物作の太刀を帶き、二十四差たる截生の矢負ひ、滋藤の弓脇に挟み、甲をば脱で高紐にかけ、跪てぞ候ける。十郎藏人行家は、紺地の錦の直垂に、黒絲威の鎧著て、黒漆の太刀帶き、二十四差たい大中黒の矢負ひ、塗籠籐の弓脇に挟み、是も兜を脱で高紐にかけ、畏てぞ候ける。前内大臣宗盛公を始として、平家の一族皆追討すべき由被仰下。兩人庭上に畏り承て罷出づ。各宿所なき由を奏聞す。木曾は大膳大夫成忠が宿所、六條西洞院を被下。十郎藏人行家は、法住寺殿の南殿と申す賀陽の御所をぞ賜りける。主上は外威の平家に囚

の幼少の頃に少しも違はぬものであるよ。是れ程の忘れがたみを、今迄見なかつたのは残念だつた」とて、御涙を流させ給うた。淨土寺の二位殿(御白河院の宮人、高階榮子)は其時はまだ丹後殿とて御前に在したが、「さて御位は此の宮にお渡しなさるのでせうな」と申されたので、法皇は「勿論である」と仰せられた。内々御占のあつた時にも、四の宮が御位に即かせられたならば百王迄も日本の國の御主であるだらう」と勸状を上つた。御母上は七條修理大夫信隆卿の御娘である。中宮の方に宮仕へして居られたのを主上が常に召されてゐる内に、お孫様が澤山お生れになつた。此の信隆卿は御娘が澤山居られたから、何れにても女御か后に立てたいと思はれたが、人の家に白鷄を千羽飼つたならば、其家には必ず后が出るといふ事があるからとて、白鷄を千羽捕へて飼はれてゐた爲めか、此御娘が皇子を數多産み參らせたのだ。信隆卿も内々嬉しく思はれたけれども、或は平家にも恐れを抱き、或は中宮をも憚つて持て成し奉ることも無つたのを、入道相國の北の方八條の二位が、「よいから私が、お育てして皇太子にお立てしやう」とて、御乳母を澤山附けて御養育申した。中でも四の宮は、二位殿の御兄法勝寺の執行能圓法師の養子となつて居られたのを、法印は平家に味方して、宮をも女房をも京都に捨て、西國へ落ち下られたが、法印は西國より人を上らせて、「宮を誘ひ奉

れさせ給て、西海の波の上に漂せ給ふ事を、法皇不斜御敷有て、主上竝に三種の神器、事故なう都へ返入れ可奉由、西國へ被仰下。けれ共、平家用奉らず。高倉院の皇子は、主上の外三所坐しき。中にも二宮をば儲君にし奉んとて、平家取奉て、西國へ落下りぬ。三四は都にましましけり。八月五日、法皇此宮達迎させ參させ給て、先三宮の八歳に成させ坐けるを、法皇あれは如何にと仰ければ、法皇を見參させ給て、大にむつがらせ給ふ間、とうくとて出し參させ給けり。其後四宮の四歳に成させ坐けるを、法皇あれは如何にと仰ければ、聽て法皇の御膝の上に參させ給て、不斜懷氣にてぞ坐しけ

つて、急いで下り給へ」と申し上げられたので、北の方は大層悦ばれ、宮を誘ひ奉つて西の七條まで出でられた。すると女房の兄紀伊の守教光が「是は物が附いて氣でも狂つたのですか、此の宮の御運は、唯今からお開けになるものを」とて、引留め奉つた。次の日に、法皇から御迎の御車が參つたいふことである。何事も斯う定つた運命であるとは申しながら、紀伊の守教光は、四の宮の御爲めには、大層御奉公遊ばされた人と見える。然しなから其の忠義をも思召されなかつたのか、空しう年月を送られたが、或時教光若しもと歌を二首詠んで、宮中に落書をなされた。

一聲でよいから思ひ出して鳴けよ郭公、老蘇の森の夜半の昔を。即ち老いた私が、その昔あなたをお止めた事を思ひ出して、一聲何とか言つてほし。

山がらが今自由の身になつて、夕顔の宿に身をかくしてゐるが、却つて籠の中にとち込められてゐた時が羨ましい。(即ち自由に夕顔の下を飛びかうてゐるよりも籠の中の方が宜いとて仕官を望んだものである。)

主上は此の事を聞し召されて、是程の事を今迄思ひ附かなかつた事は、返す／＼も愚な事であつたといつて、聽て天恩を蒙つて正三位に叙せられたと云ふことである。



る。法皇御涙を流させ給て、げにも坐ならん者の、此老法師を見て如何でか懐氣には思べき。是ぞ誠の我御孫にて御座す。故院の少生に少も違せ給はぬ者哉。是程の忘形見を、今迄御覽せられざりつる事よとて御涙塞敢させ不給。淨土寺の二位殿、其時は未丹後殿とて御前に候はれけるが、さて御位は此宮にてこそ渡らせ給ひ侍はめなうと被申たりければ、法皇仔細にやとぞ仰ける。内々御占の有しにも、四宮位に即せ給はば、百王迄も日本國の御主たるべしとぞ勘へ申ける。御母儀は七條修理大夫信隆卿の御娘なり。中宮の御方に宮仕給しを、主上常は召れ參せける程に、宮あまた出來參させ給けり。此信隆卿は、御娘多く御座ければ、何れにても女御后に立參せ度被思けるが、人の家に白鷄を千飼つれば、其家に必後の出來と云ふ事の有ればとて、鷄の白を千汰て被飼たりける故にや、此御娘皇子數多生參させ給けり。信隆卿も内々嬉しく被思けれ共、或は平家にも恐を成し、或は中宮を憚奉て、持成奉る事も無りしを、入道相國の北方八條の二位殿、よし／＼苦しかるまじ、我育參せて、儲君にし奉んとて、御乳母あまた附て、持成參させ給けり。中にも四宮は、二位殿の御兄法勝寺執行能圓法印の養君にてぞ坐ける。然るを法印平家に具せられて、宮をも女房をも京都に捨おき、西國へ被落下たりけるが、法印西國より人を上せ、宮誘引參せて、急ぎ下り給へと被申上たりければ、北方不斜に悦び、宮誘引參せて、西の七條まで被出たりけるを、女房の兄紀伊守教光、是は物の附て狂給ふか、此宮の御運は、唯今啓させ給んする者をとて、取留奉たりける次の日ぞ、法皇より御迎の御車は參たりけるとかや。何事も可然事とは申ながら、紀伊守教光は、四宮の御爲には、さしも奉公の人とぞ見えし。去れ共其忠をも思召不寄けるにや、空う年月を送けるが、或時教光若やと二首歌を詠て、禁中に落書をぞしたりける。

一聲は思ひ出でなげ郭公、老蘇の森の夜半の昔を。  
籠の内も猶美し山がらの、身のほど藏す夕顔の宿。  
主上此由聞召て、是程の事を今迄思召不寄けるこそ、返々も愚なれとて、聽て朝恩蒙つて、正三位に被敘けるとぞ聞えし。

〔語釋〕(一)按察使——あぢちとよむのが普通。地方官の治績を調べ民情を視察する官。後世は名義のみとなり大納言が兼帯することとなつた。物語などに按察使大納言など見えるは即ち是だ。(故實辭典)とあるから、此所の按察使も亦名義だけなのだらう。(二)未來記——之は聖德太子の作だといはれてゐるが、假托の書である。今日の事こそ床しけれといふのは、未來記にも、今日の事がちやんと豫言してあるといふ意。(長門本には、この事なし)。(三)簀子——竹をならべて作つた床。又は板目をすかして箱の外に造つた床をいふ。

(四)いかもの作の太刀——殿らしく作つた太刀。虎の皮の尻鞘をかけて足は七足柄鞘とも銀づみだといふ。(五)すゞらならんもの——こゝでは宜い加減な者、何心なき幼稚な者の意。(六)侍はめなう——め(む)は推量の助動詞、なうは意味を強めたのである。(七)仔細にや——仔細にや及ぶ。いふ迄もない。(八)一聲は云々



郭公は天皇をさし、老齢になつてゐる自分のことを老蘇の森(近江にある)にかけたのである。この歌新古今集に載す。つまり、老いた私とその昔、あなたをお止めした事を思ひ出して、一聲何とかいつてほしいとの意である。(老後の思出に今一度世に出たいと解して、時鳥を籠光自身と解する説もあるが、今は採らず。(九)籠の内も云々——夫木集に出てゐる。山がらを自分にたとへて、自由に夕顔の下を飛び交うてゐるよりか、籠の中の方が宜いとて仕官を望んだのである。

那 都 羅



同日の日、木曾左馬頭に成て、越後國を賜る。其上朝日將軍と云ふ院宣をぞ被下ける。十郎藏人備後守になりて、備後國を賜る。木曾越後を嫌へば、伊豫をたぶ。十郎藏人備後を嫌へば、備前を賜る。其外源氏十餘人、受領檢非違使靱負尉兵衛尉にぞ成れける。同十六日、前内大臣宗盛公以下、平家の一族百六十人が官職を停て、殿上の御札を削らる。其内に、平大納言時忠卿、藏人頭信基、讃岐中將時實、父子三人をば不被削。其故は主上并に三種神器事故なう都へ返入れ奉れと、時忠卿の許へ度々被仰下けるに依て也。明る十七日、平家は筑前國三笠郡太宰府にこそ著給へ。菊池次郎高直は、都より平

【通釋】 同日に、木曾は左馬の頭に成つて越後國を賜はり、其上に朝日將軍と云ふ院宣を下された。十郎藏人は備後守になつて、備後國を賜はつた。然し本會は越後を嫌つたので改めて伊豫を賜はり、十郎藏人は備後を嫌つたので備前を賜はつた。其他源氏十餘人、受領檢非違使靱負尉兵衛尉に成された。同じ十六日、前内大臣宗盛公以下、平家の一族百六十人の官職を停めて、殿上の仙籍より除名せられた。其内に、平大納言時忠卿、藏人頭信基、讃岐の中將時實父子三人は除名せられなかつた。そのわけは主上、並に三種の神器を無事に都へ還し入れよと時忠卿の許へ度々仰せ下されたので、除名せられなかつたのである。明る十七日、平家は筑前國三笠郡太宰府に著いた。菊地次郎高直は、都より平家の御供に仕へたが、自分が先に大津山の關を開けてお通し申さうと思つて肥後國に打ち越え、自分の居城に引き籠り、幾度召しても參らなかつた。其外九州二島の者どもは「皆來る様に」との御説をば「承知しました」とお受けしつゝ一人も參上しない。たゞ九州からは岩戸の少卿大藏種直だけが參つた。同じ十八日平家は安樂寺（大宰府天滿宮の傍にある）に參つて終夜歌を詠み連歌などして遊ばれた。中でも本三位中將重衡卿の御歌に「住み馴れた故い都の戀しさは、神（即ち大宰府の天滿宮は道實公を祭つたのであるから）御自身も嘗ては都戀しさに歌きになつたであらうから、

家の御供に候けるが、大津山の關開て參せんとて、肥後國に打越え、己が城に引籠て、召せ共く不參。其外九州二島の者ども、皆可參由の御領承をば乍申、一人も不參。當時は岩戸諸卿、大藏種直計ぞ候ける。同十八日平家安樂寺に參り、終夜歌詠み連歌して、宮仕へ給しに、中にも本三位中將重衡卿、

住馴し故き都の戀しさは、  
神も昔に思ひしるらん。

人々實に哀に覺て、皆袖をぞ被濡ける。同廿日、都には法皇の宣命にて、四宮閑院殿にて位に即せ給ふ。攝政は元の攝政、近衛殿替らせ不給、頭や藏人成置て、人々皆退出せられけり。三宮の御乳母泣悲み後

よく御承知でせう」と詠まれたので、人々は實に哀れを催されて、皆々涙を流されたといふ事である。同月二十日、都では法皇の宣示にて、四の宮が閑院殿で位に即かせられた。攝政は元近衛殿（基通）で、お替りにならなかつた。藏人頭や、藏人なども任命されて、皆々退出した。三の宮の乳母は歎き悲しんだけれども其の甲斐はなかつた。凡そ天には二つの日なく、國に二人の王がまゝたのだ。昔文徳天皇、天安二年八月二十三日崩御になつたが、それ以前に御子の宮様方が何れも御位に即きたいものと望をかけていらせられたから、内々御祈などがあつた。一の御子惟喬親王を木原皇子と申した。王者の才量を御心に懸けて、四海の安危は御手の内に明かに、歴史上の理亂の跡におくはしいので、賢聖の名を取らせらるゝ程の君であると思はれた。二の宮の惟仁親王は、其頃の關白忠仁公（藤原良房）の御女、染殿の後の御腹である。彼の宮はお世繼たるべき器量があり、この宮は萬機を補佐さるゝお相であるので、彼の宮も此の宮もどちらも可愛くて取捨に思召し煩はれた。一の御子惟喬親王家の御祈りには、柿本紀僧正眞濟（彈正大弼御閑卿の次男）といつて、東寺一の長者である。弘法大師の御弟子である。二の宮惟仁親王家の御祈りには、外祖忠仁公の御持僧、比叡山の惠亮和尚とて何



悔すれ共甲斐ぞなき。天に二つの日  
 なし、國に二人の王なしとは申せ  
 共、平家の悪行に依てこそ、京田舎  
 に二人の王は坐せられ。昔文徳天皇  
 天安二年八月二十三日隠させ給ぬ。  
 御子の宮達あまた御位に望を懸て  
 坐ければ、内々御祈ども有けり。一  
 の御子惟喬親王をば、木原皇子共申  
 き。王者の才量を御心に懸け、四海  
 の安危は掌の中に照し、百王の理亂  
 は御心にかけて給へり。されば賢聖の  
 名をも取せ坐ぬべき君なりと見え  
 給へり。二宮惟仁親王は、其比の執  
 柄忠仁公の御娘、染殿後の御腹也。  
 一門の公卿列して持成奉せ給しかば  
 是も又難閣御事なり。彼は守文繼  
 體の器量有り、是は萬機輔佐の臣相

れも劣らぬ高僧であるので、急にどちらの方にもお定りになり難からうと、  
 人々は内々に囁き合つてた。案の如く帝が崩御になつたので、公卿達の御  
 愈儀があつた。抑々臣等が思ひはかつて位につけ奉ることに私がつては、  
 萬人が反對するから、結局競馬や相撲の勝負の如く、其の運によつて寶祚の  
 御位を授けられる様にとの事で議定が終つた。去程に九月二日、二人の宮達  
 は右近の馬場に行啓遊ばした。爰に王公卿相等は立派な馬を並べ花の袂を粧  
 ふて群集し、星の如く連なり給ふた。これこそ稀に見る立派さであり、天下  
 の大きい見ものである。日ごろひいき／＼のあつた公卿達は、兩方に引き  
 別れて、手を握り心を砕いてゐた。御祈りの高僧達もいづれに疎略があり得  
 やう。眞濟僧正は東寺に、惠亮和尚は大内の眞言院に壇を作つて祈られたが  
 一の宮の方では「惠亮は死んだ」と云ひ觸れたならば相手は油断するだらう  
 とて、その由に云ひふらせて心を砕いて祈られた。愈々十番の競馬が始まつ  
 た。初めの四番は御子惟喬親王家が勝たせられた。後の六番は二の宮惟仁親  
 王家が勝たせられた。聽て相撲があるといつて、一の御子惟喬親王家よりは  
 那都羅右兵衛といつて、凡そ六十人力ほどの強い人を出された。二の宮惟仁  
 親王家よりは善雄少將といつて、丈が小さうて、しなやかに前者の片手にも  
 合ふとも見えぬ人が御夢の御告が有つたとて希望して出た。去程に那都羅と

有り。彼も是も痛くて、何れも思  
 召煩れき。一の御子惟喬親王家の  
 御祈には、柿本紀僧正眞濟とて、  
 東寺の一の長者、弘法大師の御弟子  
 也。二宮惟仁親王家の御祈には、外  
 祖忠仁公の御持僧、比叡山の惠亮和  
 尚を被承ける。何れも劣らぬ高僧達  
 也。頓に事行難うや有んずらんと、  
 人々内々囁合れけり。案の如く、  
 帝隠させ給しかば、公卿僉議有け  
 り。抑臣等が慮を以て、選で位に即  
 奉ん事、用捨私有に似たり、萬人  
 唇を可反。不知競馬相撲の節を  
 遂げ、其運を知り、雌雄に依て、寶  
 祚授奉るべしと議定畢ぬ。去程  
 に同九月二日の日、二人の宮達右近  
 馬場へ行啓有けり。爰に王公卿相、

義雄は相寄つて、ひし／＼と双方位置を定めて退いた。暫くして那都羅はつ  
 と寄つて善雄を取つてさゝげ、二丈許り投げ上げた。善雄は身をこらへてぬ  
 つと寄り、那都羅を取つて伏せんとしたけれども、那都羅は大の男だから上  
 より押し潰されさうで、善雄は猶危く見えた。かくて、御母染殿の后からは  
 御使が櫛の齒を引く様に繁く、御方もすでに負け色に見えた。後は「如何し  
 たらよいだらう」と仰せられた所が、惠亮和尚は、大威徳法（大威徳明王を  
 修するの法）を行つて居られたが、之は心憂きことであると、獨鉈（密教修  
 法に用ふる具）を以て頭を突き破り、腦を碎き、乳と混ぜて護摩に焼いて、  
 黒煙を立て、一揉み揉んで祈つたので、遂に善雄は相撲に勝つた。故に二の  
 宮が位にお即きになつた。清和の御門は是である。後に水尾天皇と申した。  
 （御陵が愛宕郡水尾山にあるので斯くいふ。）それより後山門では、一寸したこ  
 とにも惠亮が腦を碎いたならば二の宮が帝位に即き、嘗て清涼殿に落雷した  
 時、叡山の座主尊意が参内して加持せられたので、聖體恙なきを得たといひ  
 傳へてゐる。是れのみは法力であらうが、其外は皆天照大神の御計らひであ  
 る。



玉の鑊くわを竝べ、花の袂たもとを粧まひ、雲の如ごとに重かさり、星の如ごとに列つらり給へり。是希代このよの勝事しょうじ、天下あまのの壯觀さうくわん、日來このよ心を寄奉よし月卿げいけい雲客うんかく、兩方りやうほうに引分ひきわつて、手を握にぎり心を摧くだき給へり。御祈ごいのりの高僧達こうそうだつ、何れか疎略そりやくあらんや。眞濟しんぜい僧正そうじは東寺とうじに壇だんを立て、惠亮ゑりやう和尚おしょうは大内だいだいの眞言院しんごんいんに壇だんを立て被祈へいのりけるが、惠亮ゑりやうは失うたりと云ふ披露ひりやうをなさば、眞濟しんぜい僧正そうじ少し緩ゆるむ心もや坐まらんとて、惠亮ゑりやうは失うたりと云ふ披露ひりやうを成なして、肝膽かんたんを碎くだいて祈いのれけり。既に十番じゅうばんの競馬けいば始はじめる。始め四番しよばんは一の御子ごこ惟喬ただたか親王家しんごうけ勝かたせ給ふ。後六番のちのむは二の宮みや惟仁ただひと親王家しんごうけ勝かたせ給ふ。麴むぎて相撲すもうの節ふし可有あるとて、一の御子ごこ惟喬ただたか親王家しんごうけより、那都羅なとら右兵衛督みぎべゑとくとて、凡六十人およそむそが力現ちからげんしたる勇々ゆうゆうしき人を被出へいしゅたり。二宮にのみや惟仁ただひと親王家しんごうけより、善雄ぜんゆう少將しょうじやうとて、背小せいせうう妙たへにして、片手ひとてに可合べしあとも見えぬ人、御夢ごゆめの御告ごつこ有あるとて、申請まうしんてぞ被出へいしゅける。去程きよじやうに那都羅なとら善雄ぜんゆう寄合よひあひ、ひしくと爪取つめとりして退ひにけり。暫有しばらくあて那都羅なとらつとより、善雄ぜんゆうを取とてさげ、二丈許にじやうごほぞ投上なげあたる。唯直ただなほつて不倒ふたふた善雄ぜんゆうぬつと寄り、那都羅なとらを取とて伏ふんとす。され共那都羅なとらは大おほの男おとこ、かさかさに廻まる。善雄ぜんゆう猶危なほあやなう見えければ、御母ごはは儀染ぎせん殿のきみや后のきみやより、御使ごし櫛くしの齒はの如ごとくに、しげう走重しげうしゆうじゆうとて、御方ごかたすでに負色おせに見ゆ。如何いかせんと仰おほければ、惠亮ゑりやう和尚おしょうは、大威徳おほいとく法ほを被行へいぎやうけるが、こは心憂こころあ事ことなりとて、獨ひとり鉗くわんを以もて頭かぶを突破つぱり、腦なうを碎くだき、乳ちゅうに和なして護摩ごまに燒やき、黒烟くろけんを立て、一揉ひとこ被揉へいこたりければ、善雄ぜんゆう相撲すもうに勝かちにけり。二宮位にのみやに即つか給ふ。清和きやわ御門ごかど是こゝなり。後には水尾みづお天皇てんかうとも申まし。其よりして山門やまかどには、聊いさの事ことにも、惠亮ゑりやう腦なうを碎くだけば、二帝位にていに即つき、尊意そんい智劍ちけんを振ふしかば、菅相納受すがさうなうじゆし給ふ共傳ともたたり。是のみや法力ふりきにても有あけん。其外そのほかは皆天照大神あまてらすかみの御計ごけいなりとぞ見えたりける。

【註釋】(一)岩戸諸神——考證には種直が太宰少貳だったので少貳の異稱都督少卿を諸神と誤つたのだらうといつてある。(二)連歌——上句下句を互に長く聯れあはせる遊び。これに歌仙(三十六句)五十韻百韻などある。(三)宮仕へ——八坂本には「天神法樂のために、歌

よみ、朗詠して遊ばされける」とあるから、法樂の爲めの催しであつたのだらう。然るに流布本では宮仕となつてゐる。従つて主上の御心を慰め奉つたといふ説と神佛に祈つたといふ説とがある。こゝでは普通の字義通り主上の御前で終夜連歌などしたの意でよいと思ふ。(四)天に二日なし云々——禮記に出てゐる語。(五)四海の安危——白氏文集の語。(六)守文繼體の器量——お世繼たるべき器量の意。守文の君といふのは武を以て國を興した、その後を受けて文を以て世を治める人といふこと。繼體は文選の註に謂後主也とある。(七)爪取る——端どるで、双方位置を定めること。(八)水尾の帝——清和天皇が御退位の後、丹波國水尾といふ所におはしたからだともいひ、洛西嵯峨の水尾に御陵があるからだともいふ。(九)尊意云々——延暦寺の座主、延長八年六月に清涼殿に落雷のあつた時、菅公の崇だといふので、この尊意をして祈禱せしめられた。

【評】この名虎相撲も全く俗説であつて、又この物語の挿話としても大して意義を認められない話である。たゞ作者としては天に二日なしといつた聯想からこれを想ひ起して、さて後に「これのみや法力にてもありけん、其外は皆天照大神の御計なりとぞ見えたりける」に結ぶ爲めに用ひたやうなものだ。

### 宇佐行幸

平家は筑紫にて此由を傳聞つたへき給て、あはれ三宮さんみやをも四宮よのみやをも具たまつ奉まつりて可べき落お下くだ者ものをと申合まれければ、平大納言へいのだんなごん時忠ときちゆう卿けい、さらんには高倉宮たかくらのみやの御子ごこの宮みや、御乳母ごにちぼ讚岐さんき守重しゆうじゆう秀しゆうが、御出家ごしゅけさせ奉まつりり、具たまつ奉まつりて北國きたくにへ落おち

宇佐行幸

【通説】平家は筑紫で此の由(御鳥羽天皇御即位のこと)を傳へ聞いて、「あゝ三の宮も四の宮も俱にお連れして落ちのびればよかつたものを」と話し合はれると、平大納言時忠卿は「さうあつたら、高倉の宮の御子を御乳母讚岐の守重秀が御出家させ奉つて俱に北國に落ち下つたのを、木曾義仲が上落の時、主にし参らせやうと還俗させ申して都に上つたから、此方を位に即けられるであらう。」と仰しやると、人々は「どうして還俗の宮を御位に即けることが



下たりしを、木曾義仲上洛の時、主にし參せんとて、還俗せさせ奉り、具し奉て、都へ上たるをぞ、位には即參せんすらんと宣へば、人々争か還俗の宮をば、位に即可奉と被申ければ、時忠卿、さもさうず、還俗の國王の様、異國には其例もや有らん、我朝には、先天武天皇未春宮の御時、大友皇子に被襲させ給て、鬢髪を剃り、芳野の奥へ逃籠せ給たりしが、大友皇子を亡して終に位に即せ給き。又孝謙天皇と申せしも、大菩提心を發させ給て、御飾を下し、御名を法喜尼と申せしかども、二度位に即せ給て、稱徳天皇と申しぞかし。況や木曾が主にし參せたる還俗の宮なれば、仔細に可及とぞ宣ける。

出来やう」と云つた。すると時忠卿は「さうではない。還俗の國王の例は、異國にもあることながら、我朝には、天武天皇がまだ皇太子でいらせられた時、大友皇子に御位を襲はれて髪を剃り、吉野の奥へ逃げ籠らせられたが、後大友皇子を亡ぼして終に位にお即きになつた。又孝謙天皇と申さるゝ方も、大菩提心を起して出家遊ばされ、御名を法喜尼と申したが、二度御位に即せられて、稱徳天皇と申し上げた。況や木曾が主にし參らせた還俗の宮であるから、何のさまたげがあらう」と仰しやつた。同じく九月三日、伊勢へ公卿の勅使を立てられた。勅使は參議長教と云ふ。大上法皇が伊勢へ公卿の勅使を立てられることは、朱雀・白河・鳥羽の御先例があつたとはいつても、是は皆御出家以前である。御出家以後の例は是が初めてであると聞く。平家は筑紫に都を定め御宮を造らせらるゝやうに、公卿達の御相談があつたが、都も定まらないし、其頃主上は、岩戸諸卿大藏種直の御宿にお住ひであつた。人々の家々は、野原の中や田畑の中であつたから、麻の衣は打たないけれども、大和の十市の里と謂ふべきであらう(式子内親王の歌に、更けにけり山の端近く月さえて十市の里に衣うつなり)御殿は山の中であるから、彼の齋明天皇の假御殿であつた木丸殿も丁度此の宮殿に似てゐたことだらうが、却つて趣もある。安德帝が先づ宇佐宮へ行幸遊ばした。其際は大郡司公通の宿が皇

同九月三日の日、伊勢へ公卿の勅使を立てらる。勅使は參議長教とぞ聞えし。太上法皇伊勢へ公卿の勅使を被立事は、朱雀白河鳥羽三代の蹤跡有とは申せども、是は皆御出家以前なり。御出家以後の例、是初とぞ承る。平家は筑紫に都を定め、内裏可被造と、公卿僉議ありしかども、都も未定、主上は其比岩戸諸卿大藏種直が宿所にぞ、坐ける。人々の家々は、野中田中なりければ、麻の衣は打たね共、十市里とも謂つべし。内裏は山の中なれば、彼木丸殿も角や有けん、中々優なる方も有けり。先宇佐宮へ行幸なる。大郡司公通が宿所皇居になる。社頭は月卿雲客の居所に成る。廻廊は五位六位の

居となつた。宮の拜殿は雲の上人の居所となり、廻廊は五位六位の官人、庭上には四國鎮西の兵士どもが甲冑弓箭を帯びて雲霞の様に立ち並んだので、古い朱の玉垣が再び飾られた様に見えた。此所に七日間お籠なすつたが、七日目の夜の明方大臣殿に夢のお告げがあつた。御寶殿の御戸を推し開いて、立派な氣高い御聲で、世の中の憂さについては神も及ばないものを、お前達は心をつくして何を祈つてゐるのであるか。大臣殿は打ち驚いて胸打ち騒ぎ、餘りの淺ましさに、今迄に鳴きしきつてゐた蟲の音も、秋の暮になつて弱り果てゝしまつた。今までは萬一にもと願をかけてゐた心も、此のお告げで全く張合がなくなつた。と云ふ古歌を心細氣に口ずさまれた。かくて大宰府へ還幸になつた。去程に九月も十日餘になつた。荻の葉に夕嵐が吹き渡り、獨り寝の床も袖しをれて、寂しく深みゆく秋の哀れさは何處でも同じではあるとは云ひながら、旅の空では一入に堪へ難い。九月十三日の夜は名月であるけれども、其の夜は都を思ひ出す涙に自分の心が曇つてはつきりしない。九重の雲の上で(宮中にて)空の月を愛でつゝ思を述べてゐた夕も、まだ昨日今日の様に覺えて、薩摩守



官人、庭上には四國鎮西の兵ども、甲冑弓箭を帯して、雲霞の如くに竝居たり。舊にし丹の玉垣、再び飾るとぞ見えし。七日參籠の曉大臣殿の御爲に、夢想の告ぞ有ける。御寶殿の御戸推開き、勇々しう氣高げなる御聲にて、

世の中のうさには神もなき物を、

何祈るらん心づくしに。

大臣殿打驚き、胸打騒ぎ淺ましさに、

さりともと思ふ心も蟲の音も、弱り果てぬる秋のくれかな。

と云ふ古歌を心細げにこそ口すさみ給ける。さて太宰府へ還幸なる。去程に九月も十日餘に成ぬ。萩の葉むけの夕嵐、獨丸寝の床の上、片布く袖もしをれつ、深行く秋の哀さは、何くもとは云ながら、旅の空こそ忍難けれ。九月十三夜は、名を得たる月なれ共、其夜は都を思出る涙に、我から曇てさやかならず。九重の雲の上、久堅の月に思を述し夕も、今の様に覺て、薩摩守忠度、月を見し去年の今宵の友のみや、都に我を思出らん。

修理大夫經盛、

忠度はかく詠じた。

都で我を思ひだしてゐる人達は、去年の今宵共に集つた人許りであらう。すると修理大夫經盛が、

去年の今宵終夜、共に打ち語らつていろくと約束した人が思ひ出されて戀しい事である。

皇后宮亮經正もまた、

かき分けて來た野邊の露と共に死にもやらで、思ひもかけぬ里でこの月を見ることよ。

と詠じた。

戀しとよ去年の今宵の終夜、契りし人の思出られて。

皇后宮亮經正、

分て來し野邊の露とも消すして、思ぬ里の月を見る哉。

【釋】(一)さもさうず——さも候はずの轉。(二)麻の衣は云々——新古今にある式子内親王の歌に「ふけにけり山の端近く月浴えて、十市の里に衣うつたり」とある。この歌によつたものであらう。十市は大和にある地名。(三)木の丸殿——削らない丸木で造つた假御殿。齊明天皇が筑前の朝倉に居られた時の宮で、中大兄皇子が「朝倉や木の丸殿にわが居れば、名のりをしつ、行くは誰が子ぞ」と詠まれた。その木の丸殿よりも風流だといつたのであらう。(四)世の中の云々——うさは字佐に憂さをかけ、心盡しと筑紫とをかけて言つたのだ。(五)さりとも——俊成の歌で、千載集にある。(六)戀しとよ——とよ、は意味を強めて言ひ切る語。

【評】 神にすがらうとする平家。歌をよみつゝ亡びゆく平家。王朝の情趣とともにはかなく消えて行かうとする平家。……。

### 緒 環

豊後國は刑部卿三位頼資卿の國也けり。子息頼經朝臣を代官に被置たりけるが、京より頼經の許へ使者をたてて、平家は已に神明にも放れ奉り、君にも被捨參せて、帝都を出て波の上に漂ふ落人となれり。然るを

【通釋】 豊後の國は刑部卿三位頼資卿の庄園であつた。そして子息頼經朝臣を代官に置かれてゐたが、京の頼資卿のところから豊後の頼經の所へ使者を遣はして「平家は早や神にも見放され、君にも見捨てられて、帝都を出て波の上に漂ふてゐる落人となつてしまつた。それを九州及び壹岐對島二島の者達が、平家をもてなしてゐるといふことは宜しくない。當國(豊後の國)では決して隨ふてはならない。東や北の國と心を合せて、九州から平家を追



九州二島の者共が請取て、もてあつかふらん事こそ然べからね。當國に於ては一向不可隨、東北國と一味同心して、九國の中を可奉追出由宣ひ被遣たりければ、是を緒方三郎惟義に下知す。彼惟義と申は、怖き者の末にてぞ候ける。譬へば昔豊後國の或片里に女有き。或人の一人娘夫も無りけるが許へ、男夜々通ふ程に年月も隔たれば、身も直ならず成ぬ。母是を怪んで、汝が許へ通ふ者は、如何なる者ぞと問ければ、來るをば見れ共、歸るを不知とぞ言けるさらば朝歸せん時、標を附て繫で見よとぞ教ける。娘母の教に隨て、朝歸しける男の、水色の狩衣を著たりける頸上に針を刺し、賤の緒環

ひ出してしまへ」といひ遣はされたので、之を緒方三郎惟義に下知した。彼の惟義と云ふのは、恐ろしいものの子孫(大蛇の子孫)であつた。譬へば昔豊後の國の或片田舎に女があつた。或る人の一人娘で夫も無いこの女の處へ、男が毎夜通ふてゐる内に、年月が経つて其内に妊娠してしまつた。母は之を怪んで、「お前の處へ通ふて來る人は誰か」と問ふと、娘は、「來るのは見るけれども歸るのは知らない」と言つた。「では朝歸へる時標をつけて繫いで見よ」と教へた。娘は母の教に隨つて朝男を歸す時に水色の狩衣に針をさし、賤の緒環(麻をうみて圓く束ねしもの)と云ふものをつけて、男の過ぎて行く方へ繫いで見ると、豊後の國でも日向の境、姥ヶ嶽といふ山の麓の、大きい岩屋の内へ繫ぎ入つた。女は岩屋の口に佇んで聞くと、中から大きい聲でうめきうなる聲がしたので、女が云ふには「私はあなたの姿を見度く思つてこゝまで參つたのです」といへば、岩屋の中から答へて「我は人の姿ではない。お前が私の姿を見ると、肝魂も身に添はぬ程ひどく驚くであらう、お前の胎んでゐる子は男子であらう、弓矢にかけては、九州二島に肩を並べる程の人はないであらう」と教へた。女は重ねて「假令どんなお姿であつても、日頃のよしみをどうして忘れることが出來やう、お互の姿を見もし見ても頂き度い」と云ふと、「それでは」といつて岩屋の中から長さ五六尺、尾より首

と云ふ物を附て、經て行く方を繫で見れば、豊後國に取つても、日向の境、姥ヶ嶽と云ふ嵩の下、大なる岩屋の内へを繫入たる。女岩屋の口に伺んで聞ければ、大なる聲して呻けり。女申けるは、御姿を見參せんが爲に、わらはこそ是まで參て候へと、言ければ、岩屋の内より答へて曰く、我は是人の姿には非ず、汝我姿を見れば肝魂も身に添まじきぞ。胎る處の子は男子なるべし。弓矢打物取ては、九州二島に肩を並る者有まじきぞと教ける。女重て、縦如何なる姿にても有ばあれ、日ごろの好争か可忘なれば、互の姿今一度見もし見えられんと言ければ、さらばとて、岩屋の内より臥長は五六尺、枕跡邊は十四五丈も有らんと覺る大蛇にて、動搖してぞ這出たる。女肝魂も身に不添、召具したる十餘人の所従共、喚叫んで北去ぬ。頸上に刺すと思し針は、大蛇の喉笛にぞ立たりける。女歸て、程なく産をしたりければ、男子にてぞ有ける。母方の祖父育て見んとて育たれば、未十歳にも満ざるに、背大う顔長かりけり。七歳にて元服せさせ、母

に至る迄は十四五丈もあらうと思はれる大蛇が、地響をたて、這ひ出して來た。女は肝も潰れる程打ち驚き、召し連れてゐた十餘人の下部共もわめき叫んで逃げ去つた。襟に刺したと思つた針は、大蛇の喉笛に立つたのであつた。女は歸ると間もなく産をした所が男子であつた。母方の祖父が育て見様と言つて育てると、未だ十歳にもならないのに丈が大きうて顔が長かつたので、七歳で元服させ、母方の祖父を大大夫といふので、この子を大太と名づけた。この子は夏も冬も手足にすき間もなく臍が切れてゐたので、臍大太とも云はれてゐた。彼の惟義は、件の大太には五代目の孫であつた。かゝる恐ろしいものゝ子孫であつた故か、國司の仰せを院宣であるといつて九州二島に文を廻したので、相應の勢力ある者共も惟義に従ひつた。件の大蛇は日向國に祀つてある高知尾の神體であると聞いてゐる。

緒 環



方の祖父を、大太夫と云ふ間、是をば大太とこそ附たりけれ。夏も冬も、手足に隙なく砥破たりければ、  
砥大太とも云れけり。彼惟義は、件の大太には五代の孫也。かゝる怖き者の末なればにや、國司の仰  
を院宣と號して、九州二島に廻文をしたりければ、可然者共も皆惟義に従附く。件の大蛇は日向國に被  
崇させ給ふ高知尾の明神の神體なりとぞ承はる。

(評) 三輪山の傳説にも似た話である。斯ういふ話は歌婚傳説の名残として、何處にも残つてゐるのであつたらう。それにしても、緒方惟  
義にこの傳説を結びつけた所に、作者の平家びいきが見られる様だ。

### 太宰府落

去程に平家は筑紫に都を定め、内裏  
可被造と、公卿僉議有しか共、惟義  
が謀叛に依つて、其も叶す。新中納言  
知盛卿の異見に被申けるは、彼緒方  
三郎は小松殿の御家人也。然れば君  
達御一所向せ給て、こしらへて御覽  
せらるべうもや候らんと被申けれ  
ば、此議尤可然とて、新三位中将資  
盛、其勢五百餘騎、豊後國に打越え

【通釋】 去る程に、平家は筑紫に都を定め、御所を造られる様にと公卿達  
の御相談があつたけれども、惟義の謀叛に依つて夫れも出来ない。新中納言知  
盛卿の申さるゝには、「彼の緒方三郎は小松殿の御家來である。だから君達が  
御一緒にお出向になつてなだめすかして御覽になつては如何ですか」と申し  
上げると、「それも尤なことである」として新三位の中将資盛、その軍勢五百餘  
騎が豊後の國に出向いて、色々とお話になつたが、惟義は従はなかつた。  
其上に「君達をも捕へて取り込めるべきであるけれども、大きな事を仕様と  
すれば小事は問題外だ。取り込め参らせぬからといつて何程のことがあら  
う。だから早く大宰府に歸つて、御一門の人々と共にどうにでもお成りなさ

様々にこしらへ宣へ共、惟義従ひ奉  
らす。剩へ君達をも、是にて取籠參  
すべう候へ共、大事の中の小事なし  
とて、取籠參せずば、何程の事か候  
べき。唯太宰府へ歸らせ給て、御一  
所で如何にも成せ給へとて、追返奉  
る。其後惟義が次男、野尻次郎惟村  
を使者にて、太宰府へ申けるは、平  
家こそ重恩の君にて坐し候へば、甲  
を脱ぎ弓の弦を弛て、降人に可參候  
へ共、一院の仰には、速に九國の内  
を追出し可奉由候と、申送つたりけ  
れば、平大納言時忠卿、緋緒括の袴、  
絲葛の直垂、立烏帽子にて、維村  
に出向て宣けるは、夫我君は天孫四  
十九世の正統、神武天皇より人皇八  
十一代に當せ給ふ。されば天照大神

い」といつて追ひ返し奉つた。其後惟義の次男、野尻次郎惟村を便にして、  
大宰府へ申し入れることには、「平家こそ代々御恩ある君ですから、甲をぬぎ  
弓の弦をはづして、參降いたす筈ですが、一院（御白河法皇）の仰せには、  
平家を速に九州の内から追ひ出す様にとのことです」と申し送つたので、平  
大納言時忠卿は緋緒括の袴、絲葛の直垂、立烏帽子姿で立ち出で惟村に向つ  
て仰しやるには、「それ吾君は天孫四十九世の正しき御血統、神武天皇より人  
皇八十一代に當らせ給ふ御方であるから、天照大神正八幡宮も、吾君をこそ  
お守りになるであらう。それに當家は保元平治より以來、度々の逆亂を平  
げ、九州の者どもをば皆とりなして朝廷に召さるゝ様とり計らつたのに、其  
の恩を忘れて、東國北國の凶徒等（頼朝・義仲等）に言ひ含められて、平家を  
九州より追ひ落としおほせたら國を領せしめやう、庄園を賜はらうなどと云ふ  
のを實と思つて、あの鼻豊後の命令に従ふと云ふことは怪しからぬことだ」  
と仰しやつた。豊後國司刑部卿三位頼資卿は、大變に鼻の大きい人であつた  
から、斯様に言はれたのである。惟村が歸つてこの話をすると、「これは何と  
いふことだ、昔は昔、今は今、そんなわけならば九州を追ひ出してしまへ」  
といつて早や軍勢を揃へると見えたので、源大夫判官季貞、攝津判官守澄な  
どが「そんな事をされては今後傍輩の爲にも甚だ不都合極まることである。



正八幡宮も、吾君をこそ守り參させ給らめ。就中當家は、保元平治より以來、度々の逆亂を鎮て九州の者共をば、皆内様へこそ被召しか。然るに其恩を忘れて、東國北國の凶徒等、頼朝義仲等に被語て、爲おほせたらば國を預ん、庄をたばんと申すを、實と思て、其鼻豊後が下知に従らん事こそ、然べからねとぞ宣ける。豊後國司刑部卿三位頼資卿は、極て鼻の大なりければ、加様には宣けるなれ。惟村歸て、父に此由告たりければ、こは如何に、昔は昔今は今、其儀ならば、九國の内を追出し奉れやとて、勢汰ると聞えしかば、源大夫判官季貞、攝津判官守澄、向後傍輩のため奇怪に候、召捕候はんとて、

其勢三千餘騎で、筑後國に打越え、高野本庄に發向して、一日一夜攻めぬ。され共惟義が方の勢、雲霞の如に重れば、力及ばで引退く。平家は緒方三郎惟義が三萬餘騎の勢にて、既に寄と聞えしかば、取物も取あへず、太宰府をこそ落給へ。さしも頼しかりつる天満天神の注連の傍を、心細も立別れ、駕輿丁も無れば、葱花鳳輦は唯名をのみ聞て、主上腰輿に召れけり。國母を始參せて、止事なき女房達は、袴の裾を高く取り、大臣殿以下の卿相雲客は、指貫のそばを高く挟み、歩跣で水幾の戸を出て、我先にくと、箱崎の津へこそ落給へ。折節降る雨車軸の如し。吹く風砂を揚とかや。落る涙降る雨、

召捕つてしまひませう」といつて、其の軍勢三千餘騎で、筑後國に打ち越えて、高野本庄に發向して、一日一夜攻め戦ふた。然し惟義の方の軍勢が雲霞の如くであつたから、遂に力及ばずして引退いた。平家は緒方三郎惟義が三萬餘騎の勢で既に寄せて來ると聞いたので、取るものもとり敢へず大宰府を落ちてしまはれた。あれ程に頼みにしてゐた天満天神の注連の傍を、心細く立ち別れて、御輿をかつぐ者もないので、葱花鳳輦（陛下御乗用）とは名ばかりで、主上は粗末な御輿に召された。國母（建禮門院）を初めとして、尊い女房達は、袴の裾を高くとつて、大臣殿（宗盛）以下重だつた殿上人は指貫のひだを高く挟んで、素足で水城の戸（地名）を出て、我先にと箱崎の港へ落ちさせられた。折柄降る雨は車軸を流す様に物凄く、吹く風は砂をも巻き上げるほどであつたとか。落ちる涙か降る雨かいづれとも區別がつかぬ程であつた。かくて住吉、箱崎、香椎、宗像を伏し拜み、主上はたゞ舊都へ還幸さるゝことをのみ祈られてゐた。そしてたるみ山、鶉濱などと云ふ峻しい難所を打ち越えさせられ、廣々とした平野へ赴かれた。何日習うた事もないことであるから、御足より出る血は小石を染め、紅の御袴は色を増し、白の御袴は紅く染つてしまつた。彼の玄非三藏（唐の人）が流沙葱嶺の峻しい所を渡いだ悲しみもこれに勝ることがあらうか。彼の三藏は佛法を求める爲め

であるから、自分と他人との利益もあつたであらうが。之は開戦の道であるから、來るべき世（地獄）の苦しみを思ふても悲しいことである。原田大夫種直は、二千餘騎で京より平家の御供に參り、山賀兵藤次秀遠は數千騎で平家の御迎ひに參つたけれども、種直と秀遠とは大變に仲が悪かつたので、種直は悪からうとて途中より引返した。それより蘆屋の濱といふ所を過ぎさせらるゝにも、「之は都から我等が福原へ通つた時、朝夕見馴れた里の名であるからとて、何處の里よりも懐しく、今更の様に物の哀れを覺えられた。新羅、百濟、高麗、契丹、雲の果て、海の果てまでも、落ち行きたいと思はれたけれども、波風が烈しくてそれも出來ない。兵藤次秀遠に具せられて、山賀城に立て籠つた。山賀でも又敵が寄せて來ると聞かれたので、取るものも取りあへず急ぎ小舟に打ち乗つて、終夜豊前の國柳が浦へ渡らせられた。こゝに都を定めて、御殿を御造りある様にと公卿會議されたけれども、資力（又は境域）がないので夫も出來ず、又長門より源氏が寄せて來ると聞いたので、あわてふためいて、海士小舟に召して、海に浮ばせ給うた。丁度神無月の頃である。小松殿の三男、左中將清經は、何ごとも深く考へ込まれる人であつたが、ある月の夜、舷に立ち出でて、いろ／＼と調子を變へて横笛を吹いてゐたが、「都をば源氏の爲に攻め落され、九州は惟義のために追ひ出され、



分て何れも不見けり。住吉、箱崎、香椎、宗像、伏拜み、主上唯舊都の還幸とのみぞ被祈ける。たるみ山、鶉濱など云ふ峻き嶮難を凌せ給て、渺々たる平沙へぞ被起ける。何習はしの御事なれば、御足より出る血は砂を染め、紅の袴は色をまし、白袴は裙紅にぞ成にける。彼玄舁三藏の流沙葱嶺を凌れたりけん悲も是には争か可勝。其は求法の爲なれば、自他の利益も有けん、是は闘戦の道なれば、來世の苦、且思ふこそ悲けれ。原田大夫種直は、二千餘騎で、京より平家の御供に參る。山賀兵藤次秀遠、數千騎で平家の御迎に參けるが、種直秀遠、以の外に不和成ければ、種直は、惡かりなんとて

丁度網にかゝつてゐる魚の様なものである。何所に行けばとて逃れも出来ず、生き永らへてをられる身でもない」といつて、ひそかに經を読み念佛して、海に沈んでしまつた。男も女も之を見て嘆き悲しんだけれども更にその甲斐もない。

長門の國は新中納言知盛卿の領國である。目代は紀伊刑部大夫通資と云ふ者である。平家の方々が漁士の舟に召されたと聞いて、大船百餘艘選定して參らせたので、平家の人人は是に乗りうつり、四國へと渡つた。阿波民部重能の計ひで、讃岐國八島の磯に、形ばかりの板屋の御殿や御所を造つた。其の間は粗末な民屋を皇居とするに忍びないので、船を御所と定められた。

大臣殿以下の卿相雲客は、漁士のはかなげな家に日暮らし、船の内て夜を明かした。龍頭鶴首を海中に浮べて、波の上の行宮は靜かな時とてもない。月を浸してゐる潮の如き深い愁に沈み、霜を掩つてゐる葦の葉の如き脆い命を危み、州崎に騒ぐ千鳥の聲は曉の恨を増し、磯間にかゝる梶の音は、夜半に心を傷ませる。又白鷺の遠松に群れ居るのを見ては、源氏の旗かと思ふし、野雁のはるかに遠い海に鳴く聲を聞いては、兵士の終夜舟を漕ぐのかと驚かされる。或は潮風に玉の膚も荒れ、旅の外で故郷を思ふの涙を押へ難く、緑の帳、紅の衾とあらゆる裝飾を凝らした昔に引替へて、今は赤土を塗

路より引返す。其より蘆屋の津と云ふ所を過させ給にも、是は都より我等が福原へ通し時、朝夕見馴し里の名なればとて、何れの里よりも懐しく、今更哀をぞ被催ける。新羅、百濟、高麗、契丹、雲の終海の終迄も、落行ばやとは被思けれ共、波風向うて叶はねば、力不及、兵藤次秀遠に具せられて、山賀城にぞ籠り給ふ。山賀へも又敵寄と聞えしかば、取物も取敢ず、平家小舟共に取乘て、終夜豊前國、柳浦へぞ被渡ける。爰に都を定て、内裏可被造と、公卿僉議有しか共、分限無れば其も不叶。又長門より源氏寄と聞えしかば、取物もとり敢ず、海士小船に召て、海にぞ浮び給ける。神無月の比はひ、小松殿の三男、左中將清經は、何事も深く思入給へる人にて坐けるが、或月の夜、舩に立出でて横笛音取朗詠して遊れけるが、都をば源氏の爲に被攻落、鎮西をば惟義が爲に被迫出網に懸れる魚の如し。何地へ行かば遁べきかは、存果べき身にも非ずとて、閑に經讀み念佛して、海にぞ沈給ける。男女

つた家の葦のすだれの中に寝ね、伽羅や香などたいた香煙に引替へて、今は海士の焚く藁鹽火見るにつけても、女房達は盡きぬ物思ひに、紅の涙はせきあへないので、みどりの黛亂れつゝ、全く顔が變つて其の人とは見えぬ様である。

泣悲め共甲斐ぞなき。長門國は新中納言知盛卿の國なりけり。目代は紀伊刑部大夫通資と云ふ者也。平家海士小船に召たる由承て、大船百餘艘點じて參せたりければ、平家は是に乘移り、四國へぞ被渡ける。阿波民部重能が沙汰として、讃岐國八島の磯に、形の様なる板屋の内裏や、御所をぞ造せける。其程は怪の民屋を皇居とするに及ばねば、船を御所とぞ定ける。大臣殿以下の卿相雲客は、海士の蓬屋に日を暮し、船の中にて夜を明す。龍頭鶴首を海中に浮べ、浪の上の行宮は、靜なる時なし、月を浸せる潮の深き愁に沈



み、霜を掩へる葦の葉の脆き命を危む。洲崎に騒ぐ千鳥の聲は、曉の恨をまし、磯間にかゝる櫓の音は、夜半に心を傷しむ。白鷺の遠松に簇居を見ては、源氏の旗を揚ぐるかと疑はる。野鴈の遼海に鳴を聞ては、兵共の終夜船を漕かと驚かる。晴嵐侵膚翠黛紅顔色漸衰、蒼波穿眼、外土望郷涙難抑。翠帳紅閨に代れるは、埴生の小屋の簾、薰爐の煙に異る海士の藻鹽火焼く賤きに附ても、女房達は盡せぬもの思に、紅の涙塞敢給ねば、緑の黛亂つゝ、其人共見え不給。

【釋】(一)「しらへる」すかしなだめる意。(二)大事の中の小事云々——八坂本では「君達をも是にて對留參らせたくは候へども、それと思ふに、何程の事が渡らせ給ふべき」となつて居り、校正本では「大事の中の小事なれとて」となつてゐる。(正節本も大事の中の小事なりとて)長門本では「大事の中に小事なしとぞ存候へば取込參らせず候。又とりこめ參らせ候ともいばかりの御事が候べき」とある。是等によつて考へれば、大事の中の小事なりか、又は大事の中に小事なし(小さい事は願慮する程の事でもない)の意と解すべきである。取籠參らせずばは、とりこめないからといつての意である。長門本や八坂本だと、よく意味は分るが、(とりこめたからといつて)流布本では一寸まづつき易い。之は「取籠不參候は」といふ一本もあり、萬治假名本も、「取籠進ラセズハ」とあり、「は」は清音を可とす。(三)「緋緒括の袴」緋色の緒の裾括ある袴。(四)「絲葛の直垂」葛の纏維で作つた布製の直垂。されど「絲葛の袴」とある本に従ふべしともいふ。(五)天孫四十九世——地神五代を加へて四十九世となる。(六)「たばん」たまはらんの意。(七)「駕輿」——風笠を穿く仕丁。(八)「葱花云々」——葱花笠は擬寶珠の形を屋上につけた笠、風笠は風風をつけたもの。(九)「水鏡の戸」——筑前國水城といふ所。(一〇)「つ習はしの御事」——つ御習になつたといふのでもないから。(一一)「玄井三藏云々」——西域記に見ゆ。(一二)「横笛音取」——王敵と音が通するのを思んでやうでうといつたのだといふ。音取は調子をあはせること。(一三)「蓬屋」——苦屋と書く。藁などで葺いた家。(一四)「遼海」——はるかかの海。(一五)「晴嵐」——こゝでは海風といふ程の意。(一六)「翠黛」——みどりのまゆすみ。

【評】平大納言時忠の堂々たる態度は夙に榜牛の論じた所で、平家を文翁の徒とのみいへないといふ一證とされてゐる。清經の入水は謡曲にもとりれて哀れな場面である。ともあれ、寄るべなき平家のさすらひは正に悲劇の頂點である。されば、作者の情も亦次第に興奮を

たかめて描寫の筆端白から美辭麗句が流れ出たのであらう。さほさりながら、終の「洲崎にさわぐ千鳥の聲は」とか「晴嵐侵膚を侵して」とかいふ描寫よりも、中程の「息豊後が下知に」なんどいつてのける言葉に面白味があらう。又、惟義が唯太宰府へ歸らせ給ひて、御一所で如何にも成らせ給へ」といふ心にも武士の情があるわけだ。

### 征夷將軍院宣

去程に鎌倉前右兵衛佐頼朝、武勇の名譽長じ給るに依つて、乍居征夷將軍の院宣を被下。御使は左史生中原泰定とぞ聞えし。十月四日の日關東へ下著。兵衛佐殿宣けるは、抑頼朝武勇の名譽長せるに依つて、乍居征夷大將軍の院宣を蒙る。されば私にては争か請取奉べき。若宮の拜殿にして、請取可奉とて、若宮へこそ參向れけれ。八幡は鶴岡に立せ給ふ。地形石清水に不違、廻廊有り、樓門有り、作道十餘町を見下たり。抑院宣

征夷將軍院宣

六〇九

【通釋】去る程に鎌倉の前の右兵衛佐頼朝は、久しく武勇の譽が高いので、居ながら征夷將軍の院宣を下された。左史生中原泰定が使者となつて十月四日關東へ下著した。兵衛佐殿が仰せられるには、「抑々私が武勇の譽あるによつて、居ながら征夷大將軍の院宣を賜はる事になりました。けれ共私宅ではどうして請取ることが出来ませう。鶴岡八幡宮の拜殿でお受け致しませう」とて鶴岡へ出向いた。

八幡は鶴が岡に鎮座して、地形は全く京都の石清水と違はない。廻廊があり、樓門があり、作道の十餘町も續いてゐるのが一目に見下される。抑々この院宣を誰に請取らせやうかと御評議があつた。すると三浦介義澄をして請取らせたらよいであらうといふ事に定まつた。其の譯は八ヶ國に打ち響く弓取の三浦平太郎爲繼の末孫であるし、父大介も君のために命を捨てた程の剛の者であるから、彼の義明が黄泉の暗途を照らすため(即ち義明の亡魂を



をば、誰してか請取可奉と評定有り。三浦介義澄して請取可奉。其故は、八箇國に聞えたる弓矢取、三浦平太郎爲嗣が末葉也。父大介も君の爲に命を捨て兵なれば、彼義明が黄泉の冥闇を照さんが爲とぞ聞えし。院宣の御使泰定は、家子二人郎等十人具したりけり。三浦介も家子二人郎等十人具したりけり。二人の家子は、和田三郎宗實、比企藤四郎能員なり。郎等十人をば、大名十人して、一人づつ俄に被仕立たり。三浦介、その日は褐の直垂に、黒絲威の鎧著て、黒漆の太刀をはき、廿四差たる截生の矢負ひ、滋藤の弓脇に挟み、甲をば脱で高紐にかけ、腰を曲めて院宣を請取奉んとす。左史生申ける

慰めるためだと云ふ。院宣の御使泰定は家の子二人、郎等十人を召し連れした。三浦介も家の子二人、郎等十人を召しつれた。二人の家の子は和田の三郎宗實、比企の藤四郎能員である。郎等十人をば、大名十人して一人づつ急にこしらへられた。三浦介は其日褐衣の直垂に黒絲威の鎧著て、黒ぬりの太刀をたばさみ、二十四差した切斑の矢を負ひ、滋藤の弓を脇にはさみ、甲をぬいで高紐にかけ、腰をかめて院宣を請取り奉らうとした。左史生が申すには「唯今院宣を請取らうとするは誰であるか、名乗られよ」と言ふと、兵衛佐の佐の字に恐れしたのであらうか、三浦の介とは名乗らないで、本名三浦荒次郎義澄と名乗つた。かくて院宣を蘭箱に入れたのを兵衛佐殿に奉つた。暫くして蘭箱をお返した。重いので泰定が抜いて見ると砂金百兩入れてあつた。式後若宮の拜殿で泰定に酒を勧められた。齋院次官（藤原親能）がその席に伺候して給仕役を勤め、五位一人が役送を勤め、斯くて馬三疋を引かせた。一疋には鞍をおいた。之を宮侍狩野工藤一藤資經が引いて出た。又古い萱屋を修繕して泰定の旅舎とし、厚綿の衣二重ね、小袖十重を長持に入れ用意してあつた。その他紺摺白布千端を積み上げてあつた。杯盤は豊であつて美麗である。次の日兵衛佐の館に向つた。館の内外に部屋が十六間程あつた。外侍（中門外の侍の出仕する所）には家子郎等が肩を並べ膝を組んで居並ぶ

は、唯今院宣請取奉んとするは誰人ぞ、名乗給へと言ければ、兵衛佐の佐の字にや恐れん、三浦介とは不名乗して、本名三浦荒次郎義澄とこそ名乗つたれ。院宣をば蘭箱に被入たり。兵衛佐殿に奉る。良有て蘭箱をば被返けり。重かりければ泰定をば披て見るに、砂金百兩被入たり。若宮の拜殿にして、泰定に勸らる。齋院次官陪膳す。五位一人役送を勤む。馬三匹被引。一匹に鞍置たり。宮侍狩野工藤一藤資經是を引く。古き萱屋を飾うて、泰定を被入厚綿の衣二領、小袖十重長持に入て設たり。紺藍摺白布千端を積み。杯盤豊にして美麗なり。次の日兵衛佐の館へ向ふ。内外に侍あり。共に十六間迄有

し、内侍には上座は源氏一門が座し、末座には八ヶ國の大名小名が居並んだ。そして源氏の上座に泰定を据えた。暫くして寢殿（正殿）に向つた。上には高麗縁の疊をしき、廣廂には紫縁の疊をしいて泰定を据えられた。御簾を高く捲上げさせて、兵衛佐殿が顯はれた。佐殿の此日のいでたちは布衣に立烏帽子である。顔が大きくて背が低く、容貌は美しうて言葉ははつきりしてゐる。先づ初めに事の次第を一言話された。「抑々平家は頼朝の勢に恐れて都落ちした。後に木曾義仲、十郎藏人などが打入つて、高名顔に官階を意のままに行ひ、其の上に國を嫌ふなどは以ての外のことである。又奥州の秀衡が陸奥守になり、佐竹冠者が常陸守になつて、之も頼朝の命令に従はない。故に彼等をも追討する院宣を賜はる様に」など話された。泰定は「直ぐに名簿を差し上げ度くは存じますが、當時は御使の身であるから何れ退出して認めて參らせやう。弟である史大夫重能も其の様に申して居ります」と言ふと、兵衛佐はあざ笑つて「當時頼朝の身分として各々方の名簿を貰うなどは考へてゐない。然しながらさうなさるといふなら其の積りに心得てみませう」と仰しやつた。泰定はやがて、今日歸洛するといつたけれども、今日だけは御留まりなさる様にと引留められた。次の日に又兵衛佐の館に向つた。萌黄絲絨の腹巻一領、銀で作つた太刀一振、滋藤の弓に野矢（戰場に用ふ矢）を



けり。外侍には家子郎等肩を並べ膝を組で列居たり。内侍には一門の源氏上座して、末座には八箇國の大名小名居流たり。源氏の上座には泰定を居らる。良有て寢殿に向ふ。上には高麗縁の疊を敷き、廣廂には紫縁の疊を敷て、泰定を居らる。御簾高く捲上させて、兵衛佐殿被出たり。其日は布衣に立烏帽子也。顔大にして背短かりけり。容貌優美にして言語分明也。先仔細を一事述たり。抑平家頼朝が威勢に恐て、都を落つ。其跡に木曾義仲、十郎藏人等が打入て、我高名顔に、官加階を思ふ様に仕り、剩へ國を嫌申す條奇怪也。又奥の秀衡が陸奥守になり、佐竹冠者が常陸守に成て、是も頼朝が下知に不従。彼等をも急ぎ可追討由の院宣賜るべき由を申さる。泰定聽て是にて名簿をも參せたるは候へ共、當時は御使の身で候へば、罷上て聽て認てこそ參せめ、弟で候ふ史大夫重能も、此儀を申候と申ければ、兵衛佐殿あざ笑て、當時頼朝が身として、各の名簿思もよらす。乍去も被致ば、さこそ存せめてとぞ宣ける。泰定聽て今日上洛の由を申す。今日計は可有逗留とて被留。次の日又兵衛佐の館へ向ふ。萌黄絲威の腹巻一領、白う作たる太刀一振、滋藤の弓に野矢副てたぶ。馬十三匹被引。三匹に鞍置たり。十

二人の家子郎等共にも、直垂小袖大口馬物具に及べり。馬だにも三百匹迄有けり。鎌倉出の宿よりも、近江國鏡の宿に至まで、宿々二十石づゝの米を被置たりければ、澤山あるに依て、施行に引けるとぞ聞えし。

【釋】(一)左史生——太政官の屬官で、公文の書記役。(二)若宮——若宮八幡の略。若宮といふのは御本體の正統の御子を祭る社である

がこゝでは石清水八幡に對して鶴岡八幡をさういつたのだらう。(三)三浦介——介とは中世以後國司の吏務を執つた者(次官)大介といふのも同じやうな職掌である。こゝの三浦介は恐らく三浦の庄をおさめてゐたのだらう。(四)關箱——覽箱とも書く、繪旨を入れる筥。元來は上箱から文書を入れて天皇の御覽にそなへたので覽箱といふのだとか。(五)齋院次官——齋院司の次官、こゝでは藤原親能兼定の弟。陪膳は陪食を許されたことである。(六)役送——お膳の運び役。(七)宮の侍云々——考證には「祐經ハ后宮(皇太后)ノ侍ニシテ一萬ナルモノカ又瀬口ニシテ一萬タル者カ」といつてある。なほ可考。(八)紺藍摺——藍で模様を摺り染めた布。(九)高麗縁——白地に黒い紋様を織り出すか染め出すかした疊の縁。(一〇)廣廂——母屋の外側の廂。(一一)布衣——狩衣の類。(一二)名簿——自分の姓名を書いた帳簿。二心なきをあらはす爲に送るのが例だつたといふ。(一三)被致ば云々——さうなるならば、その様にさい、そのつもりでませう。(一四)白う作つた——銀作りの。(一五)野矢——征戦に用ふる矢。(一六)大口——大口袴の略。東帯の時表袴の下に穿く袴。表裏共に紅色の平絹で造る。

【評】頼朝が征夷大將軍に任ぜられたのは建久三年であるから、こゝで壽永二年にしてゐるのは誤である。梅澤氏は「壽永二年十月一日或秘記云傳聞先日所遣三頼朝之許之院廳官、此兩三日以前歸與三豆多之引出物云々とあり、院宣は此事を誤り傳へたるらしい」といつてゐる。文章には浮いた所がなくて落ちついてゐる。

### 猫 間

泰定都へ上り、院參して、御坪の内かしこに畏て、關東のかしこ様を具に奏聞申たりければ、法皇大に御感有けり。公卿も殿上人も笑壺あつはに入せ御座し、如

副へて頂戴した。尙其の他に馬十三頭を引出物として貰つた。三頭には鞍を置いてある。十二人の家の子郎等共にも直垂小袖・大口・馬具、物具、などまで賜つた。馬でさへ三百頭からあつた。鎌倉を出て、次の宿から、近江國鏡の宿に至るまで、宿々には二十石宛の米を頼朝の方から用意してあつたので、餘りに米が澤山であるから途中で施米したといふことだ。

【通釋】泰定は都に上つて、院御所に伺候し、御殿のお庭に畏つて、關東の有様を委しく申し上げると、法皇は大層御悦びになり。公卿も殿上人も笑ひ興ぜられた。どうして兵衛佐はかく勝れてゐるのだらう、それにしても當時都の守護をして居られる木曾義仲は見かけによらず悪い。色は白くて眉目



何なれば、兵衛佐は角こそ勇々しう御座しか。當時都の守護して候れける木曾義仲は、似も似ず悪かりけり。色白う眉目は好男にて有けれ共、立居の振舞の無骨さ、言たる訶績の頑なる事限なし。理哉二歳より三十に餘る迄、信濃國木曾と云ふ片山里に住馴て坐ければ、何かはよかるべき。其比猫間中納言光高卿と云ふ人有けり。木曾に宜合すべき事有て坐たりけるを、郎等共猫間殿の入れ給て候と言ければ、木曾大に笑て、猫は人に對面するかとぞ言ける。是は猫間中納言殿とて公卿にて渡せ給ひ候と言ければ、さらばとて對面す。木曾猫間殿とはえいはで、猫殿の食時にまればわいた

秀麗ではあるが、起居動作の無作法なこと、もの言ひ振りのごつ／＼したことなど、ひどいものだ。それも道理、二歳から三十歳になるまで信濃國の木曾と云ふ片田舎に住み馴れて居られたので、何としてよいことがあらう其頃猫間中納言光高卿といふ人があつた。木曾殿に對談されるべき事があつたので義仲を訪づれた所が、郎等共は「猫間殿が御いでになりました」と言つた。木曾は大層笑つて「猫は人に對面するか」と言はれた。「いえ猫間中納言殿とて公卿にわたらせらるゝ御方です」と言ふと、「それでは」とて對面した。木曾は猫間殿とは言はないで「猫殿は食事時においてになつたのだから饗應せよ」と仰しやつた。中納言は「どうして唯今、左様なる御饗應をなさらぬ様に」と仰しやつた。木曾殿は鹽魚に對して生魚を無鹽と云ふのをば、何でも新らしいものは無鹽といふのであると思ひ違へて「無鹽の平茸が此所にあるから早く／＼」と急がせた。根井小彌太がお招伴した。田舎の飯器の大變大きくて凹いのに飯を推高く盛り上げて、御菜三種、平茸の汁で差し上げた。木曾の前にも同じ様なお膳を据えた。木曾は箸を取つて食したのに、中納言は餘り、粗末な飯器なので召し上らなかつた。木曾は「きたなくお思にならぬ様に、此は私のきれいなお椀であるから、何卒／＼」と勧められるので、中納言は食べぬのも悪いだらうと思はれたのか、箸を取つて食べる形を

に、物よそへとぞ言ける。中納言殿争が唯今さる御事の坐べきと宜へ共木曾何をも新き物をば無鹽と云ふぞと心得て、無鹽の平茸此に有り、と／＼と急がす。根井小彌太陪膳す。田舎合子の極て大に凹かりけるに、飯堆うよそひ、御菜三種して、平茸の汁にて參せたり。木曾が前にも同じ體にて据たりけり。木曾箸取て食す。中納言は、餘に合子のいぶせさに、召ざりければ、木曾きたなうな思給ひそ。其義仲が精進合子で候ぞ。とう／＼と勸る間、中納言殿召でも流石悪かりなんとや被思けん、箸取て召由して、指置れたりければ木曾大に笑て、猫殿は小食にて坐すよ。聞ゆる猫おろしし給たり。搔給へ

して箸を置かれたので、木曾は大變に笑つて「猫殿は小食であられる、猫は物を食ひ餘す癖があるとの評判だが、猫殿はその食ひ餘しをなされた。何卒掻き込んでしまひなさい」と責めたので、中納言殿は斯様なことに全く興がさめて、話し合ひもなさらずに、急いで歸つてしまはれた。其後義仲が院に伺候した時、官位の上つた者は直垂で伺候するのはよくないといつて、急に布衣となり、装束をつけた様子、冠のかむりきは、紐のく／＼具合、袴の裾の紐のく／＼具合に至るまで、ごち／＼して見られない。義仲が鎧を著、矢を負ひ、弓押し張り、甲の緒をしめて馬に乗つた有様に比して、似ても似つかぬ程見にくいものであつた。そして車に曲なりに乗つた。牛飼は八島の大巨(宗盛)の牛飼である。牛車も同様である。すぐれた牛を繋ぎ飼して置いたのを、門を出るや否や一鞭當てたのでたまらない、牛は一散に飛び出したので、木曾は車の中で仰向に倒れた。蝶が羽根を廣げた様に、左右の袖を廣げて手をばた／＼させて、起き様となされたが、どうして起きられやう、牛飼とも言ひ得ないで「小牛の健兒よ、小牛の健兒よ」と言はれたので、牛飼は車をやれよと云はれるのであらうと思ひ、五六丁も走らせた。今井四郎が鞍鎧を合せて追ひ付き、「何故、斯の様に車を急せがるのであるか」と言ふと「餘りに牛の鼻が強うて」と答へた。牛飼は木曾に仲なほりを仕様と思つ



くやとぞ責たりける。中納言殿は加様の事に萬興醒て、宣合すべきこと共、一言も言出さず、急ぎ被歸けり。其後義仲院參しけるが、官加階したる者の、直垂にて出仕せん事有べうもなしとて、俄に布衣となり、装束冠ぎは、袖のかゝり、指貫の輪に至迄、頑なる事限なし。鎧取て著、矢搔負ひ、弓押張り、甲の緒をしめ、馬に打乗たるには、似も不似惡かりけり。され共、車にゆがみ乗ぬ。牛飼は八島の大匠殿の牛飼也。牛車も其なりけり。逸物なる牛の居飼たるを、門出るとて、一椏當たらうに、何かはよかるべき。牛は飛で出れば、木曾は車の内にて、仰向に倒ぬ。蝶の羽播たる様に、左右の袖をひろげ手をあがいて、起んくとしけれ共、何かは可被起。木曾牛飼とはえ言で、やれ小牛健兒よ。やれ小牛健兒よと言ければ、車をやれと言ぞと心得て、五六町こそあがかせけれ。今井四郎鞭鎧を合て追付き、何とて御車をば加様には仕るぞと言ければ、餘に御牛の鼻が強う候てとぞ演たりける。牛飼木曾に申直せんとや思けん、其に候ふ手形と申す者に取附せ給へと言ければ、木曾手形に無手と摺附て、

たのか「其所にある、手形のついた（乗降の便の爲に車の前後に手形の木がつけてある）木をお掴みなさい」といつたので、木曾は手形にしつかりしがみついて「あゝうまい仕掛がしてある、これは牛健兒のしたことか。殿（宗盛）が斯様にして置かれたのか」と問はれた。さて院の御所に來て、門前で車をかけはすさせ、後から下りやうとしたので、京の者の雑色に召し使はれてゐる者が「車にお乗りになる時は後からですが、下りる時は前からお下りになるものです」と言つたので、木曾は「いくら車だからと言ふて何して素通りをするのであるか」といつて、とう／＼後から下りられた。其の外にもおかしい事など多かつたけれども、遠慮して申すまい。かくて牛飼は終に斬られてしまつた。

哀支度や、牛健兒が、計か、殿の様かとぞ問たりける。さて院御所へ參り、門前にて車かけはづさせ後より下んとしければ、京の者の雑色に被召遣けるが、車には、被召候時こそ後よりは被召候へ、下させ給ふ時は前よりこそ下させ給へけれと言ければ、木曾、争か車ならんからに、何條すどほりをすべきとて、終に後よりぞ下てける。其外をかしき事共多かりけれ共、恐て是を不申、牛飼は終に被斬にけり。

【語釋】（一）食時にまれば云々——校定本には「稀におはしたるに物よそへ……如何でけとときにおはいたる、さて可在か」となつてゐる。八坂本では「たま／＼、わいたに飯よそはせではいかゞあるべき」となつてゐる。これは石田氏の説の如く「まればわいたに」が方言の原形で、それが分りやすく改められたのが八坂本、覺一本の所説であらう。してみると「まればれ」はたま／＼とかめづらしくの意で、わいたはおはしたの意である。（二）無鹽——鹽をつけない生の魚。（三）田舎合子——合子は蓋と實とを合せるもので、こゝでは田舎椀位の意。（四）猫おろし——考證に「餘食ヲ云ナリ」とある。食べ残したて下げることをいふ。（五）一椏當てたらうに——すばえは、木の枝の細く真直なもの。つまり一椏あてたのでの意。あてたらうには、あてたであらうによつて。（六）こでい——中間の如き難役をする者の稱。（元來は兵士をいつたのである。）（七）あががす——あがくは苦しみもかく意味で、義仲を困らせたといふ意に解する説と、牛をもがせた即ち牛を走らせたの意に解する説とある。八坂本には「あがらせたり」とあるから、やはり牛を跳らせたつまり走らせたと解する方が宜い。（八）手形——車の前後の左右につけてある木。（九）あつばれ支度や——あゝいかにも感心な用意である。（手形のつけてあるのは）（一〇）殿のやうか——八坂本には「是は八島のおほい殿の御はからひか」とあるのでよく分る。（一一）車かけはづす——轆を鞍から放すこと。（一二）車ならんからに——車だからといつて。

【評】いかに田舎者らしい、たわいな義仲が、よく描かれてゐる。武には強いし情もあつかつた（實盛にみても、兼平にみても）旭將軍ではあり、色の白い「みゆい男」であつた彼も、都人の前に出れば全くの山猿であつた。しかし、それは彼のいつはらぬ姿であつて「きたなうな思ひ給ひそ、義仲が精進（きれいな）合子で候ぞ」といふ邊りは愛すべき野人の姿ではないか。猫殿／＼と呼びかけるのも彼一流の親しさから出た言葉とも考へられる。さるにても「猫おろしし給ひたり」に至つては少々野卑な滑稽である。かうした骨



さが自分を滅ぼす大きな原因であつたとは、悲しい運命の皮肉である。作者も亦、いつしか木曾くと呼捨てにする様になつてしまつた。  
 なほ、本文についていふと「やれ小牛健兒よといひければ、車をやれといふと心得て」とある所が、八坂本では「耳にも聞入れず」となつてゐる。その方が自然な書き方であると思ふ。

### 水島合戦

去程に、平家は讃岐の八島に有ながら、山陽道八箇國、南海道六箇國、都合十四箇國をぞ討取ける。木曾安からぬ事也とて、懸て討手を被向大將軍には陸奥の新判官義康が子、矢田判官代義清、侍大將には、信濃國の住人海野彌平四郎行廣を先として都合其勢七千餘騎山陽道へ發向す。備中國水島の渡に舟を浮て、八島へ既に寄んとす。閏十月一日の日、水島が渡に小船一艘出來たり。海士船

【通釋】 去る程に、平家は讃岐の八島に在りながら、山陽道八ヶ國・南海六ヶ國都合十四ヶ國を討取つた。木曾は不安心な事であるとして、やがて討手を向けた。大將軍には陸奥の新判官義康の子、矢田判官代義清、侍大將には、信濃國の住人海野彌平四郎行廣を先として、都合其の勢七千餘騎、山陽道を發向した。備中國水島の渡に舟を浮て、八島に早や打ち寄せようとした。すると閏十月一日に水島の渡へ小舟が一艘現はれた。漁士の舟であらうと見てゐると、さうではなくて、平家の方からの偵察の舟であつた。源氏の方の兵どもは是を見て、濱へ引き上げてあつた五百餘艘の舟を、皆吾先にく下した。平家は千餘艘で打寄せた。大將軍には、新中納言知盛、副將軍には能登守教經である。能登殿は大音をあげて「如何に四國の者ども、北國のやつばらに、生捕にせられることは、残念とは思はないか、味方の舟を組み合せよ〜」

釣船かと思ふ處に。さはなくして平家の方よりの牒の使の船也けり。源氏の方の兵共、是を見て、干上たりける五百餘艘の船どもを、皆我先にくとぞ下ける。平家は千餘艘でぞ寄たりける。大將軍には新中納言知盛卿、副將軍には能登守教經也けり。能登殿大音聲を上て、如何に四國の者共、北國の奴原に生捕にせられんをば、心憂とは不思議や、御方の船をば組やとて、千餘艘の纜船綱を組合せ中にもやひを入れ、歩の板をひき渡し渡れば、船の中は平々たり。開作り、矢合して、遠きをば射て落し、近きをば太刀で斬る。或は熊手に懸て引落さるる者もあり、或は引組刺違へて、海へ飛入る者も有り。何れ隙有共見えざりけり。源氏の方の侍大將海野彌平四郎行廣討れぬ。是を見て矢田判官代義清安からぬ事也とて、主従七人小舟に乗り、眞前に進で戦けるが、船踏沈て失にけり。平家は船に馬を立たりければ、船共乗傾々々、馬共追下しく船に引附々々遊ぶ。馬の足

といつて、千餘艘の纜を組み合せ、綱と綱の間につなぎを入れて、歩みの坂を一面に引き渡したので、舟の中は平になつた。かくて開の聲に矢を合せ、遠いのを射落し、近いのは太刀で斬りまくつたので、或は熊手にかけて引落される者があり、或は引組み刺し違へて、海へ飛び込む者がある。どの點からいつても平家には隙があるとは見えない。源氏の方の侍大將海野彌平四郎行廣が討たれた。是を見て矢田判官代義清は癡にさへて、主従七人小舟に乗つて眞先に進んで戦つたが、遂に舟を踏み沈めて死んだ。平家は舟に馬を乗せてあつたので、舟を乗りかたむけて、馬を追ひ下し、船につないで游がせた。馬の足を立て鞍爪の所まで水が届く所で、ひたくと打乗つて、能登殿五百餘騎がおめき叫んで、先を争ふと、源氏の方では大將軍が討たれたので吾先にと落ちてしまつた。平家は今度こそ水島の戦に勝つて、日頃の恥を雪いだのであつた。



立ち鞍爪干たる程にも成しかば、ひたくと打乗て、能登殿五百餘騎喚て先を懸給へば、源氏の方には大將軍は討れぬ。我先にとぞ落行ける。平家は今度水島の軍に勝てこそ、會稽の恥をば雪めけれ。

【語釋】(一) 藤の使の舟——藤状をもつて来る使の船。考證には藤としてある。(偵察船の意。)(二) 船たくむ——單獨では動作に不恒だから幾艘をもつなぎ合せるのである。(三) もやひ——紡のことで、船と船となつなぎあはせる棧又は綱。

### 瀬尾最後

木曾左馬頭此由を聞いて、安からぬ事也とて、其勢一萬餘騎で備中國へ馳下る。爰に平家の御方に候ける備中國の住人瀬尾太郎兼康は、聞ゆる兵にて有けれ共、去ぬる五月北國の戦の時、運や盡にけん。加賀國の住人倉光次郎成澄が手に懸て、生捕にこそせられけれ。其時既に斬るべかりしを、木曾殿あつたら男を左右なう可斬に非すとて、第三郎成氏に被預て候ける。人あひ心様誠に優

【通釋】木曾左馬頭は此の由を聞いて、心安からぬことであるとて、其の軍勢一萬餘騎で備中國へ馳せ下つた。爰に平家の御方である備中國住人瀬尾太郎兼康は、評判の武士であつたが、去る五月北國の戦の時、運が盡きたのであらう、加賀國の住人倉光次郎成澄に討たれて、生捕にせられた。其の時既に斬られる筈であつたのを、木曾殿が「惜しい男をたやすく斬るべきではない」といつて弟の三郎成氏に預けられたのである。人柄や心持など誠に優しかつたので、倉光も親切に待遇した。これ恰も蘇子卿が胡國に使して十九年間囚はれ、李少卿が匈奴に虜はれて歸らなかつた様なものである。昔の人が蘇武や李陵を悲しむのは、遠い異國に身を託したからだと文選にも書いてある。兼康も亦その通りだ。所謂草製の衣を着て風雨を凌ぎ、羶肉毛衣、牛酪、漿を以て飢渴を防ぎ、夜は寝やして晝は終日仕へ、たゞ木を伐り草を刈らな

なりければ、倉光も懇に持成けり。蘇子卿が胡國に囚れ、李少卿が漢朝へ歸ざりしが如し。遠く異國につける事も、昔の人の悲めりしが處也と云へり。韋構、毳幕、以禦風雨。羶肉、酪漿、以充飢渴。夜は寢し事なく、晝は終日に仕て、木を伐草を刈すと云ふ許に従つ、如何にもて敵を窺ひ討て、今一度舊主を見ばやと、思立ける兼康が、心の中こそ怖けれ。或時瀬尾太郎倉光三郎に言けるは、去ぬる五月より甲斐なき命を被助參せて候へば、誰を誰とか思ひ參せ可候。今度御合戦候はば命をば先木曾殿に奉らん。共に就候ては、先年兼康が知行し候し備中の瀬尾と云ふ所は、馬の草飼好き

いと云ふばかりで、外の事は何でもするといふ程に仕へて、何とかして敵のすきを窺ひ、之を討取つて今一度舊主に逢ひ度いものと、思ひ立つてゐる兼康が心の中こそ恐ろしいものである。或時瀬尾太郎が倉光三郎に言ふには「去る五月生き甲斐のない身を助けられてからは、誰をどうかうとは思つてはゐない。(舊主のことなど思つてはゐません)、今度御合戦があつたならば命を先づ第一に木曾殿に差し上げよう。それについては、先年兼康が知行してゐた備中の瀬尾といふ所は馬に草飼ふのによい所で(糧食足りて兵を畜へるによい)あるから、若し斯様なことがあつた時は、義仲殿に願つて其の土地を頂きなさい。私が案内しませう」と言つたので、倉光三郎は木曾殿にこの由を話した。木曾殿は「さて、不便なことを申す者である。では汝は先づ下つて、馬の草を備へさせる様にせよ(お前に與へる)と仰しやつた。倉光三郎は長つて、手許にある三十騎ばかりと、瀬尾太郎を相具して備中國へ急ぎ向つた。瀬尾の嫡子小太郎宗康は平家の御方であつたが、父が木曾殿より暇を賜はつて下つて来ると聞いて、年來の郎等をかり集めて、其の軍勢百騎ばかりで、父の迎ひに上つたが、丁度播磨の國府で行き逢つた。それより打連れ下る内に、備前の國三石の宿に留つた夜、瀬尾の舊知己の者共が酒を持つて集つて來つて終夜酒宴をしたが、瀬尾は倉光の軍勢三十騎程に酒を勧めて



處にて候。御邊申して給らせ給へ、案内者せんと言ければ、倉光三郎木曾殿にこの由を申す。木曾殿さては不便の事をも申すござんなれ。誠に汝先下て、馬の草などを構へさせよとぞ宜ける倉光三郎畏承て、手勢三十騎許、瀬尾太郎を相具して備中國へ馳下る。瀬尾が嫡子小太郎宗康は、平家の御方に候けるが、父が木曾殿より暇賜て下ると聞て、年來の郎等共催し集て、其勢百騎許で、父が迎に上げるが、播磨の國府で行あうたり。其より打連れ下る程に、備前國三石の宿に留つたりける夜、瀬尾相知つたる者共、酒を持せて來集り、終夜酒盛しけるが、倉光が勢三十騎許を強伏て起しも立す

酔はせて寝させてしました。そして倉光三郎を始めとして、一々皆刺し殺してしまつた。備前國は十郎藏人の國である。其の代官が國府に居たのを、聽て押寄せて討つてしまつた。瀬尾太郎が申すに「兼康は木曾殿より暇を賜はつて、是迄罷り下つた。平家に御心をよせらるゝ程の人々は、此度木曾殿の下られる時矢一つ射かけよ」と披露したので、備前備中備後三ヶ國の兵共は、相當な武器從卒などをば平家の御方へ進上し、休んでゐた老武者共は瀬尾にかき集められて、或はかきの直垂の紐をつめなほし、或は布の小袖からけて裾をはし折り、腹巻のつぎ合せたるを著て無細工な靱や竹の箴などに矢を少しさし、搔負ひくして都合二千餘人瀬尾の館へ集つて來た。備前國福隆寺繩手、篠のせまりを城郭に備へて、幅二丈、深さ二丈の堀を掘り、垣桶かき、高矢倉を構へ、逆茂木引いて待ち懸けた。十郎藏人の代官は瀬尾に討たれ其の下人が逃げて京へ上つたのが、播磨と備前の境の船坂山で木曾殿に行き逢つて、この由を言上した。「にくき瀬尾である。此の前斬つて捨てる筈であつたものを、つい油断してたばかられてしまつたのは癪にさはることである」と後悔せられたので、今井四郎が申すに「彼奴の面魂は普通の者とは見えなかつた。だから幾度も斬り捨てやうと云つたのは此の事である。さりとて今でも何程のことがあり得やう。兼平が先づ參つて見ませう」とて其の軍勢三千餘騎で備前國へ馳せ向つた。備前國福隆寺の繩手は幅の廣さ弓杖一杖ほどで(七尺五寸)で遠さは西國道の一里(六丁、盛衰記には二十餘町)である。左右は深田で馬が歩めないで、三千餘騎は心のみ先にはやるけれども、力及ばず馬の歩くまゝに歩かせた。今井四郎が押し寄せて見ると、瀬尾太郎は急ぎ高矢倉に上り、大音聲をあげて「去る五月生きられぬ、命を助けられ各々方への御禮には之を用意しました」といつて、二十四差した矢を指し詰め、散々に射た。今井四郎、宮崎三郎、海野、望月の一人當千の將士は之を事ともせず、甲の鍔を傾けつゝ、射殺される人馬をば取り入れ引き入れ堀を埋め、或は左右の深田に打入れて、草脇や、軼のかれくる迄太腹に立つ處も少しもひるまず、群つて押し寄せ、或は谷の深いのも、厭はず懸け入り、関の聲を作つて攻め入つたので、瀬尾方の兵士は助かる者は少く討たれる者の方が多かつた。夜になつて頼み切つてゐた篠の迫の城壁を破られて、叶はないと思つたのであらうか引退いた。そして備中の板倉川の端に、垣桶かいて待ちかけたので、今井四郎はつゞけて攻めた。瀬尾方の兵士は、山靱竹箴に、矢種のありつたけ戦つて防いだが、矢種は皆盡きてしまつたので、力及ばず我先にと落ちて行つた。瀬尾太郎は主従三騎となり、板倉川の岸に沿うて緑山の方へ落ちて行つた。去る五月、北國で瀬尾を生捕にした倉光次

倉光三郎を始めとして、一々に皆刺殺してける。備前國は十郎藏人の國也けり。其代官の國府に有けるをも、聽て押寄せて討てけり。瀬尾太郎申けるは、兼康こそ木曾殿より、暇賜て是迄罷下たれ。平家に御志思參せん人々は、今度木曾殿の下り給に矢一つ射懸奉れやと披露したりければ、備前備中備後三箇國の兵共、可然馬物具所從などをば、平家の御方へ參せて休み居たりける老者共、瀬尾に被催て、或はかきの直垂につめ紐し、或は布の小袖に東折し、破腹巻綴り著、山靱、竹箴に矢共少々指し、搔負々々都合其勢二十餘人、瀬尾が館へ馳集る。備前國福隆寺繩手、篠のせまりを城郭に構て、口二丈深さ二

餘騎で備前國へ馳せ向つた。備前國福隆寺の繩手は幅の廣さ弓杖一杖ほどで(七尺五寸)で遠さは西國道の一里(六丁、盛衰記には二十餘町)である。左右は深田で馬が歩めないで、三千餘騎は心のみ先にはやるけれども、力及ばず馬の歩くまゝに歩かせた。今井四郎が押し寄せて見ると、瀬尾太郎は急ぎ高矢倉に上り、大音聲をあげて「去る五月生きられぬ、命を助けられ各々方への御禮には之を用意しました」といつて、二十四差した矢を指し詰め、散々に射た。今井四郎、宮崎三郎、海野、望月の一人當千の將士は之を事ともせず、甲の鍔を傾けつゝ、射殺される人馬をば取り入れ引き入れ堀を埋め、或は左右の深田に打入れて、草脇や、軼のかれくる迄太腹に立つ處も少しもひるまず、群つて押し寄せ、或は谷の深いのも、厭はず懸け入り、関の聲を作つて攻め入つたので、瀬尾方の兵士は助かる者は少く討たれる者の方が多かつた。夜になつて頼み切つてゐた篠の迫の城壁を破られて、叶はないと思つたのであらうか引退いた。そして備中の板倉川の端に、垣桶かいて待ちかけたので、今井四郎はつゞけて攻めた。瀬尾方の兵士は、山靱竹箴に、矢種のありつたけ戦つて防いだが、矢種は皆盡きてしまつたので、力及ばず我先にと落ちて行つた。瀬尾太郎は主従三騎となり、板倉川の岸に沿うて緑山の方へ落ちて行つた。去る五月、北國で瀬尾を生捕にした倉光次



丈に堀を掘り、垣桶かき、高矢倉し逆茂木引て待懸たり。十郎藏人の代官、瀬尾に被討て、其下人の逃て京へ上るが、播磨と備前の境なる船坂山にて木曾殿に行逢奉り、此由かくと申ければ、木曾殿悪からん瀬尾めを斬て捨べかりつる物を、手延にし謀れぬる事こそ安からねと、後悔せられければ、今井四郎申けるは、奴が煩魂、たゞ者とは見候はず、千度斬うと申候しも、こゝ候ぞかし。乍去何程の事か可候。兼平先罷向て見候はんとて、其勢三千餘騎で、備前國へ馳下る。備前國福隆寺繩手は、端張杖一杖許にて、遠さは西國道の一里也。左右は深田にて馬の足も及ねば、三千餘騎が心は先

郎成澄は今度弟の三郎成氏を討たれて、残念だつたのか、今度も又瀬尾奴を虜にしてやらうと、唯一騎群より抜けて後を追ふて行つた。間が一丁ばりに追ひ附いた頃「そこへ行くのは如何にも瀬尾でないか、卑怯に敵に後を見せるのか、返せ」と詞をかける、瀬尾太郎は板倉河を西へ渡る所であつたが、河中にて待ち懸けた。倉光次郎は鞭を合せて追附き、押し並んで無手と組んでどうと落ちた。互に劣らぬ大力ではあり、上になり下になり轉び合つてゐたが、河岸に淵があつたので轉び入つてしまつた。倉光の水練の心得なく、瀬尾はひるまない程の水練の巧な人であつたから、水底で倉光の腰の刀をぬき鎧の草摺を引上げて、柄も拳も透れくと三太刀刺して首を取つた。瀬尾太郎は我馬を乗り損じたので、倉光の馬に乗つて落ちて行つた。瀬尾の嫡子小太郎宗康は、年は二十二歳であつたが、餘りに肥つてゐるので、一町とも走り得なかつたために瀬尾は是を見捨て、二十餘丁程逃げのびてしまつた。

瀬尾太郎が云ふには、「日頃は千萬の敵に逢うて戦つても四方が晴れくとしてゐる様に思ふが、今日は小太郎宗康をすて、逃げた爲であらうか、一向先が暗うて見えぬ。今度の戦に生きのびて再び平家の御方へ參つても、兼康は年六十に餘り、(目がくらむ)いつ迄命生きようと云ふてか、誰一人ある子

に進め共、力不及、馬次第にぞ歩せける。今井四郎押寄て見ければ、瀬尾太郎は、急ぎ高矢倉に走り上り、大音聲を揚て、去ぬる五月より甲斐なき命を被助參せて候ふ各の芳志には、是をこそ用意仕て候へとて、二十四差たる矢を、指詰引詰散々に射る。今井四郎、宮崎三郎、海野、望月、諏訪、藤澤など云ふ一人當千の兵共、是を事共せず、甲の鎧を傾け、射殺さるゝ人馬をば取入れ引入れ堀を埋め、或は左右の深田に打入れて馬の草わさ鞆づくし、太腹に立つ處をも事ともせず、簇めかいて押寄せ、或は谷ふけをも不嫌懸入々々喚叫で攻入れれば、瀬尾が方の兵ども、助る者は少く、討るゝ者

を捨て、これ迄逃げて来たのであらうと、同僚の者共に言はれることが口惜しい」といつたので、郎等は「さうであるからこそ唯御一所に討死なさる様にと申したのはこのことである。引返させらるゝ様に」云つたので、取つて返した。案の如く小太郎宗康が足を腫れ上らせて臥つてゐた所へ、瀬尾太郎が取つて返し、急ぎ馬から下りて、小太郎の手を取り「汝と生死を共に仕様と思つてこれ迄師つたのである」といふと、小太郎は涙をはらりと流して「私は無器量であるからたとひこゝで自害いたすとも、御父上は我故に御命を失はれるとすれば五逆罪(殺父、殺母、殺阿羅漢、殺和合僧、出佛身血)の一であるから、どうかお逃げ下さい」といつたけれども、「早や覺悟をきめてしまつた上はいつ討死すとも、思ひ残すことはない」とて、休んで居る所へ、又源氏の新手が五十騎ばかり出て来た。瀬尾太郎は射残してゐた八筋の矢をさしつめ、散々に射た。死生は知らず、其の場で敵八騎を射落し、其の後太刀をぬいて、先づ小太郎の首を討ち落し、自分は敵の中へ懸け入り、散々に戦つて敵を多く討取りて其所で討死してしまつた。郎等も主に負けず戦つたが、痛手を負うて生捕にせられ、中一日してやがて死んでしまつた。源氏は彼等主従三人の首を備中國鷲の森に、木曾殿は「あはれ剛の者であるよ。彼等が命を助けて見度、



丈に堀を掘り、垣楯かき、高矢倉し逆茂木引て待懸たり。十郎藏人の代官、瀬尾に被討て、其下人の逃て京へ上るが、播磨と備前の境なる船坂山にて木曾殿に行逢奉り、此由かくと申ければ、木曾殿悪からん瀬尾めを斬て捨べかりつる物を、手延にし謀れぬる事こそ安からねと、後悔せられければ、今井四郎申けるは、奴が頼魂、たゞ者とは見候はず、千度斬うと申候しも、こゝ候ぞかし。乍、去何程の事か可候。兼平先罷向て見候はんとて、其勢三千餘騎で、備前國へ馳下る。備前國福隆寺繩手は、端張杖一杖許にて、遠さは西國道の一里也。左右は深田にて馬の足も及ねば、三千餘騎が心は先

郎成澄は今度弟の三郎成氏を討たれて、残念だつたのか、今度も又瀬尾奴を虜にしてやらうと、唯一騎群より抜けて後を追ふて行つた。間が一丁ばりに追ひ附いた頃「そこへ行くのは如何にも瀬尾でないか、卑怯に敵に後を見せるのか、返せ」と詞をかけると、瀬尾太郎は板倉河を西へ渡る所であつたが、河中にて待ち懸けた。倉光次郎は鞭鎧を合せて追附き、押し並んで無手と組んでどうと落ちた。互に劣らぬ大力ではあり、上になり下になり轉び合つてゐたが、河岸に淵があつたので轉び入つてしまつた。倉光の水練の心得なく、瀬尾はひるまない程の水練の巧な人であつたから、水底で倉光の腰の刀をぬき鎧の草摺を引上げて、柄も拳も透れくと三太刀刺して首を取つた。瀬尾太郎は我馬を乗り損じたので、倉光の馬に乗つて落ちて行つた。瀬尾の嫡子小太郎宗康は、年は二十二歳であつたが、餘りに肥つてゐるので、一町とも走り得なかつたために瀬尾は是を見捨て、二十餘丁程逃げのびてしまつた。

瀬尾太郎が云ふには、「日頃は千萬の敵に逢うて戦つても四方が暗れくとしてゐる様に思ふが、今日は小太郎宗康をすて、逃げた爲であらうか、一向先が暗うて見えぬ。今度の戦に生きのびて再び平家の御方へ參つても、兼康は年六十に餘り、(目もくらむ)いつ迄命生きようと云ふてか、誰一人ある子

に進め共、力不及、馬次第にぞ歩せる。今井四郎押寄て見ければ、瀬尾太郎は、急ぎ高矢倉に走り上り、大音聲を揚て、去ぬる五月より甲斐なき命を被助參せて候ふ各の芳志には、是をこそ用意仕て候へとて、二十四差たる矢を、指詰引詰散々に射る。今井四郎、宮崎三郎、海野、望月、諫訪、藤澤など云ふ一人當千の兵共、是を事共せず、甲の鎧を傾け、射殺さるゝ人馬をば取入れ引入れ堀を埋め、或は左右の深田に打立て馬の草わき鞆づくし、太腹に立つ處をも事ともせず、簇めかいて押寄せ、或は谷ふけをも不嫌懸入々々喚叫で攻入ければ、瀬尾が方の兵ども、助る者は少く、討るゝ者

を捨て、これ迄逃げて来たのであらうと、同僚の者共に言はれることが口惜しい」といつたので、郎等は「さうであるからこそ唯御一所に討死なされる様にと申したのはこのことである。引返させらるゝ様に」云つたので、取つて返した。案の如く小太郎宗康が足を腫れ上らせて臥つてゐた所へ、瀬尾太郎が取つて返し、急ぎ馬から下りて、小太郎の手を取り「汝と生死を共に仕様と思つてこれ迄歸つたのである」といふと、小太郎は涙をはらりと流して「私は無器量であるからたとひこゝで自害いたすとも、御父上は我故に御命を失はれるとすれば五逆罪(殺父、殺母、殺阿羅漢、殺和合僧、出佛身血)の一であるから、どうかお逃げ下さい」といつたけれども、「早や覺悟をきめてしまつた上はいつ討死すとも、思ひ残すことはない」とて、休んで居る所へ、又源氏の新手が五十騎ばかり出て来た。瀬尾太郎は射残してゐた八筋の矢をさしつめ、散々に射た。死生は知らず、其の場で敵八騎を射落し、其の後太刀をぬいて、先づ小太郎の首を討ち落し、自分は敵の中へ懸け入り、散々に戦つて敵を多く討取りて其所で討死してしまつた。郎等も主に負けず戦つたが、痛手を負うて生捕にせられ、中一日してやがて死んでしまつた。源氏は彼等主従三人の首を備中國鷲の森に、木曾殿は「あはれ剛の者であるよ。彼等が命を助けて見度、



ぞ多かりける。夜に入て、瀬尾が頼切たる篠の迫の城郭を被破て、叶じ、  
 の端に、垣楯かいて待懸たり。今井四郎やがて續て攻ければ、瀬尾が方の兵ど、  
 有程こそ防ぎけれ。矢種皆盡ければ、力不及我先にとぞ落行ける。瀬尾太郎唯主従三騎に打なされ、板倉  
 河の端に著て、緑山の方へ落ぞ行く。去ぬる五月北國にて、瀬尾生捕にしたりける倉光次郎成澄は、弟の  
 三郎成氏を討せて、安からずや思けん、今度も又瀬尾めに於ては、虜にせんとして、唯一騎群を抜て追て  
 行く。あはひ一町許に追附き、あれは如何に瀬尾とこそ見れ。正なうも敵に後を見する者哉。返せや返せ  
 と詞を懸ければ、瀬尾太郎は板倉河を西へ渡すが、河中に控へて待かけたり。倉光次郎鞭笠を合せて追附  
 き押並べ無手と組で、どうと落つ。互に劣ぬ大力ではあり、上に成り、下に成り、轉合けるが、河岸に淵  
 の有けるに轉入ぬ。倉光は無水練、瀬尾は屈竟の水練にて有ければ、水の底にて倉光が腰の刀を抜き、鎧  
 の草摺引上げて、柄も拳も透れくと三刀刺て首を取る。瀬尾太郎我馬をば乗損じたりければ、倉光が馬  
 に打乗て落て行く。嫡子小太郎宗康は、年は二十二に成けれ共、餘に肥太て、一町共え走す。是を見捨て  
 瀬尾は二十餘町ぞ延たりける。瀬尾太郎郎等に言けるは、日來は千萬の敵に逢て軍するには、四方晴て  
 覺ゆるが、今日は小太郎宗康を捨て行ばにやあらん、一向先が暗うて見えぬなり。今度の軍に命生て、二  
 度平家の御方へ參りたり共、兼康は六十に餘て、幾程生うと思て、唯一人ある子を捨て是迄遁れ參たるら  
 んなど、同隸共に言れん事こそ口惜けれと言ければ、郎等、さ候へばこそ、唯御一所で如何にも成せ給へ  
 と申つるは、こゝ候ぞかし。返させ給へとて、又取て返す。案の如く小太郎宗康は、足かん許に腫て伏  
 り居たる所へ、瀬尾太郎取て返し、急ぎ馬より飛び下り、小太郎が手を取て、汝と一所で如何にもならん

と思ふ爲に、是迄歸りたるは如何にと言ければ、小太郎涙をばらくと流て、  
 爰にて自害を仕候共、我故御命をさへ失 參せん事、五逆罪にや候はんずらん。唯とうく延させ給へと  
 言けれ共、思切てん上はとて、休居たりける處に、又荒手の源氏五十騎許で出来る。瀬尾太郎射残したる  
 八筋の矢を、差詰引詰散々に射る。死生は不知、矢場に敵八騎射落し、其後太刀を抜て、先小太郎が首ふ  
 つと討落し、敵の中へ懸入り、堅様横様蜘蛛蜘蛛手十文字に懸廻り、散々に戦ひ、敵あまた討取て、其にて討  
 死してげり。郎等も主に些も不劣戦けるが、痛手負て生捕にこそせられけれ。中一日有て懸て死にけり。  
 彼等主従三人が首をば、備中國鷲が森にぞ懸たりける。木曾殿哀剛の者や、是等が命を助てとぞ宣ける。  
 【註釋】(一)蘇子綱——漢の蘇武の事(前出)。(二)李少綱——漢の李陵の事(前出)。(三)遠く異國に云々——「遠託異國、昔人所悲」と  
 李陵が蘇武に答ふる書の句をとつたのだ。(四)韋韜云々——同じく蘇武に答ふる書にある句、(文選、漢書、禮記)韋韜は韋製の衣類、韜  
 幕は鳥獸の毛で作つた防寒具、韞肉、酪、漿、は何れも食物飲料。(五)つめ紐し——紐を詰め直す。(六)東折——衣の裾の端折り方の  
 名即ち袖をかゝげて帯にはさむことだといふ。(七)山靱——考證には不明の由記せり。山上八郎氏の説によれば、山うつばは山狩の時  
 うつば  
 など獵師の用ひた様な粗末なうつばといふ意味で、特別のものではあるまいといふことだ。貞丈  
 雜記には「つれのうつばをばやまうつばと可申由申傳へし也と講取波之記にあり、つれのうつば  
 とはぬりたるうつばの事也、騎馬うつばとは毛皮かけたる也」とある。靱は空穗の當字である。  
 空穗とは矢をいれて腰につけるものである。(うつばの圖参照)。(八)手延びにして——手ぬるい事をして。(九)端張弓杖一枚——はた  
 張は道の幅。それが杖一つ程(七尺五寸)の意。(一〇)西國道の一里——拾芥抄によると六町一里としてある。(一一)草わき、鞆づくし  
 ——草わきは馬の胸部即ち草を排してゆく所。鞆づくしはむながひのつく所即ち胸部。(一二)篋めかいて——むらめかしての音便。  
 群つての意。(一三)足かん許に——足かくばかりに。(一四)荒手——新手の當字である。





## 室山合戦

去程に木曾は備中國萬壽庄にて、勢汰して、八島へ既に寄んとす。其間都の留守に被置たりける樋口次郎兼光、西國へ使者を奉て、殿の渡せ給はぬ間に、十郎藏人殿こそ、院のきり人して、様々に譏奏せられ候なれ。西國の軍をば暫指置せ給て、急ぎ上せ給へと言ければ、木曾さらばとて、夜を日に續で馳上る。十郎藏人行家は、木曾に中達て悪かりなんとや被思けん。其勢五百餘騎で、丹波路に懸て、播磨國へ落下る。木曾は攝津國を経て都へ入る。平家は木曾討んとて、大將軍には新中納言知盛卿、本三位中將重衡卿、侍大將に

【通釋】 さて木曾は備中國萬壽の庄（窪屋郡萬森林倉敷町の東北）で軍勢を整へ、八島へ既に打ち寄せやうとした。其の間京の留守に置かれた樋口次郎兼光が西國へ使者をたて、殿のお留守の間に十郎藏人殿が院の御寵愛深く最も權勢があるので色々あなたを譏言なさいますから、西國の戰を暫くさし置いて、急ぎ上京せらるゝ様に」といつて來たので、木曾は「それでは」とて夜を日についで馳せ上つた。十郎藏人行家は、「木曾と仲を悪くしてはまづいだらう」と思つたのか、その兵五萬餘騎で丹波路にかゝつて、播磨の國へ落ち下つた。木曾は攝津の國を経て都に入つた。平家は木曾を討たうとして、大將軍に新中納言知盛の卿、本三位の中將重衡の卿、侍大將には越中次郎兵衛盛嗣、上總の五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清、伊賀の平内左衛門家長を先として、都合その軍二萬餘騎、播磨國に押し渡り、室山に陣を取つた。十郎藏人は平家と軍して、木曾と仲直りしようと思はれたのであらうか、その勢五百餘騎で室山を攻めた。平家は陣を五つに張り、先づ伊賀の平内左衛門家長は二千餘騎で一陣を固め、越中次郎兵衛盛嗣は二千餘騎で一陣を固み、上總五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清は三千餘騎で三陣を固み、本三位の中將重衡

は、越中次郎兵衛盛嗣、上總五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清、伊賀平内左衛門家長を先として、都合其勢二萬餘騎、播磨國に押渡り、室山に陣をぞ取たりける。十郎藏人行家は、平家と軍して、木曾に中直せんとや思けん、其勢五百餘騎室山へこそ懸られけれ。平家は陣を五つに張る。先伊賀平内家長二千餘騎で一陣を固め、越中次郎兵衛盛嗣、二千餘騎で二陣を固む。上總五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清、三千餘騎で三陣を固む。本三位中將重衡卿、三千餘騎で四陣を固め給ふ。新中納言知盛卿、一萬餘騎で五陣に控へ給へり。先一陣伊賀平内左衛門家長、暫應答體に持成て、中を開てぞ通しける。二陣越中次郎兵衛、是も開てぞ通ける。三陣上總五郎兵衛、悪七兵衛、共に開

の卿は三千餘騎で四陣を固めた。新中納言知盛の卿は一萬餘騎で五陣に控えた。

先づ一陣は伊賀の平助左衛門家長が暫く應戦する様に見せかけて、中をあけて通した。二陣越中の次郎兵衛もあけて通した。三陣上總の五郎兵衛、悪七兵衛もやはり開けて通した。四陣本三位の中將重衡の卿も同じくあけて行家を中に入らせた。先陣から後陣までかねて約束してあつたので、この様に源氏を中に取込めてからわれ先に討取らうとしたので、十郎藏人行家は「之は謀られたのだ」と思ひ、面もふらず、命も惜まず、こゝを最後と攻め戦つた。新中納言の第一に頼りとしてゐた紀七衛門、紀八衛門、紀九衛門などといふ一人當千の兵どもは、皆そこで十郎藏人に討ち取られた。けれども行家五百騎の兵は僅か三十騎ばかりに討ち破られ、雲霞の如くなる敵の中をわつて出たけれども、行家は身に傷一つ負はないが、二十七騎は大方傷を受けたので、播磨國高砂から舟に乗つて、和泉の國吹飯の浦へ押し渡り、それから河内國長野の城に立て籠つた。平家は室山、水島の二度の戰に勝つていよ

／＼勢が増して來たのである。



てぞ通しける。四陣本三位少將重衡卿も同う開てぞ被<sub>レ</sub>入ける。先陣より後陣迄、兼て約束したりければ、源氏を中に取籠て、我討取んとぞ進ける。十郎藏人行家、こは被<sub>レ</sub>謀にけりとや被<sub>レ</sub>思けん。面も不振命も不<sub>レ</sub>惜、爰を最後と攻戦ふ。新中納言の宗と被<sub>レ</sub>頼たりける紀七衛門、紀八衛門、紀九郎など云ふ一人當千の兵共、皆そこにて十郎藏人に被<sub>レ</sub>討取ぬ。かくして五百餘騎の勢共、僅三十騎許に被<sub>レ</sub>討成、雲霞の如くなる敵の中を破て出れ共、我身は手も不<sub>レ</sub>負、廿七騎大略手負ひ、播磨國高砂より船に乗て、和泉國吹飯浦へ押渡り、其より河内國長野城に楯籠る。平家は室山水島二箇度の軍に勝てこそ、彌勢は附にけれ。

### 鼓判官

凡京中には源氏の勢満々て、在々所々に入取多し。賀茂八幡の御領共不言、青田を刈て、秣にし、人の藏を打開て物を取り、路次<sub>ル</sub>に持て逢ふ物を奪ひ取る。平家の都に坐し程は、六波羅殿とて、唯大方怖<sub>レ</sub>かりし計也。衣裳を剥取迄は無<sub>レ</sub>りし物を、平家に源氏替劣したりとぞ人申ける。

【通釋】京中には源氏の軍勢が充滿して到る所で掠奪し、賀茂や八幡の御領をも構はずに青田を刈りとつて秣にしたり、路で逢ふ物を奪取したので、「平家が都にゐた時は六波羅殿とて唯何となく怖ろしいだけだった。衣裳までを剥取る程ではなかつたのに、源氏が平氏に替つたのは替り劣りした」と人々は恨んだ。そこで法皇から朝泰といふ人を使として狼籍を静めよといふ仰せが下つた。この朝泰は有名な鼓の名手だったので、義仲は對面して院への御返事もしない先に「あなたを鼓判官と云ふのは、萬人に撃たれる爲めなのですか」と尋ねたので、朝泰はあきれかへつて返事もせず急ぎ歸り「鼓

法皇より木曾左馬頭のもとへ、狼籍静よと被<sub>レ</sub>仰下。御使は壹岐守朝親が子に、壹岐判官朝泰と云ふ者也。天下に聞えたる鼓の上手にて有ければ時の人鼓判官とぞ申ける。木曾對面して、先づ院の御返事をば申さで、抑和殿を鼓判官と云ふは、萬の人に撃れたうたか、張れたうたかとぞ問たりける。朝泰返事に及ばず、急ぎ歸參て、義仲嗚呼の者にて候、早追討せさせ給へ。唯今朝敵と成候なんすと申ければ、法皇聽て思召立せ給けり。さらば可<sub>レ</sub>然武士にも不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰附して、山の座主寺の長吏に被<sub>レ</sub>仰て、

山三井寺の惡僧共をぞ被<sub>レ</sub>召ける。公卿殿上人の召れける勢と云ふは、向礫印地云甲斐なき辻冠者原、さては乞食法師原也。又信濃源氏村上三郎判官代、是も木曾を背て法皇へぞ參ける。木曾左馬頭の御氣色惡うなると聞えしかば、始は木曾に隨うたる五畿内の者共、皆木曾を背て、院方へ參る。今井四郎申けるは、是

仲は笑止千萬な愚者です。早く御追討なさいませ、もう直ぐにも朝敵となるでせう」と申上げたので、法皇も直ぐ追討の御決心になつたのである。然らばとて適當な武士にも仰せにならないで、先づ叡山の明雲座主と三井寺の長吏圓惠法親王に御下命になつて、兩寺の荒法師達をお召しになつた。又公卿殿上人のお召しになつた軍勢といふのは、向礫をうつ者、印地をなす者などいふ路傍の無頼漢や、乞食法師などであつた。其の他信濃の村上判官代基國も木曾に背いて法皇の味方をした。「義仲は後白河法皇の御機嫌を損ねてゐる」と聞いた五畿内の者共は皆木曾に背いて院方へ參つた。今井兼平がいふには「以ての外の大事だ。さればとて天子に弓をひくことは出来ませぬ、唯武装を解除して降人となられるのが宜しからう」といふと、木曾は之を聞いて大層怒り「自分が信濃を出發してから諸所の戦に未だ一度も不覺をとつた事がない。たとひ十善の君でござつても、甲を脱いで降人にはどうあつてもなることは出来ぬ」といつた。



こそ以の外の御大事にて候へ。さればとて十善の君に向ひ参せて、如何で御合戦候べき。唯甲を脱ぎ弓の弦を弛て、降人に参せ給へうもや候らんと申ければ、木會大に怒りて、我信濃を出しより、小見、合田の合戦より始て、北國にては、礪波、黒坂、鹽坂、篠原、西國にては、福隆寺繩手、篠の迫、板倉が城を攻しかども、一度も敵に後を見せず。縦ひ十善の君にて渡せ給ふ共、甲を脱ぎ弓の弦を弛て、降人にはえこそ参まじけれ。

【語釋】(一)うたれたうたか——うたれ給う爲かの音便。(二)向國印地——正面から標を投げたり、印地といつて石を投げたりする事の上手なもの。

### 法住寺合戦

譬へば都の守護して有んずる者が、馬一匹づつ飼て可し乗か。幾らも有る田共刈せて秣にせんを、強に法皇の咎め可給様や有る。兵糧米盡ぬれば、冠者原共が、西山東山の片邊に附て、時々入取せんは、何かは苦かるべき。大臣以下宮々の御所へ参らばこそ儲事ならめ。如何様是は

【通釋】(前段の義仲の言葉のつゞき)「譬へば都を守護して有る者が馬一匹飼つて乗らないといふ事があるか。又、幾らでも有る田を刈らせて秣にしたのをば、法皇が無暗とお咎めになる筈がない。兵糧米が盡きた時大國以下宮々の御所へ追捕にゆくのならば悪いであらうが、さうでなくて、若い者共が西山や東山の片邊へ闖入して奪つて来るのが何故悪からう。成る程これは鼓判官の悪計だと思はれる。先づその判官を討ち殺せ。今度は愈々義仲の最後の軍だ、且つ又頼朝が後で轉聞する事でもあるから、卑怯は出来ない。それでは皆の者は充分戦へよ」として打ち出でた。此の時北國の者共も皆落ちた。

鼓判官が凶害と覺るぞ。其鼓め打破て捨よ。今度は義仲が最後の軍にて有んずるぞ。且は兵衛佐頼朝が還聞んずる所も有り。軍ようせよ、者共とて打出けり。北國の者共、始は五萬餘騎と聞えしが、皆落下て、僅六千騎ぞ有ける。義仲が軍の吉例なればとて、七手に分ち、先樋口次郎兼光二千餘騎で、新熊野の方より搦手に差遣す。残る六手は、各が居たらんずる條里小路より皆打立て、六條河原で一つになれと、相圖を定て打立けり。御方の笠符には、松の葉をぞ附たりける。軍は十一月十九日の朝也。院御所法住寺殿にも、軍兵二萬餘人參籠たる由聞えけり。木會法住寺殿の西の門へ押寄て見け

て、始め五萬騎といふのが僅か六千七千騎になつた。義仲は軍の吉例だからとて軍を七手に分ち、先づ樋口兼光を二千餘騎で新熊野(京の東南部)から搦手へと遣はした。残る六手は各自の屯してゐた町から出發して、六條河原で一つになれよと相圖しておいた。味方の笠印には松の葉をつけた。軍は十一月十九日の朝だつた。御所法住寺殿でも(京の東南)二萬餘の軍兵が籠つてゐるといはれた。義仲は法住寺殿の西門へ押寄せて見ると、鼓判官が軍の指揮役を承つて西の築垣の上へ昇つてゐた。そして片手に鎧を持ち片手に金剛鈴を持ち、それを振りながら時々舞ふ事もあつたので、公卿達は「風情のない事だ、朝泰には天狗がついたのだ」と笑つた。朝泰は高音をあげて「昔は宣旨を讀みあげたならば(例へば草木……に向つて)枯れた草木も花咲き惡鬼も従ふたものだ。いかに世が末だからとて、どうして十善の君に向つて矢を放つべきだらうか。若し矢を放つたならば、其の矢は却つて汝等の身に立つであらう」と罵つたので、義仲は「雜言吐かすな」と鬨を作つて攻め寄せた。その間に樋口兼光も二千餘騎で新熊野方面から吶喊して來た。今井兼平は鎗矢の孔中へ火を入れて御所の棟に射たてたので、折柄風の烈しい爲め猛火は天に燃上り、黒煙がおしかけて來たので、軍奉行の朝泰は人より先に逃げてしまつた。指揮官が逃げたので、二萬餘の兵も吾勝ちにと逃げて行つ



れば、鼓判官朝泰は、軍の行事承て御所の西の築垣の上へ昇り上て立ちけるが、赤地の錦の直垂に、甲計ぞ著たりける。甲には四天を書てぞ押たりける。片手には鉾を持ち、片手には金剛鈴を持って、打振々々、時々舞ふ折も有けり。公卿殿上人は、風情なし朝泰には天狗ついたりとぞ被笑ける。朝泰大音聲を揚て、昔は宣旨を向つて讀ければ、枯たる草木も忽に花咲き實り、飛鳥も地に落ち、悪鬼惡神も従き。末代澆李なればとて、如何でか十善の君に向ひ參せて、弓を引き矢をば可放。放ん矢は、却て汝らが身に可立。拔ん太刀は、却て身を可斬など、伺つたりければ、木曾さな謂せるとて、関

た。餘りに周章でたので長刀を倒に杖ついて、自分の足を貫く者もあつた。或は弾を何かに引懸けはづすことも出来ず、弓を捨て、逃げた者もあつた。又七條通の東端の方に攝津源氏が陣どつてゐたが、「それ落人だ」とて附近の者は石を拾つて散々に投げつけたので、「自分達は院方だぞ、間違へるな〜」といつたけれど、附近の住民は「そんなことを言はせるな。院宣だから唯打殺せ〜」と石を投げたので、或は頭を破られたり打殺された者も多かつた。斯うした間違も、院の御所から「若し落人があつたならば皆用意をして置いて打殺せ」といふ御命令があつたので、附近の住民達は屋根に楯をならべ、おそひの石を取集めて待つてゐたからである。この戦に於て主水正親業は白月毛の馬に乗つて賀茂河原を北へ逃げていつたのをば、今井兼平が追かけて射殺した。この親業は明經道の博士であるが、こんな經學者が武装したのは是が始だと聞いた。其の他近江中將、越前少將……なども討たれ、村上判官代も殺された。又明雲座主や圓慶(惠)法親王も御所に籠つて居られたのだが、黒煙がおしかけて來たので、御馬に乗つて急いでお逃げになる所を射殺されて首を取られた。又、法皇は御輿に召して他所へ御幸遊ばさうとした所が、武士共が散々に射奉つた。豊後少將が木蘭地の直垂に、折鳥帽子(軍陣用の折鳥帽子は挿み鳥帽子を折つたのだとは貞丈の説を交へてお供してゐたが)こ

を咄と作ける。去程に樋口次郎兼光二千餘騎新熊野の方より、同う関の聲をぞ合せける。今井四郎兼平、鎧の中に火を入れて、法住寺殿の御所の棟に射立たりければ、折節風は烈し、猛火は天に燃上て、焔は虚空に充滿てり。黒煙押懸ければ、軍の行事朝泰は、人より先に落にけり。行事が落る上はとて、二萬餘人の兵共、吾先にとぞ落行ける。餘に周章騒で弓取る者は矢を不知、矢取る者は弓を不知、或は長刀倒に突て我足突貫く者も有り、或は弓の弮物に懸てえ迦さで捨て逃る者も有り、七條が末をば攝津國の源氏の固たりけるが、院御所より落人あらば、用意して皆打殺せと下知せられたりければ、

これは法皇であらせられるぞ、過ちするな」と申したので、武士共は何れも馬から下りて平伏した。「何者だ」と御尋ねになると「信濃の住人矢鳥行重」と名乗つた。かくて行重(一本行綱)は御輿に手をかけて昇き奉り、五條内裏(五條南、東洞院西)へ入御なし奉つて、嚴重に守護し奉つた。又豊後國司頼資卿も御所に籠つてゐたが、黒煙が押掛けて來たので急いで河原へ逃げ出したけれども、武士の下部どもに衣裳を剝取られて眞裸になつて立つてゐた。丁度十二月だから河原は定めし寒かつた事だらう。所がこの頼資卿の兄の越前法橋の中間法師が、戦況を見ようとて出かけて來たが、三位が裸で立つてゐるのを見附けて、「あゝ何とした事です」と走り寄つた。此の法師は白の下着を二枚着て法衣を着してゐた。「それじやお前の小袖をぬいで私に着せてくれ」と仰しやつたので、衣をぬいでなげかけた。三位が短い衣を襦袢の上から被つて、帯もしない後姿はさぞ見苦しいものだらう。だから急いで歩きもなさないで、白衣の法師を供につれて居られたが、此方彼方に立ち止つて「あれは誰の家だ、此所は誰の邸だ」などと問ふので(平生は車に乗つて通る身分の人だから歩いて町を通るのは珍らしいのである)それを見る人は皆手をたゝいて笑ひ合つた。さて主上は(後鳥羽天皇)法住寺殿の池で船に乗つておいでになると、武士共が盛に矢を射かけるので、御船に侍してゐ



在地の者共、屋根に楯を突立べ、おそひの石を取聚て、待居たる處に、攝津國の源氏の落けるを、あはや落人として、石を拾懸け、散々に打ければ、院方で有ぞ、過すなと言ければ共、さな云せそ、院宣で有に、唯打殺せしと打つ程に、或は頭打破れ或は腰打折れて、馬より落ち、這々逃る者も有り、或は打殺る者も多かりけり。八條が末をば山僧共の固たりけるが、恥有る者は討死し、強顔者は落て行く。爰に主水正親業は薄青の狩衣の下に、萌黄威の腹巻を著、白月毛なる馬に乗て、河原を上りに落けるを、今井四郎兼平追蒐り、能辨て、しや頭の骨を兵つばと射て、馬より倒に射落す。清大外

た七條侍従が「これは主上であらせられるぞ不敬なことをするな」と云つたので、武士共は皆馬から下りて畏つた。やがて、閑院内裏（二條の南、西洞院西一町）へお連れ申した。此の時の行幸の儀式はあまりに簡單で、言葉に出すのも勿體ない次第である。源仲兼は五十人程で法住寺の西門を固めてゐたが、近江源氏の山本義高がとんで来て「お前方は一體誰を保護し様とて軍をなさるのだ。既に天皇も法皇も他所へ御遷りになつたよ」といつたので、それでは、といふので大勢の敵中へ割つて入り散々に戦ひ、主従八騎に討ちなされた。この八騎の中に加賀房といふ法師武者がゐたが「私の乗つてゐる月の馬が餘り口が強く乗れきれない」と言つた。すると源藏人は「それならば此の馬に乗替へなさい」とて栗毛の馬で、尾の先の白い馬に乗替へ、二百騎許の敵中へ飛び込み散々に戦つて、八騎が五騎になつた。加賀房は自分の馬では危うさうだとて主人の馬と乗替へたけれど、やはり運が盡きたのか、終に討たれてしまつた。話かはつて源藏人仲兼の家への仲頼は（一本頼直につくる）栗毛の馬の下尾の白いのが馳け出して来たのを見て、下人を呼び「この馬は源藏人殿の馬と思ふが、違ふか」「左様です」「さてどの陣屋へ馳け入つたと見たか」「河原坂勢へ御入りになりました（源藏人が）そして御馬はすぐあの勢の中から人を乗せず、出て来ました」といつたので、仲頼は涙を

記頼業が子也けり。明經、道の博士甲冑を鑑ふ事は始とぞ承る。近江中將爲清、越前少將信行、伯耆守光綱子息伯耆判官光經も、被射落て首取れぬ。又木曾を背て、院へ參たる信濃源氏、村上三郎判官代も討れぬ。按捺大納言資方卿の孫、右少將隆方も、鎧立烏帽子で軍の陣へ出られたりけるが、樋口次郎兼光が手に懸て虜にこそせられけれ。天台座主明雲大僧正、寺長吏圓慶法親王も、御所に參籠らせ給たりけるが、黒煙既に押懸ければ、御馬に召て、急ぎ出させ給けるを、武士共散々に射奉る。明雲大僧正、圓慶法親王も、御馬より被射落て、御首被取らせ給けり。法皇は御輿に召て、他所へ御幸なる。

流して「あゝお氣の毒にも仲兼公は早討たれたのだ。幼少竹馬の昔から死なば一所でと約束したのに、今は別々に死ぬのは悲しい」とて、妻子の許へ最後の様子を言ひ送つておいて、唯一人河原勢の中へ攻め込んで大音をあげ「敦躬親王の八代の子孫信濃守仲重の子の仲頼だ、我と思はん人は出て来い、戦はう」とて縦横に駆け廻つて終に討死した。主人の源藏人は是を知らな。兄と共に主従三騎で南へ落ちて行つたが、攝政基通卿が都の兵亂を恐れて宇治へおいでになるのに木幡山で追附いた。「お前達は誰だ」「仲信仲兼です」「東國北國の凶徒かと思つたから心配した。まあよかつた、お前達もここからお供せよ」と仰しやつたので、承知して宇治の富家殿（忠實の別業）迄送り届けて、それから此の人達は河内國へ逃げのびた。翌二十日に義仲は六條河原へ出向いて、昨日斬つた首を掛け並べて數へた所が六百三十餘首あつた。その中には天台座主や三井寺の長吏の御首も晒されたので、是を見る人は何れも涙を流した。かくて義仲は七千餘騎の馬頭を一齊に東へ向けて天地も轟くばかりの鬨の聲をあげた。これは悦の鬨の聲だといふ。さて故少納言信西の子息參議長教は法皇のいらつしやる五條内裏へ參つて門から入らうとすると、守護の武士共がこれを許さないで、案内を知つたまゝ、ある小屋へ入つて俄に剃髪し法衣に袴を着して「かく出家した以上は何の差支があ



武士共散々に射奉る。豊後少將宗長木蘭地の直垂に、折烏帽子で供奉せられたりけるが、是は院にて渡せ給ふぞ、過仕など被<sup>レ</sup>申たりければ、武士共皆馬より下て畏る。何者ぞと御尋有ければ、信濃國の住人矢島四郎行重と名乗り申す。聽て御輿に手かけ參せて、五條内裏へ入奉て、殿う守護し奉る。豊後國司刑部卿三位賴資卿も、御所に參籠られたりけるが、黒煙既に推懸ければ、急ぎ河原へ被<sup>レ</sup>逃出<sup>レ</sup>けるが、武士の下部どもに衣裳皆剥取れて、真裸にて立たり、比は十一月十九日の朝なれば、河原の風さこそは烈かりけり。三位の兄越前法橋性意が中間法師の有けるが、軍見んとて出たりけるが、三

位の裸にて立れたるを見附て、あな淺ましとて、急ぎ走寄る。此法師は白小袖二つに衣をぞ著たりける。さらば小袖をも脱で著せ奉れかし。衣を脱で投懸たり。短き衣虚にかぶつて、帯もせず。後の體、さこそは見苦かりけり。さらば急も歩み給はで白衣なる法師を供に具して坐けるが、あそこ爰に立徘徊ひ、あれなるは誰が家ぞ、爰なるは何者の宿所など問給へば、見る人手を叩て笑合へりけり。主上は御船に召て、池に浮ばせ給たりけるに、武士共頻に矢參せければ、七條侍從信清、紀伊守教光、御船に候れけるが、是は内にて渡せ給ふぞや、過仕など被<sup>レ</sup>申ければ、武士共皆馬より下て畏る。聽て閑

らう。開けて入れよ」といつたので、武士共は許して通した。泣く／＼御前へ參つて今度討たれた人々の事を一々申し上げたので、法皇も「明雲が非業の死を遂げる者とは少しも思はなかつたのに、今度は全く自分の死ぬべき身代りになつたのだ」と仰せあつて御落涙遊ばした。

同月二十二日三條中納言朝方卿以下四十九人が官職を停止されて押籠められた。平家の時は四十三人を停められたが、今度は四十九人だから平家の悪行よりは尙超過してゐる。其の上義仲は基房卿の姫君をとつて無理に關白の掣となつた。義仲は其の日家の子郎等を集めて「自分は一天の君に向つて軍に勝つたのだから主上にならうか、上皇にならうかと思ふけれど、法師になるのも變だし(法皇)といつて天皇になるにしても子供姿になるのも變だ。一層のこと關白に成らう」といつた。すると祐筆の覺明が進み出て「關白には鎌足公の御子孫で大臣の家柄の方がなされるのです。貴下は源氏だからそれは叶ひますまい」といつた。「それでは」と無理に院の既の別當になつて丹波國を領した。義仲は上皇が御出家なさるから法皇と申し上げ、又主上が御元服なさらない間は童形でゐられるので、必ずしも天皇は童形でなく、上皇は御出家と限らないといふ事を知らなかつたといふのは笑止千萬だ。話變つて、鎌倉の頼朝は義仲の亂暴を取鎮めようといふので、範頼と義經

に六萬餘騎をつけて都へ上させたが、都では軍が始まつて御所も内裏も皆燒き拂ひ、天下は全く無警察状態になつたと聞いたので、矢鱈に上洛して軍する事もないとて尾張の熱田邊に止つてゐた。そこで北面の武士の宮内判官公朝と時成とが、都の状態を告げようとて尾張國へ馳せ下つて事情を話したので、範頼と義經は「それは鎌倉へ下つて陳狀なさるべきである。何となれば詳しく事情を知らない使が鎌倉へいつて、先方から反問せられた時不審が残るから」といはれた。そこで公朝は子息の公茂といふ十五歳になる少年をつれて鎌倉へ下られた。其の他の所従は今度の軍に皆落せたり討たれたりしたからである。で、晝夜兼行で鎌倉へ下つて此の事を訴へた所が、頼朝は「之は鼓判官がつまらない事をいひ出して天皇をも惱まし、多くの高僧達をも失つたのは呉々も奇怪千萬な事だ。こんな人間を召使つたならば今度も天下の騒動は絶えまい」といはれた。そこで鼓判官は急いで鎌倉へ下り、梶原景時を通して色々陳述して辯解したけれど、頼朝は「あんな奴に目をかけるな、あしらひもするな」と仰しやつたので、毎日頼朝の邸へ出かけたけれど終に面目なくしてまた京都へ歸り、不遇の中に生命だけ保つて、稻荷の附近でさびしく暮してゐたといふ。さて、義仲は西國へ使者をたて、「急ぎ御上洛なさい。私と合同して關東へ馳せ下り頼朝を討ちませう」と言ひやつた。する



院殿へ行幸なし奉る。行幸の儀式のあさましさ、申も中々愚也。源藏人仲兼は、其勢五十騎許で法住寺殿の西の門を固て防ぐ處に、近江源氏山本冠者義高、鞭笠を合て馳來り、如何に各は誰をかばはんとて軍をばし給ふぞ。御幸も行幸も、他所へ成ぬとこそ承れと言ければ、さらばとて大勢の中へ懸入り、散々に戦へば、主従八騎に討なさる。八騎が中に、河内の日下黨に、加賀房と云ふ法師武者有り、月毛なる馬の口の強にぞ乗たりける。此馬は餘に口が強うて乗可堪共存候はずと言ければ、源藏人、さらば此馬に乗替よとて、栗毛なる馬の下尾白に乗替へて、根井小彌太が二百餘騎許で控たる河原坂の勢

と宗盛卿をはじめ一門の人々は皆悦んだけれど、知盛卿が反対していふには「たとひ末世になつたからとて義仲などに語らはれて、どうして都へ上つてよからう。當方には十善の帝王が三種神器をもつておいでになるのだから甲を脱ぎ弦をはずして降人に參れと仰せらるべきではなからうか」といつたので、宗盛卿は其の旨の返事をした。然し義仲は之を用ひない。そこで入道の松殿(基房)は木曾を召して「清盛は悪行をした人だつたが、それでも一面に稀有な善根をして置いたからだらう、世を安穩に二十年の實權を握つたのである。悪行ばかりでは世を治めることは出来ないのだ。だから大した理由もなくして押籠めた人々の官途など皆赦す様に」と仰しやつたので、一向に荒夷の様な義仲だけれど、妻の父のいふことだから之に隨つて押籠めた人々の官位を皆赦した。そして松殿の御子師家を大臣攝政にした。丁度其の時は大臣の空席がなかつたので、徳大寺實定卿が内大臣大將だつたから、その大臣の名義を借りて來て御家につけた。故にいつしか人々は師家を借大臣といふ様になつた。同十二月十日に法皇を五條内裏から六條西洞院の成忠の邸へお移して、同十三日に歳末の御修法を始め、其の日に除目が行はれ、義仲の計らひで人々の加階を思ふ儘に行つた。平家は西國に、頼朝は東國に、義仲は都に、それぞれ頭張つてゐた。それは恰も前漢後漢の間で王莽が篡立を企

の中へ懸入り、散々に戦ひ、其にて八騎が五騎被討ぬ。加賀房は我馬のひあい也とて主の馬に乗替たりけれ共、運や盡にけん其にて終に被討にけり。爰に源藏人の家子に、次郎藏人仲頼と云ふ者有り。栗毛なる馬の下尾白が駈出たるを見附て、下人を呼び、こゝなる馬は源藏人の馬と見るは僻事か、さん候と申す。さてどの陣へや駈入たると見つる。河原坂の勢の中へこそ入せ給つるなれ。御馬も聽てあの勢の中より出來て候と申ければ、次郎藏人涙をばら／＼と流て、あな無慚早被討給たり。幼少竹馬の昔より、死ば一所で死んところ契しに、今は所々に伏ん事こそ悲けれとて、妻子の許へ最後の形勢言遣し、唯一騎河原坂の勢の中へ懸入り、鎧鎧張立上り、大音聲を揚て、敦躬親王に八代の後胤、信濃守仲重が子に、次郎藏人仲頼とて、生年廿七に罷成る。我と思ん人々は寄合や、見參せんとて、縦様横様蜘蛛手十文字に懸破り懸廻り戦けるが、敵あまた討取て、終に討死してげり。源藏人は是をば知給はず、兄の河内守仲信打具して、主従三騎南を指て落行けるが、攝政殿の、都をば軍に恐れさせ給て、宇治へ御出有けるに、木幡山にて追附奉り、馬より下て畏る。何者ぞと御尋有ければ、仲信仲兼と名乗申す。北國の凶徒等かなんと思召たればとて、御威有り。聽て汝等も御供に候へと仰ければ、承て宇治の富家殿迄送り參せて、其より此人々は、河内國へぞ落行ける。明る廿日の日、木曾左馬頭義仲六條河原に打立て、昨日斬る所の首共、皆懸並て註いたれば、六百三十餘人也。其中に天台座主明雲大僧正、寺長の吏圓慶法親王の御首も懸せ給たり。是を見る人涙を流さすと云ふ事なし。木曾左馬頭都合共勢七千餘騎、馬頭一面に束むけて、天も響き大地も動く許り



に、関をぞ三箇度作ける。京中又騒あへり。但是は悦の関とぞ聞えし。去程に故少納言入道信西の子息宰相長教、法皇の渡せ給ふ五條内裏へ参て、門より入んとすれば、守護の武士共許さず。案内は知たり、ある小屋に立入り俄に髪剃下し、墨染の衣袴著て、此上は何か可苦開て入よと宣へば、其時許し奉る。泣々御前へ参て、今度討れ給ふ人々の事、一々に申たりければ、法皇、明雲は非業の死すべき者と露も思召寄ざりし物を、今度はたゞ我如何にも成べかりつる御命に代たるにこそとて、御涙塞あへさせ不給。同廿三日、三條中納言朝方卿已下、四十九人が官職を停て、追籠奉る。平家の時は四十三人をこそ被停しか、是は既に四十九人なれば、平家の悪行には猶超過せり。松殿の姫君取奉て、關白殿の聲に押成る。其日又木曾左馬頭、家子郎等召集て、評定す。抑義仲一天の君に向ひ参せて、軍には打勝ぬ。主上にや成まし、法皇にや可成。法皇に成うと思へ共、法師に成んもをかしかるべし。主上に成うと思へ共、童に成んも不可然。よし／＼さらば關白に成うと言ければ、手書に具せられたりける大夫房覺明進み出で、關白には大織冠の御末、執柄家の君達たちこそ成せ給へ。殿は源氏にて渡せ給へば、其こそ叶候まじとぞ申ける。さらばとて院の御厩別當に押成て、丹波國をぞ知行しける。院の御出家有は法皇と申し、主上の未御元服なき程は御童形にたまし／＼けるを、不知けるこそうたてけれ。去程に鎌倉の前右兵衛佐頼朝、木曾が狼籍鎮めんとて、範頼義經に六萬餘騎を相副て、被差上けるが、都には軍出來て、御所内裏皆焼拂ひ、天下暗闇と成たる由聞えしかば、左右なう上て可軍様もなしとて、尾張國熱田の邊なる所にぞ坐ける。北面に候ける宮内判官公朝、藤内判官時成、此事訴んとて、尾張の國へ馳下り、かくと此由申ければ、範頼義經、これは公朝の關東へ可被下で候ぞ。其故は、仔細を存せぬ使は、返して問る時、不審の残るにとぞ宣ける。今度

の軍に所從皆落失せ討れにしかば、子息宮内所公茂とて、生年十五歳に成けるを相具してぞ下ける。夜を日に續で鎌倉へ馳下り、此由訴被申ければ、鎌倉殿、是は鼓判官が不思議の事申出で、君をも惱し奉り、多くの高僧貴僧をも失ける事こそ、返々も奇怪なれ。是等を召使せ給はば、此後も天下の騷動絶ゆまじう候と被申ければ、朝泰此事陳せんとして、夜を日に續で鎌倉へ馳下り、梶原平三景時に附て、様々に陳じ申けれ共、鎌倉殿しやつに目な懸そ、應答なせそと宣へば、日毎に兵衛佐の館へ向ふ。終に面目なくしてまた都へ歸り上り、辛き命生きつゝ、稻荷の邊なる所に、幽なる體にて栖けるとぞ聞えし。木曾西國へ使者を立て急ぎ上せ給へ、一つに成て關東へ馳下り、兵衛佐可討由言遣たりければ、大臣殿を始奉て、一門の人々は皆被悦けれ共、新中納言知盛卿の異見に被申けるは、縦ひ世末に成て候へばとて、木曾なんどに被語て争でか都へ上せ可給。十善の帝王三種神器を帶して渡せ給へば、甲を脱ぎ弓の弦を弛て、是へ降人に參れと、申させ給べうもや候らんと被申ければ、大臣殿其様を御返事有しか共、木曾用奉らず。入道の松殿殿下、木曾を召て、清盛公は悪行人たりしかど、希代の善根をし置たればにや、世をば穩う二十餘年迄保たんなり。悪行計にて世を治る事はなき物を、させる故なうて押籠奉たる人々の官途共、皆可赦由仰ければ、一向荒夷の様なれ共、隨奉て、押籠奉たる人々の官途共、皆赦奉る。松殿の御子師家公、其時は未從三位の中納言にて坐しけるを、木曾が計ひにて、大臣攝政に成奉る。折節大臣不明ければ、徳大寺殿其比は内大臣の左大將に坐しけるを借奉て、大臣攝政に成奉る。何しか人の口なれば、新攝政殿をば借大臣とぞ申ける。同十二月十日の日、法皇をば五條内裏を出奉て、大膳大夫成忠が宿所、六條西洞院へ御幸成奉る。同十三日歳末の御修法被始。其日除目被行て、木曾が計にて、人々の官加階、思様



に成置<sup>なしかき</sup>てけり。平家は西國に、兵衛佐は東國は、木曾は都に張行<sup>はらひ</sup>ふ。前漢後漢の間、王莽が世を討取<sup>うば</sup>て、十八年治たりしが如し。四方の關々皆閉<sup>とじ</sup>たれば、公家の御貢物をも獻<sup>たてまつ</sup>らず、秋の年貢も上らねば、京中の上下、唯少水の魚に不<sup>ふ</sup>異<sup>ことな</sup>、危<sup>あやな</sup>ながらに年暮<sup>としく</sup>て、壽永も三年に成<sup>な</sup>にけり。

【註釋】(一)笠符——軍陣中であつて敵味方の區別をつける爲めに笠又は兜に旗標をつけるのふ。時としては袖又は馬等に布をつける事もある。(二)掃圖參照(三)行事——指揮役。(四)四天——増長、持國、廣目、多聞(前出)。(五)金剛鈴——



密家で修法の際などに用ふる鈴。(五)おそひの石——屋根の板を押へる爲めの石、即ち押への石と解したる者——恥を知つてゐる者。(七)つれなき者——恥をも知らぬ者。厚顔な者。(八)主水正——主水司の長官。主水司は供御の水漿から藏水、供若水等を管掌する所。(九)清大外記——清は清原。大外記は太政官の少納言局の庶政を務める役、詔書等を清書したりする。大外記は中原、清原兩家の世襲であつた。(一〇)

明經道の博士——大學寮の經書を教授する職を明經博士といふ。もとは清原、中原等がその家柄だつた。(一一)法橋——僧位の一つ。(一二)中間法師——雜役に服する僧僧。(一三)處にかぶる——素肌の上に著物一枚を著すること。(一四)栗毛なる云々——栗毛(赤身黒鬣)の馬の下尾が白い馬に。(一五)ひあい——危い意。和訓栞には水間の義かといふ。(一六)敦躬親王——宇多帝の皇子、仁和寺宮と號す。(一七)執柄家——執柄は政柄を執る意で、執柄家とは攝關になる家柄、即ち五攝家をいふ。(一八)歳末の御修法——歳末に宮中で眞言の修法を行ひ、安寧を祈られることなふ。

【評】義仲は實際おはたゞしく都に飛び出して來て、大あばれにあげられて、ばつと散つて行くのである。平家の没落と頼朝の進出となつたぎ合せるに恰度宜いくさびになつてゐる。史實がさうだからでもあるが、平家一篇の構想から見ても必要なくさびであつた。義仲のこゝとは八巻が中心であつて、九巻はその送曲に過ぎない(事件としては)。七巻は序曲に過ぎないのであるが、しかし武將としての義仲は却つて七巻と九巻とに出てゐて、中心の八巻に於ける彼は横暴な人間。下卑な無骨者として描かれて居るのである。しかし七巻の實

盛や、九巻の巴や兼平のくだりを讀むと、やはり涙のある夜の一面を知ることが出来る。さもあれ知盛が義仲の勸誘を拒絶した立派な態度、或は又頼實卿が河原でふるへてゐた右様の軽い描寫、藏人と仲頼の涙ぐましい悲壯な友情、何れも小挿話ながらそれよく描かれてゐる。



平家物語 卷第九

小朝拜

壽永三年正月一日の日、院御所は大膳大夫成忠が宿所、六條西洞院なりければ、御所の體不可然とて、院の拜禮も不被行。院の拜禮無りければ、内裏の小朝拜も行れず。平家は讃岐國八島の磯に送迎て、年の始なれ共、元日元三の儀式事宜からず。主上渡せ給へ共、節會も行れず。四方拜もなし。腹赤も不奏。吉野國栖も不參。世亂たりしか共、都にては流石かうは無りし者とぞ、各宣合れける。青陽の春も來り、浦吹く風も和に、日影も長閑に成行けど、唯平家の人々は、何も氷に閉

小朝拜

六四七

【通釋】 壽永三年正月一日、後白河法皇の御所は六條西洞院にある成忠の邸であつたが、こゝは御所としての體をなして居ないので、院の拜禮も行はれなかつた。従つて内裏の小朝拜もなかつた。平家は八島で春を迎へたが、元日、元三（前出）の儀式など思ふ様には出來ない。天皇はおいでになるけれど、節會も四方拜も行はれないし、腹赤（前出）も奉らず、吉野の國栖の朝貢もなかつた。いくら世は亂れてゐても都ではこんな事はなかつたよ皆は話し合つた。春風吹いて浦風も日影のどかになつてゆくが、平家の人々は氷に閉籠められた心地がして暖い日を待ちわびてゐる。東岸西岸の柳は濃淡の緑を交へ、南枝北枝の梅も或は開き或は蕾みしてゐる時、都での楽しい種々の遊などを思ひ出して語りつとけつゝ、長い春日を暮しかねてゐるのは哀である。



籠られたる心地して、寒苦鳥に不異。東岸西岸の柳遅速を交へ、南枝北枝の梅開落已に異にして、花の朝月の夜、詩歌管絃、鞠、小弓、扇合、繪合、草盡、蟲盡、様々興有し事ども思出で、語續けて、長き日を暮し兼ね給ふぞ哀なる。

【語釋】(一)小朝拜——元日に關白以下殿上人が清涼殿の東庭に併列して天皇に拜賀する儀式をいふ。(小朝拜以前に院參して拜禮あるを院拜禮といふ)之は朝賀なき年に行はれる小儀である。(二)節會——元日の節會は天子紫宸殿に渡御なつて百官に酒を給ひ宴會あるをいふ。(公事根源參照。(三)青陽——爾雅に「春爲青陽」とある。(四)寒苦鳥——印度の大雪山に棲む鳥で、この鳥は日中は温いので何もかも忘れてゐるが、夜になると寒いので、夜が明けたら巢を作らうと鳴く。しかも朝になると忘れてしまふ。人間の懈怠を喩へるのによく經文に引かれる鳥である。こゝでは寒苦鳥の様に寒がつてゐるの意。(五)東岸西岸の柳——朗詠集に見ゆる慶保胤の句。(六)扇合——扇を立派に作つたり、それに歌や繪を書いたりして、それを互に出しあつて優劣を定める遊。繪合せ、草盡などいふのも、繪の優劣を定め合つたり、草を出して定めあつたりする遊。

### 宇治川

同正月十一日、木曾左馬頭義仲院參して、平家追討の爲めに、西國へ可發向由を奏聞す。同十三日既に首途すと聞えしかば、鎌倉の前右兵衛佐頼朝、木曾が狼籍鎮んとて、範頼義經を先として、數萬騎の軍兵を被差し

上けるが、既に美濃國伊勢國にも著と聞えしかば、木曾大に驚き、宇治勢田の橋を引て、軍兵共を分遣す。折節勢こそ無りけれ。先勢田の橋へは、大手なればとて、今井四郎兼平八百餘騎にて指遣す。宇治橋へは、仁科、高梨、山田次郎五百餘騎で遣けり。一口へは、伯父の信太三郎先生義教、三百餘騎で向けり。去程に東國より攻上る大手の大將軍には、蒲御曹司範頼、搦手の大將軍には九郎御曹司義經、宗徒の大名三十餘人都合其勢六萬騎とぞ聞えし。其比鎌倉殿には、生食磨墨とて、聞ゆる名馬有けり。生食をば梶原源太景季頻に所望申けれ共、是は自然の事の有ん時、頼朝が物具して可乘馬なり、

へは信太の先生(前出)義教三百餘人を向けた。然るに東國から攻める正面の大將は範頼、背後の大將は義經、主なる大名三十餘人、總勢六萬人といふ。其の頃鎌倉殿には生月・磨墨といふよい馬がゐた。生食を景季が頻りと所望したけれど、「是はまさかの時頼朝が武裝して乗る馬だ。これも生食に劣らぬ名馬だから」とて梶原には磨墨を賜つた。其の後佐々木高綱が御暇乞に來たので、頼朝はどう思つたのか、(高綱の父秀義が、源爲義の嫡子、杉山に七回も先を懸けて功をたてしに、今も頼朝の名代となる等の事を心に思ひ浮べた爲だらうと見る説と、頼朝の臣を利用する策謀だと見る説とがある)所望の者がいくらかあつたのに、お前に與へるのだからその旨を覚えて居れ」といひ含めて生月を高綱に與へた。高綱は畏つて「今度はこれに乗つて宇治の先登を致します。若し私が死んだとお聞きならば人に先んじられたのだと思つて下さい。未だ生きてゐるとお聞きになつたら、定めし先陣をしたのだからとお思ひ下さい」と云つて退出した。其の場に居合せた大名・小名は「あつばれ不敵な大言よな」と囁き合つた。かくて、各人は鎌倉を立つて思ひくゝに西へ上つた。すると浮島原で景季が高丘に上り、馬を控へて他の群馬を見るに、思ひくゝの鞍をおき鞆(前出)をかけ、幾萬と通るけれど磨墨に勝る馬がないと嬉しがつてゐると、生食らしい馬が現れた。それは金製輪の鞍



是も劣らぬ名馬ぞとて、梶原には磨墨をこそ賜てげれ。其後近江國の住人佐々木四郎の御暇申に被參たるに、鎌倉殿如何か被思召けん。所望の者は幾らも有けれ共、其旨存知せよとて、生食をば佐々木にたぶ。佐々木畏て申けるは、今度此御馬にて宇治川の眞先渡し候べし。若死たりと被思召候はば、人に先をせられりてげりと被思召候べし。未生たりと被聞召候はば、定て先陣をば高綱ぞしつらん物をと被思召候へとて、御前を罷立つ。參會したる大名小名、哀荒涼の申様哉とぞ、人々囁き合れける。各鎌倉を立て、足柄を経て行もあり、箱根に懸る勢もあり。思ひく上る程に、駿河國浮島原に

(前出)おかせ、小總のある鞆をかけ、多くの馬丁をつけてあるが、それでも差繩をふりきる様に元氣よく走つて来た。「是は誰の御馬だ」「佐々木殿の」「三郎殿か」「四郎殿の」と引張て行つた。景季は氣を悪くして「同じ様に召使はれてゐるのに、私を高綱と思ひかへられた(龍が高綱に移つた)のは残念だ。今度都へ上つたならば義仲の四天王の一人と組討するか、でなければ西國へ向つて平家中の一人當千の名ある武士と軍して死なうと思つてゐたのに、この御様子(頼朝の信用の程度)ではそれもつまらない(甲斐がない)。結局こゝで高綱と刺違へて鎌倉殿に損をかけてやらう」とつぶやいて待つてゐた。すると高綱は何心なく出て来た。景季は心中で「押並んで組まうか、正面から突き當つて落馬させようか」とも考へたが、先づ詞をかけた。「佐々木殿は生食を賜つて上洛か」と、高綱は「成程此の人も内々所望したと聞いてゐたが……」と思つて「その事だよ、今度の戦には定めて宇治・瀬田の橋を取除いたであらうが、乗渡すべき馬はなし、といつて生食か欲しいと思つたけれど御邊が願つてさへお許しがなかつたと聞いたので、僕などがいくら願つても戴けさうにないと思ひ、後日の御叱を覺悟の上で出發の前夜に既人と謀し合せて盗んで来たのだよ」と言つたので、景季も腹の虫がおさまつて「えい畜生、そんな事なら俺が盗むのだつたに」と大笑して別れた。高綱の賜つた馬

て、梶原源太景季、高き所に打上り、暫控思ひ思て多くの馬どもを見けるに、ひの鞍置せ、色々の鞆かけ、或は乗口に引せ、或は諸口に牽せ、幾千萬と云ふ數を不知引通々々しける中にも、景季が賜たる磨墨に勝る馬こそ無りけれと、嬉う思て見る處に爰に生食と覺しき馬こそ一騎出來たれ。金覆輪の鞍置せ、小總の鞆懸け、白轡はげ、白沫かませて、舍人あまた附たりけれ共、猶引もためず躍らせてこそ出で來たれ。梶原打寄て、是は誰が御馬ぞ。佐々木殿の御馬候と申す。佐々木は三郎殿か。四郎殿の御馬候とて引通す。梶原、安からぬ事なり。同様に被召使景季を佐々木に思召替られける事こそ遺

は黒栗毛のたくましい奴で、人でも馬でもあたりの者に直ぐ噛みついたので、生食といふ名をつけたのだ。景季が貰つた馬は極めて黒かつたので磨墨といつた。何れも劣らぬ名馬である。さて、東國から攻め上る軍兵は尾張から二手にわけて、大手の大將は範頼、それに従ふ者は武由太郎以下三萬五千餘、近江の國野路篠原に陣をとつた。搦手の大將軍は義經、それに従ふ安田三郎以下二萬五千、これは伊賀國を経て、宇治の橋詰に押寄せた。木曾方では宇治・瀬田の橋を引き、水底には亂材を打ち、逆茂木をつないで流しかけた。頃は正月二十日餘りの事だから、比良・志賀などの小山は昔ながら(ながらと長良山をいひ掛けてある)に雪も消え氷も解けて、水は丁度増してゐるので、白浪漲り落ち、瀬枕も瀧の流るゝ如き音をたて、物凄程である。夜は既にほのくくと明けてゆくけれど、河霧は深く立ちこめて、馬や鎧の色合もはつきりしない。此の時義經は河岸に出て水面を眺め、人の心を引いて見やうとて「この激しい流ではとても渡れまいから、淀一口へ向ふか又は河内路へ廻らうか。或は又水の落ちて少くなるのを待たうか、どうしたものだらう」といふと、高山重忠、生年二十一歳であつたのが、進み出で、「此の河の様子は鎌倉でもよく分かつてゐた事であります。前から豫期しないで、突然河海が出來たのならばいざ知らず、琵琶湖の末流なのですから、いくら待つても水



恨の次第なれ。今度都へ上り、木曾殿の御内に、四天王と聞ゆる、今井樋口、楯、根井と組で死ぬるか、然らば西國へ向つて、一人當千の聞ゆる平家の侍共と軍して死んところ思しに、此御氣色では其も詮なし。所詮にて佐々木を待受け、引組み刺違へ、好侍二人死で鎌倉殿に損とらせ奉ると、つぶやいてこそ待懸たれ。佐々木何心もなう歩ませて出来たり。梶原押並べてや組む、向うざまに當や落すべきと思けるが、先詞をぞ懸ける。如何に佐々木殿は、生食賜らせ給ひて上せ給ふなと言ければ、佐々木哀此仁も内々所望申つると聞し物をと思ひ、さ候へば、今度御大事に罷り上り候が、定て宇治勢田の

量は減じますまい。又、橋をば誰が渡してくれませう。去る治承の合戦に足利又太郎忠綱が生年十七歳で此の河を渡つたのも、よもや鬼神ではありませまい。私が瀬ぶみ（瀬が深いか浅いかを試しに渡ること）して見ませう」とて、丹黨を主として五百餘騎でひし〜と鏑をならべた。すると此の時平等院の東北、橋の小島の崎から二人が引續いて出て来た。一は景季、一は高綱である。よそ目には分らないけれど、内々では先登を目あてにして居るらしい。梶原は一段ばかり進んだ、すると高綱は「いかに梶原殿、此の河は西國一の河だよ、君の馬の腹帯がゆるんで居るらしいから、締め直し給へ」といつたので、景季も成程と思ひ、手綱を馬の揺髪（たてがみの事ならんと講義はいふ）にすて、左右の鏑をすかし、腹帯を解いて締め直した。其の間に高綱はつと馳け抜けて河へさつと打ち入れた。梶原は詐かれたと思ひ直ぐに續いて河へ乗り入れた。梶原が「佐々木殿、いくら高名手柄をしやうとて、あせつてはいけない。（不覺は考のない様なことをしてはいけぬといふ意）水底には大綱があらうから氣を付け給へ」といつたので、佐々木は大刀を抜いて馬の足に引かゝる綱などを打ち切つて進んだ。この宇治川は急流ではあるが、池月といふ日本一の名馬に乗つてゐるのだから一直線に向ふ岸へ着いた、梶原の乗つてゐる馬は河の中程から矢を曲げた様に押流されて遙かに下流から

橋をや引たるらん。乗て河を可渡馬はなし。生食を申さばやとは存つれ共、御邊の申させ給ふだに、御許れなきと承て、増して高綱などが申ともよも賜らじと思ひ、後日に如何なる御勘當も有ばあれと存じつゝ、曉立んとての夜、舍人に心を合せて、さしも御秘藏の生食を盗みすまして上りさうは如何に、梶原殿と言ければ、梶原此詞に腹がゐて、ねつたいさらば景季も盗べかりける物をとて咄と笑てぞ退にける。佐々木四郎の賜られたりける御馬は、黒栗毛なる馬の、極めて太う逞きが、馬をも人も傍を拂て食ければ、生食とは被附たり。八寸馬とぞ聞えし。梶原が賜たりける御馬も、極めて太う逞きが、

岸に上つた。高綱は鏑ふんばり大音聲あげて「宇多天皇から九代の後胤云々」と名乗つた。畠山重忠は五百餘騎で渡らうとした處、向ふ岸から山田次郎の放つた矢が重忠の馬を深く射たので、弓杖をついて水中に下りたつた。岩にくだける波が甲の手先へびしや〜と打ち寄せてくるけれど、重忠は平氣で、水底を潜つて向ふ岸へ着いた。そこで岸へ上らうとすると、後から纏りついた者がある。「誰だ」「重親です」、「大串か」「左様です」この大串は畠山の烏帽子子であつた。「餘りに水が早くて、馬を中流から押流されました。仕方なくこゝまでやつとついで来ました」といつたので、畠山は「いつもお前の様な人間は俺に助けられるのだ」といふや否や、大串をつかんで岸へ投げ上げた、すると大串次郎は投げ上げられて立ち直り、太刀を抜いてふりかざし大音聲をあげて「武藏國の住人云々」と名乗つたので敵味方共に一度にとつと笑つた。其の後畠山は乗替の馬に乗つてをめき叫んで突入し、木曾殿の家の子長瀬判官代を討取り、その首を本田次郎の鞍のつつけに付けさせた。これを手始にして宇治橋を守つてゐた兵共も暫し防戦したが遂に力及ばずして、木幡・伏見へ向けて逃げて行つた。勢田の方面は稻毛三郎の計略で田上の供御瀬を渡つて攻め上つて来た。



誠に黒かりければ、磨墨とは被附たり。何も劣ぬ名馬なり。去程に東國より攻上る大手搦手の軍兵、尾張國より二手に分てせめ上る。大手の大將軍には、蒲御曹司範頼、相伴ふ人々、武田太郎、加賀見次郎、一條次郎、板垣三郎、稻毛三郎、榛谷四郎、熊谷次郎、猪俣小平六を先として、都合共勢三萬五千餘騎、近江國野路、篠原にぞ陣を取る。搦手大將軍には、九郎御曹司義經、同伴ふ人々、安田三郎、大内太郎、畠山庄司次郎、梶原源太、佐々木四郎、糟屋藤太、澁谷右馬允、平山武者所を先として、都合共勢二萬五千騎、伊賀國を経て、宇治橋の詰にぞ押寄たる。宇治も勢田も橋を引き、水の底には亂杖打て大綱張り、逆茂木つないで流し懸たり。比は睦月廿日餘の事なれば、比良の高根、志賀山、昔ながらの雪も消え、谷々の氷打解て、水は折節増りたり。白浪夥しう漲落ち、瀬枕大に瀧鳴て、逆巻く水も早かりけり。夜は既に若々と明行けど、河霧深く立籠て、馬の毛も、鎧の毛もさだかならず。大將軍九郎御曹司、河の端に打出て水の面を見渡して、人々の心を見んとや被思けん、淀一口へや可向、又河内路へや廻べき、水の落足をや待べき、如何せんと宣ふ處に、爰に武藏國の住人畠山庄司次郎重忠、生年廿一に成けるが、進出て、此の河の御沙汰は、鎌倉にても能々候しぞかし。兼ても知召れぬ海河の俄に出来ても候はばこそ。近江の湖の末なれば、待ともく水ひまじ。橋をば又誰か渡で可參。去ぬる治承の合戦に、足利又太郎忠綱が、生年十七歳にて渡けるも、鬼神にてはよもあらし。重忠先瀬踏仕らんとて、丹黨を宗として、五百餘騎ひしひしと鎧を並る處に、爰に平等院の良、橋の小鳥が崎より、武者二騎引かけ引かけ出来たり。一騎は梶原源太景季、一騎は佐々木四郎高綱也。人目には何共見えざりけれ共、内々先に心を懸たるらん、梶原は佐々木に一段許ぞ進んだる。佐々木、如何に梶原殿、此河は西國一の大河ぞや。腹帯の延て見さうぞ。縮給

へと言ければ、梶原さも有らんとや思けん、手綱を馬のゆがみに捨て、左右の鎧を踏透し、腹帯を解てぞ縮たりける。佐々木其間に、そこをつと馳抜て、河へ颯とぞ打入たる。梶原被謀ぬとや思けん、懸て續て打入たり。梶原、いかに佐々木殿、高名せうとて不覺し給ふな。水の底には大綱あるらん。心得給へと言ければ、佐々木さも有らんとや思けん。太刀を抜て、馬の足に懸たる大綱共を、ふつくくと打切、打切、宇治川速しと云へ共、生食と云ふ世一の馬には乗たりけり、一文字に颯と渡て、向の岸にぞ打上たる。梶原が乗たりける磨墨は、河中より篋形に押流され、遙の下より打上たり。其後佐々木鎧踏張立上り、大音聲を揚て、宇多天皇に九代の後胤、近江國の住人、佐々木三郎秀義が四男、佐々木四郎高綱、宇治川の先陣ぞやとぞ名乗たる。畠山五百餘騎打入て渡す。向の岸より、山田次郎が放つ矢に、畠山馬を篋ぶかに射させ、はぬれば、弓杖を突て下立たり。岩波甲の手先へ颯と押懸けれども、畠山是を事共せず、水の底を潜て、向の岸にぞ著にける。打上らんとする處に、後より物こそ無手と控たれ。誰そと問へば、重親と答ふ。大串次郎か。さん候。大串次郎、畠山が爲には烏帽子子にてぞ候ける。餘に水が早うて、馬をば河中より押流され候ぬ。力及ばで是まで著參て候と言ければ、畠山、いつも和殿原が様なる者は、重忠にこそ助られんすれといふ儘、大串を擱て岸の上へぞ投上たる。投上られて、たゞ直り、太刀を抜て額にあて大音聲を揚て、武藏國の住人大串次郎重親、宇治川の歩立の先陣ぞやとぞ名乗たる。敵も御方も是を聞いて一度に咄とぞ笑ける。其後畠山乗替に乗て、喚てかく。爰に魚陵の直垂に緋威の鎧著て、連錢蘆毛なる馬に、金覆輪の鞍を置て乗たりける武者一騎、眞先に進たるを、畠山、爰に懸るは如何なる者ぞ、名乗やと言ければ、是は木曾殿の家子に、長瀬判官代重綱と名乗る。畠山今日の軍神祝はんとて、押並て無手と組



で引落し、我乗たりける鞍の前輪に押付け、些も不動頭ねち切て、本田次郎が鞍のつ附にこそ附させけれ。是を始て、宇治橋固たりける兵ども、暫支て防戦ふと云へ共、東國の大勢皆渡りて攻ければ、力不及、木幡山、伏見を指てぞ落行ける。勢田をば稻毛三郎重成が計にて田上の供御瀬をこそ渡けれ。

【註釋】(一)蒲の御曹司——範頼は遠州蒲で生れたから蒲といふ。曹司は部屋のこと、まだ部屋住の若君を御曹司といふ。(二)荒涼の申様——すさまじい云ひ様、鼻息の荒い云ひ様の意。あつればは感嘆の詞。(三)乗口に云々——さし繩をとるとか、手綱を引くとかいふ説があるが、考證には「左ノ片口ヲ引テ」とあるから、乗口とは左方の綱を引くこと。諸口を引くとは差繩を引くといふのと兩口とつて引くといふ説などあるが今は後者に従つておく。(四)白磔はげ——白磔は鐵を磨いて銀色にしたもの。はげは引かけての意。つまり鉄めること。(五)白池がませる——口を強くせめ白池を口からふかせて。(六)あつばれ——感嘆の發語で、こゝでは「さうだく」といふ程の意。(七)上りさう——上り候の音便。(八)腹がゐて——腹が癒て(ぬは)いの誤。(九)れつた——れつたし(れたまし)といふ方言。(一〇)八寸——馬の丈は四尺を標準としてそれ以上の丈をいふ(寸をきとよませるのが普通)、こゝでは四尺八寸の馬。(一一)武者所——院の御所を警固する武士。(一二)昔ながら——乍ら(のまゝ)と近江の長良山をかけていつたのだ。(一三)瀬枕——川瀬の水が水底



の物にぶつつかつて高くなつてゐる所。(一四)丹黨——武藏七黨中の丹治黨のこと。(一五)一段——段については六十間、六間、五間等諸説あるが、六間を一段とする和爾雅の説に従ふ(平家物語の語法註の所参照)。但しあるひはもつと短いものではあるまいかと文意

の意味からは考へられるが確證がないから止むを得ぬ。續日本記には二丈六尺とし、四時祭式には八尺を一段としてある。(一六)馬のゆがみ——岡本記に「巻きかみを、ゆがみともたてがみとも申すべし」とある。(一七)兜裝形——矢の兜形をためた様に曲げた形。(一八)甲の手先兜の吹き返しの前方の部分。(一九)魚陵——諸説あり一定せず、桃華葉葉には「山鳩色をいふ」とあり、貞丈雜記には「色の名にあらず綾の名なり、浪に魚の紋ある綾なるべし」と見える。今後説に従つて置く。(二〇)軍神祝ふ——首を切つて神にさへげて勝利を祈ること、血祭にあげるといふのと同じ。神といふのは北斗七星中の破軍星をさす。(二一)鞍の取付——鹽手(四方手)のこと、敵の首をとつて取付ける所だからとつつけといふ。鞍の前輪後輪に左右二所づつける金具をいふ。元來はむながい、しりがいを止める爲のものである。(二二)田上の供御瀬——勢多川左岸の山谷を田上といひ、その附近の徒渉場(古、こゝから氷魚をとつて朝廷へ供へた)をいふ。

【評】有名な宇治川先陣の場面である。佐々木が梶原をたばかつて迄先陣を望み、大串次郎が重忠に投げ上げられつゝも、大音あげて歩立の先陣と名乗るなど、かうした真剣の競争や、滑稽の中にもよく武士の功名心が見られるであらう。古來、高綱を以て競争者をたばかる卑怯者としないうで却つてその心事の命懸けなるを賞するのは何とした理由だらう。さて文章として「我は既にほのく」と明けゆけど河霧深くたちこめて、馬の毛も鐵の毛も云々」など、いかにも目に見るやうである。

## 河原合戦

軍破れにければ、九郎御曹司義經、飛脚を以て、鎌倉殿へ合戦の次第を委う註いて被申けり。鎌倉殿先御使に、佐々木は如何にと御尋有ければ

【通釋】敵軍が敗れたので、義經は飛脚を遣して頼朝へ合戦の様子を委しく報告した。頼朝は先づ使に向つて「佐々木はどうだつた」とお尋ねになると「宇治川の先登を致しました」と對へた。そこで日記を披見なさると「宇治川の先陣高綱、二陣景季」と書いてあつた。さて宇治勢多が破れたので、



宇治川の眞先候と申す。さて日記を披て見給へば、宇治川の先陣、佐々木四郎高綱、二陣梶原源太景季とぞ被書たる。宇治勢田破れぬと聞えしかば、木曾は最後の暇申さんとて院の御所六條殿へ馳参る。木曾門前迄参たりしか共、さして可奏旨もななくして、取返して、六條高倉なる所に初て見そめたりける女房の有ければ、そこに打寄て、最後の名残惜んとて、頓にもやらざりけり。爰に今参したりける、越後中太家光と云ふ者有り。御敵既に河原迄攻入て候に、何とて左様に打解ては渡せ給ひ候やらん。唯今犬死させ給ひ候なんす。とうとう御出候へと申ければ、猶出もやらざりければ、左候は

義仲は最後の御暇を申さうと院御所へ馳けつけたが、別に奏すべき事もなかつたので引返して、六條高倉に見そめた女房がゐたので、そこへ立寄つて別れを惜まうとて出かけていつた。そして仲々その家から出て來なかつた。すると近頃家來になつた（一本に新参とある）越後中太といふ者が「敵が既に加茂河原迄攻め入つたのに何故そんなに打解けてゐられるのですか。そんな事をしてゐては今にも犬死なさいますよ、早く御出ましなさい」と申ししたが、なほ仲々出て來ない。そんな事なら私が先立つて死出の山でお待ちしませう」とて家光が腹を切つて死んだ。義仲は、自分をすゝめる爲の自害だと思つてすぐに家を出た。かくて上野國の住人那波廣純を先として、百人餘の兵をつれて六條河原へ出てみると、東國方の兵らしく先づ三十騎程現はれた。その中から二人の武者が先に進み出た。一人は鹽屋五郎、今一人は勅使河原の五三郎である。鹽屋がいふには「後陣を待たうか」、勅使河原が「一陣が破れると殘黨は散亂してしまふから、何はともあれ遮二無二突撃しよう」とておめいて戦つた。義仲は今日を最後の戦と力戦するのをば、東國勢は中に取り圍んで討取らうとする。義經は、戦の方は軍兵にまかせて置いて、自分は院の御所が氣にかゝるものだから、守護し奉らうと總て甲冑にかためて、五六騎で六條殿へかけつけた。御所では大膳大夫成忠が、東の築塔の上へ上つ

ば家光は、先立參せて、死出山にてこそ待參せ候はめとて、腹搔切てぞ死にける。木曾、是は我を勸る自害にこそとて、聽て打立給けり。爰に上野國の住人那波廣純を先として其勢百騎許には過ぎりけり。六條河原に打出て見れば、東國の勢と覺くて、先三十騎許で出来る。其中より武者二騎先に進だり。一騎は鹽屋五郎惟廣、一騎は勅使河原五三郎有直也。鹽屋が申けるは、後陣の勢をや可待。又勅使河原が申けるは、一陣破ぬれば殘黨不々、唯懸よやとて、喚て駈く。木曾は今日を最後と戦へば、東國の大勢木曾を中に取籠て、我討取んとぞ進ける。大將軍九郎御曹司義經、軍をば軍兵共にせさせ、

て、ふるえながら見てゐると、五六騎が甲も仰向になつて、射向の袖を春風にたびかかせて黒煙をたて、飛んで來るのが見える。「あゝ大變だ、また義仲が來た」と叫んだので、院中の人々は今度こそ此の世の見おさめだと手を握り、色々の願をかけぬ者もない。成忠は再び奏するには「今日都入りする東國の武士らしうございます。皆、笠印（前出）が違つてゐます」といひも終らぬうちに、義經は門前で馬を下り大音聲をあげて「義經が宇治方面を破つて此の御所守護の爲に馳せ参りました、開けてお入れ下さい」と呼ばはつた。成忠は餘りの嬉しさに築塔から躍り下り、腰を打つた痛さも、嬉しさに紛れて、這ひながら御所へ参つて此の事を奏聞したので、法皇は大に御感あつて、門内へ這入らせた。義經の其の日の装束は赤地の錦の直垂だつた。法皇は中門の格子窓から御覽になつて「雄々しさうな男よ、皆の名を名乗らせよ」と仰せになつたので、先づ義經、次に義定、曰く重忠、曰く景季と名乗つた。義經を合せて武士は六人。鎧は違つてゐるが、その容貌は何れも一くせありげな様だ。成忠は仰せを蒙つて義經を廣縁のそばへ召して合戦の様子を委しくお尋ねになつた。義經は畏つて「頼朝が義仲の狼籍を鎮壓する爲に、範頼、義經を先として六萬騎を上洛させました。範頼は勢多から参りましたが、未だ一人も上京しませぬ。私は宇治方面を破つて此の御所守護の爲に馳せ参りました。義



我身は院の御所の覺束なきに、守護し奉んとて、混甲五六騎、院の御所六條殿へ馳參る。御所には、大膳大夫成忠、御所の東築牆の上に登り上て、標々見渡せば、武士五六騎除甲に戰成て、射向の袖春風に吹靡させ、白旗颯と指上げ、黒煙蹴立て馳參る成忠あな淺まし、木曾が又參り候と申ければ、院中の公卿殿上人、傍の女房達に至迄今度ぞ世の失はてんとて手を握り、立ぬ願も坐さず。成忠重て奏聞しけるは、今日始て都へ入る東國の武士と覺え候。如何様にも皆笠符が替て候と申も果ぬに、大將軍九郎御曹司義經、門前にて馬より下り門を敲せ、大音聲を揚て、鎌倉の前右兵衛佐頼朝が弟、九郎義經こゝ、宇

仲は河を北へ逃げて行きましたのを官軍を以て追はせました。今頃は定めて討取つてゐるでせう」といと平氣でかるく、と對へた。法皇は大層御喜びになつて「又義仲の殘黨などか來て暴れるかも知れないから、お前は此所をよく守護せよ」と仰せられたので、四方の門を警備してゐた。其の間に軍兵も集つて一萬餘となつた。

義仲は萬一の事でもあつたら法皇をおつれして西國へ落ち、平家と一緒にならうと思ひ、力のある者二十人程を揃へて用意してゐたが、御所は義經が嚴重に守護してゐると聞いて、今は仕方がないと思つたのだらう、加茂河原を北の方へ逃げて行つたが、六條と三條との間で、幾度も討たれやうとした。義仲は涙を流して「こんなにならうと前から思つてゐたら、今井を勢多へは遣さなかつたらうに（やらすあままし）、今井とは幼い竹馬の頃から死ぬのならば一所でと約束してゐたのだ。今は別々に討たれるのは悲しい。併しもう一度兼平の行方を尋ねて見よう」と河原を北へ進んで行くと、六條と三條との間で敵が襲撃して來たので、引返し、引返して、小勢を以て大敵を五六度も追ひ散らして、加茂川を渡り、粟田口松坂を経て逃げた。そして四宮を過ぎる頃には、主従七騎になつてしまつた。まして此の調子では中有（死後の旅路）はどんなに淋しからうと思ひやられて哀れである。

治の手を攻破て、此御所守護の爲に馳參て候へ。開て入させ給へと被申たりければ、成忠餘の嬉さに、急ぎ築牆の上より躍下るとて、腰を衝損したりけれ共、痛さは嬉さに紛て不覺、這々御所へ參て、此由奏聞したりければ、法皇大に御感有て、門を開させてぞ入られる。義經其日の裝束には、赤地の錦の直垂に紫下濃の鎧著て、鍬形打たる甲の緒を締め、金作の太刀を帶き、二十四指たる截生の矢負ひ、滋藤の弓の鳥打の本を、紙を廣さ一寸許に切て、左巻に巻たる、是ぞ今日の大將軍の符とは見えし。法皇中門の櫃子より窺覽有て、ゆゝしげなる者共哉、皆名乗らせよと仰ければ、先大將軍義經、次に安田三郎義定、畠山庄司次郎重忠、梶原源太景季、佐々木四郎高綱、滋谷右馬允重資とぞ名乗たる。義經具して武士は六人鎧は色々替たりけれ共、頼魂事柄何も劣らず。成忠仰承て、義經を大床の際へ召て、合戦の次第を委う御尋あり。義經畏て被申けるは、鎌倉の前右兵衛佐頼朝、木曾が狼籍静めんとして、範頼義經を先として、都合六萬餘騎を差上せ候が、範頼は勢田より參り候へ共、未一騎も見え不候。義經は宇治の手を攻破つて此御所守護の爲に馳參じて候へ。木曾は河原を上りに落候つるを、軍兵共を以て追せ候つるが、今は定て討取候なんすと、最事もなげにぞ被申ける。法皇大に御感有て、又木曾が餘黨など參て、狼籍もぞ仕る。汝は此御所能々守護仕れと仰ければ、畏り承て、四方の門を固て、待つ程に、兵共馳集つて、程なく一萬餘騎許に成にけり。木曾は自然の事あらば、法皇取奉て、西國へ落下り、平家と一つに成んとて、力者廿人汰て持たりけれ共、御所には又、九郎義經參て、嚴う守護し奉ると聞いて、今は叶じと思けん、河原を上りに落行けるが、六條河原と三條河原の間に、既に討取れんとする事度々に及ぶ。木曾涙を流いて、かく可有とも期したりせば、今井を勢多へは遣ざらまし。幼少竹馬の昔より、死なば一所で死んところ契しか



今は所々で討れん事こそ悲しけれ。乍去、今一度今井が行方を聞んとて、河原を上りに懸る程に、六條河原と三條河原の間にて、敵襲懸れば、取て返し、取て返し、木曾僅なる小勢にて、雲霞の如くなる敵の大勢を、五六度迄追返し、賀茂河さつと打渡り、栗田口松坂にも懸けり。去年信濃を出しには、五萬餘騎と聞えしが、今日四宮河原を過るには、主従七騎になりける。まして中有の旅の空、思やられて哀なり。

【通釋】(一)六條高倉なる云々——長門本には「ある宮腹の女房」といひ、盛衰記には「松殿基房公の御姫十七」とある。(二)除甲——退甲又は仰け甲とも書く。戰激しくて兜の緒がゆるんで、後さまになつたのをいふ。(三)弓の鳥打——弓の上弭と握皮との中間の所(末弭から一尺二三寸の所)「鳥を射たるに矢所によりて死なずして飛揚ることあり、其時弓を以て鳥を打落すゆゑ鳥打といふなるべし」。(四季草)(四)櫛子——窓に幅狭い板を豎に並べたものをいふ。三才圖會に「縦者櫛、横者櫛、櫛間子曰櫛子」。(五)狼籍もぞする——このぞは推量の意を表はす助詞。(六)力者——庭訓往來扶翼には「出帳頭巾チカブリ、白布ノ狩衣袴ニ脚絆シテ短刀チ腰ニサス、下俗人ノ如シ、制髮ノ人夫也」とあれど、こゝでは、力ある者といふ程の意か。

### 木曾最後

木曾は信濃を出しより、巴、款冬とて、二人の美女を具せられたり。款冬は、勢有て、都に留りぬ。中にも巴は色白う髪長く、容顔誠に美麗也。究竟の荒馬乗の、惡所落し、弓矢打物取ては、如何なる鬼にも神にも合

【通釋】 義仲は信濃を出た時から、巴御前、款冬御前といふ二美女をつれてゐた。後者は病氣で京都に止つた。巴は色白の美人で殊の外荒馬乗の名手。道の悪い所でも乗りこなし、どんな強敵にあつても一人當千の勇婦であつた。だからいつの軍の時にも札よき鎧を着せて一方の大將としてさし向けられたのだが、度々の高名をして、比肩するものがなかつた。で、今度も、多くの味方が討たれ中にも、七騎になる迄巴は討たれなかつた。義仲は長坂を経て

と云ふ一人當千の兵也。されば軍と云ふ時は、札よき鎧著せ、強弓大刀持せて、一方の大將に被向けるに、度々の高名肩を並る者なし。されば今度も多くの者落失討れける中に、七騎が中までも、巴は討れざりけり。木曾は長坂を経て、丹波路へとも聞ゆ。龍華越に懸て、又北國へ共聞えけり。かゝりしか共、今井が行末の覺束なさに、取て返して勢多の方へぞ落行給ふ。今井四郎兼平も八百餘騎にて勢田を固たりけるが、五十騎許に打なされ、旗をば巻せて持せつゝ、主の行方の覺束なさに、都の方へ上る程に、大津の打出濱にて木曾殿に行合奉る。中一町許より、互に其と見知りて、主従駒を早めて寄

丹波路へいつたとも或は龍華を越えて北國へ落延びたとも噂された。けれど、も實際は今井兼平の行末が氣になるので、引返して勢多の方へ落ちていつた。兼平も亦八百餘騎が五十騎ばかりに打負かされて、旗を巻かせて持たせながら主君の行方が氣懸りなので都の方へ上つて來たので、丁度大津の打出濱で義仲と出遇した。二人の間が一町程になると、互にそれと知つて主従ともに駒を早めて寄り合つた。義仲は兼平の手をとつて、自分は六條河原で死ぬ所であつたけれど、お前の行方が覺束ないので大敵に後を見せてこゝ迄逃げて來た。お前はどうかと云ふと「仰せ誠に忝ふ存じます。私も勢多で討死すべきでありましたが御行方が心配で、こゝ迄來ました」と答へた。義仲は「さては二人の約束はまだ違はなかつたのだ。……さて自分の味方の兵は山林に逃げ散つて此邊にも隠れてゐるだらう、お前の印の旗を上げさせよ」といつたので、今井の旗を差し上げた。それを見て京から逃げて來た者といはず、勢多からの者といはず馳せ集つて程なく三百になつた。義仲は大層喜んで、「これだけの軍勢ならば最後の軍せずばなるまい。向ふに群つてゐるのは誰の軍だらう」「甲斐の一條次郎の兵だといひます」「どれ程あるだらう」「六千人といひます」「それでは互によい敵だ。同じ死ぬるのなら大勢の中へ飛び込んで好い敵と組合りて討死しよう」とて眞先に進んだ。義仲の其日の装束は赤地の錦



合たり。木曾殿今井が手を把て宣けるは、義仲六條河原にて如何にも成べかりしか共、汝が行方の覺束なさに、多くの敵に後を見せて、是迄遁たるは如何にと宣へば、今井四郎、御諛誠に忝候。兼平も勢田にて討死仕るべう候しか共、御行方の覺束なさに、是迄遁参て候と申しければ、木曾殿、さては契は未朽せざりけり。義仲が勢山林に馳散て、此邊にも控たるらんぞ、汝が旗上させよと宣へば、巻て持たせたる今井が旗差上たり。是を見附て、京より落つる勢共なく、又勢多より参る者共なく馳集て程なく三百騎許に成給ぬ。木曾不斜に悦て、此勢にては、最後の軍一軍などかせざるべき。あれにしぐ

の直垂にいか物作(前出)の太刀をはき、少々残つてゐる石打の矢を頭高に負ふて鬼芦毛といふ馬に乗り、「日來噂に聞いてもゐよう。旭將軍義仲だ。お前は甲斐の一條次郎と聞いてゐる。俺を討取つて頼朝に見せよ」と叫んで攻めよせた。「一條次郎はこれを聞いて」「それ大將軍だ、餘さず討つてしまへ」と大勢の中に取圍んで討たうと進んで来た。義仲は三百騎で斬りまくり、後へつと出て来た時には五十騎程になつてしまつた。そこを破つてゆくと土肥實平が一千騎で支えてゐた。之も破つて更に進むと、あそこに四五百騎こちらに百騎と陣どつてゐる。それを驅破つて行くうちに主従は五人になつてしまつた。それでも巴はまだ討たれなかつた。義仲は巴を呼んで「お前は女だから、是から何所へでも早く逃げてくれ、自分は討死するのだ、若し人手にかゝらなければ自害する。で、自分の最後の軍に女をつれてゐたなどといはれるのは残念だから」といつたけれども巴はなほ落ちて行かない。餘りやかましくいはれるので「どうか好い敵が出てくれ、ば宜い。義仲殿に最後の戦して見せやうものを」と控へてゐると、そこへ武藏國の住人御田八郎といふ大力の者が三十騎許りで進んで来た。巴はその中へわけて入り先づ御田と組み合つて頭を切り捨て、それから物具を脱いで東國の方へ落ちて行つた。此の戦で手塚太郎は討死するし、同別當は逃げてしまつた。かくて義

ろうて見るは、誰が手哉覽、甲斐一條次郎殿の御手とこそ承つて候へ。勢如何程有らん。六千餘騎と聞え候。さては互によい敵、同う死ぬる共、大勢の中へ懸入り、よい敵に逢てこそ討死をもせめとて、真先にぞ進給ふ。木曾殿其日の装束には、赤地の錦の直垂に、唐綾威の鎧著て、いか物作の太刀を帶き、鍬形打たる甲の緒を締め、二十四指たる石打の矢の、其日の軍に射て、少々残たるを頭高に負なし、滋藤の弓の真中取て、聞ゆる木曾の鬼蘆毛と云ふ馬に金覆輪の鞍を置たりけるが、鎧踏張立上り、大音聲を揚げて、日來聞けん物を、木曾冠者、今は見らん左馬頭兼伊豫守朝日將軍源義仲ぞや。

仲と義平と二人になつた。義仲は「日頃は何とも思はぬ置が今日は重く感じられる」といふと今井が「御身もまだ疲れていらつしやらないし、馬も弱つてゐないのに、一領の著背長(前出)を俄に重いなど何故お思になるのです、それといふのは味方につよく兵がないから臆病になつたのでせう。私人を千人とも思召せ、まだ射残した矢が七八本ありますから、これで暫く防ぎませう、向ふに見える粟津松原へ入つて靜に御自害なさい」といひつゝ馬を進めて行くと、そこへ荒手の武者五十騎許りが出て来た。兼平は「此の敵を暫く防ぎますから、主君はあの松原へお入りなさい」といふ。義仲は「六條河原で討死すべきのを、お前と一所に死なうと思つて此所迄来たのだから、一所に討死しよう」とて、馬の鼻を並べて今や突進しようとした。兼平は急いで馬から下り、義仲の馬の水つきに取りつき、涙をばらばらと流して、「武士は平常どんな高名があつても最後にみにくい事をすればいつ迄も恥です。今は御身も弱り、馬もつかれてゐるので、つまらない人の郎等に組落されて討たれなすつたら、あれ程日本國に鬼神ありといはれた木曾殿を何某の郎等が手にかけて討取つたと云はれるのが口惜うございます。どうかいやでもあの松原へお入りなさい」といつたので、義仲も「それならば」とて唯一人粟津の松原へ向つた。今井四郎は後へ引返して、五十人程の中へ



甲斐の一條。次郎とこそきけ。義仲討つて兵衛佐に見せよとて喚て懸く。一條。次郎是を聞いて、唯今名乗るは、大將軍ぞや。餘すな者共、漏すな若黨、討やとて、大勢の中に取籠て、我討取んとぞ進ける。木曾三百餘騎六千餘騎が中へ懸入り、豎様横様蜘蛛手十文字に懸破つて、後へつと出たれば、五十騎許りに成にけり。そこを破て行く程に、土肥次郎實平、二千餘騎で支たり。そこをも破つて行く程に、あそこにては四五百騎、爰にては二三百騎、百四五十騎、百騎許りが中を、懸破々々行く程に、主従五騎にぞ成にける。五騎が中迄も巴は討たれざりけり。木曾殿巴を召して己は女なれば、是よりとう／＼

割つて入り大音聲あげて「遠い者は聲をきけ、近い者は目でも見よ、自分は今井兼平とて三十三才になる、義仲の臣にかうした者が居るとは頼朝公迄も御承知だらう、この兼平を討取つて頼朝にお見せしろ」とて射残した八筋の矢を次々と射た。死生はいさ知らず、たちまち敵八人を射落した。それから太刀を抜いて斬り廻つたのに、面と向つて敵對する者はない。何れもたゞ「射とれや射とれ」と散々に射たが、鎧が良いので裏までは通らない。札の間を射ないものだから疵も受けない。義仲は唯一人松原へと馳けた。頃は正月二十一日の夕方であるから薄氷は張つてゐる。深田があるとも知らずして馬を乗り入れたものだから、馬の首も見えない位にめり込んだ。いくらあふつても打つても動かない。それでもなほ今井の方が氣になるので振り向いた所を、三浦の石田次郎が追かけて来て矢を放つたのが、義仲の内甲を射た。射られた痛さに甲の眞甲を馬の頭に押あてて俯伏した。そこへ石田の家來が二人やつて来て首を切つてしまつた。かくてその首を太刀の鋒に貫き「此の日来日本の鬼神といはれた義仲公を石田爲久が討つた」と名乗つた。兼平は戦つてゐたが之を聞いて、「今は誰をかばう爲に軍するといふこともない、見給へ東國の人々よ、日本一の剛の者の自害する手本を」とて、太刀の鋒を口にくわへ馬から倒に飛び降り貫れて死んだ。

木曾殿

何地へも落ゆけ。義仲は討死をせんずる也。若し人手に懸らざれば、自害をせんずれば、義仲が最後の軍に、女を具したりなど言れん事、可口惜と宣へ共、猶落も行かざりけるが、餘に強う被言奉つて、哀好らう敵の出来よかし。木曾殿に最後の軍して見せ奉んとて、控て敵をまつ處に、爰に武藏國の住人、御田八郎師重と云ふ大力の剛の者。三十騎許りで出で来る。巴其中へ破つて入り、先御田八郎に押ならべ、無手と組んで引落し、我乗たりける鞍の前輪に推つけて、少も不動、頸ねち切て捨てんげり。其後物具脱棄て、東國の方へぞ落行ける。手塚太郎討死す。手塚別當落にけり。木曾殿今井四郎唯主従二騎に成つて、宣けるは、日来は何共覺えぬ鎧が、今日は重う成つたるぞやと宣へば、今井四郎申けるは、御身も未嬴させ給ひ候はず、御馬も弱り候はず、何に依て一領の御著背長を、俄に重うは思召れ候べき。其は御方に續く勢が候はねば、臆病でこそ、さは思召候らめ。兼平一騎をば、餘の武者千騎と思召候べし。爰に射残りたる矢七つ八つ候へば、暫防矢仕候はん。あれに見え候は、栗津の松原と申候。君はあの松の中へ入せ給て、靜に御自害候へとて、打て行く程に、又荒手の武者五十騎許りで出来る。兼平は此御敵暫防參候べし。君はあの松の中へ入せ給へと申ければ、義仲、六條河原にて如何にも成べかりしか共、汝と一所で如何にも成ん爲にこそ、多くの敵に後を見せて、是迄遁れたんなり。所々で討れんより、一所でこそ討死をもせめとて、馬の鼻を並べて既に懸んとし給へば、今井四郎急ぎ馬より飛で下り、主の馬の水づきに取附き涙をはらくと流いて、弓矢取は、年來日来如何なる高名候へ共、最後に不覺しぬれば、永き瑕にて候也。御身も嬴させ給ひ候ぬ。御馬も弱て候。云甲斐なき人郎等に組落されて、討れさせ給候なば、さしも日本國の鬼神と聞えさせ給つる木曾殿をば、何某が郎等の手に懸て、討奉たりなんと申されん事、口惜かるべ



し。唯理を枉げて、あの松の中へ入せ給へと申ければ、木曾殿さらばとて、唯一騎栗津の松原へぞ駈け給ふ。今井四郎取返し、五十騎許が勢の中へかけ入り、鎧踏張立上り、大音聲を揚て、遠からん者は音にも聞け、近からん人は目にも見給へ。木曾殿の乳母子に、今井四郎兼平とて、生年三十三に罷成る。さる者有とは、鎌倉殿迄も知召たるらんぞ、兼平討て、兵衛佐殿の御見参に入よやとて、射残たる八筋の矢を指詰引詰散々に射る。死生は知らず、矢庭に敵八騎射落し、其後太刀を抜て、斬て廻るに、面を合する者ぞなき。唯射取や射取とて、差詰引詰散々に射けれども、鎧好ければ裏かゝす、開間を射ねば手も不負。木曾殿は唯一騎、栗津の松原へ駈給ふ。比は正月廿一日、入相許の事なるに、薄氷は張たりけり。深田有とも不知して、馬を馳と打入たれば、馬の首も不見けれ。あふれ共く打共々々不動。かゝりしかども今井が行方の覺束なさに、振仰き給ふ所を、相模國の住人、三浦の石田次郎爲久追懸り、能引てひやうと放つ。木曾殿内甲を射させ、痛手なれば。甲の眞甲を馬の頭に押當て俯し給ふ所を、石田が郎等二人落合て既に御首をば賜りける。やがて首をば太刀の鋒に貫き、高く指上げ、大音聲を揚て、此日來日本國に鬼神と聞えさせ給つる木曾殿をば、三浦石田次郎爲久が討奉るぞやと名乗ければ、今井四郎は軍しけるが、是を聞いて、今は誰をかばはんとて軍をばすべき、是見給へ東國の殿原、日本一の剛の者の自害する手本よとて、太刀の鋒を口に含み。馬より倒に飛落ち、貫かつてぞ失にける。

【語】(一)巴——今井、樋口等と同胞である。後和田義盛の妻となつて朝比奈三郎を産んだ。(二)惡所落し——險難な所も馬で乗りおろす。

(三)しぐらうて——時雨ひでの音便。時雨の降る時の様に模倣として見ゆる一集團の意だらう。校定本には密集とある。(四)石打の矢

——笠の石打の羽(尾の最下に重なつた羽)ではいだ矢。これは敵をいしく(うまく)打つといふ事にとりなしてつけた名だといふ。聲が飛ぶ時此の羽で石を打つといふのは非なりと春草にある。(五)好からう敵——よからん敵の音便。(六)手塚の別當——長門本には

太郎の叔父とある。この別當も莊司のことだらう。(七)馬の水づき——髯の左右、手綱をつける所をいふ。(八)乳母子——乳母の子だから義兄弟である。(九)裏かく——裏まで通る。(一〇)開間云々——鎧の透間に當らないから。(一一)あふる——鎧をふんで馬を急がせること。(一二)内甲——甲の裏。

【譯】さすがに義仲も強い男であつた。巴に向つて「義仲が最後の軍に女を具したりなどいはれん事口惜しがるべし」といふのも尤もな事である。乳兄弟今井兼平を思ひやる心持も涙が出る程だ。さればこそ、今井の義仲に對する態度も立派である。ことに最後の描寫はなか／＼よく書かれてゐる。義經記に見ゆる義經が靜や奥方との別れ或は奥州での最後と、義仲のそれらとを比較すると、義仲の方がずっと男らしい所がある。

### 樋口被斬

今井が兄樋口次郎兼光は、十郎藏人討んとて、其勢五百餘騎で、河内國長野城へ越たりけるが、其にては討漏しぬ。紀伊國名草に有りと聞て、聽て續て寄たりけるが、都に軍有りと聞て、取返上る程に、淀の大渡の橋にて、今井が下人に行合たり。是はされば、何地へとて渡せ給ひ候やらん。都には軍出て、君討れさ

【通釋】今井の兄樋口兼光は十郎行家を討たうとて、南河内の長野城へ打向つたが、そこでは討漏らした。そして十郎は紀伊の名草に居ると聞いてすぐに寄せかけたけれども、京都の方に戦があると聞いて引返して來た所が、淀の大渡の附近で今井の家來に行き合せて「之は一體どこへお越しになるのですか、主君の義仲は已に討たれ、今井殿も御自害になりました」と聞いて樋口は大息し、「皆聞いたか、義仲公へ忠義の志ある人々は、こゝから早く何所へでも落ちゆき、何とでも乞食行脚をして君の菩提を弔つて下さい。私は都へ上り討死して冥途で御目にかゝり、弟にも一度逢ひたいと思ふ」といつて馬を驅つたが、初め五百餘騎居た軍勢があそこ此所に休息しつゝ落ちて行く



せ給候ぬ。今井殿も御自害候と言ければ、樋口次郎涙をはら、と流て、是聞給へ殿原、君が御志思參せん人は、是よりとうく何地へも落行き、如何ならん乞食頭陀の行をもし、君の御菩提を弔參させ給へ、兼光は都へ上り討死して、冥途にても君の御見參に入り、今井をも今一度見ばやと思ふ爲也とて、打て行く程に、五百餘騎の勢共あそこ爰に控へく落行く程に、鳥羽の南の門を過るには、其勢僅に廿餘騎にぞ成にける。樋口次郎今日既に都へ入と聞えしかば、黨も高家も、七條、朱雀、作道、四塚へ馳向ふ。樋口が手に、茅野太郎光廣と云ふ者有り。四塚に幾も有ける勢の中へ駆り、笠踏張立

間に、鳥羽離宮の南門を過ぎる頃には僅かに二十餘騎になつてしまつた。兼光が今日都へ攻めて來るといふので、坂東の諸豪族も高家も七條朱雀作道方面(鳥羽街道)へ馳せ向つた。樋口の家來に茅野光廣といふ武士がゐたが、四塚附近に居る敵中へ割つて入り「一條次郎殿の兵が居るか」と叫ぶと「一條次郎の兵でないのならば軍をしないといふのか。誰にだつて向つてくれれば宜いじやないか」とどつと笑ふ。笑はれて「かくいふは信濃國の住人、茅野光廣だ。必ず一條殿の兵を尋ねるといふわけではないが、弟の七郎がその方についてゐる。自分の子供が二人信濃に残してあるが、自分の父が勇ましい討死をしたか卑怯な死様をしたかと心配するからだ。故に弟の七郎の前で立派に討死して、自分の子供達に父の最後を確に聞かせたいと思ふから尋ねたのだ。一條の手でないからとて敵を選り好みするわけではないのだ」とて、縦横に戦つて三人を殺し、四人目の敵と組討をして死んだ。樋口兼光は兒玉黨と縁故があつたので、兒玉の人々は「一體武士が我も人も人の中へ入つて交際し、姻戚となるのは何か萬一の時にそこをたよつて一先づ息をつぎ、暫くの命を延ばさうと思ふからだ。してみると樋口が我等と親籍になつたのもやはりさうした心があつたからだらう。何とかして樋口の命だけは助けたいものだ」とらに當時の武士の結婚政策の心持がよく出てゐると思ふ。併し此

上り、大音聲を揚げ、此勢の中に甲斐の一條の次郎殿の御手の人や坐すと問ければ、一條次郎が手でないは軍をばせぬか、誰にも合かして、咄と笑ふ。笑はれて名乗けるは、かう申す者は信濃諷訪の上宮の住人、茅野大夫光家が子に、茅野太郎光廣と云ふ者也。必一條次郎殿の御手の人を尋るには非ず、弟の七郎それにより。子共二人信濃に置たるが、哀我父は、好てや死だるらん。惡てや死だるらんと歎かんする處に、弟の七郎が前にて討死して、子共に慥に聞せんと思ふ爲也。敵をも嫌まじとて、あれに馳合ひ、是に馳合ひ、武者三騎切て落し、四人に當る敵に押並べ無手と組でどうと落ち、刺違へてぞ死に

の時代の明日しれぬ亂脈な世相としては無理もないことだ。といふわけでは樋口の處へ使をやつて、「木曾殿の御内では今井、樋口、榎、根井の四天王として有名なあなたですが、義仲殿が討たれ、今井殿も自害なされた上は、何の心苦しい事がございませう。もう君に爲すこともありませんから我等へ降人におなりなさい。今度の私の功ととりかへに御命だけはお助けませう」といつてやつた。それが爲に兼光は聞ゆる武士だつたけれど、運の盡きなのか、おめくといふと兒玉黨へ降人となつた。範頼・義經に此事を申し、更に院御所へ御伺をたてた所が、院中の人々は皆「義仲が法住寺殿へ押寄せて火を掛け、更に多くの高僧共を殺したのは、今井、樋口の仕業と何處へいつても申してゐる。是等を助けたならば此上もなく口惜しい」と口々に云つたので、止むなく死罪に定まつた。同二十二日新攝政殿(基房の子師家)が停任となつて、元の攝政殿が再任なすつた。僅か六十日の間に交替になつたのだから師家は見果てぬ夢の様な氣がしたらう。昔粟田關白道兼は任官の慶賀の後僅か七日ばかり位にあつた。今度のは六十日とはいふけれどその間に節會も除目(前出)も行はれたのであるから思出がないわけではない。さて義仲及び餘黨五人の首が都へ持つて來られて大路を引廻された。兼光は降人ではあつたが、頻に首のお供をしたいと云つたので直垂立烏帽子で引廻されて、翌二十五日に斬



けり。樋口次郎は兒玉に黨結ばれた  
りければ、兒玉の人共寄合て、抑弓  
矢取の、我も人も廣中へ入と云ふは、  
自然の時一先の息をも續ぎ、暫の命  
をも生うと思ふ爲也。されば樋口が  
我等に結ばれけんも、さこそ有けめ、  
命計を助んとて、樋口が許へ使者を  
立て、木曾殿の御内に、今井、樋口  
楯、根井と聞えさせ給て候へ共、木  
曾殿討れさせ給候ぬ。今井殿も御自  
害候上は、何か苦う候べき。我等が  
中へ降人に成給へ。今度の勤功の賞  
に申替て、御命計をば助奉ると言送  
たりければ、樋口次郎は聞ゆる兵な  
りしか共、運や盡にけん、おめく  
と兒玉黨の中へ降人にこそ成にけ  
れ。大將軍範頼義経に此由を申す。

られた。範頼等がいろ／＼と助命を願つたが、木曾四天王の一人を助けるの  
は虎を養つておく様に危険だとして特に仰せがあつて斬られたのだといふ。傳  
へ聞く所によれば、秦が衰へて諸侯が蜂起した時、沛公が先に咸陽宮へ入つ  
たけれど、項羽が後から来るのを恐れて美人を奪つて妻とする事もなく、金  
銀も掠奪しないで只函谷關を守り、漸々に項羽を亡して天下を治め得たとい  
ふ。されば義仲も先づ都へ入つたからとても、頼朝の命に順つたならば沛公  
の謀にも劣らなかつたらうに。……

さて平家の方では去年の冬頃から讃岐の屋島を出て大坂灣に入り、西は一  
の谷を城郭とし、東は生田森を大手の城戸口と定め、其の間、福原・兵庫・須  
磨に籠る兵は西國十四ヶ國十餘萬といはれた。一の谷は北は山、南は海、口  
は狭く奥は廣く、岸高くて屏風を立てたのと違はない。そこに大石を重ね上  
げ大木の逆茂木を引き、沖には大船をつらねて垣とし、城の正面の高櫓には  
四國九州の兵が雲霞の如く列んでゐた。矢倉の前には鞍を置いた馬が十重二  
十重につないである。常は太鼓をたゞいてがや／＼騒いで景氣をつけ、半月  
の様な弓を張り、秋霜の如く皎々とした刀を帶し、武備全くなつて、高い所  
には赤旗が春風に吹かれて火焰の如しといふ盛んな事であつた。

院へ伺ひ被申たりければ、院中の公卿殿上人、局の女房女の童に至迄、木曾が法住寺殿へ寄せて、御所に  
火を懸け焼亡し、多くの高僧貴僧を失たりしには、あそこにも爰にも、今井樋口と云ふ聲のみこそ有しか。  
是等を助られんは、無下に可口惜と、口々に被申たりければ、不叶して又死罪にぞ被定ける。同二十  
二日、新攝政殿被停させ給て、本の攝政還著し給ふ。僅六十日の内に替られさせ給ぬれば、未見果ぬ夢  
の如し。昔栗田關白は、悅申の後唯七箇日だに有しぞかし。是は六十日とは申せども、其間に節會も除目  
も被行ぬれば、思出なきに非ず。同廿四日、木曾左馬頭、餘黨五人が首都へ入て、大路を渡さる。樋口次  
郎は降人たりしが、頻に首の供せんと申ければ、さらばとて、藍摺の直垂立烏帽子にてぞ被渡ける。明る  
廿五日、樋口次郎終に討れにけり。範頼義経様々に被申けれ共、今井、樋口、楯、根井とて、木曾が四天  
王の其一つなれば、是等を助られんは、養虎の憂有るべしと、殊に沙汰有りて、被斬けるとぞ聞えし。  
傳に聞く、虎狼の國衰て、諸侯蜂の如くに起し時、沛公先に咸陽宮へ入と云へ共、項羽が後に來ん事を恐  
れて、妻は美人をも不犯、金銀珠玉をも掠めず、徒に函谷の關を守て、漸々に敵を亡て天下を治する事を得  
たりき。されば今の木曾左馬頭も、先都へ入ると云へ共、頼朝朝臣の命に順はましかば、彼沛公が謀には  
劣らざらまし。去程に、平家は去年の冬の比より、讃岐國八島磯を出て、攝津國難波灣に押渡り、西は一  
谷を城郭に構へ、東は生田森を大手の木戸口とぞ定ける。其間、福原、兵庫、板宿、須磨に籠る勢、山陽  
道八箇國、南海道六箇國を討從へて、召るゝ所の軍兵十萬餘騎とぞ聞えし。一谷は北は山、南は海、口は  
狭て奥廣し。岸高くして屏風を立てるに不異。北の山際より、南の海の遠淺迄、大石を重ね、大木を伐  
て逆茂木にひき、深き所には大船共を側て垣楯にかき、城の面の高矢倉には、四國鎮西の兵ども、甲冑



弓箭を帯して、雲霞の如くに列居たり。矢倉の前には鞍置馬共、十重廿重に引立たり。常に大鼓を打て亂聲す。一張の弓の勢は、半月胸の前に懸り、三尺の劍の光は、秋の霜腰の間に横へたり。高き所には赤旗多く打立たれば、春風に吹かれて天に翻るは、唯火炎の燃上に異ならず。

【語釋】(一)黨も高家も——黨といふのは兒玉黨、渡邊黨といふやうに、地方の武人の私黨で、高家は豪族中の家柄のよいもの、盛衰記には「高家ニハ秩父、足利、三浦、鎌倉、武田、吉田、黨ニハ小澤、横山、兒玉黨」(二)結ばほれたり云々——盛衰記に「や、樋口殿軍を止め給へ、和殿ばかりは助け奉らせん、廣き中に入て聲に成れば、筒様の時の料也」とあるを見れば兒玉黨と姻戚關係だつたと見える。廣中へ入るといふのは世間へ出て交際をすること。(三)粟田關白云々——兼家の次男道兼は關白になつて任官拜賀の後七日で薨じたのなをいふ。(四)藍摺——白地に藍で摺模様した布。(五)養虎の臺——後継のこと。通鑑に「養三將軍一如養虎當飽三其肉」と飽三噬之とあり、史記には「今釋弗擊此所謂養虎自遺患」ともある。(六)虎狼の國云々——こゝでは秦をさす。(七)まし——推量の助動詞。【評】終りの方義仲に對する批評として「賴朝朝臣の命に順はましかば」云々は確かにあたつてゐる。しかし運命はどうなるか分らない。若し賴朝に従つたとして、又は盛衰記にある如く平家と賴朝と義仲とが天下三分の計をばかつたとして、歴史はどう展開してゐるか……義仲が義經や範頼の様な運命になるのならば、旭將軍として花々しく咲いて散つた方がよかつたかも知れない。さるにても最後の平家勢力挽回の様子が短いうちによく描かれてゐる。以上でもつて義仲の幕は閉ざされた。そして愈々義經を中心とする。

## 六箇度合戦

去程に平家一谷へ渡給て後は、四國の者共一向隨奉らず。中にも阿波讃岐

【通釋】さて平家が一の谷へ移つてから後は、四國の者はさつぱり隨はない。就中阿波讃岐の地方在住の豪族達は皆平家に背いて源氏に心を通じてゐる。

岐の在廳等、皆平家を背て、源氏に心を通しけるが、流石昨日今日迄、平家に隨奉たる身の、今日始めて源氏へ参りたり共、よも用給はじ、平家に矢一つ射懸奉て、其を表にして參んとて、門脇平中納言教盛、越前三位通盛、能登守教經父子三人、備前國下津井在すと聞て、兵船十餘艘でぞ寄たりける。能登殿大に怒つて昨日今日迄、我等が馬の草剪たる奴原が、何しか契を變ずること有なれ。其儀ならば、一人も洩さす討やとて小船共押浮て追れければ、四國の者共、人目計りに矢一つ射て、退んとこそ思しに、能登に餘に手痛う攻められ奉つて、叶はじと思ひけん、遠負にして引退き、淡路國福良の泊

たが「それにしても、ほん此の間まで平家に隨つてゐた者が、今日始めて源氏へ従つたからとてよもや信用して下さるまい。平家に矢一つ放つて一寸敵としておいて」それを表向の理由として源氏の方へ行かう」と考へ、教盛卿等が備前の下津井にいらつしやると聞き、兵船十餘艘で攻め寄せた。能登守教經は大に怒つて「昨日今日迄我等の馬草をかつた者が、いつ主従の約を變じたのだ。それならば一人も洩らさす討てや」とて小船を浮べて追はれた。四國の連中は形ばかりに人の手前だけ矢を射かけて退却しようと思つてゐたのに、教經に餘り手厳しく攻めたてられて、叶はないと遠くの方から負けながら淡路の福良港へ退いた。淡路には源氏が二人ありと聞いて、爲義の末子義嗣と義久といふ人を大將として城郭を構へて待つてゐると、能登守が攻めて來たので、義嗣は討死し、義久は捕はれた。かくて殘兵で防戦した所の兵二百三十餘人の首を斬り、射手の功名をも書き添へ福原へ送つた。それから教盛卿は一の谷へ行つた。その子供達は「伊豫の河野四郎が召しても來ないから攻める」といつて四國へ渡つた。兄の通盛は阿波の花園城へつき、弟の教經は讃岐の八島へついたらと知れたので、河野四郎は伯父の沼田次郎と一緒にならうとて安藝國へ逃げた。教經は此の由を聞いて八島を出發し、其の翌日沼田城へ押寄せたので、沼田次郎は遂に弦をはづして降参した(手向はないといふし)



に著にけり。其國に源氏二人有と聞えけり。故六條判官爲義が末子、賀茂冠者義嗣、淡路冠者義久と聞えしを大將に頼り、城郭を構へて待つ處に、能登殿押寄て散々に攻給へば、賀茂冠者討死す。淡路冠者は痛手負て虜にこそせられけれ。残り留つて防矢射ける者共、二百三十餘人が首斬懸させ、討手の交名記て、福原へこそ參せられけれ。其より門脇殿は一谷へぞ被參ける。子息達は伊豫の河野四郎が召せ共參ぬを責んとて四國へぞ被渡ける。兄越前三位通盛卿は、阿波國花園城にぞ著給ふ。弟能登守教經は、讃岐の八島に著給ふ由聞えしかば、伊豫國の住人河野四郎通信は、安藝國の住人沼田次郎

河野はそれでも未だ降參せず、五百騎が五十騎になつて城から逃げて行く途中で教經の家來平八兵衛爲員の二百人に取巻かれて、主從七騎に討ちのめされ、助船に乗らうと細道を通つて汀へ逃げて行く所をば、八兵衛の息義範といふ弓の名手の爲に五騎迄射落された。所で河野が自分の命にも替へて可愛がつてゐる郎等に向つて讃岐七郎が組伏せて首を斬らうとしてゐる。そこで河野は自分の家來の上に馬乗りになつてゐる所の讃岐七郎の首を斬つて深田へ投げ入れ、大音聲をあげ「伊豫國の住人河野四郎（之は通稱）越智通信（これは本名）生年二十一歳。軍といふものはかく勇しくするものだ。これが癪だと思ふならば自信ある奴は留めてみる」と名乗つて、家來を肩に擔いだまゝ其所をば難なく逃げのびて伊豫國へ歸つた。教經は河野を打漏らしたが、沼田が降人となつたのを召し連れて一谷へやつて來た。又、阿波國の安摩六郎も平家に背いて源氏に心を寄せたが、大船二艘に兵糧米を積んで都に上ると聞いたので、教經は西宮沖で散々に攻めた。六郎は叶はもと和泉の吹飯浦（泉南郡多奈川村の東）に立て籠つた。又紀伊の國の園邊兵衛も平家に快からざりしめ爲、百騎許りで和泉の吹飯に居る安摩と合體して城を構へて待つてゐた。教經はやがて此所へ攻め寄せたので、六郎兵衛は叶はもと體だけで京へ逃げ上つた。そこで教經は殘兵百三十餘人の首を斬り福原へ歸つて來た。

は母方の伯父也ければ、一つに成んとて、安藝國へ推渡る。能登殿此由を聞給ひて、八島を立て被追けるが、其日は備後國養島と云ふ所に著て、次の日沼田城へぞ被寄ける。沼田次郎河野四郎一つに成つて、城郭を構へて待つ處に、能登殿懸て押寄て散々に攻給へば、沼田次郎叶はもとや思けん、甲を脱ぎ弓の弦を外いて降人に參る。河野は猶も不順。其勢五百餘騎有けるが、五十騎許りに討成れ、城を落ちて行く處に、爰に能登殿の侍に、平八兵衛爲員と云ふ者、二百騎許りが中に被取籠、主從七騎に討成れ、助船に乗んとて、細道に懸て汀の方へ落行く處を、平八兵衛が子息、讃岐七郎義範、屈竟の弓の上手なりければ、追懸り能引て、七騎を五騎射落す。主從二騎にぞ成にける。河野が身に替へて思ける郎等に、讃岐七郎押並べ無手と組でどうと落ち、取て押て首を搔んとする所に、河野四郎取て返し、我郎等の上なる讃岐七郎が首搔切て深田へ投入れ、大音聲を揚て、伊豫國の住人、河野四郎越智通信、生年廿一、軍をば角こそすれ、吾と思ん人々は寄て留よやと名乗捨て、郎等を肩に引懸け、其をばなつく逃延び、伊豫國へ押渡る。能登殿河野をば打漏されたりけれ共、沼田次郎が降人たるを召具して、一谷へぞ被參ける。又阿波國の住人安摩六郎忠景、是も平家を背て、源氏に心を通しけるが、大船二艘に兵糧米積み、物具入れ、都を指て上りけるを、能登殿福原にて、此由を聞給て、小舟共押浮べて被追ければ、西宮の沖にて返合て防戦ふ。能登殿餘す



な洩すなとて、散々に攻給へば、安摩六郎叶はじとや思けん、和泉國吹飯浦に楯籠る。又紀伊國の住人園邊兵衛忠康、是も平家に不快けるが、安摩六郎が能登殿に手痛う攻られ奉て、和泉國吹飯浦に有と聞て其勢百騎許で和泉國へ打越て、安摩六郎園邊兵衛一つに成て、城郭を構て待つ所に、能登殿聽て押寄て、散々に攻給へば、安摩六郎園邊兵衛、叶はじとや思けん、身からは逃けて京へ上る。残り留て防矢射ける兵共、百三十餘人が頸切て、福原へこそ被參けれ。又豊後國の住人、臼杵次郎惟隆、緒方三郎惟義、伊豫國の住人河野四郎通信一つに成て、都合共勢二千餘人、小船共に取乗て、備前國へ押渡り、今木城に楯籠る。能登殿福原にて、此由を聞給て、安からぬ事也とて、共勢三千餘騎で備前國に馳下り、今木城を攻給ふ。能登殿、奴原は強い御敵で候。重て勢を可被給由被申たりければ、福原より數萬騎の軍兵を指向らる、由聞えしかば、城の内の兵共、手の際戦ひ、分捕高名し極て、敵は多勢也、御方は小勢也ければ、被取籠ては叶ふまじ、爰をば落て、暫の息を續やとて、臼杵次郎惟隆、緒方三郎惟義は、豊後國へ押渡り、河野は伊豫へぞ渡りける。能登殿今は可攻敵、なしとて福原へこそ被參けれ。大臣殿以下の月卿雲客寄合給て能登殿の毎度の高名をぞ感じ合れる。

【註釋】一在廳——地方在住の豪族と解するものあれど、正しくは國司の廳・地方廳に在動して吏務を司る者、即ち在廳官人のことをいふ。(前出)。(二)表にす——表面の歸順の印とするの意。(三)違負——近よりもしない先に遠くの方で既に氣負ける。(四)交名——名を演れるもの、即ち名簿。(五)二百騎許云々——正節本には「爲員といふ者あり、二百騎許が中に云々」となつてゐる。つまり爲員といふ者あり、その二百騎許の中へ河野が取籠められたのである。言葉が一寸不備でまごつきやすい。(六)風竟——至極。こゝでは強いといふ程の意。(七)其所をばなつく——長門本、盛衰記等は何れも、肩にかけ小船に乗せとなつて居り、八坂本は浦へつと出で又舟に乗せとなつて、何れもなつくとは無い。なつく(馴かしげに操舞うて)難なく、俗にいふづぶとく、などいふの推測説があるが、結局わからない。難なく悠々と位の意と見てよい。

【評】河野四郎のあく迄も強く、しぶとく逃げのびるさまよ。情味は乏しいとしても、さすがが武士氣質の一面がよく窺はれる。平家方では教経なども亦得難い武將である。

### 三草勢汰

同正月廿九日、範頼義經院參して、平家追討の爲に西國へ可發向、由を奏聞す。本朝には神代より傳れる御寶三つあり。神璽寶劔内侍所是也。事故なう都へ返入れ奉べき由被仰下。兩人庭上に畏り承て罷出づ。二月四日の日、福原には故入道相國の忌日とて、佛事如形遂行はる。朝夕の軍立に過行く月日は知ね共、去年は今年に廻り來て、爰かりし春にも成にけり。世の世にて有ましかば、如何なる起立塔婆の企、供佛施僧の營

【通釋】同正月二十九日に範頼義經が院參して、平家追討の爲に西國へ出發の事を奏聞した。すると、「我朝には神代から傳はつてゐる三種の神器がある。それを無事に平家から取返せ」といふ仰せが下つた。兩人は畏つて退出した。二月四日は清盛の忌日なので福原では例の如く佛事が営まれた。日々の軍で月日の經つのもわからないけれど、それでも一年を経過して、この悲しい春を迎へたのだ。世が世であらばどんなにも立派に佛事を營むことも出来るのだがと人々は歎き合つた。福原では佛事のついでに任官の除目が行はれ、僧俗ともに司を與へられ、教盛は正二位大納言に上るといふ事を宗盛から知らせたので「今日迄も生きてゐればとて生き甲斐のある自分であらうか。(いや全く生きて來たけれど甲斐ない我身だ)それに今御加階とは夢の様な氣がする」と御返事になつて、終に大納言にはならなかつた。昔將門が下野國相馬郡に都をたて、自分を平親王と稱し、百官を作つた時、曆の博



も有べかりしか共、唯男女の君達たち指添て歎悲合れけり。福原には、此次に除目被行て、僧も俗も皆司なされけり。中にも門脇平中納言教盛卿をば、正二位大納言に上り可給由、大臣殿より宣被遣たりければ、教盛卿、

今日迄も有ば有かの我身かは、夢の中にも夢を見かな。

と御返事申させ給て、終に大納言には成給はず。大外記中原師直が子、周防介師純大外記になる。兵部少輔正明、五位藏人になされて、藏人少輔とぞ被召ける。昔將門東八箇國を討從て、下總國相馬郡に都を立て、我身を平親王と稱して、百官を成たりしには、曆博士とぞ無りける。是は其

士はなかつた。この福原はそれと同一に論ずる事は出来ない。主上が都をお出ましになつたとはいへ、三種神器を帶して萬乘の位に即いてられるのだから、叙位除目の行はれるのは不都合ではない。さて平氏が既に福原まで攻め上つたと聞いて、京都に残つてゐた人々も皆憐び勇んだ。就中二位僧都專親（忠盛の子）は梶井宮（後白河院の皇子）と年來御同宿だつたので、便ある毎に手紙を送られたし、宮からも御文があつた。旅の空の様子も苦しけれど、都もまだ静まらないなどこまんと書いて、其の奥に「人知れずその方を思ふ心を西に傾く月にたくへてゐます」と書かれてあつた。僧都はこれを顔に押しあて、泣かれた。さて維盛は年のたつにつれ、故郷へ残して置いた奥方や子供の事をのみ歎いてゐた。商人の便りに手紙などを送つて來る時にも、北の方の都の住居が心憂くて「そんな事なら此方へ迎へて一所にどうにでもならう」とも思はれたけれど、又「自分はどうなつても、妻には可哀さうで」と思ひ沈んで暮してゐるので、その切な心持がよく外にも現れた。二月四日に源氏が福原を攻める筈であつたが、其の日は故清盛の忌日だから佛事を營ませる爲に攻撃せず、五日は西の方塞り、六日は道虚日、故に七日の午前六時頃に一の谷の木戸口で源平の矢合せと決定した。けれども四日は吉日だからといふので、大手搦手の軍兵が二手に分れて攻め下つた。大手は

には不可似。主上舊都をこそ出させ給ふと云へ共、三種神器を帶して、萬乘の位に備り給へば、叙位除目行

範頼以下五萬餘騎、四日の午前八時過ぎに都をたつて、其の日の午後四時から六時頃には昆陽野に陣を布いた。搦手の方は義經以下一萬餘騎が同時に都をたつて丹波路にかゝり、兼行して三草山の東麓に陣取つた。

れんも僻事には非ず。平氏既に福原迄攻上たる由聞えしかば、故郷に残留給ふ人々、皆勇悦合れけり。中にも二位僧都專親は、梶井宮の年來の御同宿にて坐ければ、風の便にも被申けり。宮よりも又御文有り。旅の空の粧御心苦けれ共、都も未靜など細々とあそばいて、奥には一首の歌ぞ有ける。

人知す其方を忍ぶ心をば、傾く月にたくへてぞやる。

僧都是を顔に押當て、悲の涙塞あへず。去程に小松三位の中將維盛卿は、年隔り日重るに隨て、故郷に留置給へる北方少き人々の事をのみ歎悲給けり。商人の便に、文などの通にも、北方の都の御栖居、心苦う聞給て、さらば是へ迎參せて、一所でいかにも成ばやとは思れけれ共、我身こそ有め、御爲痛くてなど思召沈て、明暮給にぞ、責ての御志の深さの程は顯にける。二月四日の日、源氏福原を攻べかりしか共、故入道相國の忌日と聞て、佛事遂させんが爲に、其日は不寄。五日は西塞り、六日は道虚日、七日の日の卯刻に、一の谷の東西の木戸口にて、源平矢合とぞ定ける。去れ共四日は吉日なればとて、大手搦手の軍兵二手に分て攻下る。大手の大將軍には、蒲御曹司範頼、相伴ふ人々、武田太郎信義、加賀美次郎遠光、同小次郎長清、山名次郎教義、同三郎義行、侍大將には梶原平三景時、嫡子源太景季、次男平次景高、同三郎景家、稻毛三郎重成、榛谷四郎重朝、同五郎行重、小山小四郎朝政、中沼五郎宗政、結城七郎朝光、左



貫四郎大夫廣綱、小野寺禪師太郎道綱、曾我太郎資信、中村太郎時經、江戸四郎重春、玉井四郎資景、大河津太郎廣行、庄三郎忠家、同四郎高家、勝大八郎行平、久下次郎重光、河原太郎高直、同次郎盛直、藤田三郎大夫行泰を先として、都合其勢五萬餘騎、二月四日の辰の一點に都を立て、其日の申酉の刻には攝津國毘陽野に陣をぞ取たりける。搦手の大將軍には、九郎御曹司義經、同伴人々、安田三郎義貞、大内太郎惟義、村上判官代康國、田代冠者信綱、侍大將には土肥次郎實平、子息彌太郎遠平、三浦介義澄、子息平六義村、畠山庄司次郎重忠、同長野三郎重清、佐藤十郎義連、和田小太郎義盛、同次郎義茂、三郎宗實、佐々木四郎高綱、同五郎義清、熊谷次郎直實、子息小次郎直家、平山武者所季重、天野次郎直經、小河次郎資能、原三郎清益、多々羅五郎義春、其子太郎光義、渡柳彌五郎清忠、別府小太郎清重、金子十郎家忠、同與一親範、源八廣綱、片岡太郎經春、伊勢三郎義盛、奥州佐藤三郎嗣信、同四郎忠信、江田源三、熊井太郎、武藏坊辨慶、是等を先として、都合其勢一萬餘騎、同じ日の同じ時に都を立て、丹波路に懸り、二日路を一日に打て、丹波と播磨の境なる三草の山の東の山口、小野原に陣をぞ取たりける。

【語釋】(一) 梶井の宮——後白河院の皇子。天台座主承仁法親王と申す。(二) 粧——有様といふ意。(三) 我身、そあらめ——我身、そいかにとあらめなどの意。(四) 責ての御志——切なる御心。(五) 西塞り——天一神が西に遊行する日に當つてゐるので西方を忌む。天一神は日の大將軍ともいひ、金星の精で、殺伐を掌るから、之を犯す者は三年の内に死ぬといはれてゐる。(六) 道慮日——一、六、十、十八、廿四、晦の諸日は歩行の凶日だといふ。何れも陰陽道にていふ所である。

【評】平家に同情をもつ作者が、福原での除目に對して「主上舊都をこそ出でさせ給ふといへ共、三種の神器を帶して萬乘の位に備り給へば、叙位除日行はれん事僻事には非ず」と評してゐるのを見よ。兎も角、京都でも福原でも除目が行はれて居るのだから、まさに變遷であつて、若し正問論を持ち出せば、こゝにも大きな論戰が交はされることであらう。

教養の「今日迄も云々」の歌は全く悲しい心持ではないか。

### 三草合戦

平家の方の大將軍には、小松新三位中將資盛、同少將有盛、丹後侍從忠房、備中守師盛、侍大將には、伊賀平内兵衛清家、海老次郎盛方を先として、其勢三千餘騎で、三草の山の西の山口に押寄て陣を取る。其夜の戌刻許に、大將軍九郎御曹司義經、侍大將次郎實平を召して、平家は是より三里隔て、三草の山の西の山口に大勢で控たり。夜討にやすべき、又明日の軍かと言はば、田代冠者進出て平家の勢は三千餘騎、御方の御勢は一萬餘騎、遙の利に候。明日の軍と被延候なば、平家に勢附候なんす。

【通釋】平家方の大將では資盛、有盛等を先とし、三千餘騎で三草山の西麓に陣した。其の夜の八時頃に義經が侍大將の實平を呼び「平家は之から三里先の西麓に控へてゐる。夜討すべきだらうか、明日にしようか」と尋ねられると、田代冠者が進み出て「平家は三千、味方は一萬だから遙かに有利です。併し明日に戦を延ばすと平家に兵が殖えるでせうから、夜討がよいと思ひます」と申したので、實平は「よくも云つた、誰もさう言ひたい所だ、夜討がよいと思ふ」と同意したすると、兵士達は「眞暗だどうしよう」と口々にいふので、義經は「例の大松明は」といふと實平は「左様／＼」といつて小野原の民家に火をかけた。之を手初に到る所へ火をかけたので、晝間に劣らずに明るくなつた。そこで三里の山を越えて行つた。一體この田代といふのは、父は伊豆の前の國司、中納言爲綱の子孫で、母は狩野介茂光の娘である。小さい時母方の祖父に預けられて武士に仕立てられたのだ。俗の素性は後三條院の皇子輔仁親王の五代の孫である。氏もよく、武藝も出来る人であつた。平家方では其の夜、夜襲されるとは夢にも知らないで、「定めて明日



夜討好んぬと覺候と被申ければ、土肥次郎、いしうも申させ給ふ田代殿哉。誰も角こそ申度候つれ。夜討よかんぬと覺候と申ければ、兵共暗さは開し、如何せんと口々に申ければ、御曹司例の大續松は如何にと宣へば土肥次郎去事候とて、小野原の在家に火をぞ懸たりける。是を始て、野にも山にも草にも火を懸たれば、晝には些も不劣して、三里の山をぞ越行ける。此田代冠者と申は、父は伊豆國の前國司、中納言爲綱の末葉也。母は狩野介茂光が娘を思て設たりしを、母方の祖父に預て、弓矢取には仕立たなり。俗姓を尋れば、後三條院の第三の皇子、輔仁親王に五代の孫也。俗姓も能き上、弓を取ても好りけり。平家の方には其夜、夜討にせんするをば夢にも不知、軍は定て明日の軍にてぞ有んすらん。軍にも睡たいは大事の物ぞ。能寝て軍せよ者共とて、先陣は自用心しけれ共、後陣の兵共は、或は甲を枕にし、或は鎧の袖箆などを枕として、前後も不知ぞ臥たりける。其夜の夜半許、源氏一萬餘騎、三草の山の西の山口に押寄て、関を咄とぞ作る。平家の方には、餘に周章騒いで、弓取る者は矢を不知、矢を取る者は弓を不知、あわてふためきけるが、馬に當られじとや思けん。皆中を開てぞ通ける。源氏は落行く平家をあそこに追懸け、爰に追詰め、散々に

は軍があるだらう、軍になつて眠い様では困るからよく寝ておけよ」とて、先陣は自然用意もしてゐたが、後陣は甲や箆を枕として前後不覺に寝てゐたのである。其の夜半許りに源氏の一萬餘騎が三草山の西へ押寄せて來たので、平家は餘りにあわて、弓矢も忘れて騒いだが、さればとて敵の馬に斬殺されない様にと思ひ、中を開けて通した。源氏は落ち行く平氏を彼方此方へ追詰めて攻めたので、瞬く間に平氏は五百人討たれた。かくて大將軍の資盛、有盛等は三草山を破られて不面目に思つたのだらう、播磨から船に乗つて讃岐の八島へ渡つた。師盛だけはどうして漏れたのか、一の谷へ歸つて來た。

取ければ、矢場に五百餘人討れぬ。手負ふ者共多かりけり。大將軍新三位中將資盛、同少將有盛、丹後侍從忠房、三草の手を被破て、面目なうや被思けん。播磨の高砂より舟に乗て、讃岐の八島へ渡り給ぬ。備中守師盛計こそ、何としてかは漏させ給たりけん、平内兵衛海老次郎を召具して、一谷へぞ被參ける。

【通釋】(一)いしうも——いしくも。いみじくもの略音便。殊勝にもこの意。(二)よかんぬ——よくあらぬ、よからんとすの略。ぬは過去でも打消でもない。意味を強めたのである。

老 馬

大臣殿、安藝右馬助能行を使者にて人々の許へ宣被遣けるは、九郎義經こそ、三草の手を攻破つて、既に亂入る由聞え候。山の手が大事で候へば、各被向候なんやと宣被遣たりければ、皆辭し被申けり。能登殿の許へも、度々の事では候へ共、今度も又御邊被向候なんやと、宣被遣たりければ、能登殿の返事に、軍は左様に獵漁などの様に、足立

【通釋】宗盛は安藝守能行を使者として「九郎義經が三草の方面を破つて亂入して來るさうだ、山の手が大事だから誰か其方へ向はないか」と觸れさせたけれど、誰も行く者がない。そこで能登守の所へ「度々の事で恐縮だが、今度も亦貴殿が向つて下さらないか」と云ふてやつた。すると教經の返事に「その様に狩漁の如く、足場の宜い方へ向はう、悪い方へは向ふまいなどと云つて居ては、軍に勝つことはあるまい。何處でも宜い強い方へ私が向ひ、一方を打破つて見せるから御安心なさい」といつたので、宗盛も大層悦び、越中前司を先として一萬餘騎を能登殿に附けた。そこで教經は兄の通盛をつれて山の手へ向つた。此の山の手は一谷の後、鴨越の麓だ。所が通盛が自分の妻を教經の假屋へつれて來て最後を惜んだので、教經は大いに怒つて「此の



の好らう方へは向う、悪からん方へは向じなど候はんには、軍に勝つ事はよも候はじ。幾度でも候へ、強からん方へは教經承て、罷向候べし。一方打破て參せ候はん。御心安う被思召候べしと被申たりければ、大臣殿不斜に悦給て、越中前司盛俊を先として、一萬餘騎能登殿にぞ被附ける。兄越前三位通盛卿を相具して、山の手へぞ被向ける。此山の手と申は、一谷の後鴨越の麓也。通盛卿能登殿の假屋へ、北方迎寄給て、最後の名残被惜けり。能登殿大に怒て、此手は大事の方とて、教經被向候が、誠に強う候也。唯今も上の山より敵落す程ならば、取る物も取あへ候まじ。縦弓をば持たり共、矢に番すば

方面は大事の所だといふので、私が差向けられて来たのだが、本當に強敵に向つてゐるのだ。唯今にも山上から敵が下りて来たならば大あわてをせねばなるまい。いくら矢を持つても矢をつがへなければ役に立たぬ。矢を引かねば猶更つまらぬ。ましてそんなに打解けてゐては何の用に立たうか」と諫めたので、通盛も「なる程」と思ひ、急いで武装し、妻をば歸してしまつた。

五日の夕方に源氏は昆陽野を發して生田の森へ近づいたので、其の方向を見ると、山の端を出る月明の様に、かがり火で空も明るかつた。平家も遠火をたいたので、明けゆくまゝに眺めると、晴れた空の星の様で、業平が河邊の螢と詠んだのも思ひ合された。斯様に源氏は彼所此所に馬を休めてゐるので、少しも急がず、平家では今に来るか〜と不安で居た。同六日の曙に義經は一萬騎を二手に分け、實平に七千餘人を添へて一谷の城戸口へ遣し、自分は三千人で鴨越を越さうと丹波路から搦手へ向つた。兵士は「こゝは有名な險惡な所だから、同じ死ぬのなら敵に出合うて死にたい。惡所に落ちて死にたくはない。誰か此の山の案内人はないのかと口々に云つた。すると平山武者所（大番衆の事——前出）季重が進み出て「私が此の山の様子をよく知つてゐる」といつたので、義經が「お前は東國育ちの者で、今日始めて見る西國の山の案内を知つて居るとは本當らしくないね」と仰しやると「御

惡かるべし。縦矢をば番たり共、彎すば猶も可惡。まして左様に打解て渡せ給ては、何の用に合せ可給と被諫て、通盛卿實もとや被思けん、急ぎ物具して、人をば歸し給けり。五日の日の暮方に、源氏昆陽野を立て漸々生田森へ攻近く。雀松原、御影松、昆陽野の方を見渡せば、源氏手々に陣を取て、遠火を焼く。深行まゝに眺れば、山の端出る月の如し。平家も遠火焼やとて、生田森にも如形ぞ焼たりける。明行く儘に見渡せば、晴たる空の星の如し。是や昔河邊の螢と詠じ給けんも、今こそ思知れけれ。加様に源氏は、あそこに陣取ては馬休め、爰に陣取ては馬飼などしける程に急がず。平家の方には

仰せとも思はれませぬ。たとひ吉野や初瀬の花を見なくとも歌人はこれを知り、敵の籠つた城の後の勝手（様子）は剛の者ならば知つてゐるものです」と傍若無人に答へた。又武藏の住人で別府小太郎といふ十八歳の若武者が進み出て云ふには「父の義重が教へたのには、『山越の狩をする時でも、敵に襲はれた時でも、兎も角深山に迷ひ込んだ時には、老馬に手綱を結んで打かけ先に追立てゝ行け、さうすれば必ず道へ出られるぞ』と教へました」といつたので、義經は「感心にもよく申した。雪が野原を埋めても、老馬は道を知つてゐるといふ話もある」とて白茸毛の老馬に鏡鞍（前出）を置き、先に追立てゝ未知の深山へ入つて行つた。丁度頃は二月初めだから、峯の雪が所々消えて花の様にも思はれ、谷の鶯が鳴いて春霞のかゝつた所もある。登れば白雪、下れば峨々たる岸、松の雪消えずして苔の道も幽である。嵐が吹くと雪が梅花の如く散る中を、駒を早めて行く程に日もとつぷりと暮れた。

すると辨慶が一人の老翁を連れて来た。義經が「あれは何だ」と仰しやると、「之は、此の山の獵師です」、「それでは案内をよく知つてゐよう」、「どうして知らない事がございませう」、「さうだらうな。是から一の谷へ落さうと思ふがどうかね」、「滅相もないこと、凡そ三十丈の谷や十五丈の岩角がございまして、容易に人も通れさうにございませぬ。其の上城の内には落穴を掘り



今や寄す、今や寄すると相待て、安心もせざりけり。同六日の日の曙に大將軍九郎御曹司義經、一萬餘騎を二手に分て、土肥次郎實平に七千餘騎を差副て、一谷の西の木戸口へ指遣す。我身は三千餘騎で、一谷の後鴨越を落さんとて、丹波路より搦手へこそ被向けれ。兵共是は聞ゆる惡所にて有なり。同う死ぬる共、敵に逢てこそ死たけれ。惡所に落ては死たからず。哀此山の案内者やあると口々に申ければ、爰に武藏國の住

菱(前出)をも植ゑてあるでございませう、まして馬では思もよりませぬ」といふと、義經は「そんな所は鹿が通ふか」「鹿ならば通ひます。時候が暖かになれば播磨の鹿は丹波へ、寒くなると雪の浅い所を求めて丹波の鹿は印南野へ越えます」と答へた。義經「それでは馬の通へる所だ、鹿さへ通ふ所を……さらば直ぐお前は案内せよ」と仰しやると、「私は年老いて出来ませぬ」「子供はないか」「ございませぬ」といふわけで、熊王といふ十八歳の若者を連れて来た。義經は直ぐ元服させて鷲尾義久(經春ともいふ)と名乗らせ、一谷の先打ち(先に立つて行くこと)をさせ、案内者として連れて行つた。さて、源氏の世になつてから、鎌倉殿と義經とが不和になり、義經が奥州へ下つたれ討れた時、この義久も共に討死した。

人平山武者所進出て、季重こそ此山の案内能く存知仕て候へと申ければ、御曹司、和殿は東國育の者の、今日始て見る西國の山の案内者、大に誠しからずと宣へば、季重重て申けるは、こは御詮共覺候はぬ物哉。吉野泊瀬の花をば見ね共歌人が知り、敵の籠たる城の後の案内をば剛の武者が知候とぞ申ける。是又傍若無人にぞ聞えし。又武藏國の住人別府小太郎清重とて、生年十八歳に成けるが、進出て申けるは、父にて候し義重法師が教候しは、譬へば山越の狩をせよ、又は敵にも襲れよ、深山に迷たらんする時は、老馬に

手綱結で打懸け、先に追立て行け、必道へ出うするぞとこそ教候しかと申ければ、御曹司、優うも申たる者哉。雪は野原を埋め共、老たる馬ぞ道は知ると云ふ様有とて、白茸毛なる老馬に、鏡鞍置き、白轡番げ、手綱結で打懸け、先に追立て、未知ぬ深山へこそ入給へ。比は二月初の事なれば、峯の雪村消て、花かと思ゆる所も有り。谷の鶯音信て、霞に迷ふ所も有り。登れば白雪皓々として聳え、下れば青山峨々として岸高し、松の雪だに消やらで、苔の細道幽なり。嵐にたぐふ折々は、梅花とも又疑はれ、東西に鞭を揚げ駒を早て行く程に、山路に日暮ぬれば、皆下居て陣を取る。爰に武藏坊辨慶、或老翁一人具して参たり。御曹司、あれは如何にと宣へば、是は此山の獵師で候と申ければ、さては案内能く知たるらん。争か存知仕らでは候べき。御曹司、さぞ有らん。是より平家の城郭一谷へ落さうと思ふは如何に、努々叶候まじ。凡三十丈の谷十五丈の岩崎などをば、容易人の可通様も候はず。其上城の内には、落穴をも掘り、菱をも植て待參せ候らん。まして御馬などは思も寄候はずと申ければ、御曹司、さて左様の所は鹿は通ふか。鹿は通ひ候。世間だに暖に成候へば、草の深に臥んとて、播磨の鹿は丹波へ越え、世間だに寒う成候へば、雪のあさりに食んとて、丹波の鹿は播磨の印南野へ越候とぞ申ける。御曹司、さては馬場ごさんなれ。鹿の通はんする所を、馬の通はざるべき様や有る。さらば聽て汝案内者せよと宣へば、此身は年老て如何にも叶候まじと申す。さて汝に子は無か。候とて、熊王とて生年十八歳に成ける小冠者を奉る。御曹司聽て警取上させ給て、父をば鷲尾庄司武久と云ふ間、是をば鷲尾三郎義久と名乗せて、一谷の先打させ、案内者にこそ具せられけれ。平家亡び、源氏の代に成て後、鎌倉殿と中違て、奥州へ下り討れ給し時、鷲尾三郎義久と名乗て、一所で死にける兵也。





【語釋】(一)足立——足場といふ程の意。(二)明けゆくまゝに——火勢が強くて明るくなつて行くにつれての意で、夜明の意ではない。(三)河邊の螢——伊勢物語に「晴る、夜の星か河邊の螢かも、わがすむかたの海人のたく火か」とあるのを言つたのだ。(四)狩なせよ——狩をするにしても云々。(五)老いたる馬ぞ云々——「管仲曰、老馬之智可用、乃放老馬而隨之遂得道」と春秋後記にありといふ。(六)村消——村は斑の意で富字、まばらに消えること。(七)嵐にたぐふ——たぐふは添へる伴ふの意。(八)雪のあさりに云々——校定本では「雪の浅きに」となつてゐる。雪をあさつて(探し求める)食を求めるといふ説と、浅い所に食を求めるといふ解とある。今校定本の文意に従つて後者をとる。

【評】 教経が「軍は左様に狩瀛などのやうに足立のよからう方へは向はう、悪しからん方へは向はじなど云々」ときめつける所は如何にも痛快だ。又平山季重が「剛の武者が知り候」と傍若無人の言を吐くのも坂東武者らしい。

一一一 懸

六日の夜半許迄は、熊谷平山搦手にぞ候ける。熊谷子息小次郎を呼んで言けるは、此手は悪所このてで有なれば、誰先と云ふ事も有まじきぞ。いざうれ土肥が承て向うたる西の手へ寄て、一谷の眞先懸うまへと言ければ、小次郎此儀尤然べう候。誰も角こそ申度候つれ。さらばとう寄させ給へと申す。熊谷、誠や平山も此手に有ぞかし。打込の軍好ぬ者なれば、平山が様見て參れとて、下人を見せに遣す。案の如く平山は、熊谷より先に出立つて、人をば不可知、季重に於ては一引も引まじい者を、引まじい者と、獨言をぞし居たる。下人が馬を

【通釋】 熊谷、平山の二人は搦手に屬してゐたが、六日の夜半頃に直實は子息の小次郎を呼んで「此の方面は悪い足場だから誰が先へ行くといふ事もあるまい。なあお前(山田氏)の研究に従ふ。前出。但し他の註譯にはいざれといふ意に解してゐる。語原は不明。思ふに大阪附近の方言に、来いといふことを「うせろ」又は「うせ」といふ。その轉訛と見れば「来い」とも見られる。土肥實平が命を受けて打向つた一谷へ行つて「一番乗をしよう」といつた所が、小次郎も「それは結構です。誰しも斯う言ひたい所です。それは早くおいでなさい」と答へた。直實は「平山も此の手に居るが、彼奴も一所に攻めるのを好まない男だから、様子を見て来い」とて家來を見せにやつた。案の定平山は熊谷より先に出かけて「他人は知らぬが俺は一步も後へは退くまい」と獨語してゐた。家來が馬に糲をやつてゐたが、「こん畜生長食ひの馬だなあ」とて鞭で打つたので平山が「そんな事をするな、此の馬も今夜が名残だから」とて出發した。家來は走り歸つて此の事を告げたので、「やはりさうであつたか」とて、直ぐに熊谷も出發した。かくて直實と小次郎と旗持と三人が、一の谷の坂を左手に見て、右の方へ進んで行くと、やがて波



飼ふとて、憎い馬の長食哉とて、鞭ければ、平山、さうなせそ、其馬の名残も、今夜計ぞとて打立けり。下人走歸て、主に此由告ければ、さればこそとて、是も聽て打立けり。熊谷が其夜の裝束には、かぢの直垂に赤革威の鎧著て、紅の母衣を懸け權太栗毛と云ふ、聞ゆる名馬にぞ乗つたりける。子息小次郎直家は、澤鴻を一入摺たる直垂に、摺繩目の鎧著て、西樓と云ふ白月毛なる馬にぞ乗たりける。旗指は黄塵の直垂に、小櫻の黄にかへいたる鎧著て、黄河原毛なる馬にぞ乗たりける。主従三騎打つれ落さんする谷をば弓手になり、馬手へ歩せゆく程に、年來人も通はぬ田井畑と云ふ古道を経て、一の

打際へ出た。直實は土肥實平の控へてゐる鹽屋の所を夜に紛れて抜け通り一の谷の西の木戸口へ攻め寄せた。其の時は夜もまだ深かつたので、城内は靜まり返つて音もしない。直實は小次郎に「此の方面は惡所だから我もくんと先を覗つてゐる者も多いだらう。そして此の邊へ寄せて夜の明けるのを待つてゐる事だらうから、思慮淺く自分達だけが拔駈したと思つてはならぬ。早く先陣の名乗を上げよう」と垣楯の際まで進み、大音聲を上げて名乗つた。城の中では之を聞いて「よし／＼音を立てるなよ、敵の馬を疲らせてから矢のある限り射盡せよ」とて相手にする者がない。や／＼暫くして後から武者二騎現はれた。「誰だ」といふと「季重」と答へた。「さういふのは誰だ」、「直實だ」、「熊谷殿はいつから此所に?」、「宵から」と答へた。季重は「私も直ぐに寄せる筈だつたのを成田五郎に欺かれて今迄ぐ／＼してゐたのだ。成田が「死ぬのならば一緒に」と約束したので、打連れてやつて来た所が、「そんなに先陣を急いではいけません、軍の先をかけるといふことは味方の勢を後に控へて先をかけてこそ高名も不覺も人によく分るのだ。あの大勢の中へ唯一騎で駈け入つて討たれたならば、何の所詮があらうか」といつたので「それもさうだと思つて、小坂のあつたのを上りきつて、御方の軍を待つてゐると、成田も打積いてやつて来た。馬を並べて軍の様子を打合せするののかと思

谷の波打際へぞ打出ける。一谷近う鹽屋と云ふ所有り。未夜深かりければ、土肥次郎實平、七千餘騎で控たり。熊谷夜に紛れて、波打際より、そこをばつと馳通り、一谷の西の木戸口にぞ押寄せたる。其時も未夜深かりければ、城の内には静り返つて音もせず。熊谷子息小次郎に言けるは此手は惡所で有なれば、我もくんと先に心を懸たる者共多かるらん。既に寄たれ共、夜の明るを相待つて、此邊にも控たるらんぞ、心狭う直實一人と不可思。いざ名乗んとて、垣楯の際に歩せ寄り、鎧踏張立上り、大音聲を揚げて、武藏國の住人熊谷次郎直實、子息小次郎直家、一谷の先陣ぞやとぞ名乗たる。城の内には是

つた所がさうでなくて、季重の方を素氣なく見ながら傍をつつと馳せ通つたので、は、此奴季重を詐つて先をかけるのだなと思ひ、五六段(前出)進んだのを、此奴の馬は自分のより弱さうだ」と一鞭あて、追付き「何と成田殿はよくも季重を(卑怯にも、不道理にも)だましたね」と言ひかけたま、成田を打ち捨て置いて飛んで来たのであるから、今頃は成田はずつと後になつてゐるだらう。よもや、私の後影さへも見てはゐまい」と語つた。さて東雲も次第に明けてゆくと、城の前には熊谷平山など五騎ばかり控へてゐた。熊谷は先に名乗つただけけれど、平山のある前でもう一度名乗らうと思つたのだらう「以前名乗つた直實、子息小次郎、一の谷の先陣ぞや」と名乗つた。城内では之を聞いて、「終夜名乗る熊谷父子をひつ捕へて来やう」とて越中次郎等二十餘騎が木戸を開いてかけ出した。すると平山は「保元平治兩度の軍に先懸して高名した平山武者所なり」と名乗つてをめき叫んで突進した。熊谷と平山とは互に我劣らじと入替り立替り火の出る程に攻めたので、平家方は叶はじと思つたのか城内へ颯と引いて敵を外にして防いだ。直實は馬の太腹を射られ馬が跳ねかへるので弓杖ついて下り立つた。小次郎も「生年十六歳」と名乗つて戦つたが、左の肘を射られて馬から下り、父と並んで立つてゐた。直實は「小次郎手疵を受けたのか……鎧をゆすぶつて裏を



を聞いて、よし／＼音なせそ。敵の馬の足疲させよ、矢種を射盡させよとて、應答ふ者こそ無りけれ。良有て後より武者こそ二騎續たれ。誰そと問へば季重と答ふ。問は誰そ。直實ぞかし。如何に熊谷殿は何よりぞ。宵よりとこそ答けれ。季重も聽て續いて寄べかりつるを、成田五郎に被謀て、今迄遅々したりつる也。成田が死ば一所で死なんと契し間、打連れて寄つれば、痛う平山殿先懸早りなし給そ。軍の先を蒐ると云ふは、御方の勢を後に置いて、先を蒐たればこそ、高名不覺をも人に知るれ。あの大勢の中へ唯一騎かけ入て討れたらんには、何の詮にか可合と云ふ間、實もと思ひ、小坂の有つるを打登せ

搔かすなよ、又、鍔を傾けて内甲を射られるなよ」と教へた。熊谷は鎧に立つた矢を抜き捨て、城内を睨み「去年鎌倉を出發してから以來、頼朝公に命を捧げ、一の谷で骸を曝さうと決心した直實だ云々、悪七兵衛はゐないのか。高名不覺も敵によつてすることだ。誰とでも組討ちしやうといふのではない。強い者は出て来い」と罵つた。城内ではこれ聞き、越中次郎盛續が熊谷父子を目掛けて進んで来た。熊谷父子も、二人の間を引離されまいと間を隔てない様に立ち並び、太刀をぬいて上段に構へ、後へは一步も退かず斬り込んだので、越中次郎は叶はないとて引き返した。直實は「あれは越中次郎だと思ふが、敵として何處が不足で逃げるのだ、押並べて組めや」と叫んだけれど、次郎は「さうじゃない」といひながら引退いた。悪七兵衛が之を見て「醜い殿原の振舞よ、よし俺が組まう。よもや雌雄を決しない事はあるまい（しやは罵語）」とて、まさに駈け出さうとしたので、越中次郎がその袖を捉へて「君の御大事はこれに限りはしない。無謀なことはしないが宜い（然あるべくもなし）」と制したので、景清も止むなく組討はしなかつた。其の後熊谷は乗替の馬に乗つてをめて攻めるし、平山も熊谷が戦つてゐる間に馬を休めて、また同じく攻めた。平家では唯「射とれ」と次から次と射るけれども、敵は少なく味方は多く、大勢に粉れてしまつて却つて矢も富

下様に馬の首を引立て、御方の勢をまつ處に、成田も續て出来り、打並て軍の様をも言合んずるかと思たれば、左はなくして、季重が方をばすげなげに見成つ、傍をつと馳通る間哀れ此者季重謀て先懸るよと思ひ、五六段計進たるを、あれが馬は我馬より弱げなる物をと目をかけ、一鞭打て追附き、如何に成田殿は、正なうも季重程の者を謀り給ふ物哉と言かけ、打捨て寄つれば、今は遙に下りぬらん、よも後影をば、見たらじとこそ語けれ。去程に篠目漸明行けば、熊谷平山彼是五騎でぞ控たる。熊谷は先に名乗たりけれ共、平山が聞く前にて、又名乗んとや思けん、垣楯の際へ歩せ寄り、鎧踏張立上り、大音聲を揚て、抑以前名乗つる武藏國の住人、熊谷次郎直實、子息小次郎直家、一谷の先陣ぞやとぞ名乗たる。城の内には是を聞いていざ終夜名乗る熊谷父子を捉て來んとて、進む平家の侍誰々ぞ、越中次郎兵衛盛續、上總五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清、後藤内定經を先として、宗徒の兵廿餘騎、木戸を開いて馳出たり。爰に平山は滋目結の直垂に、緋威の鎧著て、二引兩の母衣をかけ、目糺毛と云ふ聞ゆる名馬にぞ乗たりける。旗指は黒革威の鎧に、甲猪頭になしつ、



宿月毛なる馬にぞ乗たりける。保元平治二箇度の軍に、先懸て高名したる武藏國の住人、平山武者所季重と名乗て、喚てかく。熊谷蒐れば、平山續き、平山蒐れば熊谷續き、互に我劣じと、入替々々、名乗替々々々、揉に揉で、火出る程にぞ攻たりける。平家の侍共、熊谷平山に、餘に手痛う攻られて、叶はじとや思けん、城の内へ颯と引て、敵を外様に成てぞ防ける。熊谷は馬の太腹射させ、はぬれば、弓杖突て下立たり。子息小次郎直家も生年十六と名乗て、真先蒐て戦けるが、弓手の肘を射させ、是も馬より下り、父と竝でぞ立たりける。熊谷、如何に小次郎は手負たるか。さん候。鎧づきを常にせよ、裏搔すな、鎧を傾けよ、内甲射さすなよとこそ教けれ。熊谷は鎧に立たる矢共撥り捨て、城の内を睨へ、大音聲を揚て、去年の冬鎌倉を立しより以來、命をば兵衛佐殿に奉り、骸を一谷の汀に曝さんと思切たる直實ぞかし。去ぬる室山水島二箇度の軍に打勝て、高名したりと名乗なる越中次郎兵衛、上總五郎兵衛、悪七兵衛はないか。能登殿は坐ぬか。高名不覺も敵に依てこそすれ。人毎にはえせじ物を。唯熊谷父子に落合や。組や組とぞ。旬たる。城の内には是を聞いて、越中次郎兵衛盛績、好む裝束なれば、小村濃の直垂に、赤威の鎧著て、鍬形打たる甲の緒を締め、金作の太刀を帶き、二十四差たる截生の矢負ひ、滋藤の弓脇に挟み、連錢蘆毛なる馬に、金覆輪の鞍を置て乗たりけるが、熊谷父子を目に懸て、歩ませ寄る。熊谷父子も中を破れじと間も透さず立並び、太刀を抜て額に當て、後へは一引も引かず、彌前へぞ進んだる。越中次郎兵衛是を見て、叶はじと思けん、取て返す。熊谷、あれは如何に、越中次郎兵衛とこそ見れ。敵には、どこを嫌はうぞ。押並て組や組と言けれど、次郎兵衛さもさうすとて引返す。上總悪七兵衛是を見て、蓬い殿原の振舞哉、しや組んする物を、落合ぬ事はよも有じとて、既にかけ出組んとしければ、次郎兵衛、悪

七兵衛が鎧の袖を控て、君の御大事是に不可限。有べうもなしと制せられて、力及ばで不組けり。其後熊谷は乗替に乗て、喚てかく、平山も熊谷父子が戦ふ間に、馬の息休め、是も同う續たり。平家の方には是を見て、唯射取れや射取とて、指詰引詰散々に射けれ共、敵は小勢なり、御方は大勢なりければ、勢に紛て矢にも不當。唯押並、組や組と下知しけれ共、平家の方の馬は、飼は稀なり、乗しげし。舟に久う立たりければ、皆彫きつたる様なりけり。熊谷平山が乗たる馬は、飼に飼たる大の馬共なり。一當當ば皆蹴倒れぬべき間、流石押並て組む歩者一騎も無りけり。爰に平山は、身に替て思ける旗指を討せて、不安や思けん、城の中へ蒐入り、懸て其敵が首取てぞ出たりける。熊谷父子も、分捕あまたしてげり。熊谷は先に寄たれ共木戸を開ねば蒐入らず。平山は後に寄たれ共、木戸を開たれば蒐入ぬ。さてこそ熊谷平山が、一二懸をば争けれ。

【語釋】(一)「いざうれ」このうれも實盛最後の條にある「組んでうすやうれ」と同じく汝と呼びかけたのである。普通の註釋書は何れもいざ來れの義と解してある。(正節本も然り。但し梅澤氏は實盛の所では「今も越前にては詞のあとに



ろほ

保呂かけたて



一二懸

「なうれ」といふ事あり、といつてある點からすれば必ずしも「來れ」が「なうれ」ではない。梅澤氏もこゝは意譯したものか。(二)打込の軍——皆と一所に攻める軍。(三)人をば不可知——人のことは知らない(不レ聞)。(四)母衣——布帛で製し、上下に組緒をつけて鎧に結びつけ、矢を防ぐ具とす(挿圖参照)。後世は母衣籠、母衣骨を丸く包む様になつた。(五)澤鴻を云々——澤鴻といふくわゐに似た植物の葉の模様を山藍で摺つたもの。一入するとは布に一回だけ濃く摺つたもの。(六)拵繩目の鎧——伏繩目の革即ち白と薄青と紺を並べて染めた革を縦に細くきつて威したもので、丁度幕の繩の縞に見えるからいふ。(七)旗指——大將の旗を持つ者。(八)黄塵——麴塵で萌黄地に黄で模様ついたもの。(九)小櫻



の黄にかへいた鏡——藍染の革に小さい櫻の模様を澤山染めだしたのを小櫻といひ、それを更に黄色に染めかへしたのをいふ。(一〇) 黄河原毛——白に黄赤の(黄がかつた色)交つた毛、河原毛とは土器の色。その黄のかつた色。(一一)正なう——まさなく、不都合。(一二)遙に下る——成田がづつと後になつたとの意。(一三)涙目結——機目を糸で繋く結んで模様を出した。今の絞染の様なもの、鹿の子ともいふ。(一四)二引兩の母衣——上半部へ横に二筋染めぬいた母衣。(一五)目糺毛——糺毛は灰色に白の交つたもの、目の所だけ糺毛の馬。(一六)猪頭——甲を仰けてかぶる。敵を恐れないのである。(一七)宿月毛——月毛(薄桃)に赤色の少し加はつたもの。(一八)鏡づきを常にせよ——常に鏡をつき動かして正しく直せよ。(一九)小村濃——紺村濃、むら濃は所々斑に濃く染めたもの、それを紺で染めたのが紺村濃。(二〇)さも候はず——評釋には「さも候はずの轉」とある。講義には「然も然たり」とある。「然も然たり」と解するのは「さも候はず」の轉と見たのだらう。今は前者に従ふ。

【評】 戦の様子がよく面白くなつて来た。作者が目に見る様に裝束を細々と並べたて、或は大音聲をあげて名乗りかける様、指詰引詰血の出る様に戦ふ様いかにも戦記物らしくて、かうした所には貴族趣味の悠長な情趣や、哀感を加へる餘地がない。又前に述べた如く、戦場での扱がけの功名は卑怯とはされなかつた事が、こゝにもよく見えてゐる。熊谷が小次郎に「鏡を常につき直せよ云々」といふ。言葉は短いが流石に子を思ふ親の情である。

## 二 度 懸

去程に成田五郎も出来る。土肥次郎實平、七千餘騎色々の旗指上げ、喚叫んで攻戦ふ。大手生田森をば、源氏五萬餘騎で固たりけるが、其勢の

【通釋】 さて其の間に成田五郎も出て来るし實平も七千餘騎を率ひ、色々の旗をさし上げて吶喊して来た。又大手なる生田森を五萬餘騎で固めてゐたが、其の中には河原太郎次郎といふ兄弟があつた。太郎が次郎をよんで「大名は自分から手を下さないけれど、家來の高名を自分の名譽としてゐる。けれ

中に、武藏國の住人、河原太郎、河原次郎とて兄弟有り。河原太郎弟の次郎を呼んで言けるは、大名は我と手を下さね共、家人の高名を以て名譽す。我等は自手を下さでは難叶。敵を前に置ながら、矢一つをだに射ずして待居たれば、餘に心元なきに、高直は城の中へ紛入て、一矢射んと思ふ也。されば千萬が一つも生きて歸らん事有がたし。汝は残留つて、後の證人にたてと言ければ、弟の次郎涙をはらくと流して、唯兄弟二人有る者が、兄を討せて、弟があとに残留つたればとて、幾程の榮花をか保べき。所々で討れんより、一所でこそ討死をもせめとて、下人を呼寄せ、妻子の許へ、最後の有様言遣し、馬

ど我等は自分から手を下して戦はねばならぬ身だ。敵を前へ見ながら矢一つさへ射なくては餘りにたよらないから、私は城中へ紛れ入つて一矢射やうと思ふ。だから萬が一も生きて歸ることは難からう。お前は残り留つて後の證人になつてくれ」といつた。すると弟の次郎は涙を流して、「たつた二人の兄弟で、兄が討たれて弟が残つたからとて、どれ程の榮花をたもつ事が出来ませう。別々に討たれるよりも、一所で死にませう」とて下人を呼び寄せ、妻子の所へ最後の有様を云ひ送り、藁草履をはいて生田森の逆茂木を登り越えて城中へ入込んだ。まだ星明では鏡の毛もはつきり見分けがつかない程であつた。さて河原高直は大音聲をあげて「生田森の先陣」と名乗つたので、城内では「何とまあ東國武士程怖しい者はない。此の大敵の中へ兄弟二人きりで攻入つたとて何程の事が出来やう。唯そのまゝに捨て置き殺してはやるまい」とて討たうとする者もなかつた。河原兄弟は無比の弓の上手だつたので、次々と散々に射た。そこで城中では今は可愛さうでもあるが、悪らしくもある討取つてしまへ……といふ間もなく、西國に有名な強弓の上手、眞名邊四郎、五郎といふ兄弟(兄は一の谷に置かれ、弟は生田にゐたのだが)が之を見てよく弓を引いて暫く保つて兵と放つた。其の矢が河原太郎の胸板を後へ射通し、弟が兄を肩に引擔いで生田の逆茂木を登り越えやうとする所を、二の矢



には乗で、芥下をはき、弓杖を突て生田森の逆茂木を上越て、城の中へぞ入たりける。星明に鎧の毛さだかならず。河原太郎大音聲を揚て、武藏國の住人、河原太郎私高直、同次郎盛直、生田森の先陣ぞやとぞ名乗たる。城の内には是を聞いて、哀東國の武士程怖しかりける者はなし。此大勢の中へ唯兄弟二人懸入たれば、何程の事をかし出すべき。唯置いて愛せよやとて、討んと云ふ者こそ無りけれ。河原兄弟屈竟の弓の上手なりければ、指詰引詰散々に射る。城の中には是を見て、今は此者愛し惡し。討やと云ふ程こそ有けめ、西國に聞えたる強弓精兵、備中國の住人眞名邊四郎眞名邊五郎とて兄弟有

で草摺の端を射て、兩人を殺してしまつた。眞名邊の下人がそこへやつて来て二人の首を切つて知盛卿にお見せした所が「あつばれ剛の者よ、これらをこそ一人當千の兵ともいふべきだ。あつたら惜しい者の命を助けて見たかつた」と仰しやつた。其の後河原の下人が走り散つて「河原兄弟が今城中へ眞先かけて入り込んで討たれた」と呼ばはつたので、梶原景時が之を聞いて「それは私一黨の連中の不注意で河原兄弟を討たせたのだ、攻めるによい時だ、そら攻め寄せよ」とて五百餘騎が生田の逆茂木を取り除けさせ城内へ喚きかゝつた。所が景時の次男の平次が餘りに先へ進まうとした爲に景時は使をやつて「後陣の兵の續かないのに先がけした者は褒美がないといふ大將軍の仰せだ」と言はせた。すると平次は暫くためらつて「武士の氣質として、一度先へ進んだからは後へは引きませぬ、梓弓は引くにかゝる。傳統的精神とでもいふべきものを取傳へたる梓弓といつたのだ」とさう申して下さい」といつて突進した。景時は之を見て「平次を討たすな。景高討たすな、續けよ者共」とて父の平三、兄、弟打ち續いて五百餘騎の中へ割つて入り、縦横無盡に戰つて颯と退いた。所が長男の源太景季の姿が見えない。「源太はどうしたのだ」「餘りに深入してお討たれになつたのでせう、仲々見えませぬ」と答へた。景時ははら／＼と涙を流して「軍の先がけ仕様といふのも子供の爲に功名たてゝや

り、兄の四郎をば一谷に置れたり、弟の五郎は生田森に有けるが、是を見て能鬻暫保て兵と射る。河原太郎が鎧の胸板を後へつと射抜れて、弓杖に把り疼む所を、弟の次郎走り寄り兄を肩に引懸て、生田森の逆茂木登越んとする處を、眞名邊が二の矢に、弟の次郎が鎧の草摺の迦を射させて、同じ枕に臥にけり。眞名邊が下人落合て、河原兄弟が頸を取る。大將軍新中納言知盛卿の御見參に入れたりければ、哀剛の者や。是等をこそ一人當千の好兵共とも云べけれ。可惜者共が命を助けて見てとぞ宣ける。其後河原が下人走散つて

らうと思ふからだ。それに今源太を討たせて、自分が生きても何にならう。だから皆の者も引返して戦へ」とて再び引返した。かくて「左眼の甲の鉢附の板を射つけられても其の矢を抜かずに、返報の矢を放ち敵を落し、名を後代にあげた権五郎景政の五代の孫、東國に名だたる梶原の景時ぞや」と喚き叫んで攻め寄せた。城内では之を聞き「餘すな漏らさず討取れ」と梶原を中に取圍んで討取らうとした。けれども景時は自分の身の上は考へないで、源太がどこに居るか、馳せ廻りながら尋ね求めた。すると案の定、源太は馬をも射られて歩行し、甲も打落され髪を亂して、二丈程の岸を後にして、郎等二人を左右に立て、太刀を抜いてこゝを先途と戰つてゐた。景時は之を見て、「源太はまだ討たれてゐないのだ」と嬉しく思ひ、馬から飛び下りて「おい源太よ、父はこゝに居るぞ、同じく死ぬのならば敵に後を見せるな」（卑怯なことをするな、逃げるな）とて父子して五人の敵を討取り、或は疵つけて「武士は進むも退くも時期によるのだ。さあ来いお前源太」とて、引連れて出た。梶原の二度の突入とはこれを云ふのだ。

河原殿兄弟こそ、唯今城の中へ眞先懸て討れさせ給ぬるはと呼つたりければ、梶原平三是を聞いて、是は私黨の殿原の不覺でこそ、河原兄弟をば討せたり。時能く成ぬるぞ、寄よやとて、梶原五百餘騎、生田森



の逆茂木をとり除かせて、城の内へ喚てかく。次男平次餘に先を蒐うと進む間、父平三使者を立て、後陣の勢の續ざらんに先懸たらんする者には、勸賞有まじき由、大將軍よりの仰ぞと言送たりければ、平次暫く控へて、

武士の取傳たる梓弓、引ては人のかへすものかは。

と申させ給へやとて、喚てかく。梶原是れを見て、平次討すな者共、景高討すな續やとて、父の平三兄の源太、同三郎續たり。梶原五百餘騎の大勢の中へ驅入り、堅様横様蜘蛛手十文字に懸破て、颯と引て出たれば、嫡子源太は不見けり。梶原、郎等共に、源太は如何にと問ければ、餘に深入して討れさせ給て候やらん。遙に見えさせ給ひ不候と申ければ、梶原涙をはらくと流て、軍の先を懸うと思ふも子共がため、源太討せて景時命生ても、何にかはせんれば、返やとて又取て返す。其後梶原鎧踏張立上り。大音聲を揚て、昔八幡殿の後三年の御戦に、出羽國千福金澤城を攻給し時、生年十六歳と名乗つて、眞先かけ、弓手の眼を鎧の鉢附の板に射附られながら、其矢を抜で、當の矢を射返し、敵射落し、勸賞蒙り、名を後代に上たりし鎌倉権五郎景政に五代の末葉、梶原平三景時とて、東國に聞えたる一人當千の兵ぞや。我と思はん人々は、寄合や見參せんとして、喚てかく。城の内には是を聞いて、唯今名乗は東國に聞えたる兵ぞや。餘すな、漏すな、討やとて、梶原を中に取籠て、我討取んとぞ進ける。梶原先我身の上をば知らずして、源太は何くに有やらんと、蒐破 廻り尋ぬる程に、如案、源太は馬をも射させ歩立になり、甲をも打落され、大童に戦なつて、二丈許有ける岸を後に當て、郎等二人左右にたて、打物抜て敵五人が中に取籠られて面も不振命も不惜、爰を最後と攻戦ふ。梶原是を見て、源太は未討れざりけりと嬉しう思ひ、急ぎ馬より飛で

下り、如何に源太景時爰に有り、同う死ぬる共、敵に後を見すなとて、父子して、五人の敵を三人討取り二人に手負せて、弓矢取は懸るも引くも折にこそよれ、いざうれ源太とて、かい具してぞ出たりける。梶原が二度の懸とは是也。

【語釋】(一)名譽す——名をあげる。名譽を動詞として用ひてある。(二)芥下——藁草履。(三)怖しかりける——怖しくありける。で、このけりは過去ではない味嘆の意を表はす語である。(四)爰せよや——こゝでは手心をして相手にしない事。(五)能擧云々——よく引いて(弓を)暫くそのまゝにねらつてゐて。(六)可惜者共が云々——あたら惜しい斯様な武士の命を助けて見たいの意。「助けて見て」は見てあらむを略したのであらう。校定本には「助けて見て」となつてゐる。(七)私の黨——武藏の私市の一黨の略。本文にも私高直とある。地名から来た名。同じく武藏七黨の丹治黨を略して丹黨といつた例は宇治川の所にもある。(八)千福——仙北の訛。羽後國仙北郡金澤町にあり。(九)鉢附の板——鎧の第一の板をいふ。(挿圖参照)。(一〇)當の矢——答の矢。



兜の名稱

とは違つて、すがくしきがある。そして血涙がある。盛衰記には此の時景季が腹に梅花をさしてゐたといふ優美な挿話が載せてある。あつた方が宜いやうだ。

### 坂 落

是を始て、三浦、鎌倉、秩父、足利 【通釋】 之を手始として、三浦・鎌倉・秩父・足利等の一族又は猪俣・玉兒・私



黨には、猪俣、兒玉、野井與、横山、西黨、綴喜黨、總じて私黨の兵共、源平互に亂あひ、喚叫ぶ聲は山を響し、馳遠ふる馬の音は雷の如く、射違ふる矢は雨の降に不異、或は薄手負て戦ふ者も有り、或は引組刺違へて死ぬるも有り、或は取て抑へて首を搔もあり、被搔もあり、何れ隙有共不見けり。かゝりしか共、源氏大手計では如何にも叶べし共不見しに、七日の日の曙に、大將軍九郎御曹司義經、其勢三千餘騎、鴨越に打上て、人馬の息休めて坐しけるが、其勢にや驚たりけん、男鹿二つ、妻鹿一つ、平家の城郭一谷へぞ落たりける。平家の方の兵共是を見て、織里近からん鹿だにも、我等に

市等の兵が攻撃を初め、源平互に入亂れて喚き叫ぶ聲は山を響かし、射る矢は雨の如くで何れに隙ありとも見えなかつた（隙はゆとり）。けれども義經の方は大手の人数だけではどうしても勝てさうになかつた。すると七日の未明に義經の三千餘騎が鴨越に上つて人馬を休めてゐたが、其の軍勢に驚いたと見えて、男鹿二匹雌鹿一匹が一の谷へ逃げ落ちた。平家の兵はこれを見て、「たとひ里近い鹿でも我等の大勢を恐れて深山へ逃げて行くべきであるのに、さうでなくて此所へ落ちて来たのは怪しい、之は必ず山上から敵が下りるのだらうと大騒ぎを始めた。すると伊豫國の住人武智清教が進み出て、「假令何者でも敵の方から来たものを通すべき謂がない」とて、男鹿二つを射殺してしまつた。越中前司が之を見て「つまらない殿原の鹿の射やう哉。唯今の一矢で敵の十人も防げるものを、罪作りに矢を使はなくつても」と制止した。さて義經は山上から平家の城内を見下してゐたが、馬でも落して見やうとて、少々下して見た所が、途中で足を折つて死ぬるものもあつたが、其の中で鞍置いた三頭が無事に落着いて、越中前司の邸の前で身振ひして突立つた。そこで義經は「落し主さへ氣をつけて落せば大して疵つくまい、義經を手本としてひた落しに下せ」とて先づ三十騎許が真先に下りたので、三千騎も續いて下りた。丁度そこは小石交りの砂だつたので、ずる／＼つと二町程すべ

り落ちて、段になつゝある所にふみ止まつた。更に下を見ると大岩であるのをば、真逆様に十四五丈下つた。然しそれから先は下りられさうもなく、さればとて引返すことも出来なくて、進退谷まつてゐると、三浦黨の佐原十郎が進み出て「私達の所では鳥一羽止つてさへ、常にこんな所を馳せてゐるのです。こんな所は三浦黨にして見れば馬場の様なものです」といつて、真先に落したので大勢も續いて下りた。餘りの急で、後方から下りる者の鎧の端が前者の甲にさはる程である。餘りの無氣味に皆は目を塞いで下つた。或は又低い聲でえい／＼と馬に元氣をつけて下りた。その様子は殆ど人の所業とは思はれない程である。かくて村上康國の手勢から火を放つて平家の屋形を忽ち焼き拂つたので、平家の者共は萬が一にも助かるかと前の海へ走り逃げた。落には助舟は澤山あるが、船一艘には鎧武者が千人許も乗つたのであるから、何として安全であらう。忽ち大船三艘が沈んでしまつた。其の後は身分ある武者は乗つても、雑兵は乗つてはならぬとて、太刀長刀で打拂つた。そんな事とは知りながらも敵と戦つて死なずに、乗せまいとする船にしがみついて、臂や肘を切られて眞赤になり汀に列んでゐたといふ。その間にも大手濱の手でも關東の兵がこゝを最後と戦つた。平の教經は、今迄一度も負けなかつたのだが、今度はどう思つたのか、高砂から船に乗つて八島へお渡りに



落著て、越中前司が屋形の前に身振 なつた。

主々が心得て落さんには、痛は損すまじかりけるぞ。たゞ落せ。義經を手本にせよとて、先三十騎許眞先懸て被落ければ、三千餘騎の兵共、皆續いて落す。其しも小石交りの砂なりければ、流落に、二町許颯と落ちて、壇なる所に控たり。其より下を見下せば、大磐石の苦むしたるが、釣瓶落下しに、十四五丈ぞ下たる。其より先へは可進共不見、又後へ取て可返様も無りしかば、兵共爰ぞ最後と申て、あきれて控へたる所に、三浦佐原十郎義連、進出て申けるは、我等が方では、鳥一つ立てだにも、朝夕加様の所をば馳ありけり。是は、三浦の方の馬場ぞとて、眞先懸て落しければ、大勢みな續いて落す。後陣に落す者の鎧の鼻は先陣の鎧甲に障る程なり。餘のいぶせさに、目を塞いで落しける。えい／＼聲を忍にして、馬に力を附て落す。大方人の所爲とは不見、唯鬼神の所爲とぞ見えし。落しも果ぬに、関を咄とぞ作りける。三千餘騎が聲なれ共、山彦答へて、十萬餘騎とぞ聞えける。村上判官代康國が手より火を出て、平家の屋形假屋を片時の煙と焼拂ふ。黒煙既に押懸ければ、平家の兵共、若や助ると、前なる海へぞ多く走入ける。渚には助舟共いくらも有けれ共、船一艘には鎧たる者共が、四五百人千人許、込乗たらうに、何かは可好、渚より三町許漕出て、目前にて大船三艘沈にけり。其後は、好き武者をば乗る共、難人原をば不可乗とて太刀長刀にて打拂けり。かくする事とは知ながら、敵に逢ては死すして、乗じとする船に取付き摺附き、或は臂打斬れ、或は肘被打落て一谷の汀に、朱に成てぞ列伏たる。去程に大手にも濱の手にも、武藏相模の若殿原、面も不振命も不惜、爰を最後と攻戦ふ。能登殿は度々の軍に、一度も不覺し給はぬ人の、今度は

如何被思けん、薄墨と云ふ馬に打乗つて、西を指てぞ落給ふ。播磨の高砂より御船に召て、讃岐の八島へ渡り給ぬ。

【語釋】(一)私黨——正節本には「私市の黨の兵共惣じて……」、校定本には「三浦鎌倉、黨には猪俣……都筑黨、私黨の兵共惣じて……」とある。その方がよい。従つて本文「惣じて私黨の兵共」を、「わたくしの黨派」とみる講義以下の註は誤。(二)矢だうな——一本には矢たふなに作る。保元物語に爲朝の語として「己程の者なば矢だうなに手取にせん云々」と見えてゐる。はつきり分らない、校定本には「今俗に人だくな。火だくななどいへり」とあるがなほ不明。評釋には矢は貴いものなるに、矢づひえ(むだづかひ)なるにと解したので反對して「矢たぶな(賜ふな)といふ意らしく思へる」といつてある。講義は「貴重なる矢を費すな……矢を用ふるまでもなしの意か」といつてゐる。思ふに保元物語の文(白河殿の戦の所)では「矢種なしにつまり矢など射ないで手取にしやう」と解される所であるから、こゝも矢種なしにと見て「罪作りだよ。矢種もないのに」と解し得られないだらうか。何れにしても矢たぶなはおかしい。(三)まじかりけるぞ——こゝは「まじきぞ」の意味である。けりといふ感嘆(前出)の語を用ひて、強めの助詞「ぞ」を加へたのである。(四)三浦の佐原十郎——三浦黨の佐原十郎の意。(五)いぶせさ——覺束なさの意。こゝでは氣味悪さ。(六)込乗つたらうに——込み合つて乗つたであらうによつて。

### 盛俊最後

新中納言知盛。卿は、生田森の大將軍にて坐けるが、東に向て戦給ふ處に山のそばより寄ける兒玉黨の中より、使者を立て、君は一年武藏國司にて渡せ給へば、其好を以て、兒玉

【通釋】新中納言知盛は生田の大將軍でつたが東に向つて戦つてゐると、山の側面から攻めて來た兒玉黨の中から使者をたて、「君は先年武藏國司だつたから其好誼を以て御注意申します。あなたの方の本據も既に焼かれてゐるのに、まだそれを(後の方を)御存じではないのですか」と申して來た。後を見るに黒煙がおしかけて來るのであつた。「あはや西の方面は破れたのだ」



黨の者が中より申候。未御後をば御覽せられ候はぬやらんと申ければ、新中納言以下の人々、後を顧給へば黒煙押懸たり。あはや西の手は破にけるはと云ふ程こそ有けれ、取る物も取敢ず、我先にとぞ落行ける。越中前司盛俊は、山の手の侍大將にて在けるが、今は落つ共叶じと思けん、控て敵を待つ所に、猪俣小平六則綱、好敵と目を懸け、鞭籠を合て馳來り、押雙て無手と組でどうと落つ。猪俣は八箇國に聞えたる健者也。鹿の角の一二の草かりをば、輒引裂けるとぞ聞えし。越中前司も、人目には二三十人が力顯すと云ども、内々は六七人して上下す船を唯一人して推上推下す程の大力也。

と云ふ間もなく取るものも取敢えずに我先にと逃げ出した。越中前司盛俊は山の手(生田方面)の侍大將だつたが「もう斯うなつては逃げた所で叶ふまい」と思つたのか、ふみ止まり敵を待つてゐると、猪俣小六が好い敵だと目をかけて馳せ來り、馬を並べて無手と組み附いた。猪俣は八ヶ國に聞えた剛勇の者で、鹿の角の根から一二の枝を容易に引裂いたといふ。越中前司も人前では二三十人力を顯すけれど、内々は六七人して上下する船を唯一人で上げ下しする程の大力である。だから猪俣を取つて押へて動かさない。猪俣も粗しかれながら刀を抜かうとしたが指の股が開いて柄を握ることも出来ない。物言はうとしても餘り強く抑へられて聲も出ない。しかし猪俣も大剛の者だつたから、暫く息を休めて「敵の首を取るといふのは自分も名乗り、相手にも名乗らせて首取つてこそ大手柄である。名も知れぬ者の首をとつても何になりませう」といつたので、越中前司も尤もだと思つたのか「自分は盛俊だ」と名乗つた。「私は猪俣小六です。唯今私の命をお助け下さい。さうすれば御身の一門何十人あつても今度の軍功の賞と取換へて御命をお助け申ませう」といつた。盛俊は大いに怒つて「自分はずまらない者が、之でも平家の一門である。自分は源氏をたよらうとも思はないし、源氏とて自分にたよらうとは思ふまい。悪い貴様のいひ様かな」とて既に首を切らうとした。すると小

されば猪俣を取て抑て不動。猪俣下に乍伏、刀を抜うとすれ共、指の股はだかつて、刀の柄を握にも不及。物を言うとすれ共、餘に強う被抑て聲も不出。されども猪俣は、大剛者にてありければ、暫の息を休て、敵の首を取と云ふは、我も名乗て聞せ、敵にも名乗せて、首取たればこそ大切なれ。名も知ぬ頸取て、何にかはし可給と言ければ、越中前司實もとや思けん、本は平家の一門たりしが、身不肖なるに依て、當時は侍になされたる越中の前司盛俊と云ふ者也。和君は何者ぞ、名乗れ聞うと言ければ、武藏國の住人猪俣小平六則綱と云ふ者也。唯今我命助させ坐ませ。さだにも候はじ、御邊の一門何十人も坐よ。今度の勳功の賞に申替へ、御命計をば助奉らんと言ければ、越中前司大に怒つて、盛俊不肖なれ共、流石平家の一門也。盛俊源氏を憑う共思もよらず、源氏又盛俊に憑れう共よも思給はじ。悪い君

は「それはいけませんね、降人の首を切るといふ事がありませうか」といつたので、では助けてやらうとて免した。二人は乾いた田を前にし、深い水田を後にした畔に腰かけて一服してゐた。や、暫くして緋緘の鎧を著た武者が一人一散にかけて來た。小平六は「あれは私と親しい人見四郎です、私を見つけてやつて來るのでせう。御心配はいりませぬ」と口ではいひながら「あの男が近づいて來たら取つ組まう、彼が援けない事はよもあるまい」と心中で思ひながら待つてゐた。兩人の間が五六間になつた時、盛俊は初めは兩人を一目づつ見て油断しなかつたが、次第に近づく敵をちつと見つめて小平六を見ない隙に乗じて小平六は拳を強く握り、前司の胸板をとんと突いて後向に倒し、起き上らうとする所を乗掛かつて刀を抜き、草摺を引上げて三刀突きさしてから首を取つた。そこへ人見も出て來たが、小平六は、こんな時には後から誰が首をとつたか議論も起ると考へて、「平家の鬼神といはれてゐた盛俊を小平六が討取つた」と名乗つて、其の日の第一等の高名として功簿に記された。



が申様哉とて、既に首を搦んとしければ、正なう候。降人の首搦様や有と言ければ、さらば助けんとて救けり。前は堅田の畠の様なるが、後は水田のごみ深かりける畔の上に、二人ながら腰打懸て、息續居たり。良あつて、耕威の鎧著て、月毛なる馬に、金覆輪の鞍置て乗たりける武者一騎、鞭笠を合せて馳來る。越中前司怪氣に見えければ、あれは猪俣に親しう候人見四郎で候が、則綱が有を見て、詣で來と覺え候。苦うも候はぬと言ながら、あれが近附く程ならば、しや組んする者を、落合ぬ事はよも有じと思て待つ處に、間一段許に馳來る。越中前司、初は兩人の敵を一目づゝ見けるが、次第に近附く敵をはたと守て、則綱を見ぬ隙に、猪俣力足を踏で立上り、拳を強く握り、越中前司が鎧の胸板を、はたと突て、後へのけに突倒す。起上らんとする處を、猪俣上に乗懸り、越中前司が腰の刀を抜き、鎧の草摺引上て、柄も拳も通れ通れと、三刀刺て首を取る。去程に人見四郎も出來り。加様の時は論する事も有とて、聽て首をば太刀の鋒に貫き、高く指上げ、大音聲を揚て、此日來平家の御方に鬼神と聞えつる越中前司盛俊をば、武藏國の住人猪俣小平六則綱が討たるぞやと名乗て、其日の高名の一の筆にぞ附にける。

【釋】(一)山のそば——(組)こ、では側面。(二)二の草かり——鹿の角の根から一二の枝をいふ。(三)正なう——正なく、無法にも、(四)水田のごみ——石田氏の新釋には「こみか、こみは水の溜つてゐる所をいふ語。水田の水深い意か」とある。芥泥の意に解しても不自然ではない。(五)苦しうも候はぬ——あれが來ても心配はありませぬ。(六)しや組まんする者を——しやば罵る發語。(前出)組打したならばの意。

【評】平家にも盛俊の如き立派な武人も居る、源氏にも則綱の如き専者もゐる。後の武士道完成の時から見れば、則綱の如きは全く口の齒にもかゝるまいものを。それにしてもこの騒し討がやはり高名の一の筆に附けられたといふのは戦亂時代のこと、勝てば官軍といふ風な考もないではなかつたのだと見るより仕方がない。けれども、讀者はわれ人ともに越中前司盛俊に深い同情の涙を注ぐことであらう。戦場の沙汰だけに、作者が例の美文で迷情を殊更らしく述べたてない所に却つて緊張味がある。

### 忠 度 最 後

薩摩守忠度は、西の手の大將軍にて坐けるが、其日の裝束には、紺地の錦の直垂に、黒絲威の鎧著て、黒馬の太逞しきに、沃懸地の鞍置て乗給たりけるが、其勢百騎許が中に打圍れて、最騒がす控々落給ふ所に、爰に武藏國の住人岡部六彌太忠純、好敵と目を懸け、鞭笠を合て追懸奉り、あれは如何に好大將軍とこそ見參せて候へ。正なうも敵に後を見せ給ふ物哉。返させ給へと詞を懸ければ、是は御方ぞとてふり仰き給ふ内甲を見入たれば、かね黒也。哀御方にかね附たる者はなき物を、如何様に

【通釋】薩摩守忠度は西の手の大將だつた。其の日の裝束は紺地の錦直垂を着、黒馬の逞しいのに沃懸地(前後の輪に一面の金銀粉沃ぎかけたもの)の鞍を置いて乗つてゐたが、百騎許の勢に取圍まれてしづくと落ちていつた。岡部六彌太がこれを見つけて「よい大將と見奉る、敵に後を見せるとはよろしくない、お返しあれ」と詞をかけた。忠度が「自分は味方のものだよ」とて後向いた時よく甲の中の顔を見ると、お齒黒だつた。六彌太は「味方には鐵漿した者はゐない、如何様これは平家の公達でおはさう」といつて組附いて來た。之を見て百騎許の兵は一騎も助けに來ないで逃げ出してしまつた。といふのはこれは何れも國々のかりあつめの兵だつたからである。忠度は熊野育ちの大力で無比の早業だつたから、六彌太をつかんで「悪い奴。味方といはせて置けば宜いのに、情知らずめ」とて三太刀迄突いたが薄手の爲めに六彌太は死ななかつた。そこへ六彌太の家來の童が後れ走せに飛んで來て薩摩守の右の臂を切り落した。忠度は「今はこれ迄」と思つたのだらう、最後の十念を唱へようと、六彌太を搦んで七八尺投げ飛ばして置いて、西



も是は平家の公達にてこそ坐らめとて、押並て無手と組む。是を見て百騎許の兵共、皆國々の假武者也ければ、一騎も落合はず、我先にとぞ落行ける。薩摩守は聞ゆる熊野育の大力、究竟の早業にて坐ければ、六彌太を掴で、悪い奴が、御方ぞと言は言せよかしとて、六彌太を捕て引寄せ、馬の上にて二刀、落附く所で一刀、三刀迄こそ突れけれ。二刀は鎧の上なれば通らず、一刀は内甲へ突入られたりけれ共、薄手なれば死ざりけるを、取て抑て首を搔んとし給ふ處に、六彌太が童、後馳來て急ぎ馬より飛で下り、討刀を抜て、薩摩守の右の肘を臂の本よりふつと打落す。薩摩守今は角とや被思けん、暫退け、最後の十念唱んとて、六彌太を掴で、弓長許ぞ投退らる。其後西に向ひ、光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨と宣も果ねば、六彌太後より寄り、薩摩守の首を取る。好首討奉たりとは思へ共、名をば誰共不知けるが、箆に結附られたる文を取て見ければ、旅宿花と云ふ題にて、歌をぞ一首詠れたる。

行幕て木の下陰を宿とせば、花や今宵の主ならまし。忠度と被書たりける故にこそ、薩摩守とは知てけれ。聽て頭をば太刀の鋒に貫き、高く差上げ、大音聲を

に向ひ彌陀救済の光明は十方を遍く照して念佛の衆生を救ひとり給ふ」と唱へた。其の聲の終らない内に六彌太が後から忠度の首を切つた。よい大將の首をとつたと思つたが、名を知らなかつた。所で、箆に結びつけてある文を取つて見ると「行きくれて木の下かけを宿とせば云々忠度」と書いてあつたので、さては薩摩守とは分つた。やがて、その頭を太刀の鋒に貫いて「薩摩守の首を討取つた」と名乗つたので、敵も味方も「あゝお可哀さうに、武藝にも歌にも秀でた立派な大將でおはしたものを」とて涙を流した。

揚て、此日來日本國に鬼神と聞えさせ給たる薩摩守殿をば、武藏國の住人岡部六彌太忠純が討奉つたるぞやと名乗たりければ、敵も御方も是を聞て、あないとほし、武藝にも歌道にも勝て、好大將軍にて坐つる人をとて、皆鎧の袖をぞ濡ける。

【語釋】(一)かれ黒——鐵漿で齒を染めてあること。故實拾要には「元服ノ日後ニ染レ之者也」とある。(二)あつばれ——感嘆的發語。(三)かり武者——驅り集めた兵士。(四)落合はず——そこへやつて來て。(助ける者がなし)(五)言はせよかし——自分が言つたらば(言へばが正し)そのまゝに言はせておいて、自分を逃れさせれば宜いのに、情知らずの六彌太といふ意。(六)落ら附く所——馬から地上に落附いた所で。(七)討刀——鐔のついた普通の長い刀をいふ。刺す爲めの小刀に對して討つといつたのだ。(八)弓長——普通は七尺五寸。(九)光明遍照云々——觀無量壽經第九觀にある語。光明は佛の智慧をたへた語。(一〇)主ならまし——まはしは推量の助詞。

【評】忠盛が俊成卿の門を敲く話によく知られてゐるが、かうした強い一面はあまり知られてゐない。従つて單にやさしい公達とのみ思はれて居るのは氣の毒だ。

### 重 衡 虜

本三位中將重衡の卿は、生田森の副將軍にて坐けるが、その日の裝束には褐に白う黄なる絲を以て、岩に群千鳥繡たる直垂に、紫下濃の鎧著て、鍬形打たる甲の緒を締め、金作の太

【通釋】本三位中將は生田森の副將だつたが、後藤兵衛盛長といふ乳母子と二人(裝束の解は何れも前出)助け船に乗らうとて渚の方へ落ち延びて行つた。すると庄四郎梶原景季が、好敵手と思ひ追掛けて來た。渚には助船が澤山あつたけれども、乗る隙もなかつたので、湊河……を打渡り須磨をも後

に西の方へ逃げて行つた。重衡は童子鹿毛といふ名馬に乗つてゐるのだし、



刀を帶き、廿四差たる截生の矢負ひ、滋藤の弓持て、童子鹿毛と云ふ聞ゆる名馬に、金覆輪の鞍置て乗給へり。乳夫子の後藤兵衛盛長は、滋目結の直垂に、緋威の鎧著て、三位中將のさしも秘藏せられたる夜目無月毛にぞ乗られたる。主従二騎助船に乗らんとて、渚の方へ落給ふ處に、庄四郎高家、梶原源太景季、好敵と目を懸け、鞭鐙を合て追懸奉る。渚には助船共多かりけれ共、後より敵は追懸たり。可乗隙も無りければ、湊河荻藻河をも打渡り、蓮池を馬手に見て、駒林を弓手になし、板宿、須磨をも打過て、西を指てぞ落給ふ。三位中將は、童子鹿毛と云ふ聞ゆる名馬に乗給へり。もり伏たる馬共、容易追附べし共不見ければ、梶原若やと遠矢に能騎て兵と放つ。三位中

敵はもみ疲れた馬であるから容易に近づけさうにもなかつた。そこで梶原が「若しや萬一にもあたつたら……」と思ひ矢を放つた。所が中將の馬の三頭を深く射た。乳母子の盛長は自分の馬を中將にとられるかと思ひ、鞭をあげて逃げ出した。中將は「やよ盛長、俺を捨て、何處へ行くのだ、日來はそんな約束はしなかつたのに」と仰しやつたけれど、盛長は空とぼけて、鎧の赤印をもぬき捨て、逃げてしまつた。重衡の馬は弱るし、海へ飛込んで身を投げやうとしたが、遠淺で沈む事も出来ないで、腹を切らうとした所へ庄四郎が駆けつけて「それはいけません、何處迄もお伴しませう」とて自分の乗つてゐた馬に乗せ、鞍の前輪にしめつけて味方の陣へ歸つて來た。盛長は其所を難なく逃げのび、後に熊野法師で尾中法橋といふ人をたよつてゐたが、この法橋が死んで後は後家の尼が訴訟の爲めに都へ上る供をして上つた。所が以前から中將の乳母子で上下の人によく知られてゐた爲めに「あゝ憎や盛長は重衡公があれ程寵愛なされたのに、一所に死なないで、思もよらぬ後家の尼の供して上洛した」とて皆がつまはじきをした。盛長もさすがに恥しく思つたと見え、扇を顔にあて、道を通つたといふ。

將の馬の三頭を筈深に射させて弱る處に、乳夫子後藤兵衛盛長吾馬召れなんとや思けん。鞭を打てぞ逃たりける。三位中將、如何に盛長、我をば捨て何くへ行ぞ。日來はさは契らざりし物を、と宜へ共空きかすして、鎧に附たる赤印共撥り捨て、唯北にこそ北たりけれ。三位中將馬は弱る、海へ颯と打入給ふ。身を投んとし給へ共、其しも遠淺にて可沈様も無りければ、腹を切んとし給ふ處に、庄四郎高家、鞭鐙を合て馳來り、急ぎ馬より飛で下り、正なう候、何く迄も御供仕候はんする者をとて、我乗たりける馬に搔乗奉り、鞍の前輪に縮附奉て、我身は乗替に乗て、御方の陣へぞ入にける。乳夫子の盛長は、其をばなつく逃延て、後には熊野法師に、尾中法橋を憑うで居たりけるが、法橋死ての後、後家、尼公の訴訟の爲都へ上るに伴して上りければ、三位中將の乳夫子にて、上下多くは見知れたり。あな憎や、後藤兵衛盛長が三位中將のさしも不便にし給つるに、一所で如何にも成すして、思も寄ぬ後家尼公の供して上たるよとて、皆爪弾をぞしける。盛長も流石恥うや被思けん、扇を顔にかざしけるとぞ聞えし。

【語釋】(一)夜目なし月毛——桃毛の一種だといふ。馬の夜目(前足の膝上の白い毛)の目立たないもの、意ではあるまいか。(二)もり伏せたる——校定本には「もみふせたる」とある。その方がよさうだ。もみにもんで、疲れた馬の意。(三)馬の三頭——馬の後足程股の上部をいふ。(卷四、二三八参照)。

敦

盛

去程に、一谷の軍破にしかば、武藏國の住人、熊谷次郎直實、平家の

【通釋】さて、一の谷が破れたので熊谷直實は「平家の公達が助船に乗らうとて汀の方へ逃げて行くだらうから、よい敵に取組みたいものだ」と思ひな



公達の助船に乗らんとて、汀の方へや落行き給らん。哀好大將軍に組ばやと思ひ、細道に懸つて渚の方へ歩する處に、爰に練貫に鶴繻たる直垂に、萌黄匂の笠著て、鍬形打たる甲の緒を締め、金作の太刀を帶き、廿四差たる截生の矢負ひ、滋藤の弓持ち、連錢蘆毛なる馬に、金覆輪の鞍置て乗たりける者一騎、沖なる船を目に懸け、海へ颯と打入れ、五六段許ぞ遊せける。熊谷、あれは如何に、好大將軍とこそ見參せて候へ。正なうも敵に後を見せ給ふ物哉。返させ給へくと、扇を擧て招ければ、被招て取て返し、渚に打上らんとし給ふ所に、熊谷浪打際にて押並べ、無手と組で、どうと落ち、取て抑へて

がら細道を通り渚の方へやつてくると、練貫に鶴の模様を繻ふた直垂に萌黄匂の笠を着た武士が沖の船を目がけて海へ打入れ、五六段（前出）ばかり馬を泳がせて居るのを見た。直實は「あれはどうだ、好敵だとお見受けする、卑怯にも敵に後を見せ給うな」と扇でさし招いた。すると武士は取つて返し渚へ上らうとするので、熊谷は浪打際に馬を並べて無手と組み、馬から落して首を切らうと、甲をおしのけて見ると、薄化粧をしたかね黒の美男子である。自分の子供小次郎程の年配であつた。「一體どなたです、御名乗りなさい、お助けしやう」といふと、「さういふお前は誰だ」「大した者ではありませぬが武藏の住人熊谷直實です」それではお前にとつては好い敵だ、名乗らずとも討取つて人に問ふて見よ、見知つてゐるであらう」と答へた。直實は「あゝ何と立派な大將だらう、此の一人を討つたとて負けるべき軍に勝つこともなく、助けたからとて勝つ者が負けるといふ事はあるまい。今朝一の谷で我子の小次郎が薄手を負うたのでさへ、父として心苦しかつたのに、此の殿が（敦盛）討たれたと聞いたならば親達はどんなに歎くであらう、助けてあげやう」とて後を振り返へつて見ると、土肥梶原など五十騎許りが出て來た。直實ははらりと涙を流して「あれ御覽なさい、何とかしてお助けし様と思ふけれど、味方の軍勢が多く充滿してゐて、よもや遁しは致しますまい。同

首を搦んとて、甲を押仰て見たりければ、薄化粧して銀鬚黒也。我子の小次郎が齡程して、十六七許なるが容顏誠に美麗なり。抑如何なる人にて渡せ給ひ候やらん。名乗せ給へ助參せんと申ければ、先かういふ和殿は誰ぞ。物其數にては候はね共、武藏國の住人熊谷次郎直實と名乗申す。さては汝が爲には好敵ぞ。名乗す共首を取て人にとへ。見知うするぞとぞ宣ける。熊谷、哀、大將軍や、此人一人討奉たり共、可負軍に可勝様なし。又助奉たり共、勝軍に負る事もよも有じ。今朝一谷にて、我子の小次郎が薄手負たるをだにも、實直は心苦しく思ふに、此殿討れ給ぬと聞給て、さこそは歎悲給はんすらめ、

じ死なれるのならば私の手にかけて、死後の菩提をも營みませう」と云ふと、「何でも宜いから早く首を切れ」と仰しやつた。熊谷は餘りに可憐で、どこへ刀を通して宜いか分らない。目もくらみ心も滅入つて前後不覺になつたけれど、いつ迄もさうしてゐるわけにゆかないので、遂に首をかけた。そして「弓矢とる身程悲しいものはない。武藝の家に生れなければどうしてこんな苦しい目に出逢はう、無情にも討ち奉つた事よ」と袖を顔にあて、潸然と泣いた。さて首を包まうと敦盛の直垂を解いて見ると、錦の袋に入れた笛を腰にさして居られた。「あゝ可哀さうに、今晚城内で音楽をしてゐられたのは此の人であつたのだ。當時（只今）味方は東國勢が何萬騎か居らうけれど、軍の陣に笛持つ程のやさしい人はよもやあるまい。上流の人はやはり風雅なものだ」とて之を取つて義經に見せたので、見る人は皆涙を流した。後で聞くと修理大夫經盛の末子敦盛といふ十七歳の君であつた。これがあつてから熊谷は發心（出家となる心）が出て來たのだといふ。「その笛は祖父の忠盛が鳥羽院から下賜されたのを經盛が受けつき、敦盛が笛の上手だつたので持つたのだといふ。名は小枝といふ。かうした事はくだらない出來事ではあつたのだけれど、それが終に佛法を讚嘆する出家となる因となつたのはあはれなことである。」



助參せんとて後を顧たりければ、土肥梶原五十騎許で出来たる。熊谷涙をはらくと流て、あれ御覽候へ、如何にもして助參せんとは存候へども、御方の軍兵雲霞の如くに満々て、よも遁し參せ候はじ。哀同うは、直實が手に懸奉て、後の御孝養をも仕候はんと申ければ、唯何様にもとうく首を取とぞ宣ける。熊谷餘にいとほしくて、何に刀を可立共不覺、目も昏れ心も消果て、前後不覺に覺けれ共、さてしも可有事ならねば、泣々首をぞ搔てげる。哀弓矢取る身程口惜かりける事はなし。武藝の家に生れずば、何しに唯今かゝる憂目をば見るべき。情なうも討奉たる物哉と、袖を顔に押當て、潜然とぞ泣居たる。首を裏んとて、笠直垂を解て見ければ、錦の袋に被入たりける笛をぞ腰に被指たる。あないとほし、此曉城の内にて管絃し給つるは、此人々にて坐けり。當時御方に東國の勢何萬騎か有らめども、軍の陣に笛持つ人はよも有じ。上臈は猶も優かりける物をとて、是を取て大將軍の御見參に入たりければ、見る人涙を流けり。後に聞けば、修理大夫經盛の乙子大夫敦盛とて、生年十七にぞ成れける。其よりしてこそ、熊谷が發心の心は出きにけれ。件の笛は、祖父忠盛、笛の上手にて、鳥羽院より下賜られたりしを、經盛相傳せられたりしを、敦盛笛の器量たるに依て、被持たりけるとかや。名をば小枝とぞ申ける。狂言綺語の理と云ながら、遂に讚佛乘の因となるこそ哀也。

〔語釋〕(一)練貫——練絲を緯にして織つた絹。(二)狂言綺語云々——白氏文集に「願以三今世生俗文字之業、狂言綺語之誤、一轉爲三當來世々讚佛乘之因、轉法輪之緣」とあつて、つまらない文章のわざを以て佛法を讚嘆する緣となるやうにといふ意である。但しこゝでは敦盛を討つたことが出家の因となつたことないふのである。

〔評〕熊谷出家の動機が、こゝにあつたとするのは誤である。しかし、熊谷はこれによつて傳説的に名將となり、更に淨土門家の説教によつて蓮生坊としても亦尊い聖となつてしまつた。何れにしても、平氏滅亡の後、日ならずして出家したのは敦盛討取をその動機と考へるのに都合よかつた。かくて、あの武將が出家した……といふ驚嘆を美化せしめたのであらう。さう思はれる程に、この話は又たくあはれな光景である。謡曲となり、淨瑠璃となり、説話文學となり、現代劇曲となつて、なほ素材にとられるのは、全く花の雷の敦盛と剛勇の直實との對照であり、その雷の健氣さと、その剛勇の涙とである。そして蓮生坊が敦盛の忘れ形見と共に法然門下に席を同じうするといつた運命である。しかし作者の心は敦盛への同情、引いては平家へ、吾舊文化の繼承者、優美——への同情に動いてゐるのであらうと思はれる。一の谷落城以後の諸公達の最後を斯く迄に一つ／＼詳述してゐる所にも平家への作者のあつてい心持が窺はれようではないか。

### 濱 軍

門脇殿の末子、藏人大夫業盛は、常陸國の住人士屋五郎重行と組で被討給。皇后宮亮經正は、武藏國の住人、河越小太郎重房が手に取籠奉て、遂に討奉る。尾張守清定、淡路守清房、若狹守經俊、三騎つれて敵の中へ破て入り、散々に戦ひ、分捕數多して、一所で討死してげり。新中納言知卿盛は、生田森の大將軍にて坐けるが、其勢皆落失討れにしか

〔通釋〕敦盛の末子業盛は土屋五郎に討たれ、經正は河越小太郎が討取つた。尾張守清定及び清房、經俊三人は敵中へ割つて入り、散々に戦つて討死した。知盛は生田の大將軍だつたが其の軍勢が或は討たれ或は落延びたので子供の知章、侍の頼方と三人で汀の方へ逃げて行つた。すると兒玉黨と思はれる團扇の旗差物をした者十騎許りが追駈けて來た。監物太郎は大層弓の上手だつたので、引返して眞先に進んだ旗差の男の頭骨を射て馬から落した。其の中の大将と思はれる者が知盛に組み附かうとてやつて來たのを、知章が中を隔て、組附き、取つて抑へて首を切り立ち上らうとする所へ、敵方の童が來合せて知章の頭を斬つた。監物太郎も亦散々に戦つたが遂に左の膝をひどく射られて討死した。この紛れに知盛は其處を逃げのびて、息の長い名馬に



ば、御子武藏守知章、侍に監物太郎頼方、主従三騎汀の方へ落給ふ處に、爰に兒玉黨と覺しくて、團扇の旗差たる者共が、十騎許鞭笠を合せて、押懸奉る。監物太郎は、究竟の弓の上手なりければ取返し、先真先に進たる旗差が頸の骨をひやうつばと射て、馬より倒に射落す。其中の大將と覺しき者、新中納言に組奉んとて馳並る處に、御子武藏守知章、父を討せじと、中に隔り、押並べ無手と組で、どうと落ち、取て抑て首を掻き、立上らんとし給ふ處に、敵が童落合て、武藏守の首を取る。監物太郎落重り、武藏守討奉たりける敵が童をも討てけり。其後矢種の有る程射盡し、打物抜て戦けるが、弓手

乗つてゐた爲めに海上二十餘町を泳がせて宗盛郷の船へ辿りついた。船では人が多く乗つてゐて馬を乗せる餘地はなかつたので、馬を渚へ追返した。重能は「御馬が敵の物になるのは残念だ射殺さう」とて片手矢番いで船のへりへ出て来たので、知盛は「たとひ何物の所有になるにしても、唯今自分の命を助けた者を射殺すといふ事はよくない」と仰しやつたので、仕方なく射るのを止めた。此の馬は主人との別を惜み暫しは船を離れもせず、船について沖の方へ泳いでいつたが、次第に隔たりが遠くなつたので主も居ない渚へ泳ぎ還り、足の立つ程の所で猶も船の方を顧みて二三度嘶いた。其の後陸へ上つて休んでゐるのをば河越小太郎が捕へて、後白河院へ奉獻した。元來此の馬は院の御祕藏で第一の厩に入れてあつたのをば、或年宗盛卿が任内大臣の拜賀のあつた時下賜された。それを弟の知盛卿に預けられたので、大層祕藏して毎月一日毎に此の馬の壽命長久を祈り泰山府君を祭つた。その爲めか、此の馬の息も長くて主人の命を助けたのは目出度い事だ。元來此の馬は信濃井上の育ちだつたから井上黒と呼んでゐた。今度は河越小太郎が院へ奉つたので河越黒とお呼びになつた。さて其の後知盛卿は宗盛の前に出て「子供の子供の知章にも先立たれ、監物も討たれたので、今は心細くなりました。こんな奉行な子があつて、父を討たせまいと敵と組むのを見ながらよくも無情の父なれば子の討たれるのを助けもしないで此所迄逃げて来たことでせう。若し之が他人の事ならどんなにもどかしい事だらうに。自分の身の上になると、よくも命は惜しいものだといふ事が今こそ思ひ知られました。人々が卑怯な父よと思ひなざる心の中を考へると恥かしう御座います」とて潸然と泣かれたので、宗盛も「誠に知章さんが父の命に代つたのは偉い、腕も出来心も剛くて立派な大將軍であつたのを……あの清宗と同年で十六歳だつたね……」とて御子の右衛門督を見返つて涙ぐんだので、其の場に居合せた者は皆貰ひ泣きをした。

の膝口を健に射させ、立ちも上らで乍居討死してけり。此紛に新中納言知盛卿は、其をつと逃延て、究竟の息長き名馬には乗給ぬ、海的面廿餘町泳せて、大臣殿の御船へぞ被參ける。船には人多く取乗て、馬可立様も無りければ、馬をば渚へ追廻さる。阿波民部重能、御馬敵の物に成候なんす。射殺候はんとて、片手矢番で出ければ、新中納言、縦何の物にも成ばなれ、たゞ今命助たらんする者を、有べうもなしと宣へば、力及で射ざりけり。此馬主の別を惜つ、暫は船を離もやらず、沖の方へ泳けるが、次第に遠く成ければ、空き渚へ泳還り、足立つ程にも成しかば、猶船の方を願て、二三度迄こそ嘶けれ。其後陸に上つて休居たりけるを、河越小太郎重房、取て院へ參せたり。本も此馬院の御祕藏にて、一の御厩に被立たりしを、一年宗盛公内大臣に成て、悦申し有し時、下し被賜たりしを、弟中納言に被預たりしかば、餘に祕藏して、此馬の祈の爲にとて、毎月朔日毎に、泰山府君をぞ被奠ける。其故にや馬の息も長う、主の命をも助けるこそ目出たけれ。此馬本は信濃國井上だちにて有ければ、井上黒とぞ召れける。今度は河越が取て院へ參せたりければ、河越黒とぞ召れける。其後新中納言知盛卿、大臣殿の御前に坐て、涙を流て被申けるは、武藏守にも後れ候ぬ。監物太郎をも討せ候ぬ。今は心細こそ罷成



て候へ。されば子は有て父を討せじと、敵に組を乍見、いかなる父なれば、子の討るゝを不助して、是迄遁參て候やらん。哀人の上ならば、いか許もどかしう候べきに。我身の上に成候へば、よう命は惜物にて候けりと、今こそ思知れて候へ。人々の思召ん御心の中共こそ、恥う候へとて、鎧の袖を顔に押當て、潜然と被泣ければ、大臣殿、誠に武藏守の父の命に被代けるこそ有難けれ。手もき、心も剛にして、好大將軍にて坐つる人を、あの清宗と同年にて、今年は十六なりとて、御子右衛門督の坐ける方を見給て、涙ぐみ給へば、其座に幾らも竝居給へる人々、心有も心なきも、皆鎧の袖をぞ被濡ける。

【註釋】(一)大夫——五位(前出)。(二)討死してげり——してんげりとか、してげりとか、又はしててんげり。など何れもしてげりを詠つたのである。(三)ひやうつば——矢の飛んで、あたる音をい云たのである。よつ引いてひやうと放つひやうと同じ云ひ方である。

(四)片手矢はげ——の矢なつがへやうと左手の握皮の所へ持ちそへ弓矢共に左の片手に持つたといふこと。(五)泰山府君——道家でいふ所の壽命を掌る神。陰陽道でも用ひたと見え、東鑑などにも出てゐる。(六)召されける——こゝでは呼ばれたといふ程の意。

(七)子はあつて云々——評譯には「現在子供はあつて」でもわかるが、本文の調子からいへば「子供は子供としての道を守つて」といふやうな意味に見えるとある。さう迄考へなくとも字義通りに「有て」は「その場に子供がゐて」と見てよからう。(八)十六な——は感嘆の意を表す助詞。

【評】すらくとしてゐて、佳い文である。馬が「なほ船の方を顧みて二三度こそ嘶きけれ」といひ、知盛卿の迷憤といひ、何れも一種の情味がある。人間以上に馬の描寫に悲壯美があるではないか。

## 落 足

小松殿の末子備中守師盛は、主従七

【通釋】重盛の末子師盛は主従七人で小船に乗つて逃げる所へ知盛の侍の

人小船に乗り落給ふ處に、爰に新中納言知盛卿の侍に、清衛門公長と云ふ者、鞭鎧を合て馳來り、あれは如何に、備中守殿の御船とこそ見參せて候へ。參り候はんと申ければ、船を渚へ掉寄たり。大の男の鎧著ながら、馬より船へ岸波と飛乗うに、何かは可好。船は小し、くるりと踏返してげり。備中守浮ぬ沈ぬし給ふ處に、畠山が郎等、本田次郎親經、主従十四五騎鞭鎧を合て馳來り、急ぎ馬より飛んで下り、備中守を熊手に懸て引上奉り、遂に御首をぞ擡てける。生年十四歳とぞ聞えし。越前三位通盛卿は、山の手の大將軍にて坐けるが、其勢皆落失討れ、大勢に被押隔て、弟能登守には後れ給ぬ。心靜に

落 足

清原衛門公長がやつて来て「そこへ行かれるのは備中守殿の御船と存じます、乗せて下さい」と云つたので船を渚へ寄せた、すると大の男が馬から船へ飛び乗つたので何條たまるべき、船は小さいのでくるりと顛覆した。師盛は浮いたり沈んだりしてゐる所へ畠山の郎黨十四五騎が馳せて来て馬から飛び下り、師盛を熊手にかけて引上げ、終に首を斬つてしまつた。生年十四歳だといふ。又通盛卿は一の谷の大將軍だつたが、其の軍勢も討たれたり逃げのびたりした上、自分は大勢に遮られ弟の能登守から後れてしまつた。そこで心靜かに自害しやうと東に向つて落ちて行くと、佐々木成綱等七人程に取圍まれ遂に討たれた。其の時迄は侍一人が附いてゐたけれど、之も最後の時は附いて來なかつた。此の如く東西の城門外の合戦も、時の經つにつれて長時間にもなつたので、源平ともに随分討たれた。櫓の前の逆茂木の下には人馬の死骸が山の如く、一の谷の小篠原は爲めに薄紅になつてしまつた。一の谷、生田、山の麓、海岸に射られ、斬られて死ぬる者は數知れずあつた。源氏方に斬られた首が二千餘人であつた。今度一の谷で討たれた平家の主な人々では通盛をはじめ(以下略)十人だといふ。

さて軍に負けたので安徳帝を初めとして、平家の人々は皆御船に乗つて御出發になつたのは痛ましい極みである。或は汐に引かれ風に誘はれて紀伊路



自害せんとて、東に向て落行給ふ處に、近江國の住人佐々木木村三郎成綱、武藏國の住人玉井四郎資景、彼是七騎が中に取籠參せて、終に討奉てけり。其時迄は、侍一人附奉たりけれ共、是も最後の時に落合はず。凡東西の木戸口時移る程にも成しかば、源平數を盡して討れにけり。槽の前逆茂木の下には、人馬の肉山の如し。一谷小篠原緑の色を引替へて、薄紅にぞ成にける。一谷生田森、山の傍、海の汀に、被射被斬て死ぬるは不知、源氏の方に斬懸らるゝ首共、二千餘人也。今度一谷にて討れさせ給へる宗徒の人々には、先越前三位通盛、弟藏人大夫業盛、薩摩守忠度、武藏守知章、備中守師盛、尾張守清定、淡路守清房、經盛の嫡子皇后宮亮經正、弟若狭守經俊、其弟大夫敦盛、以上十人とぞ聞えし。軍破にければ、主上を始參せて、人々皆御船に召て、出させ給ふこそ悲けれ。汐に引れ風に隨て、紀伊路へ赴く船も有り。蘆屋の沖に漕出て、浪に洶るゝ船も有り。或は須磨より明石の浦傳ひ、泊定ぬ檣枕、片敷袖もしをれつゝ、臚に霞む春の月、心を摧ぬ人ぞなき。或は淡路の瀬戸を押渡り、繪島磯に漂へば、波路遙に鳴渡り、友迷せる小夜千鳥、是も我身の類哉。行末未何くとも思定ぬかと覺て、一谷の沖に徘徊ふ船も有り。加様に浦々島へ行く船もあれば、芦屋の沖に漕ぎ出て浪にゆられる船もあり。或は須磨から明石の浦傳ひにあてどなき航海を續けて臚に霞む春月に心を碎かぬ人もなかつた。或は又淡路海峡を渡つて繪島が磯に漂ふと、小夜千鳥が波路に鳴き渡るのを聞いて、之も自分達と同じくさすらひの旅かと思はれる。中には又行先きも未だ定まらないと見えて一の谷の沖を徘徊する船もあつた。此の如く浦々島々に漂ふてゐるのだから、お互に生死も知り難い。嘗ては十四ヶ國十萬餘の兵を隨へて都へ近づくのも僅かに一日の行程だつたから、今度こそはと頼母しく思つてゐたのに、一の谷を攻め落されては一層心細くなつた。

々に漂へば、互の死生も知難し。國を従ふる事も十四箇國、勢の附く事も十萬餘騎、都へ近附く事も僅に一日の道なれば、今度はさりと恐しうこそ思れつるに、一谷をも被攻落て、いと心細うぞなられる。

【語釋】(一)熊手——長い柄の先に鐵のかぎ形になつたものを數本つけて、物を引掛けるに用ひたもの。

【評】泊定ぬ波枕以下は例の七言調の所謂美文である。平家の落人は何處まで詩的であるのか。或は作者の心が夢を追ふのか。將又歌枕に名ある地名を連れると、自然技巧的な繪畫的な歌心が浮んで來るのか。何れにしても語り物とすれば調子が高ぶるのかも知れない。平家の公達の討死を一つく列擧した最後の送曲であるのだ。

### 小 宰 相

越前三位通盛卿の侍に、見田龍口時員と云ふ者有り。急ぎ北方の御船に參て申けるは、君は今朝湊河の下にて、敵七騎が中に取籠參せて、終に被討させ給て候ぬ。中にも殊に手を下て討奉たりしは、近江國の住人佐々木木村三郎成綱、武藏國の住人玉井四郎助景とぞ、名乗參せて候つれ。時員も一所で討死仕り、最後の御供

【通釋】越前三位通盛卿の侍に見田(群田、宮太など一定せず)時員といふ者があつた。急いで北の方の御船へ參つていふには「殿様は今朝湊河の河下で七人の敵が圍んで終にお討たれになりました。就中手を下して討つたのは佐々木の一族の木村三郎と玉井四郎だと名乗りました。私も御一所に討死して最後の御供を申すべきでしたが、かねく「通盛はどうなつてもお前は命を捨てるな。何とかして命をながらへて、北の方の御行方を尋ねて呉れよ」と仰せられたので、甲斐ない命を生きて、無情にも是迄参りました」と申し上げたので、北の方は何とも返事なさらないで、かづきを引きかぶつて泣き伏された。きつと討たれたとは聞きながらも、ひよつとすると間違だらう。生きて



仕べう候つれども、兼てより仰候しは、通盛如何に成とも、汝は命を不可捨、如何にもして存て、御行方をも尋参せよと仰候し程に、甲斐なき命許生て、強顔こそ是迄参て候へと申ければ、北方兎角の返事にも及給はず、引被てぞ伏給ふ。一定討れ給ぬとは聞給へども、若僻事にても有らん、生て被歸事もやと、二三日は白地に出たる人を待つ心地して坐けるが、四五日も過しかば、若やの頼も弱果てて、いと心細ぞ成れる。唯一人附奉たりける乳母の女房も同枕に伏沈にけり。かくと聞給し七日の日の暮程より、十三日の夜迄は、起も上り不給。明けば十四日、八島へ押渡る。宵打過る迄は臥給た

歸られる事もあらうか」と二三日は一寸外出した人を待つ様な心で居られたが、四五日も過ぎたので、「若しやといふ頼み心も弱つて大層心細くなつて居られた所であつた。唯一人付き添うてゐた乳母の女房も同じ悲みに泣き沈んだ。かく通盛卿が討たれたとお聞きになつた七日の夕方から、北の方は十三日の夜迄起き上りもなさらず、翌十四日に八島へ向つた。此の日も宵過ぎ迄寝て居られたが、夜の更けるにつれ船の中も静かになつた。乳母の女房に仰しやるには「今朝迄は三位卿が討たれたとは聞いてゐたが、本當とは思はないでゐたけれど、今日夕方から本當にさうだらうと思ひ定めた。といふのは誰も皆湊河とかで通盛卿が討たれたと云ふ者はあつても、生きてゐると云ふ者は一人もない。又明日軍に出陣しやうといふ前夜一寸した所で行き逢つた時に、通盛卿はいつもより心細さうに嘆いて『明日の軍には必ず討たれる様な氣がする。私が死んだ後はあなたはどうなさる』などいつたけれど、軍はいつもある事だから必ずしもさうとは思つてゐなかつたのが悲しい。それが今生の限だと思つたなら、どうして後の世迄もと約束しなかつたのかと思ふさへも悲しい。自分の體が普通でなくなつた(懐妊した)事をも平生は隠して言はなかつたけれど、餘り打ちあけない人間と思はれまいと思つて(講義では「思はれし……餘り心深く寵愛されしことなればと思ひて」とあるのはよろ

りけるが、更行儘に、船の中静りければ、乳母の女房に宣けるは、今朝までは、三位討れしとは聞しか共、實共思はで有つるが、此暮程より、實さも有んと想定て有ぞとよ。其故は皆人毎に、湊河とやらんにて三位討れにしとは言しか共、其後生てあうたりと云ふ者一人もなし。明日打出んとての夜、白地なる所にて行逢たりしかば、何よりも心細げに打敷て、明日の軍には、必討れんと覺るはとよ、我如何にも成なん後、人は如何はし可給など言しか共、軍は何もの事なれば、一定さるべし共思はで有つる事こそ悲けれ。其を限とだに思はましかば、など後の世と契ざりけんと、思ふさへこそ悲けれ。直なら



す成たる事をも、日來は隠して不言しか共、餘に心深く被思じとて、言出たりしかば、不斜嬉げにて、通盛三十に成る迄、子と云ふ者も無りつるに哀同は男子にても有かし。浮世の忘形見にもと思置計也。さて幾月にか成らん。心地は如何有らん。何となき波の上、船の中の栖居なれば、閑に身々と成ん時、如何はし可給など言しは、はかなかりける兼言哉。誠やらん、女は左様の時、十に九は必死ぬるなれば、恥がましようたてき目を見て、空う成んも心憂し。靜に身々と成て後、少き者を育て、亡人の形見にも見ばやとは思へ共、其を見ん度毎には、昔の人のみ戀くて、思の數は増る共、慰む事はよもあら

方々の北の方の御數は、何れ疎かには思召すまい。必ず一蓮托生と思召しても、死後の世界で六道四生(前出)の間何所へお越しになるでせう。通盛卿とお逢ひになる事も不定ですから、御入水なすつても無駄な事です。それより靜かに御出産なすつて、どんな田舎でも幼い御子を育て、御出家なすつて亡き殿様の菩提をお弔ひなさいませ。且つ都の事は誰が保護なさると思つてそんな事を仰しやるのですか。御恨めしい事です」とて潛然とかき口説いたので、北の方も「此の事は知らせて悪からう(講義には乳母に悪く覺らるゝならんと思ひてにやとある)と思はれたのだらう、それは私の心になつて推量してごらん。大方に世も恨めしく人の別の悲しさにつけても身を投げやうなどいふのは普通の事です。けれど、左様に言つた人で實行した者は稀です。本當にさう思ひ立つ事があればどうしてお前には知らせないで置ませう。今夜は夜も更けました、さあ寝ませう」と仰しやつた。乳母の女房は「此の四五日は湯水さへはかしく召し上らない人が、こんなに細々と仰せられるのは本當に御決心なすつたのかと悲しくて、凡そ都の事は兎も角として本當に身投と御決心ならば、千尋の底迄も御供させて下さい。でないと、後れ奉つた後片時も生きて居れやうとも思ひませぬ」と言つて御傍に居たが、一寸うとくした際に北の方はそつと舷へ出て、何處が西とも分らないけれど、月

じ。終には過まじき道也。若不思議に此世を忍過す共、心に任せぬ世の慣は、思ぬ外の不思議も有ぞとよ。其を思へば心憂し。目睡めば夢に見え、醒れば面影に立ぞとよ。生て居て兎に角に人を戀と思んより、水の底へも入ばやと思定て有ぞとよ。足下に一人留て、歎んずる事こそ心苦けれ共、妾が装束の有をば取て、如何ならん僧にも奉り、亡人の御菩提をも弔參せ、妾が後世をも助給へ。書置たる文をば都へ傳てたべなど、細々と宣へば、乳母の女房涙を抑へて、幼き子をも振捨て、老たる親をも留置き、遙々と是迄附參せて候ふ志をば、いか許とか被思召候らん。今度一谷にて被討させ給ふ御一家

の入る方の山の端を極樂の方と思つたのだらう、心靜かに念佛遊ばした。沖の白洲に鳴く千鳥、海の瀬戸を渡る帆の音も折から一入哀を深くした。北の方は念佛百遍許り唱へて「西方極樂の阿彌陀佛よ、衆生救済の本願が間違なく、飽かずに別れた夫婦の仲ですから必ず一つ蓮に極樂へ生れますやうに」と泣くく申して、南无の聲と共に海に沈まれた。丁度其の時は一の谷から八島へ渡らうとする航海中の夜半だったので、船中寢靜まつて誰も之を知らなかつた。所が撒取の男が一人寝なかつたが、此の様子を見て、「あの船から女房が海へ投身なすつた」と呼ばはつたので、乳母の女房が驚いて傍を手さぐりして見ると、北の方が居られなかつた。そこで唯「あれよく」とあきれ驚いた。多くの人が目をさまして引上げやうとしたが、只さへ春の夜は霞むものだから、四方の村雲がはびこつて、どんなに水を潜つても月光が朧で見えない。隨分経つてから引上げたけれど、既に息が絶えてゐた。北の方は白袴に練貫の二つ衣を着、髪も袴も潮でぬれて、引上げたが甲斐がなかつた。乳母の女房は北の方の手を握り顔に自分の顔をおしあて、「是程迄に御決心なすつたのならば、妾をも御供させて下されば宜いのに……恨めしくも妾一人を取り残された事よ。それにしても今一度蘇生して妾に何か聲を聞かせて下さい」と悶え焦れたけれど、既にこと切れた上は一言の返事もなならない。



の公達たちの北方の御敷、何れか疎に被思召候べき。必一運へと被思召候ふとも、生替せ給なん後、六道四生の間に、何の道へか赴せ給はんすらん、行達せ給ん事も不定なれば、御身を投ても由なき御事なり。靜に身々と成せ給て、如何ならん岩木の狭間にても、少き人を育ませ、御様を替へ、佛の御名を唱へて亡人の御菩提を弔參せ給へかし。其上都の御事をば、誰見續參せよとて加様には被仰候やらん、恨しうも承り候ふ物哉とて、潜然と掻口説ければ、北方此事悪うも知せんんとや思れけん、是は心に代ても推量給べし。大方の世の恨しき、人の別の悲さにも、身を投んなど云ふは、常の

わづかに通ふてゐた息もはや止つてしまつた。その間に春の夜の月も西山に傾き空も段々明けて來たので、名残は盡きないけれ共、いつ迄もかうして置、わけにもゆかないので、再び浮き上らない様に故三位殿の著背長を着せ奉つて終に海へ沈めた。乳母の女房も今度は死に後れまいと續いて海へ入らうとしたのを、人々が止めたので力も及ばなかつた。然し切な心の辛棒できなかつた爲めか、手づから髪を切取つて中納言律師忠快を師とし、剃髮授戒して主人の後世を弔つた。昔から男に死に後れる者は多いけれど、その時出家するのは普通の事で、此の北の方の様に身を投げるのは稀有な事である。されば「忠臣は二君に云々」といふのはこんな事をいふのだらう。一體この北の方は藏人頭刑部卿範方の娘で小宰相といふ禁中第一の美人で、上西門院統子(鳥羽院の第二皇女、二條院の准母)の女房だつた。上西門院が法勝寺へ御花見の時當時中宮亮だつた通盛がお供してゐてこの小宰相を見初めたのである。初は戀歌をよみ文を幾度も送つたけれど受取る様子もなかつた。かくて三年をすぎたので、通盛卿は之が最後の手紙と思つて文を書き送り、「取傳へた女房にも逢はないで歸つていつた。丁度其の時小宰相は里から上西門院の御所へ出仕する所であつた。文を託された女房は空しく歸る本意なさに、傍をつゝと走り通る様な振をして小宰相殿の乗つてゐる車の中へ通盛の文を投げ入れた。

習なり。去共左様の事は、有難き様ぞかし。誠に思立つ事有は、足下に不知しては有まじきぞ。今は夜も更ぬ。いざや寝んと宣へば、乳母の女房、此四五日は湯水をだに、はかばかしく御覽じ入させ給はぬ人の、加様に細々と被仰は、誠に思召立つ事もやと悲うて、凡は都の御事もさる御事にて候へ共、實思召立つ事ならば、妾をも千尋の底迄も引こそ具せさせ給はめ。後れ參せん後、更に片時存べし共覺えぬ者哉と申て、御傍に在ながら、些打目睡たりける隙に、北方やはら鮫へ起出給て、漫々たる海上なれば、何地を西とは知ね共、月の入さの山の端を、其方の空とや覺しけん、閑に念佛し給へば、

「これは誰から來たのか」と供の者に聞いても「存じませぬ」といふので、小宰相が聞けて見ると通盛からの文である。車に置いて行くこともならず、道へ捨てるもどうかと思ひ、袴の腰へ挟んだまゝで御所へ參つた。さて宮仕してゐる時に、場所もあらうに女院の御前へ文を落したのだ。女院はこれをお拾ひになつて、急いで御衣の袂に隠して「珍らしいものを拾つた、此の主は誰だらう」と仰しやると、御所の女房達は皆「神かけて存じませぬ」といふ。其の内に小宰相ばかりは顔を赤めて、碌々に物も云はない。女院も内々、通盛卿が云ひ寄つてゐると御存じだつたので、その文を披見なされると、薰物の匂も深い紙に立派な筆跡で「あまりにあなたの氣強いのも、今は却つて嬉しくて……」など細々と書いて、その奥に「我戀は細い谷川の丸木橋の如く踏み返されて悲しい」といふ歌が書いてあつた。女院は「是は逢はぬを恨んだ文だらう。餘り人の氣の強いのも却つて怨なものだ。中頃小野小町といふ人が美人で情の道も稀有だつたので、見る人聞く人皆心を痛め(愛を得やうと)たけれど、心強いといふ評判をとつた爲めに、終には人の思も積つた罰にか零落して根芹など摘んで露命を過したといふ話がある。之は何とか色よい返事しなければいけない」とて御視を引寄せて忝くも御自身で御返事を、「細谷川の丸木橋は踏み返されて川に落ちないといふ事はない(あなたの情に



沖の白洲に鳴く千鳥、天戸渡る櫂の音、折から哀や勝けん、忍び聲に念佛百返許唱させ給ひつゝ、南無西方極樂世界教主彌陀如來、本願誤たず、あかで別れし妹脊のなからひ、必一運にと、泣々遙に掻口説き、南無と唱る聲共に、海にぞ沈給ける。

ほだされて陥落するのだから御安心なさい」と書かれた。かく胸中悶々の情が外に現はれて上つ方に知られた美人は幸運の花とでもいはうか。通盛は遂にこの女房を賜つてお互に情愛も濃やかに暮した。だから西海の波の上までも引連れ終に同じ死の道へと赴いたのである。さて門脇中納言教盛は、嫡子通盛にも末子の業盛にも死に後れたので、今は頼る人とは教経と忠快律師ばかりである。故三位通盛卿の形見とも思つて此の小宰相を見給ふべきに、それさへ亡くなられたのだから大層心細くなられた。

一谷より八島へ押渡んとての夜半許の事也ければ、舟の中静つて、人は是を不知けり。其中に櫂取の一人寝ざりけるが、此由を見奉て、あれは如何に、あの御船より、女房の海へ入せ給ぬるはと呼たりければ、乳母の女房打驚き、傍を捜れ共坐ざりければ、唯あれよあれよとぞあきれる。人數多下て、取上奉るとしけれ共、さらぬだに、春の夜は、習に霞む物なれば、四方の村雲浮れ来て、潜共々々、月朧にて見不給。遙に程経て後取上奉たりけれども、早此世になき人と成給ぬ。白袴に練貫の二つ衣を著給へり。髪も袴もしはたれて、取上けれ共甲斐ぞなき。乳母の女房手に手を取組み、顔に顔を押當て、などや是程に思召立つ事ならば、妾をも千尋の底迄も、引こそ具せさせ給べけれ。恨うも唯一人留させ給ふ物哉。さるにても今一度物被仰て妾に聞させ給へとて、悶焦けれ共、早此世に亡人と成給ぬる上は、一言の返事にも及給はず、纒に通つる息も、はや絶果ぬ。去程に、春の夜の月も雲井に傾き、霞る空も明行けば、名残は盡せず思へ共、さてしも可有事ならねば、浮

もや上り給ふと、故三位殿の著背長の一領残たるを引纏奉り、終に海にぞ沈ける。乳母の女房、今度は後奉らじと、續て海に入んとしけるを、人々取留ければ、力不及。せめての心の在れずさにや、手から髪をはさみ下し、故三位殿の御弟、中納言律師忠快に刺せ奉り、泣々戒を保て、主の後世をぞ吊ける。昔より男に後る類多と云へ共、様を替は常の習、身を投迄は有難き様也。されば忠臣は二君に仕へず、貞女は二夫に見共、加様の事をや申べき。此女房と申は、頭刑部卿範方の女、禁中一の美人、名をば小宰相殿とぞ申ける。上西門院の女房也。此女房十六と申し安元の春の比、女院法勝寺へ花見の御幸の有しに、通盛卿其比は未中宮亮にて供奉せられたりけるが、見初たりし女房也。始は歌を詠み、文を被書けれ共、玉章の數のみ積て、取入給ふ事もなし。既に三年に成しかば、通盛卿今を限の文を書て、小宰相殿の許へ遣す。剩へ取傳ける女房にだに不逢して、使空う歸りける。道にて、折節小宰相殿は里より御所へぞ被參ける。使空う歸參ん事の本意なきに、傍をつと走通る様にて、小宰相殿の乗給へる車の簾の中へ、通盛卿の文をぞ投入たる。供の者共に問給へば、不知と申す。さて彼文を開て見給へば、通盛卿の文也けり。車に可置様もなし。大路に捨んも流石にて、袴の腰に挟つゝ、御所へぞ參給ける。さて宮仕給し程に、所しもこそ多けれ、御前に文を被落たり。女院これを取せ坐まし、急ぎ御衣の袂に引藏させ給て、珍敷き物をこそ求たれ。此主は誰なるらんと仰ければ、御所中の女房達、萬の神佛に懸て知すとのみぞ申ける。其中に小宰相殿計顔打赤めて、つや／＼物も不被申。女院も内々通盛卿の申とは知召れたりければ、さて此文を披て御覽すれば、綺爐の煙の匂殊に深きに、筆の立ども尋常ならず。餘に人の心強も今は中々嬉くてなど、細々と書て、奥には一首の歌ぞ有ける。



我戀は細谷川のまろき橋、ふみ返れてぬる、袖かな。

女院、是は逢ぬを恨たる文や。餘人の心強も中々今は怨と成なる者を。中比小野小町とて、眉目容嚴う、情の道有難かりしかば、見る人聞く者、肝魂を不傷と云ふ事なし。され共心強き名をや取たりけん、終には人の思の積とて、風を防ぐ便もなく、雨を漏さぬ業もなし。宿に曇ぬ月星は、涙に浮び、野邊の若菜、澤の根芹を摘てこそ、露の命をば過しけれ。女院、是は如何にも返事可有事ぞとて、御硯召寄て、忝くも自御返事あそばされけり。

唯頼め細谷川のまろき橋、ふみ返しては落ざらめやは。

胸の中の思は富士の煙に顯れ、袖の上の涙は清見が關の浪なれや。眉目は幸の花なれば、三位此女房を賜て、互の志不淺。されば西海の浪の上舟の中迄も引具して、終に同じ道へぞ被赴ける。門脇中納言は、嫡子越前三位の末子業盛にも後れ給ぬ。今頼給へる人としては、能登守教經、僧には中納言律師忠快計也。故三位殿の形見共、此女房をこそ見給べきに、其さへ加様に成給へば、いと心細ぞ成れける。

【註釋】(一)つれなう——心強く、無情にも。(二)あからさま——一寸、かりそめに。(三)あからさまな所——こゝでは、思もよらぬ所といふ程の意。(四)覺ゆるはとよ——「とよ」は何れも意味を強めていつたのだ。(五)身身とならん時——身二つになる時、即ち分娩する。閉には安らかにの靜の當字。(六)兼言——豫言のあて字で、前以ていひおく詞。(七)通れまじき道——のがれることが出来ない。脱れ得ない死である。(八)そこに——そこもとはと、乳母に向つていふのだ。(九)都の御事——都に残つてゐる北の方の父母達をさすのであらう。(一〇)此事——身投げすること。(一一)白袴——考證にはこれも裏服だとある。(一二)せめての心の云々——せめて厄になつて亡き後をとむらはうと思ふ心があるに堪えられないからであらう。あられすとはあるにもあられすで、痛く心を引く時に強くいふ詞である。「さによ」のさは程度、心持をあらはす詞。(一三)忠臣は二君に仕へず云々——文選、史記、などに見えたる詞。(一四)

つや——更に一向の意、つゆ——の轉か。つゆばかりも。(一五)綺爐の煙——盛衰記には妓爐につくる。校定本には「妓女の爐にたく香の煙とある」、綺爐と見る説では彩色文様ある爐で薰物をした香の煙と解してゐる。何れにしても香をたく爐である。橘正通の詩序に妓爐之煙とある(木朝文粹及び朗詠集)。(一六)ふみ返される——文と語とにかけてある。(一七)宿にくもらぬ云々——普通ならば家の中まで曇らす照らす月や星の光が、零落した小町の涙に浮びといふのである。(一八)女院——鳥羽院第二御子、二條院の准母、上西門院統子のこと。初めに「女院是は逢はぬ云々」とあつて、こゝに又「女院是は如何にも云々」となつてゐるので、小町の話が女院の詞だと解する説と、さうでない地の文だと解する説がある。文脈からいへば、こゝの女院を省いて「是は逢はぬ怨を」から「返事可有事ぞ」までを續きと見て宜いと思ふ。盛衰記では女院の詞となつてゐる。(一九)ふみ返して云々——丸木橋をふみかへした人もやはり落ちないでは(河へと、情に靡きおつるとを兼ねてゐる)ゐない。ざらめはすあらめ、やはは反語。(二〇)胸の中の云々——平祐舉の歌に「胸は富士袖は清見が關なれや煙も波も立たぬ日ぞなき」とあるによつたもの。(二一)眉目は幸の花——當時の俗諺か。氏なくして玉の輿と異曲同音、容貌は幸福の母だといふ意。

【評】王朝の物語にでもありさうな戀物語である。殊に女院との關係の所など……けれどもさすがに此の時代だけに投身とまで切りつめた純な強さがあるのがうれしい。王朝の様に享樂でも氣分でもない所がうれしい。蓋し九卷中での名文であらう。否小賢よりも悲壯の分子が多だけに、戦記文中の情史としては生きてゐると思ふ。



平家物語 卷第十

首 渡

壽永三年二月七日の日、攝津國一谷にて被討給し平氏の首ども、十二日に都へ入る。平家に結れたりし人々は、今度我方様に、如何なる憂事をか聞き、如何なる憂目をか見んずらんと歎きあひ悲みあはれけり。中にも大覺寺に隠れ居給へる小松三位中將維盛卿の北方は、いと覺束なう思はれけるに、今度一谷にて一門の人々残り少に討なされ、今は三位中將と云ふ公卿一人生捕にせられて上るなりと聞給て、此人離れ給じ物を

首 渡

【通釋】 壽永三年二月七日に攝津の國一の谷で討死せられた平家の人々の首などが十二日に都に入つた。平家に關係の人々は、今度は自分達の方が、どんな情ない目に遭ふ事であらうかと、悲歎し合つた。その中でも、大覺寺に隠れてゐられる小松三位中將維盛卿（重盛の長男）の夫人は、甚だ頼りなく思はれたのに、今度一の谷で平家一門の人々が、生き残る人が少く、大抵討たれて、今は三位の中將と云ふ公卿が一人生捕にされて上洛するのであると聞かれて、それは夫の三位中將維盛卿に相違あるまいと心を悩ました。そこへ或る女房が大覺寺に行つて云ふには、「生捕にせられた三位中將と云ふのは、維盛卿の御事ではございません。本三位の中將重衡卿の御事でございませ」と云つたので、夫人は、それでは討死せられた人数の中に夫の維盛が居るのであらうと云つて、まだ安心されない。同十三日に大夫の判官仲頼以下の檢非違使共が六條河原に向いて平氏の首などを受取り、東洞院を北へ首



とて、悶焦給ける。或女房の大覺寺に參て申けるは、三位中將殿とは、是の御事にては候はず、本三位中將殿の御事也と申ければ、さては首共の中にこそ有らめとて、猶心安うも思ひ給はず。同十三日、大夫判官仲頼已下の檢非違使共、六條河原に出向て、平氏の首共請取り、東洞院を北へ渡で、獄門の木に可被懸よし、範頼義經奏聞す。法皇此事如何有んすらんと思召煩はせ給て、太政大臣、左右の大臣、内大臣、堀河大納言忠親卿に仰合せらる。五人の公卿被申けるは、昔より卿相の位に至る人の首、大路を渡さるゝ事先例なし、中にも、此輩は先帝の御時より賊里の臣として、久く朝家に仕まつる。範

をもつて歩いてその後獄門に懸けると云ふ事を、範頼と義經が奏上した。後白河法皇は、梟首の事はどうしたものであらうかと當惑せられて、前太政大臣忠雅、左大臣經宗、右大臣兼實、内大臣實定、堀河の權大納言忠親卿に御尋ね遊ばすと、五人の公卿の申されるには「昔から、卿相の位にある高位高官の人の首を、大通を引き廻すと云ふことはその例がない。その中でも此の平家の一族は、先帝高倉院の御時から外戚の臣として、長らく朝廷にお仕へ申したのである。範頼や義經の奏聞した次第は何としても御許しがあつてはならない。」と申上げたので、その議に定まつて引廻す事はお止めになつたけれども、範頼義經が重ねて奏上するには「平家一門は保元の亂の昔を思ふと祖父爲義の讎でございますし、平治の亂の時を思ふて見れば、父義朝の敵でございます。されば、大にしては君の御憤を安め奉り、小にしては父祖の恥辱を雪めやうがために、身命を堵して此の度朝敵平家を亡しました。それなのに今平氏の首を洛中を引き廻す事が出来ないと云ふのでは、今後はどんな勇氣があつて、凶賊を討ち退ける事が出来ませうか。」と頻に申し出たので、法皇も致し方無く、遂に二人の申し條をお許しになつて、平家の首は都大路を引き廻された。その折の見物人は幾千萬と云ふ人で、平家の人々が朝廷にお仕へ申してゐた時には、平家を怖れる輩が多かつたのに、路頭に首をさらさ

頼義經が申狀、あながちに御許容有べからずと被申ければ、渡さるまじきに被定たりしかども、範頼義經重て奏聞しけるは、保元の昔を思へば、祖父爲義が讎、平治の古を案するに、父義朝が敵也。されば君の御憤を休め奉り、父の恥を雪めんが爲に、命を捨て朝敵を亡す。今度平氏の首、大路を渡されざらんに於ては、自今以後何のいさみ有てか、凶徒を退んやと、頻に訴被申ければ、法皇力及ばせ給はず、遂に渡されけり。見る人幾千萬と云ふ數を知らず。帝闕に袖をつらねし古は、怖恐るゝ輩多かりき。巷に頭を渡さるゝ今は、又憐み悲しますと云ふ事なし。中にも、大覺寺に隠居給へる小松三位中將維

れる境遇となつた今は、諸人これを見て憐み悲しまぬと云ふ事はない。その中でも、大覺寺に隠れて居られる小松の三位中將維盛卿の子息の六代御前にお付きしてゐる齋藤五、齋藤六の兄弟の者は、餘りに主人維盛卿の御身の上の氣づかはしさに、姿を變へて一族の首を見に行つたが、その御首は皆見知つてゐるけれども、その中に三位の中將維盛卿の御首は見えない。しかし、平家の末路の餘りに情なくて、その悲しみの涙に堪へられないので、人に見顯はされる事が怖しくて急いで大覺寺に立ち歸つた。夫人は事の有様はどうであるかと尋ねられると、兄弟の者は「人々の御首は皆見知つて居ましたけれど、三位の中將殿の御首は見えません。御兄弟の中では、備中の守師盛卿の御首ばかりが見えました。其の外の首は、誰々の首でありました」と申したので、夫人は、それも又他人の事とも思へないと云つて、悲しみ伏せられた。暫くして、齋藤五は涙を抑へて云ふには、「此の一兩年は世間から隠れて居まして、他人にも餘り見知られて居りませんから、今暫くの間その首等を見たいと思ひましたけれども、萬事委しく様子を知つてゐる者が申しますには、「今度の合戦に、重盛卿の公達はお遭ひにならない。その譯は、播磨と丹波の境の三草山の方面を警備しておいでになつたが、その陣も九郎義經に破られて、新三位の中將資盛殿、同少將有盛殿、同有盛殿の弟の丹波の侍從忠房殿



盛卿の若君、六代御前に附奉たりける。齋藤五、齋藤六、あまりの覺束なさに、様を窺て見ければ、御首どもは皆見知り奉たれども、三位中將殿の御首は見え給はず。されども餘の悲しさに、裏むに堪ぬ涙のみ繁かりければ、餘所の人目も怖くて、急ぎ大覺寺へぞ歸參ける。北方さて如何にや如何にと問給へば、人人の御首どもは皆見知り奉たれども、三位中將殿の御首は見えさせ給ひ候はず。御兄弟の御中には、備中守殿の御首計こそ見えさせ給ひ候つれ。其外はそんちやう其首其御首と申ければ、北方其も人の上とは覺えずとて、引かづいてぞ伏給ふ。良有て齋藤五涙を抑て申けるは、此一兩年は隠居

達は、播磨の高砂から御船に乘られて、讃岐の國の八島へ渡られました。どうして御兄弟の方々からお離れになつたのか、其の中で備中の守師盛殿ばかりが、今度一の谷の戦に討死せられました。」と語つたので、「さてそれでは、三位の中將維盛卿の事はどうか」と尋ねましたら、「その維盛卿は、一の谷の戦より前から重い御病氣だと云つて、讃岐の八島へ渡られて、此度の一の谷の戦には御あひにならなかつた」と申す者に逢ひました」と詳しくお話しをした。夫人は、「その様な重い御病氣におかゝりになつたと云ふのも、私共の事を御案じになつて、朝夕に歎かれたのが本となつて病になられたのであらう。風の吹く日には、この様な日にお乗りになるのであらうと心配をし、又、軍の時には、今にも討死なさりはしないかと心を悩ます、まして、その様な御病氣と聞いて、どうして、平氣で聞いてゐられやうか。その御病氣の様子を委しく聞きたいものである。」と仰しやると、若君も姫君も、「なぜ、何んの御病氣と聞はなかつたのか」と仰せられるのも、御氣の毒な事である。三位の中將維盛卿も、夫人や若君の事を思ふ心から、さて一族の首が大路を渡されるにつけ、妻子は如何に心痛してゐるであらう、縦ひ、その首の中に、自分の首が交つてゐなくても、矢に當つても死に、又水に溺れて死んだであらうと思つて、今まで生き存へてゐるやうとは、よもや思は

候て、人にも痛う見知り候はねば、今暫候て見參せ度存候つれ共、よに案内委う知たる者の申候しは、今度の合戦に、小松殿の公達たちは、合せ給はず。其故は播磨と丹波の境なる三草の手を固させ給ひ候けるが、九郎義經に破れて、新三位中將殿、同少將殿、丹後待從殿は、播磨の高砂より御船に召て、讃岐の八島へ渡らせ給ひ候ひぬ。何としてかは離させ給て候けるやらん。其中に備中守殿計こそ、今度一谷にて討れさせ給て候へと、語り申候し程に、さて三位中將殿の御事は如何にと問候つれば、其は軍以前より大事の御勞とて、讃岐の八島へ渡らせたまひて、此度は向はせ給はずと、申者にこそ

ないであらう。されば、はかない命が未だ消えもしないで、生き存へてゐる事を、都に知らせよう」と云つて、使者を一人上らせたが、その使に三つの手紙を書いて託された。先づ夫人への書信には「都は敵ばかりで、貴女の身一つさへ置き場が無からうのに、幼い子供を引き連れてどのやうに悲しく思つて居られるであらう。此處へお迎ひして親子夫婦の者が一所で最後を遂げ度いと思ふけれども、我身はともかくも、それでは貴女の爲めに痛はしく思はれて迎へとることも出来ない。」などと細やかに書いて、その奥に一首の歌が添へてあつた。

何處で再びめぐり逢へるかさへ知れない身であるから、書きおく筆の跡を後の形見とも思つて見てくれ——

とあり。それから、若君たちへの書信には、「これと云ふ楽しみも無くて、徒然をどうして慰めて居るであらう。やがて、此處へ迎へ取りますよ」と、常のやうな言葉で認めて使に持たせて上洛させた。使者は都に着いて、維盛卿からの御文を取り出して北の方に差し上げた。夫人は開けて見て、一層慕はしさが増したのであらう。衣を引き被つて伏せられた。かうして四五日も経つたので、使は「御返事を頂いて歸りませう」と云つたので、夫人は泣くく夫への御返事を認められた。若君や姫君は各々筆に墨を染めて、「さて、



逢て候つれと、細々と語り申たりければ、北方、其も我等が事を心苦しう思給て、朝夕歎かせ給ふが、病と成たるにこそ。風の吹く日は今日もや船に乗給ふらんと肝を消し、軍と云ふ時は、唯今もや被討給ぬらんと心を盡す。増て左様の御勞なんどをば、誰か心安うあつかひ奉るべき。其を委う聞ばやと宣へば、若君姫君も、など何の御勞とは問ざりけるぞと宣けるこそ哀なれ。三位中將も、通ふ心なれば、さても都には如何に心元なう思ふらん、縦首共の中にこそ無とも、矢に當ても死に、水に溺て失ぬらん。今まで此世に在者とは、よも思ひ給はじ。露の命の消やらで、未浮世に存たるを知らせ奉らんとて、使を一人したてて上せられけるが、三の文をぞ被書ける。先北方への御文には、都には敵満々て、御身一の置所だにあらじに、幼き者共引具して、如何に悲う坐らん。是へ迎參せて、一つ所にて如何にも成ばやと思へ共、我身こそあらめ、御爲痛くてなんど、

父上への御返事は何んと書いたら宜しいでせう」と問はれると、夫人は「たゞ、お前達の思ふてゐる通りをお書きなさい」と仰せられた。それで若君たちは「どうして今日迄私共を迎へて下さらないのですか。餘りにお父上がお慕はしいから早く迎へ取つて下さい」と、同じ文面に認められた。使者はその書信を賜つて八島へ歸り、三位の中將殿に御返事を取り出して差し上げられた。最初に中將は、若君たちの御返事を御覽になつて、大變やるせなさうに見えた。そして「若君たちの便りを見ると、それが愛恩の絆となつて現世を棄てる勇氣がない。今生の親子の愛著が強くて、淨土を願ふのも物憂い事である。たゞこれからは山傳ひに都へ上つて、戀しい人達を今一度見もし、又見せもしてから、自害をする外は無い。」と泣く／＼語られた。

細々と書て、奥には一首の歌ぞ有ける。

何くとも知らぬあふせの藻鹽草、かきおく跡を形見とも見よ。

さて稚き人々の御許へは、つれ／＼をば何としてかは慰むらん。聽て是へ迎取うするぞと、言葉も替らす書て上せらる。使都へ上り、北方に御文取出て奉る。是を開て見給て、いと／＼思や増られけん、引被てぞ伏給ふ。かくて四五日も過しかば、使御返事賜て歸參り候はんと申ければ、北方泣々御返事かき給ふ。若君姫君も面々に筆を染て、さて父御前への御返事をば何と可書申やらんと問給へば、北方、唯兎も角も和御前達が思はする様を可申とぞ宣ける。などや今迄は迎させ給候はぬぞ、餘に御戀う思參せ候に、とく迎させ給へと、同じ言葉にぞ書れたる。使御文賜て、八島へ歸參て、三位の中將殿に御返事取出て奉る。先稚き人々の御返事を見給て、いと／＼爲方なげにぞ見えられける。抑是より穢土を厭ふに勇なし、閻浮愛執の綱つよければ、淨土を願はんも懶し。只是より山傳に都へ上り、戀き者共をも今一度見もし見えて後、自害をせんには不如とぞ、泣々語り給ける。

【語釋】(一)此人離れ給はじ物を——此人は維盛をさす。離るには逸するといふ意がある。こゝでは其の意味で維盛痛に間違はあるまいとの義。「常に離れずして在り來りし深き契なるを」と解する説はいけない。(二)威里の臣——外威里方の臣の意。(三)そんぢやう——(前出)そんぢよそこの其所。どの首はだれ、どの首はだれといふ程の意。或はそんぢやうは「其の」を冠らしめて語意を強むる語ともいふ。

【評】坂東武者の氣持からいへば維盛にしても、その北の方にしてもあまりに愚痴多い人間とも見えやう。確かにそこには英雄的悲壯美はない。しかし、人間の本當の心根はかうした弱い所にもあるのである。そこがまたやさしい點でもある。穢土を厭ふに勇なし、閻浮愛執の綱つよければ」と嘆するのは尤もなことである。近世歌舞伎の如く義理を強調しても、それが度を過すと不自然になる。維盛の場



合の様に眞情に動いても度を過すと女々しくなる。けれども此の程度の描寫ならばやはり作者と一緒に同情の哀愁にひたることは出来る。平家の悲運は總て斯うした物哀れな末路であつて、悲壯の美と迄はゆかないのだ。そこに王朝時代の物の觀方がまだ根強く潜んでゐることを語つてゐるものではあるまいか。そして、斯うした物哀れな人間らしい、詩趣の豊かな悲しさの間にほつり／＼と悲壯美ともいふべき義の爲とか、情と意志との葛藤などが點綴されてゐる。それが、武士教育の發展と共に益々強調せられるやうになつて行くのが近世文學への一方向である。そしてそれは何れも英雄的尊敬の眼をもつて見られるやうになつて來たのだ。又時としては教育的立場からこれを認めこれを稱へて來たのだ。それが江戸時代の文學の一面となつてゐる。

### 内裏女房

同十四日、生捕本三位中將重衡卿、都へ入て、大路を被渡。小八葉の車の前後の簾を揚げ、左右の物見を開く。土肥次郎實平は、木蘭地の直垂に小具足計して、隨兵三十餘騎引具して、車の前後を打圍で守護し奉る。京中の上下是を見て、あないとはし、いくらかも在ます君達の中に、此人一人加様に成給ふ事よ。入道殿にも二

【通釋】 同十四日に、生捕にせられた本三位の中將重衡卿は都に入つて、大通を引き廻された。小八葉の車の前後の簾を揚げて、左右の物見を開いた。土肥次郎實平は、木蘭地の直垂に小具足だけを著し、隨兵三十餘騎を引き連れて、車の前後を取り圍んで警護した。都中の人々はこの様子を見て「あゝお氣毒な事である。幾人もある子息達の中で、重衡卿一人この様な情無い有様になられた事よ。入道相國にも二位の局にも寵愛された御子であつたので平家一門の人々も重んじ、又、仙洞や御所へ參内せられても、老若の人々皆席を避けて、重く待遇した。然るに、今この様な情ない事にたられたのは、如何にも、奈良の寺々を焼いた罰によつてである」と云ひ合つた。

位殿にも、覺の御子にて坐せば、一門の人々も重き事にして、院内へ參せ給しにも、老たるも若きも、所を置て持成奉らせ給しぞかし。今又加様に成給ふ事は、如何様にも奈良を燒給へる伽藍の罰といひあへり。六條を東へ河原迄渡りて、其より歸りて、故中御門藤中納言家成卿の御堂、八條堀河なる所に居奉りて、嚴う守護し奉る。院御所より御使有り。藏人左衛門權佐定長、八條堀河へぞ向ける。赤衣に劔笏をぞ帶したりける。三位中將は、紺村濃の直垂に折烏帽子引立て御座す。日來は何共被思ひざりし定長を、今は冥途にて罪人共が、冥官に逢へる心地せられける。被仰下けるは、八島へ歸りたくば一門の方へ

實平は重衡卿をば六條通を東に鴨河原まで引きまはして、其處から引きかへし、故中御門藤中納言家成卿の御堂にすゑて、嚴重に守護した。すると、仙洞から藏人左衛門の權佐定長が御使として八條堀河へ向つた。この定長は赤衣に劔笏を帶してゐた。三位の中將は、紺村濃の直垂に、折烏帽子を引立て、居られた。重衡卿は常は何んとも思つて居なかつた定長を、今日は冥途で罪人共が獄官に逢ふやうな恐ろしい心地がせられた。院の仰せ下された旨は「其の許が八島へ歸りたいならば、一門の方へ申し送つて、三種の神器を都へお返しせよ。さうしたら、其の許は八島へ歸されるであらう」との御事である。重衡卿の申されるには、「さしもの我が朝廷の重寶である三種の神器を不肖重衡一人に替へませうとは、内府宗盛以下、平家一門の者共はまさか申しませぬ。女の事でございませぬから、若しか母の二位の局などは、換へやうと申すかも知れませんが、しかしながら、このまゝ院の御言葉をお返しする事は恐れ多いから、早速その由を一門に申し送つて見ませう」と云はれた。そこで院宣の御使として御局の取次役の花方と云ふ者を、又三位中將重衡卿の使として、平三左衛門重國と云ふ者を八島へ遣した。そして内大臣宗盛卿と大納言平時忠卿へは院宣の趣を申された。又二位の局へは便りを詳しく書いて送られた。重衡は、私の便りは許されないので、一門の人々の許



言送て、三種の神器を都へ返入れ奉れ。然らば八島へ可被歸との御氣色也。三位中將被申けるは、さしもに我朝の重寶三種の神器を、重衡一人に替參せんとは、内府以下一門の者共が、よも申候はじ。女性で候へば、若母儀の二品なんどもや、さも申し候はんすらん。乍去も、居ながら院宣を返し奉ん事は、其恐も候へば、速に申送てこそ、見候はめとぞ被申ける。院宣の御使は、御坪召次花方、三位中將の使は、平三左衛門重國と云ふ者也。大臣殿、平大納言へは、院宣の趣を被申。二位殿へは御文細々と書て參せらる。私の文をば容れなければ、人々の許へは詞にて言傳らる。北方大納言佐殿へも、詞にて

被申けり。旅の空にても、人は我を慰み、我は人に慰みし物を、引別れて後、如何に悲う坐らん。契は朽せぬ物と申せば、後の世には必生れ逢奉るべしと、泣々言傳給へば、重國も誠に哀に覺て、涙を抑て立にけり。爰に三位中將の年來の侍に、木工右馬允知時と云ふ者あり。八條女院に兼參の者にて候けるが、土肥次郎實平が許に行て、是は年來三位中將殿に被召使候し某と申す者にて候が、今日大路で見參せ候へば、目も當られず、餘に御痛しう思參せ候。何か苦う可候、知時計は御免れを蒙つて、今一度近附參て、はかなき昔語をも申て、慰め奉らばやと存候。弓矢を取る身にても候はねば、軍合戦の御

へは言葉で託された。重衡卿の夫人の大納言の佐殿（大納言藤原邦綱の女）へも言葉で申された。「たとひはかない旅の空でも、互に慰め合つて居たものを、つれなく引き別れて後は、どのやうに悲しう頼り無く思つて居られるであらう。夫婦の契は朽ちないものと云ふから、後生には必ず生れ合ひませう。」と、泣きながら言傳てられると、それを聞く重國も誠に御氣の毒に思つて、涙を抑へながら立つた。こゝに、三位の中將が日頃召し使はれた侍に木工右馬の允知時と云ふ者があつた。八條の女院（鳥羽天皇の皇女）へ兼ね、伺候してゐた者だが、土肥の次郎實平の許に行つて、「私は年頃、三位の中將重衡卿に召し使はれた某と申すものでございますが、今日都大路を引き廻される重衡卿の情無い有様を見ては、あまりの事に見るにも忍びず、大層御氣の毒に思ひました。何んの差障がございませう。知時計は御許しを受け、今一度重衡卿のおそばに參つて、つまらない昔語りでも申して、お慰め致したいと思ひます。私は弓矢を取る武人でも無いので、軍合戦の御供を致した事ありません。唯朝晩重衡卿の御前に侍つてゐた許りでございます。それでもまだ氣遣はれるなら、腰の刀を預り置かれて、特に御許しを蒙りたい。」と云つたので、土肥の次郎は情ある人で、「誠に、御一人の事だから何も差し障りありません。然しながら憚る處もあるから」として、腰の刀を申

し受けて内に入れた。右馬の允は非常に悦んで、急いで重衡卿の御前に參つて御有様を見奉ると、誠に深く思ひ沈まれ給ふと見えて、御姿も大變にやつれ果て、おいでになるのを見るにつけても、知時は落涙が留まらない。重衡卿も、夢の中に又夢を見る様な心地がして、何事も仰しやらない。暫くして、昔や今の事など物語られて後に、「さても、汝を介して言ひ寄つた人は未だ内裏にゐると聞いたが……」知時「左様承りました」。重衡「私が西國へ下向の時に便りもせず、別に云ひやつた事も無かつたから、此の世も後の世も契つた事は皆偽になつたよと、彼女が思ふであらう。それは誠に恥しい事である。それで、その女房に便りをしやうと思ふが、どうであらうか。お前が尋ねて行つてくれるか」と云はれた。知時は「それは、たやすい事でございませう」と申した。重衡卿は非常に悦び、直ぐ様文を書いて賜うた。知時はこれを託されて退出しやうとしたところが、守護の武士共が「どう云ふ御手紙であるか、見ませう。」と云つたので、重衡卿は知時に、「見せよ」と云はれるので、見せた。守護の武士はそれを見て、「差支ないでせう。」と云つて返した。知時はこの手紙を貰つて急ぎ内裏へ參り、晝の中は人目がはげしいので、其の近所の小屋に立ち寄つて暮れるのを待ち、黄昏時の暗に紛れて、例の女房の部屋の邊に立ち寄つて様子を窺ふと、此の女房の聲と思はれて、「あ



供仕つたる事も候はず、朝夕唯御前に伺候せし計で候き。其も猶覺束なう被思召候はば、腰の刀を召置れて、曲て御容れを蒙り候はばやと申ければ、土肥次郎情ある者にて、誠に御一身は何か苦う可候。乍去もとて、腰の刀を乞取てぞ入てける。右馬允不斜悦び、急ぎ參て御有様を見奉るに、誠に深う思入給へると覺くて、御姿もいたくしをれ返して坐けるを見參するに、知時涙も更に抑へ難し。中將も夢に夢見る心地して、兎角の事をも宣はず。良有て、昔今の物語共し給て後、さても汝して物言し人は、未内裏にとや聞く。さこそ承り候へ。中將、我西國へ下りし時、文をもやらず、言置事も無りし

、御氣の毒な事よ。大勢おいでになる君達の中に、重衡卿一人この様な事になられた事よ。世間の人は皆奈良の伽藍を焼いた佛罰と云ひ合つてゐる。重衡卿自身もさう云はれた。己が心より焼いたのではないけれども、悪者共が多くて、各々思ひ／＼に放火して、多くの堂塔を焼亡した。末の露、本の雫の例があるから、これらの事が積り積つて、我身一つの罪業になるのである。と云はれたが、今思へば全く左様に思はれるよ。」と云つて泣いてゐるので、知時はそれを聞いて、此の女房もかく歎かれるとは誠に御氣の毒な事よと思つて、案内を乞ふた。「此處に本三位の中將重衡卿の御手紙を持參して居ります。」と申した所が、常は人にも恥ぢて會はない人が、「何所だ」と走り出て、自ら其の書信を取つて見ると、その文には、西國に於て生捕にされた時の有様から、今日明日知れぬはかない身の行末などを、細々と書いて、その奥に

—— 悲歎の涙にくれてゐる上に、なほ、憂き名を流すはかない身ではあるが、今一度御身と逢ひたいものである——

と書いてあつた。女房は此の文を顔に押し當て、何んにも云はない。只悲しさに引きかづいて伏せられた。かうして時間も大變に過ぎたので、知時は「御返事を頂いて歸りませう。」と云つた。女房は泣きながら御返事を認め

かば、世々の契は、皆偽に成にけるよと思ふらんこそ恥かしけれ。文をやらばやと思ふは如何に。尋て行てんやと宣へば、知時、易い程の御事候と申す。中將不斜悦び、聽て書てぞたうでける。知時は是を賜て、罷出んとしければ、守護の武士共、如何なる御文にてか候らん。見參せ候はんと申ければ、中將見せよと宣へば、見せてげり。苦しがるまじとて、取せてげり。知時は是を取て、急ぎ内裏へ參り、晝は人目の繁ければ、其邊近き小屋に立寄り、日を待暮し、黄昏時に紛入て、件の女房の局の下口邊にぞんで聞ければ、此女房の聲と覺くて、あないとほし、いくらも坐す君達の中に、此人一人加様に成り

られた。即ち心苦しく醫々として此の二年を過ぎた様子を、こま／＼と書いてから、  
—— 君故に私まで憂き名を流すとも、君と共に底の水屑となりませう——  
この便を知時は女房から賜つて、八條堀河に歸つて來た。すると守護の武士共が、又「どのやうな御文面でせうか、拜見ませう」と云つたので、見せた。「これならば構はないでせう」といふので、重衡の所へ持つて行つた。重衡卿はこの文を見て、いたく御物思が増させられたのであらう。暫くして、土肥實平を召して云はれるには、「さて、此の頃は、各々方の親切に待遇せられる事は、誠に嬉しい事である。が今一度無理なお願がある。私には一人の子供も無いから、此の世に心残りのする事はない。たゞ年來深く契つた女房に今一度逢つて、後世の事を云ひ置き度いと思ふが、どうであらうか。」と云はれると、土肥次郎は情のある士として、「誠に、女房などの事は別段差障りがありません、はやく御對面なさるやう。」とお許しした。重衡は非常に悦んで、人から車を借りて女房の許へ遣はされた。女房は取るものも取りあはず、急いでその車に乗つて參つた。椽側にその車を引き寄せて、その由を重衡に申した所が、重衡卿は車寄まで出られて、「警護の武士共が見てゐるから車から降りてはなりません。」と云つて、車の簾を被つて手と手を組み合せ、



給ふ事よ。人は皆奈良を焼たる伽藍の罰と言あへり。中將もさぞ言し。我心に起ては焼ね共、惡黨多かりしかば、手々に火を放て、多くの堂塔を焼亡す。末の露本の雫の様にれば、我身一つの罪業にこそ成んすらめと言しが。實さと覺ゆるぞやとて被泣ければ、知時、是にもかく歎き給ふ事のいとほしさよと思ひ、物申さうと云へば、何事と答ふ。是に本三位中將殿よりの御文の候と申たりければ、日比は恥て見給はぬ人の、いつらやいづらとて走出て、手づから此文を取て見給ふに、西國にて生捕にせられたりし有様、今日明日をも知ぬ身の行方など、細々と書て、奥には一首の歌ぞ有ける。

顔と顔を押し當て、暫時は餘りのなつかしさに言葉も出ないで、唯、泣いてゐた。暫くして重衡は涙を抑へて云はれるには、「西國に下つた時も、今一度お逢ひしたかつたけれども、大層世話が騒しいために申送る便宜も無く、そのまゝ下向しました。其の後御文も送り、御返事も頂きたいと思つたけれども、旅のことなれば、心つかひのため、且つ又、朝夕の戦にその暇も無くて、遂に徒に月日を過しました。今度は一の谷の戦に一門と共に討死もする筈の處を、かうして生捕にせられて二度都に歸つて來たのも、一つは貴方に對面しやうためでありませぬ。」と云つて、又涙にくれて打ち伏せられた。重衡卿や女房の心中が推量せられて哀れである。斯うして夜もやう／＼更けて行くので、守護の武士共が、「此の頃は大路にも狼籍を働く賊がありますから、早くお歸りなさい。」と云つたので、重衡は詮方無く、直ぐに女房を歸された。車を動かし出すと、重衡は、女房の袖を引き留めて、

——其の許との此の世での對面も、私のはかない命も今宵限りになるであらう——

と歌つた。すると女房も早速

——今宵限りと云つて別れば、却つて君より先にこのはかない私の命が消える事でありませう——

涙川浮名を流す身なり共

今一度のあふせともがな

女房此文を顔に押當て、兎角の事も宣はず、引かづいてぞ伏給ふ。かくて時刻遙に押移ければ、知時御返事賜て、歸參候はんと申ければ、女房泣々御返事書給へり。心苦ういふせくて、此二年を送たりし有様、細々と書て、

さて、女房は内裏に歸られた。其の後は對面を守護の武士共が許さないの、只時々御便りばかりを通はされた。此の女房と云ふのは、民部卿入道親範の從三位平範家の男の女である。容色は人に勝れて、愛情深い人であつたので、重衡が其の後南都に渡されて斬られたと云ふ事を聞くと、出家して、墨染の濃い衣を着て重衡卿の後世菩提を弔はれたとは哀はれな事である。

君ゆるに我もうき名を流す共、底のみくづと共に成なん。

知時是を賜て、歸參たりければ、守護の武士共、又如何なる御文にてか候らん、見參せんと申ければ、見せてげり。苦う候まじとて奉る。中將是を見給て、いと御物思や増られけん、良有て、土肥次郎實平を召て宣けるは、さても此程各の情深う芳心せられつるこそ、有難う嬉しけれ。今一度芳恩蒙たき事あり。吾は一人の子なければ、浮世に思置事なし。年來契たりし女房に、今一度對面して、後生の事をも言置ばやと思ふは如何にと宣へば、土肥次郎情ある者にて、誠に女房などの御事は、何か苦う可候。とう／＼とて許奉る。中將不斜悦び、人に車借て遣されたりければ、女房取あへず、急ぎ乗てぞ坐ける。縁に車やり寄せ、此由かくと申たりければ、中將車寄まで出で向ひ、武士共の見參せ候に、下させ給ふべからずとて、車の簾を打かづき、手に手を取組み、顔に顔を押し當て、暫は兎角の事をも宣はず、唯泣より外の事ぞなき。良有て、中將涙を抑て宣けるは、西國へ下候し時も、今一度御見參に入りたかりしか共、大方世の



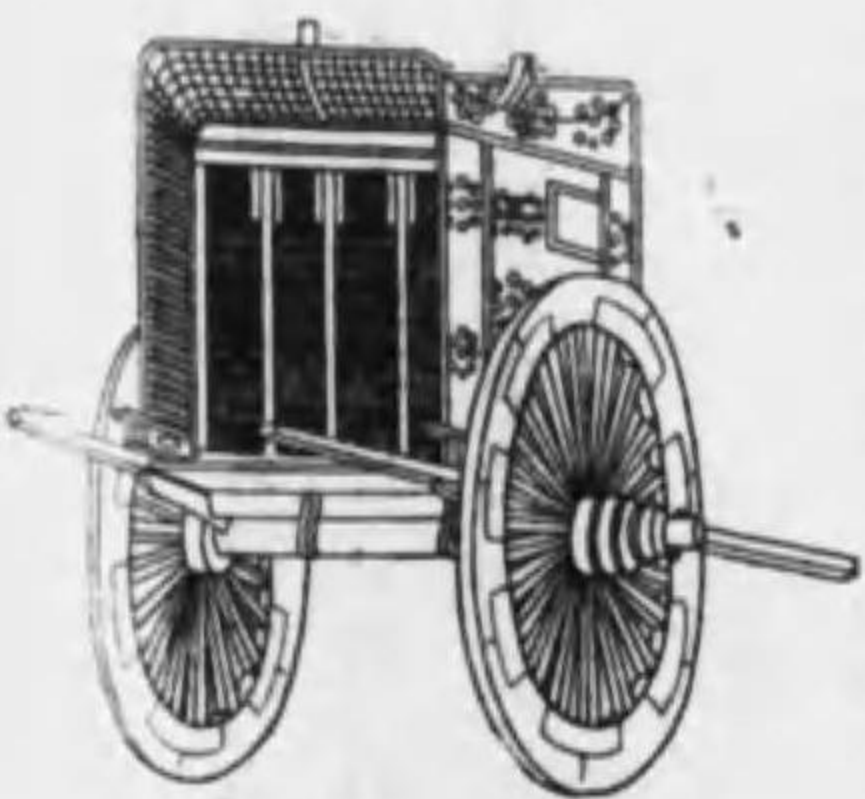
物騒さ、申送べき便もなくして、罷下り候き。其後御文をも奉り、御返事をも見參せたく候つれども、旅の空の物憂さ、朝夕の軍立に隙なくて、空う罷過候き。今度一谷にて如何にも成べかりし身の、生ながら囚れて、二度都へ罷上り候も、御見參に入べきとの事にて候ぞやとて、又涙を抑て伏給ふ。互の心の中、被推量て哀也。かくて小夜もやうやう更行は、守護の武士共、此程は大路の狼籍もぞ候に、とうくと申ければ、中將力及び給はず、聽て返し給ふ。車やり出せば、中將女房の袖を控て、あふ事も露の命も諸共に、今宵計りやかぎり成らん。女房取あへず、

かぎりとして立別れば露の身の、君より先に消えぬべきかは。

さて女房は内裏へ參り給ぬ。其後は守護の武士許ねば、時々唯御文計を通ける。此女房と申は、民部卿入道親範の女也。眉目形世に勝れ、情深き人なれば、中將南都へ被渡て、被斬給ぬと聞えしかば、聽て様を替へ、濃き墨染に寢れ果て、かの後世菩提を弔ひ給ぞ哀なる。

【釋】(一)小八葉車——車の箱に八葉の蓮花を圖案化した紋をつけた車で。紋の小なるを小八葉といふ(挿圖参照)。(二)重き事にして——重んじて、(三)所をおきて——席を避けて。(四)赤衣——紅色の袍。平治物語には五位の著るものとあり、飾抄には「袍、延尉佐、大夫外記、大夫尉等著赤色」。(五)申す——は領承申すの意。(六)御坪の召次——御局の取次役。(七)八條女院——鳥羽天皇の第三皇女暎子。(八)兼參の者——平常參候した者と見る説と、兼れて見參した者と見る説とある。今前者に従ふ。(九)たうで——たびで。(一〇)下口——居間の下の出口。(一一)末の露云々——「末の露もとの世や世の中の運れ先立つためしなるらん」と詠歌大抵にある。露と雲との差、老若の差

小八葉車



はあれど何れも我や先人や先と死んで行くのであるから、結局死ねば自分一人の罪業になるのだといふ意。内海氏の評釋では東末の露が集つてもと(木の幹)の葉となる……つまり末輩の犯した罪が皆大將たる自分の罪になるといふ様に解してあるが、少しく附會の説ではなからうか。佛教文學には死の無常をいつも本の雲末の露などよりもはかないものだといつてあるから、此所も其の意味にとる方が字解としては自然であると思ふ。(一二)いづら——いづち、いづこと同じ。(一三)消ぬべきかは——「かは」は反語、覺一本・八坂本等何れもかなとなつてゐる。かなは嘆詞。かはの場合消えぬの「ぬ」は打消の「ぬ」である。かなとすれば「消ゆるべきかな」となるべきだらう。

### 八島院宣

日數経れば、院宣の御使、御坪召次花方、同二十八日讃岐國八島の磯に下り著て、院宣を取出て奉る。大臣殿以下の卿相雲客寄合給て、此院宣を被披けり。一人聖體、出北關九禁、幸諸州三種神器、埋南海四國經數年、尤朝家之歎、亡國之基也、抑彼重衡卿、東大寺燒失之逆臣也。須任頼朝朝臣申請旨、雖可被行死罪、獨別親族、已成生捕、籠鳥戀雲思、

【通釋】それから幾日か経つて、院宣の御使、大局の召次花方が同月二十八日に屋島へ到着し院宣を取出して渡した。宗盛卿以下卿相達が寄り合つて披見すると、天子が御所をお出ましになつて諸國に行幸し給ひ、三種の神器が長らく南海西海にひそんでゐるのは朝家の尤も歎とする所であり亡國の基である。抑々彼の重衡は東大寺を燒失した逆臣であるから頼朝の請を許して死罪に行はるべきであるが、獨り一族に別れて生捕となり、遙かに八島の空を戀ひ慕うてゐる心が朝廷へ通じたので、然らば三種神器を都へ返し奉つたならば、重衡を宥してやるといふ院宣である。仍て右傳達する。成忠より時忠殿へ」と書いてあつた。



遙浮千里南海、歸鴈失友心、定通九重中途乎。然則三種神器於奉返入都、彼卿可被寬宥也。者院宣如此。仍執達如件。壽永三年二月十四日、大膳大夫成忠承謹上、前平大納言殿へとぞ被書たる。

【通釋】(一)御坪召次——院司、召次所又は單に召次と稱して、院中の雜事をつとめ、時を奏す。(二)籠鳥雲を懸ふる——本朝文粹に載する所、菅三品の作中にある句。

請

文

大臣殿平大納言の許へ、院宣の趣を被申けり。二位殿中將の文を開て見給ふに、重衡を今生で今一度御覽せんと被思召候はば、三種神器の御事を能き様に申させ給て、都へ返入させ給へ、さらすは御目に可懸共存候はずとぞ被書たる。二位殿此文を顔に押當て、人々の坐ける後の障子を引開て、大臣殿の御前に倒伏し、暫は物をも宜はず。良有て起あがり、涙を抑て宣ひけるは、是見給へ宗盛、

【通釋】 内大臣宗盛卿は平大納言時忠卿の許へ、院宣の趣を申された。話變つて二位の局が重衡卿の文を開いて見ると、「此の世で重衡に今一度對面しやうと思召されるなら、三種の神器を、然るべき様に申して都へ御還しなされるやう。さうでなかつたら、今生でお目にかゝれやうとも思へません。」と書いてある。二位の局は此の手紙を顔に押し當て、人々の座してゐる後の障子を引き開けて、宗盛卿の前に伏し、暫時は言葉も無く泣き沈まれた。やゝ暫くして起き上り、涙を抑へて云はれるには、「此の文を御覽、京都から重衡の云つてよこした事が餘りに哀れです。誠に重衡は都でどんなに思ひ詰めてゐる事でせう。只私に免じて、三種の神器の事を、よろしく申しなして、裏へお返しなさい。」と云はれると、宗盛卿の申されるには、「宗盛もさうは思ひますけれども、我が朝廷の重寶である三種の神器を、ただ重衡一人に替へ

京より中將が言おこしつる事の無漸さよ。實も心の中にいか許の事をか思らん。唯我に思免して、三種神器の御事を、能き様に申して、都へ返入奉らせ給へと宜へば、大臣殿申させ給けるは、宗盛もさこそは存候へども、さしもに我朝の重寶三種神器を、重衡一人に替參せん事、且は世の爲不可然、且は頼朝が還り聞んずる所も、云甲斐なう候。其上帝王の御世を保せ給ふ御事も、偏に此内侍所の渡せ給ふ御故也。さて餘の子共親き人々をば、中將一人に思召替させ可給か。子の悲いと云ふ事も、事にこそ依候へ。勿々叶ひ候まじと宜へば、二位殿世にも本意なげにて、重て宣けるは、我故入道相國に後て

て動かし奉る事は、一つには世の例としても、その様な事があつてはならぬいし、又一つには、頼朝が洩れ聞いても残念である。其の上に帝王が世を治められる事も、全くこの神器の御座し給ふ故である。さて重衡以外の子供や一族の人々を、重衡一人に思ひ替へられるおつもりなのか。勿論親として子の可愛いのは當然であるが、それも事情に依る事である。決してその議は叶ひません。」と云はれたので、二位の局は、甚だ失望の様子で、再び云はれるには、「私が故入道相國に先立たれて後は、一時も生きながらへて此の世にあり度いとは思はなかつたけれども、主上が何時と云ふ事も無く、西海の浪の上に漂つておいでになるお痛はしさに、二度主上の御代にしたいがために、憂き身ながらも今日までも存へたのである。重衡が一の谷の戦に於て生捕にせられたと聞いてからは、悲しさに胸も塞がる心地がして、湯水も喉へ通らない。重衡が此の世にない者と聞いたら、私も共に死出の旅に赴かうと思ふ。二度私に悲しい思をさせない先に只私を亡き者にしてくれ。」と喚き叫ばれるので、誠に親子の情としては無理からぬ事と、人々は皆伏目になつた。新中納言知盛卿の申されるには、「あれほどの我が朝廷の重寶である三種の神器を都へお返し申したとて、重衡を返される事は到底むつかしい。たゞその趣を憚る所なく御請文に申されるが宜からう。」と申されたので、「その議が宜



後は、一日片時命生て、世に在べしとは思はざりしかども、主上のいつとなく、西海の浪の上に漂せ給ふ御心苦しさ、二度代にあらせ奉らんが爲に、憂ながら今日迄も存たれ。中將一谷にて生捕にせられぬと聞し後は、いと胸せきて、湯水も喉へ不被入。中將此世になき者と聞かば、我も同じ道に赴かんと思なり。二度物を思はせぬ先に、唯我を失へやとて、喚叫び給へば、誠にさこそはと痛くて、皆伏目にぞなられける。新中納言知盛卿の異見に被申けるは、さしもに我朝の重寶、三種神器を都へ返入奉つたり共、重衡返し給はらん事有難し。唯其様を恐なく、御請文に申させ給ふべうもや候らん

からう」とて、宗盛卿が御請文を書かれた。二位の局は悲しさの餘りに、文書く筆の趣く處も覺えないけれど、子を慕ふ一心を便りに、泣きながら重衡卿への御返事を認められた。夫人の大納言佐殿は何事も云はれない。只悲しさに引被いて伏せられた。其の後大納言時忠卿は院宣の御使御坪召次の花方を召されて、「お前は院の御使として、遠路を遙々と此處まで下つた記念に、汝が生涯の思ひ出になるやうに」とて、花方の顔へ、浪方と炮印をせられた。花方が都へ歸つた所が、法皇がそれを御覽になつて、「汝は花方か」「左様でございます。」「よし／＼それでは今後浪方と名乗れ」と仰せられて、お笑ひになつた。

さて其の請文を開いて見ると「今月十四日の院宣が同二十八日に八島へ到着しました。謹んで承ること次の如し。但し彼此考へてみるに通盛卿以下當家の數人が一の谷で誅せられたのですから、どうして重衡一人の御赦免を今更悦びませう。一體わが安徳帝は故高倉院の御讓位を受けて御在位は四箇年に及んでゐます。御政は舜堯の古風をたづねていらつしやるのです。それに朝頼や義仲が黨を結んで入洛したので幼帝御母後の御歎は殊に深く、且つ外戚近臣の憤も深いので暫く九州へ行幸遊ばしたので。従つて御還幸なき限りは三種神器はどうして玉體を離し奉るを得ませう。一體臣は君の心を心とし、

と被申ければ、此議尤可然とて、大御殿御請文を申さる。二位殿は涙に昏て、筆の立度も覺給はね共、志をしるべに、泣々御返事かき給へり。北方大納言佐殿は、兎角の事をも宣はず、引かづいてぞ伏給ふ。其後平大納言時忠卿、院宣の御使御坪召次花方を召て、汝法皇の御使として、多くの浪路を凌いで、遙々と是迄下たる験に、汝一期が間の思出一つ可有とて、花方が面に、浪方と云ふ焼印をぞせられける。都へ歸上たれば、法皇御覽有て、汝は花方か。さん候。好々さらば浪方共召かしてとて、笑せ御座す。其後請文をぞ披れける。今月十四日院宣、同廿八日讃岐國八島磯到來、謹以承處如件、但就此案

君は臣を以て體とすべきで、君が御安體ならば臣も安らげ、さうすれば國家も平和です。君が憂へ臣が樂まないで心中に愁があつたならば、外面にも悦のある筈がありません。我が先祖貞盛が將門を追討してから以來關東八ヶ國を鎮めて子々孫々に傳へ、朝敵の暴臣を誅伏してから代々朝廷の聖運を守護し奉り來つたのです。だから亡父清盛が保元平治兩度の逆亂にも勅命を重んじ身命を輕んじたのも全く君の安全を希つた結果で、自分の事は考へませんでした。就中頼朝はその父義朝の謀叛の爲めに誅せらるべき由を頻に御下命あつたけれど、清盛の深い慈愛心から御許しを願つたのです。然るに昔の洪大な恩を忘れ、親切な心もなく忽ち流浪の身でありながら峰起したといふ事は愚の骨頂でございます。早く神明の天罰を蒙り、失敗すべきものでございませう。日月は一物の爲めにその明を暗くしませぬ。その如く明王は一人の爲めに法を枉げませぬ。一惡を以て其の善を捨てる様な事は致しませぬ。又少しの缺點でその功を無にする様な事もしないものです。且つ當平家數代の御奉公といひ亡父の忠節といひ、それをお忘れにならないで、勿體なくも天皇が四國へ行幸あらせられたのでせう。ですから私達は院宣を蒙つて再び舊都にかへり會稽の恥をそぐか、然らずんば残念ながら天竺の果までも参りませう。考へれば只今人皇八十一代の御代に日本の神代からの靈寶を異國の寶と



彼、通盛卿以下、當家數輩攝州一谷、  
既被誅了。何可悅重衡一人寬宥、  
哉。夫吾君受故高倉院御讓、御在位

するのは概かはいしい事でございます。どうか此の趣を然るべきやう法皇へ御  
傳へ下さいませ。宗盛頓首云々」と書いた。

既四箇年、政訪堯舜古風處、東夷北狄結黨成群入洛間、且幼帝母后御歎尤深、且依外戚近臣憤不淺、  
暫幸九國、於無還幸、三種神器爭可奉、離玉體哉。其臣以君爲心、君以臣爲體。君安則臣安、臣安則國  
安。君上憂臣下不樂。心中有愁體外無悅。曩祖平將軍貞盛、自追討相馬小次郎將門以來、鎮東八箇  
國、傳子々孫々、誅罰朝敵暴臣、至代々世々、奉守朝家聖運、然則故亡父太政大臣、保元平治兩度逆亂時、  
重勅命、輕私命、是偏爲君全不爲身。就中彼賴朝、去平治元年十二月、依父左馬頭義朝謀叛、已可被誅  
罰由、頻雖被仰下、故入道相國、慈悲餘所被申宥也。然忘昔洪恩、不存芳意、忽以狼羸身、猥成蜂起  
亂、至愚甚、申有餘。早招神明天罰、密期敗績損滅者乎。夫日月爲一物、不暗其明、明王爲一人、枉其  
法、以一惡不捨其善、以小瑕莫蔽其功、且當家數代奉公、且亡父數度忠節、不思召忘、君辱可有四  
國御幸乎。時臣等承院宣、二還舊都、雪會稽恥、若不然而可到鬼界高麗天竺震旦、悲哉、當人皇八十一代  
御宇、我朝神代靈寶、遂空作異國寶乎。宜以是等趣、可然様令洩奏聞。宗盛頓首謹言。壽永三年二月廿  
八日、從一位前内大臣平朝臣宗盛が請文とこそ被書たれ。

【語釋】(一)東夷北狄——東夷は賴朝を、北狄は義仲をさしたのだ。(二)臣は君を以て心とし云々——臣執同體章に「臣以レ君爲レ心、君以レ臣  
爲レ體、心安則體安、君泰則臣泰、未下有レ心奪二於中一而體悅二於外一君憂二於上二而臣樂二於下上」とある。(三)狼羸——羸は弱い。瘦  
せる、困む、覆す等の意がある。校定本では狼羸、正節本は狼羸(ナク)、盛衰記、八坂本は流人につくる。從つて流人が狼羸(同意)と

する方がよからう。(四)日月は云々——古文孝經に「日月不食爲二物一晦中其明、上明王不食二一人一枉其法上」。

戒 文

三位中將此由を聞給て、さこそは有  
んすれ。如何に一門の人々の悪う思  
はれけん、後悔せられけれ共甲斐  
ぞなき。實も重衡一人を惜て、さし  
もに我朝の重寶三種神器を、返し給  
らんとも覺ねば、此御請文の趣は、  
兼てより思設られたりしか共、未左  
右を被申さざりつる程は、何となう心  
元なう思はれけるに、請文既に到來  
して、關東へ可被下に定りしかば、  
三位中將都の名残も今更惜うや被  
思けん、土肥次郎實平を召て、出家  
せばやと思ふは如何にと問へば、此  
由を九郎御曹子へ申す。院御所へ奏

戒 文

【通釋】 重衡卿は西國で神器を返す事を拒んだ事を聞かれて、「左様の事も  
あらう。どんなに一門の人々が我を悪く思つて居るであらう。」と後悔せられ  
たけれども、今になつては仕方もない事である。誠に、此の重衡一人を惜し  
んで、さしもの我が朝の重寶たる三種神器を返すとは思つて居ないから、此  
の請文の趣は、前もつて豫想してゐたけれども、未だ何んとも申して來ない  
内は、何んとなき氣掛りに思はれたが、請文が既に到來して、重衡は關東へ  
下される事に定つたので、重衡は都での名残を今更惜しう思はれたのであら  
う。土肥次郎實平を召し寄せて、「出家したいと思ふがどうであらうか。」と云  
はれるので、此の事を義經に申した。法皇にも此の事を奏聞せられた所が、  
法皇は「賴朝に重衡の今のまゝを見せてから、如何様にも取り計らはう。唯  
今はどうして許す事が出來やう。」と仰せられたので、此の事を重衡に申し傳  
へた。「それでは、年來師弟の契りを結んだ聖に今一度對面して、後生の事を  
相語りたく思ふがどうか」と云はれたので、土肥次郎は「その聖は何誰でせ  
ぬ」と尋ねると、「黒谷の法然房と云ふ人である。」とのこと。「それは差



聞せられたりければ、法皇、頼朝に見せて後こそ、兎も角も計はめ。唯今は争か許すべきと仰ければ、此由を中將殿に申す。さらば年來契たる聖に、今一度對面して、後生の事も申談せばやと思ふは如何にと宣へば、土肥次郎、聖をば誰と申候やらん。黒谷の法然房と云ふ人也。さては苦う候まじ、とう／＼とて許奉る。三位中將不斜に悦び、聽て聖を請じ奉つて、泣々被申けるは、今度西國にて如何にも成べかりし身の、生ながら被捕て、罷上り候は、二度上人の御見參に入べきにて候けり。さても重衡が後生如何仕候べき。身の身にて候し程は、出仕に紛れ、政務にほだされ、僣慢の心のみ深して、當

し障りないでせう、早く／＼請待なさい。」と云つてお許しした。重衡は非常に悦んで、直ちに法然房を請じて泣きながら申されるには、「今度西國に於て討死もする筈の所を、かうして生捕に遭つて上洛したのは、一度上人に面會したためであります。さて、この重衡の後生はどうしたら宜しいでせう。私が平家の公達として榮えた時には、御所への伺候にとり紛れ、政務に東縛せられて、僣慢の欲心ばかり深く、當來の浮沈を顧みませんでした。まして、平家の運が盡き、世が亂れて都を落ちた後は、此處で戦争をし彼處で敵と争ひ、人を亡ぼして我身を助けやうと思ふ悪心ばかりに邪魔せられて、善心は曾て一度も起りませんでした。とりわけ奈良の寺々炎上の事は王命武命と云ひ、又君王に仕へ奉り、世の勢に従ふ法を免れる事が出来ないうで、衆徒の悪行を靜めるために出向いた所が、思ひがけなく伽藍の焼亡となりました。是は致し方もない次第でございます。けれども時の大將軍を拜命してゐたものですから、責任は大將軍一人にかゝるものと申しますから、この炎上の責は重衡一人の罪業にならうと思はれます。今又、この様に彼是と都に恥を曝すのも、全くその時の應報と思ひ知りました。今は薙髮して出家遊行をし、一心に佛道修行したうございますけれども、かう云ふ生捕の境遇になりましては思ふ事もまゝになりませす、どの様な行を修めても一向に助かると

來の昇沈を不顧。況や運盡世亂て、都を出し後は、茲に闘ひ彼に争ひ、人を亡し身を助らんと思ふ惡心のみ遮て、善心は曾て發らず。就中南都炎上の事は、王命と申し武命と云ひ。君に仕へ世に隨ふ法通れ難うして、衆徒の悪行を靜んが爲に罷向て候へば、不慮に伽藍の滅亡に及びぬる事は、力及ばざる次第也。されども時の大將軍にて候し間、責一人に歸すとかや申候なれば、重衡一人が罪業にこそ成候ぬらめと覺候。今又彼是恥を曝すも、併其報とのみ思知れて候へ。今は頭を剃り、乞食頭陀の行をもして、偏に佛道修行したく候へ共、かゝる身に罷成て候へば、心に心をも任せ候はず。如何なる行

も思へない事が口惜しうございます。よく／＼一代の性行を考へて見ますのに、罪業は須彌山よりも高く、善根は塵ほども積んで居りません。この右様で無駄に命が終りましたら、大焦熱地獄の苦しみは疑ひございません。願はくは上人慈悲を起し憐れみをおかけ下さいまして、この様な惡人の助かります方法がございますならばお示し下さい。」と申した。上人は涙にむせび俯して、暫くの間は何事も仰せられない。暫時の後上人の云はれるには、「誠に容易に受け難い人身を受けながら、空しく現世を捨て、三途の世界に歸る事は悲しみの極みである。それに今貴方が此の現世を厭つて淨土に再生を願はうと思はゞ、惡心を捨て、善心を振ひ起せば、三世の諸佛も定めて、喜んで受け入れられるであらう。出離の道は區々であるけれども、末世の亂れた時には彌陀の稱名を唱へるのを以て第一とする。佛は衆生を救ふ念願から九品の往生を分ち、往生の諸善行をナムアマダブツの六字の中に含めて、如何なる愚者にも唱へ易くこしらえてある。故に罪深しとて遠慮はいらぬ。十惡五逆罪を犯した者でも懺悔すれば往生が出来る。故に功德が少いからとて失望する必要はない。一念十念の信心稱名をすれば佛の來迎にあづかる事が出来る。故に善導大師は専ら佛名を唱ふれば西方極樂に往生出来ると釋し給ふた（觀無量壽經を論釋なさつた）こんな尊い教だから専心に名號を唱へれ



を修しても、一向助るべし共覺をぬ事こそ口惜候へ。つらく一生の化行を案するに、罪業は須彌よりも高く、善根は微塵計も蓄なし。かくて命空しう終り候なば、火穴湯の苦果、敢て疑なし。願くは上人慈悲を起し、憐を垂給て、かゝる悪人の助りぬべき方法候はゞ、示し給へと被申ければ、上人涙に咽び俯伏て、暫は兎角の事も宣はず。良有て上人宣けるは、誠に受難き人身を受ながら、空く三途に歸り坐ん事、悲んでも猶餘あり。然るに今穢土を厭ひ、淨土を願んと思召さば、悪心を捨て善心を發し坐んに於ては、三世の諸佛も定て隨喜し給らん。其出離の道區々也とは申せ共、末法濁亂の機には、稱

ば西方に生れ、「瞬間／＼も稱名するのが懺悔の道だ」と信じて彌陀如來の名をとれば懺悔にもなるのです」と教へた。又

降魔の劍は彌陀の名號にまさるものはないのだから、これを信すれば悪魔も近づかず、諸罪が除かれると般舟讚に説いてあります。淨土宗の究竟義は大體以上の様です。但し往生するか否かは信心の有無によるのですから此の教を深く信じて常に意にも行にも彌陀を念ひ佛名を唱へられたならば、命の終る時この苦界を脱れて西方の極樂淨土不退の國に往生なさることは疑ありません」と御教化になつたので、重衡は大層悦び、「願くばこの機會に受戒いたしたいと思ひますが、それは出家しなければ駄目でせうか」と申された。法然上人は「出家しない人も戒を持することは普通の事である」とて額に剃刀をあてゝ剃るまねをして(得度、つまり洗禮の如き儀式である)十戒を授けられた。重衡は喜の涙を流して是を受け持たれた。上人は萬事物哀れに思はれて、かきくらす心地がして、泣きながら戒律を説かれた。重衡は上人への御布施と思はれて、日來遊びに行つてゐた侍の許に預けておかれた硯を、知時をして取り寄せて上人に奉り、「この品は他人にお與へなさないで、平生目のつく所に置いて、重衡が布施に贈つたものであると御覽になる度毎に御念佛をして下さい。又お暇の時には經を一卷讀誦して下さい、それで宜

名を以て勝たりとす。志を九品に分ち、行を六字に縮て、如何なる愚癡開鈍の者も、唱ふるに便あり。罪深ければとて、卑下し不可給。十惡五逆廻心すれば往生を遂ぐ。功德少ければとて、望を絶へからず。一念十念の心を致せば、來迎す。專稱名號

しうございます。」と申された。上人は何んの御返事もしないで、是を受け懐に入れて、墨染の衣の袖を顔に押し當て泣きながら、黒谷に歸られた。件の硯は、父の入道相國が、宋朝の帝に砂金を澤山に献上せられたので、その返禮と思はれて、日本和田平大相國の許へと、送られたものであると云ふ。名を松蔭と申した。

至西方と釋して、專名號を稱すれば、西方に至り、念々稱名常懺悔と宣ひ、念々に彌陀を唱ふれば、懺悔する也とぞ教ける。利劍即是彌阿號を頼めば、魔縁近づかず。一聲稱念罪皆除と念すれば、罪皆除けりと見えたり。淨土宗の至極は、各略を存じて、大略是を肝心とす。但往生の得否は、信心の有無に依べし。唯此教を深く信じて、行往座臥時處諸縁を不嫌、三業四威儀に於て、心念口稱を忘れ給はずば、畢命を期として、此苦域界を出て、彼極樂淨土の不退の土に往生し給はん事、何の疑か有んやと教化し給へば、三位中將不斜悦び、願は此次に戒を持ばやと存候へ共、出家仕らでは叶候まじやと被申たりければ、上人、出家せぬ人も、戒を持つ事は常の習也とて、額に剃刀をあて、そる眞似をして、十戒を授らる。中將隨喜の涙を流て、是を受持給ふ。上人も萬物哀に覺て、かき昏す心地して、泣々戒をぞ説れける。御布施と覺くて、日來おはして遊れける侍の許に預置れたりける御硯を、知時して召寄て、上人に奉り、是をば人たび候はで、常に御目の懸らんする所に置れ候て、某が物ぞかしと御覽せられん度毎には、御念佛候べし。



又御隙には經をも一卷、御廻向候はゞ、然るべう候と被<sub>レ</sub>申ければ、上人兎角の返事にも及<sub>レ</sub>給はず、是を取て懐に入れ、墨染の袖を顔に押當て、泣々黒谷へぞ歸られける。件の硯は、親父入道相國宋朝の御門へ砂金を多く參させ給たりしかば、返報と覺しく、日本和田平大相國の許へとて、被<sub>レ</sub>送たりけるとかや。名をば松蔭とぞ申ける。

【語釋】(一)惡心——こゝでいふ惡心、善心とは佛法を求むる心を善とし、然らざるを惡心といふ。(二)責一人に歸す——論語に堯曰「百姓有<sub>レ</sub>過在<sub>二</sub>予一人<sub>一</sub>」。(三)乞食頭陀——出家して遊行すること。頭陀はドフーダの梵音。斗數と譯す、煩惱の塵をばらひする意。普通は乞食行脚の意の如く解せられてゐる。(四)化行——加行(前出)のあて字か。但しこゝでは單に行爲と見ておけばいい。(五)須彌——(前出)。高さ十六萬八千由旬(前出)ありといふ。(六)火穴湯——火血刀のあて字(盛衰記による)。止動輔行に従へば、地獄畜生餓鬼の三惡道をいふ。火穴湯を大焦熱地獄と解する説もある。いかゞにや。(七)出離の道——生死の迷界を出離して菩提を求むる道。(八)九品——觀經所説の上品上生から下品下生迄の菩提心を發する者に對する救濟法。(九)行を六字につゞめ——阿彌陀佛が衆生救済の大願から萬善萬行を修した、それを南無阿彌陀佛の六字の中にこめて、これを稱念する時は萬行を修すると同じ以上の價値ありとした事なをいふ。(一〇)廻心——心を入れかへて菩提を求むる心となること。(一一)一念十念——心をこめて彌陀を念すること。淨土宗では念を稱名と解す。一稱十稱の稱名のこと。(一二)利劍即是云々。一聲稱念云々。念々稱名云々——何れも善導の般舟讚にある語。(一三)三業四威儀——三業とは身口意の三つでなす作業。四威儀は行住坐臥即ち日々の作法行爲をいふ。(一四)不退の土——極樂は娑婆の様に無常變轉あることなく、常住不易で、その悟境は再び迷ふことなき不退の地である。(一五)布施——布施波羅蜜の略、梵で檀那といふ。一切衆生を慈んで一切のものを惠施すること。これに法施と財施とある。これが僧に財施する意味のみに用ひられる處になつたのだ。(一六)廻向——自分の修した諸善の功徳を廻轉して一切衆生に手向け、佛道を成ずる意。それが轉じて佛を供養し又けに者の菩提を引ふ意に用ひられる處になつた。

【評】平家物語が淨土教文學だと説く人と、さうではない天台も圓分はいつてゐると論ずる人と、否々佛敎文學ではない、佛敎は此の時代の

社會の通思想なので、それと入れられて来て全篇にある句を持たせたと過ぎないと説く人と、様々あることは解説にも述べた通りである。そして平家に見ゆる天台佛敎も、修法として若くは政争の一部に携はるものとしてのそれであつて、宗教的意義からいへば淨土教的思想が濃厚であること、しかもその淨土教的來迎思想は王朝の情趣的、浪漫的な氣分として多く採り入れられてゐる事も既に述べた。併し、こゝには法然の説法が全くの宗教的意味に於て採られてゐる點は確かに新時代の本當の宗教を求むる心の一端を現はしてゐるものと見られるので面白い。こゝには垂述説もなければ、教權もなければ、美的な夢の世界もない。ひたすらに稱名に生きやうとする説法である。重衡の心の奥底を今解剖しやうといふのでもない。又重衡の態度の女々しさを考へるのでもない。それらは作者の中心點では恐らくあるまい。そして又、平家全篇の上が見られても、さうした點は他にも求められる。こゝはやはり法然の教を求めた所に作者の心が動いてゐるのである。とはいへ、この平家物語が天台系の僧徒の手に成つたものとすれば此の節は後人の附加であらうか。

### 海 道 下

去程に、本三位中將重衡卿をば、鎌倉の前右兵衛佐頼朝、頻に被<sub>レ</sub>申ければ、さらば可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下とて、土肥次郎實平が手より、九郎御曹司の宿所へ渡し奉る。同三月十日の日、梶原平三景時に具せられて、關東へこそ被<sub>レ</sub>下。西國にて如何にも成べかりし人の、生ながら被<sub>レ</sub>捕て、都へ上り給

【通釋】さて、本三位の中將重衡卿を、鎌倉の前の右兵衛の佐頼朝が頻に所望したので、それでは下さうと云つて、土肥次郎實平の許から九郎義經の手にお渡しした。同三月十日梶原平三景時に連れられて、關東へ下向せられた。西國に於て討死すべき人が、生きながらに捕はれ身となつて上洛せられることさへ口惜しい事であるのに、今更又、鎌倉へ下向される重衡の心中は推量されて哀れである。途中四宮河原に至つた所が、此の邊は昔醍醐天皇の第四の皇子蟬丸が、逢坂の關の嵐に心を澄ませて琵琶を引かれたのに、博雅三位(一品兵部卿克明親王の子)と云つた人が、風の吹く日も雨の夜も、三



ふだに口惜きに、今更又關の東へ被<sup>レ</sup>赴<sup>ル</sup>けん心の中、被<sup>レ</sup>推量<sup>テ</sup>哀也。四宮河原に成ぬれば、爰は昔延喜第四の皇子蟬丸の、關の嵐に心を澄し、琵琶を引給しに、博雅三位といつし人、風の吹く日も吹ぬ日も、雨の降る夜も降ぬ夜も、三年が間歩を運び、立聞て、彼三曲を傳けん蘘屋の床の古も、想像れて哀也。相坂山打越て、勢多の唐橋駒も轟と踏ならし、雲雀あがれる野路の里、志賀の浦浪春かけて、霞に曇る鏡山、比良の高根を北にして、伊吹の嶽も近附ぬ。心を留としなければども、荒て中々やさしきは、不破の關屋の板廂、如何に鳴海の汐干潟、涙に袖はしをれつつ、彼在原のなにかしの、唐衣きつゝいな

年の間足を運んで、それを立聞きして彼の三秘曲を受けたと傳へられてゐるその蟬丸の詫び住居の昔が思ひやられて哀れである。相坂山を越えて勢多の唐橋を踏みならし、野路の里や志賀の浦、鏡山を経て、比良の高根を北に見ながら、伊吹山も近附いた。殊更に心を留めると云ふわけではないが、荒れて却つて面白いのは不破の關屋の板廂である。鳴海の汐干潟も涙に袖を濡らしながら、昔在原の業平が唐衣云々と詠んだ三河の國の八橋に來かゝると、蜘蛛手に水の流れてゐるのを見るにも物思ひをさせられる。瀆名の橋を渡れば松風の音がさえて、入江には浪の音が騒がしく、それだけでなくも旅の空に心憂きものであるのに、ことに物思のまさる夕暮に、池田の宿に著かれた。この池田の宿の長者(土地の富豪)熊野の女なる侍従の許に、其の夜重衡は泊られた。侍従は重衡を見て、平生は一向に便りになるとも思ひ寄らない人が、今日は思ひがけなくこんな所に立ち寄られる事の不思議な事よ、と云つて一首の歌を奉つた。

旅の空で、このやうな賤しい小屋の氣づまりにつけても、いかばかり都の空を戀しく思はれる事であらう——

その返歌として重衡、  
旅の空に流浪する身ではあるけれども、故郷の都は戀しくも思はない。

その都も永住の地ではないから——

暫くして、重衡は梶原平三景時を召されて、「さて、唯今の歌の主はどんな素性の者か、しばらくも仕出かした者よ。」と云はれると、景時は畏つて云ふには、「貴方は未だ御存じないのですか。あの主こそは島においでになる宗盛卿が未だ當國遠江の國守であつた時に、召されて御寵愛になりましたが、その女は老いたる母を遠江に残して置いたので、屢々暇を請ひましたけれども、許されなかつたので、頃は三月の始めの事でございましたせう。

花盛りの都の春も惜しいけれども、幼なじみの東國の花もはや散るであらうと思へば懐しい——

れにしと詠けん、參河國の八橋にも成ぬれば、蜘蛛手に物をと哀也。瀆名の橋を渡り給へば、松の梢に風さえて、入江に騒ぐ波の音、さらでも旅は物憂きに、心を盡す夕間暮、池田の宿にも著給ぬ。彼宿の長者熊野が女、侍従が許に、其夜は三位宿せられけり。侍従、三位中將殿を見奉て、日來は傳にだに思召寄り給ぬ人の、今日はおかゝる所へ入せ給ふ事の不思議さよとて、一首の歌を奉る。  
旅の空赤土の小屋のいぶせさに  
故郷いかに戀しかるらん  
中將の返事に、  
故郷も戀しくもなし旅の空  
都も終の栖ならねば  
良有て、中將梶原を召れて、さて唯

と云ふ歌を詠んで暇を賜り歸國した。東海道一の有名な人でございます」と申し、都を出立してから日數を経たので、三月も既に半ばを過ぎて、春もはや暮れやうとしてゐる。遠山の花は、消え残りの雪かと思はれ、浦や島は霞み渡つて、いろ／＼と今迄の事や將來の事を思ひ續けられるにつけても、これはまあ、どう云ふ宿業のうたてさであらうと、只涙ばかりである。重衡卿には御子が一人も無いので、母の二位の局もそれを歎かれ、夫人の大納言の佐殿も残念に思ひ、諸處の神佛に祈られたけれど、其の効驗がなかつた。「今となつて見ればよく子が無かつた事であつた、子供さへ有つたなら、ど